
妖星と日輪

藍三郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖星と日輪

【Nコード】

N08090

【作者名】

藍三郎

【あらすじ】

豊臣秀吉の死後、天下分け目の大戦の前に、大谷吉継は、中国を治める毛利元就と手を結び、数多の人間を陥れる策謀を巡らす。嘘と裏切りの果て、彼が目指す本当の目的とは？

第一章 策謀蠢動（一）（前書き）

イメージ的には、B A S A R A 3の大谷・毛利幻の緑ルートという感じで。基本的には原作準拠ですが、作者の妄想設定・独自解釈が含まれます。初っ端から原作のネタバレがあります。名前ありのキヤラが結構死ぬのでその辺苦手な方も注意。

第一章 策謀蠢動（一）

鼠色の空から、降りしきる驟雨^{しゅうう}。絶え間無い雨は地を穿ち、辺り一面を泥土に変える。あたかも、天上の神が滂沱^{ほうた}の涙を流しておるようだ。だが、天の悲嘆がどれほどのものであれ、目の前のあの男の慟哭には及ぶまい。

「うわあ……あ……ひで……よし……さま……」

己が身命を捧げた主の死。それは、石田三成^{いしだみつなり}の根幹となる何かを、確実に奪い去った。心にぽっかりと空いた傷口からは、絶えず悲しみが湧き出て、やつの全身を苛む。心も、魂も。三成は齒を喰いしぱり、血涙を流し、秀吉^{あさじ}の亡骸を抱く腕に力を込める。己に降り懸かった理不尽に耐え抜くように。

「何故だ……私が一体、何をした……」

いかに問いかけようとも、答えなど返ってこない。血を流すように悲しみを垂れ流し続ければ、やがて男は緩慢なる死を迎えるだろう。いっそ、この男にとっては本望やもしれぬ。ただ単に、主に先立たれただけならば。

豊臣秀吉は、殺されたのだ。しかも、味方と信じていた男の裏切りによって。

「家……康……!!」

その名を呟いた瞬間、心奥から、漆黒の憎悪が噴出する。溶岩のごとき憎しみの奔流が、傷口へと流れ込み、空虚を埋める。三成の全身を、憎しみに染め上げていく。主を無くし、抜け殻となりかけ

た石田三成を、復讐の鬼へと作り変える。

それは、三成の生存本能が成したことやもしれぬ。徳川への復讐。それ以外にやつめは生きる意味を見出だせぬゆえ。

「家康……！　いいえやあすウウウウウツ……！　許さない！　許さない！　貴様を、許さなアアアアアアい……！」

あらん限りの怨念と、復讐の決意を緋い交ぜにした絶叫が、曇天を貫く。

雨が包帯を通して、肌に染み入るのを感じながら、われはじつと三成を見つめておつた。われも様々な不幸を見てきたが、三成のそれは、酷く有り触れていて、故に極上であつた。

奈落のような喪失感。何故守り切れなかったという自責。仇敵への煮えたぎる憎悪。海より深く、闇より暗い絶望。とうに致命傷を負つておるはずなのに、復讐という渴望を満たさんがため、心は死しても体は生き続ける。安らぎなど何処にもなく、どこにいても、何をして、寝ても覚めても、心の内で絶えず悲嘆と憎悪が荒れ狂う。生きながら、無間地獄に嵌まつておる。

死が最上の不幸とするならば、この男は死んだ後も不幸を背負つて、生き続けねばならぬ。拷問の如き生、不幸の極致よ。

そんな三成を、我が盟友を見て、われは――

中国地方、安芸、厳島。

「元就様あつ！ 一大事でございます！！」

息せき切つて報告に訪れた部下の声を、毛利元就は書を記しながら、冷めた顔で聞いていた。

「報告は簡潔にせよ」

「は、はっ！ 大阪の間諜からの報告でございます！ 昨日の戦で、豊臣秀吉が、徳川家康に討たれたとのこと！！」

毛利元就は、一瞬だけ筆を動かす手を止める。だが、すぐに何事もなかったのように、筆を走らせる。その端正な顔には、僅かな漣も起こってはいない。

「そうか」

いつもと変わらず、ただ一言だけ返す。

「は……え、ええ！？」

間違いなく、日の本全土を激震させるであろう一報。にも関わらず、あまりに淡泊な反応に部下は戸惑うしかない。

「続けよ」

「は、はっ！！ 徳川は、配下の軍勢を率いて一旦本拠地である三河に引き上げたとのこと！ 現在、大阪の豊臣勢との間で一触即発の緊張状態が続いております！ ですが、総大将を失った豊臣方は大きく混乱している模様で、今のところ、徳川への報復、反撃に出る様子はありません！！」

「ふむ……」

元就は、無言で何かを考え込んでいる。毛利家の家臣である彼にとつて、主の沈黙はたまらなく恐ろしい。この冷酷極まりない主が次に何を言い出すのか、それを思うだけで、戦と同様の緊張を強いられる。自分だけではない。家臣のほぼ全てが、毛利元就のもたらず、死に勝る恐怖に縛られている。

その時、元就が彼に一瞬だけ目を向けた。その氷の眼に、心胆が凍りつく思いがする。

「……も、元就様」

「報告は以上か？」

「は、はい！」

「ならば、もうよい、下がれ。引き続き、監視と情報収集を徹底させ、新たな動きがあれば、細大漏らさず我に知らせよ」

「か、畏まりました！」

部下は、逃げるようにその場を後にした。

秀吉の死の報を聞いても、元就に驚きはなかった。徳川の造反も同様。想定されていた事態の一つが、現実になったに過ぎない。元々、あの徳川が素直に降つたはずがないことは明々白々だった。

この一月ほど前、秀吉の右腕である竹中半兵衛が病で亡くなり、磐石に思えた豊臣に、静かな、されど大きな揺れが走った。徳川が反乱を志しているならば、この機会を逃しはしないだろうし、現実には彼は行動を起こした。実際に秀吉を斃せる可能性は、五分と見ていたが。

毛利は思索する。豊臣秀吉が斃れたとはいえ、豊臣の強大な軍事

力は健在。徳川も直ぐには手を出せまい。だが、新興勢力であった豊臣軍の統制は、豊臣秀吉の存在があればこそ保たれて来た。軍に綻びが生じることは避けられまい。加え、後継者の問題もある。竹中半兵衛亡き今、順当に行けば秀吉の左腕と呼ばれた石田三成であろうが、何分奴はまだ若い。問題が紛糾するは必定であろう。

また、秀吉の死が天下に知れ渡れば、力に屈し、やむなく豊臣に服従してきた者どもが一斉に蜂起することは必定。豊臣は急激に勢力拡大を推し進めたせいで、かつての魔王と同じく、多大な恨みを買っている。この機に勇んで行動を起こす馬鹿者の数は、十や二十ではきくまい。無闇に勢力を広げた分、各地への対応が追いつかず、端から瓦解していくことになる。徳川に続いて造反する者も少なくあるまい。

一方、徳川は三河に腰を据え、周辺諸国を平定していくであろう。長い間豊臣の侵略と支配に悩まされて来た東の国々は、徳川になびくはず。こうして、豊臣が没落していくのに反比例して、徳川は隆盛していく。この二大勢力の力関係が逆転するのも、遠い未来の話ではない。

その時こそ、徳川は豊臣を攻め、天下統一を成し遂げんとするだろう。日の本の全てが、この大戦に巻き込まれる。無論、我が毛利家も例外ではない。

来るべき東西の決戦、天下分け目の時において、我が毛利はどう動くべきか。安芸毛利家永劫の繁栄がため、打つべき手とは何か。

元就は、朱の欄干越しに見える、厳島の風景に目をやる。夜が明け、水平線から朝日が昇ろうとしているところだった。陽光が、世界に色を与えて行く。瀬戸海を、厳島を、そして元就を眩く照らし出す。光を反射する瀬戸の海が、黄金の稲穂畑のように見える。

「おお……」

彼の面貌が、恍惚にたゆたう。冷酷非情なる策謀家として知られる毛利元就だが、信仰する日輪の前では、唯一人間らしい安らぎを覚える。

彼は、己以外の誰も信じない。両親、親族、配下、敵手、己を含む総てに、一片たりとも情愛を抱いたことがない。彼にとって、全ては毛利家繁栄のための駒。駒である以上、揺らぎを持たぬ存在であるべきだ。移ろいやすい他者の心など、信じるに値しない。

だが、あの燦然と輝く日輪だけは、永劫に朝と夕を繰り返す太陽だけは、絶対の存在であると信じられる。この世の何もかもが、あの日輪の偉大さの前では塵芥じんがいにしか見えない。

騙し裏切り陥れ殺す。謀略の海に生きることを自らに定めた毛利元就にとって、この日輪だけが、人の安息を与えてくれるものだった。

宮の東側から見える日の出は、いつもと何も変わらない。だが、元就にとっては特別な意味を持つものだった。己が行く道は、常に日輪によって照らされている。日輪の光に身を委ね、元就は己が確信を言葉に乗せた。

「昇陽の時、来たれり……」

それからおよそ一月後……厳島の居城にて、毛利元就は、豊臣からの来訪者を迎えていた。

彼は豊臣の正式な使者ではない。彼独自の判断で、毛利へ書状を送り、会談の約束を取り付け、密かに厳島を訪れた。

男の名は大谷吉継おおたによしつぐ。現在豊臣の総大将を務めている、石田三成の

参謀格だ。病に侵されているらしく、全身に包帯を巻き付け、常に浮遊する御輿に腰掛けている。肋骨を思わせる赤色の胴鎧に、蝶を模った装飾のついた兜を被っている。部下たちは大層気味悪がっていたが、自分には見た目などどうでもよいこと。重要なのはこの男の情報、そして、その目的だ。

会談の目的は、毛利と豊臣の同盟に関することだった。毛利もまた、豊臣からこのような動きがある事は予期していた。その上で、開口一番こう言い放つ。

「大谷とやら。一つ言っておく。我は、天下になど興味はない。我が望むのは、中国の安泰のみよ」

毛利と大谷は、畳の上に腰掛け、向かい合って会話している。

「わかっておる。先の戦でも、皆が天下取りに逸る中、ぬしはひたすら、貝のように閉じこもっておったからな」

揶揄するような大谷の発言にも、毛利は無表情で答えた。

「おっと、気分を害したのならば詫びよう済まぬ許せ。これは褒め言葉よ。何せ、あの竹中殿でさえ、最後までこの安芸には手をつけられなんだからの」

豊臣が天下を席卷した全盛時代、毛利は豊臣と従わず戦わず、息を潜め、耐えることを選択した。彼は、豊臣の軍師竹中半兵衛の仕掛けたいかなる挑発、陽動にも応じず、ひたすら自国の守りを固めることに専念した。いかに豊臣といえど、無理に毛利を攻めれば大きな痛手を被ることは避けられず、当時は徳川や武田といった敵が、大阪を攻める機会を虎視眈々と窺っていた。豊臣は、強国が揃う東を優先して攻略し、毛利は後回しにせざるを得なくなった。

だが、中国侵攻を前にして豊臣、竹中は斃れ、徳川の造反もあり西に目を向ける余裕は無くなった。豊臣の大規模侵略によって、武田、上杉、伊達、北条と諸国が大きく勢力を削がれた中、毛利家だけは力を蓄え、国力を維持し続け、現在は徳川、豊臣に次ぐ強国となっている。

「ぬしの望み、あいわかった。だからこそ、われはぬしを選んだのよ。天下は要らずとも、徳川は目障りである？ あれは、ぬしのよ
うな男を認めまいよ。恥ずかしげもなく、絆による天下統一とやら
を掲げておるぐらいだからの」

「フン」

絆……くだらなさ過ぎて、あえて罵る気にもなれない。

「われとぬし、打倒徳川という目的は同じ。それを果たした暁には、
中国はぬしに、天下は三成に。それで異存はあるまいな？」

「あろうはずがない」

「結構。ぬしも知つての通り、先の戦で徳川は武田を破り、いまや
破竹の勢いよ。三成は認めまいが、対抗するには、われらだけでは
心もとない」

「だからこそその密約か」

思った通り、石田三成という男は、将に据えるには血氣に逸り過
ぎる性格らしい。大谷としては、徳川を攻める上で、背後を万全に
固めておきたいのだろう。

「左様。折を見て、正式に同盟を結ぶことになるであろうがな。ま
ずは、われらだけで出来ることをしようではないか」

「それは何だ？」

「皆まで言わせるな。ぬしの最も好きなこと……即ち悪たくみよ」

顔に巻いた包帯越しに、大谷の唇が歪む。彼は、日本の本地図を取り出し、毛利の目の前で広げてみせる。そして、その骸骨のような指先で、中国と隣り合う島を指し示して見せた。

「まずは、ぬしの目の上のたんこぶである西海の鬼……やつに踊ってもらおか」

第一章 策謀蠢動（一）（後書き）

3の、大谷と毛利の黒幕コンビの腹黒会話が好きで、もっと見てみたいと思って書きました。ある意味自家発電です。3は基本マルチストーリーですが、秀吉の死や四国壊滅などのプレストーリーは共通しています。その辺の話は断片的にしか語られませんが中々興味深いので、作者の想像を交えてより掘り下げてみました。

第一章 策謀蠢動（一）

四国を治める長曾我部元親ちやうそかく もとちかは、世の風潮に縛られることを嫌い、四国の統治を部下に任せ、自らは瀬戸海を出て外の海へと旅立っていた。かつて長曾我部軍の象徴だった要塞富嶽ふがくは、豊臣秀吉の四国侵攻の際に失われた。現在の長曾我部の砦は、富嶽ほどの規模はないが、長曾我部の技術力を生かした堅牢な作りになっている。港には、迎撃用の砲台と、幾つものからくり兵器が並び、外敵の侵攻に備えていた。

だが、結果的には、それらの備えは全て無為に終わることになった。

その夜、葵の旗を掲げた船団が、長曾我部の砦を訪れた。葵と言えば、言わずと知れた徳川家の紋である。

「家康さんの使いだつて？」

徳川家康は、彼らの頭かしら、長曾我部元親の親友だ。彼らが言うには、近い内に、瀬戸海を挟んで長年長曾我部と対立している毛利元就が四国へ攻め込む計画を立てているとのこと。自分達は、その情報を得た家康から送られた援軍である。武器や物資を持って来たので、入港を許可して貰いたい。

長曾我部の部下達は、家康の使いを名乗った彼らをすんなり受け入れた。彼らが、内から長曾我部要塞を食い破ろうとする毒蛇とも知らず……

それから程無くして、砦から火の手が上がった。

驚愕、動揺、喧騒、恐慌、悲鳴、爆音、炎上。

いかな堅固な城塞といえども、内からの攻撃には脆いもの。砦に火がつくと同時に、夜の海に潜んでいた第二波が総攻撃を開始する。砲音が、夜の静寂をかき鳴らす。砲弾の雨が降り注ぎ、浜辺に配置された砲台とからくり兵器を次々に鉄屑に変えて行く。船から上陸する多数の軍勢。彼らは徳川軍の鎧に具足を身につけ、葵の旗を掲げていた。敵軍は燃え上がる砦に攻め込み、長曾我部の兵を屠っていく。

「敵襲——っ！敵襲——っ！——」

「敵は徳川軍だ！俺達を騙しやがった！」

「そ、そんな、家康さんが俺達を、アニキを騙まし討ちするなんて……」

「畜生！アニキさえいれば……！」

内と外からの奇襲。相手が徳川軍であることの動揺と狼狽。長曾我部軍は、虎の子のからくり兵器を起動させる間もなく、数分で総崩れとなる。荒くれ者揃いの長曾我部軍も必死に応戦するが、やはり多勢に無勢。加えて、長曾我部元親という実力的にも精神的にも支柱だった男が不在ということもあり、壊滅は時間の問題だった。砦の内外は、長曾我部軍の屍骸で埋め尽くされる。

その様子を、後方の船から眺めていた男は、不愉快そうに唇を歪める。

（刑部め、小生に汚れ仕事を押し付けおって）

男は熊のような巨漢で、全身は岩のような筋肉で覆われている。それに反して、顔立ちは中々端正で、幾分かの知性や愛嬌が感じられた。長い前髪が両目を覆い隠しているため、表情を完全に伺うことは出来ない。両腕には手枷が嵌められており、その先は巨大な鉄球で繋がれていた。

男……黒田官兵衛くろだ かんべえは、やや大袈裟に、わざとらしく嘆息してみせる。

（お前さん達には同情するぜ。何も知らずに死んでいくんだからな。だが、小生を怨んでくれるなよ。怨むなら、小生に四国壊滅を命じた刑部に毛利。それから、この乱世に本拠地を空けてのんきに船旅なんぞしてる、お前さん達の頭を怨むこつたな）

他者に責任を転嫁して、悪ぶってみせる。そんな開き直りに逃避する弱さを自覚しつつも、結局さしたる罪悪感も覚えていない自分は、本当に図々しい生き物だと思う。

その図々しさこそが己の長所だと思っている分、輪をかけて最悪だ。言い訳じみた繰り返いは続く。

（小生も最初は拒否したさ！ けどな、分かるだろう？ 小生だって、命は惜しい。あんな穴蔵の中で、野望を叶えられぬまま、終わりとたくは無いだ！）

黒田官兵衛は、かつて豊臣軍に所属しており、その慧眼から竹中半兵衛と共に“二兵衛”と称されていた。しかし、彼は豊臣傘下でありながら、堂々と天下を狙っており、そのあからさま過ぎる野心を危惧した石田三成によって南の地に追いやられ、石垣原の穴蔵に

投獄されたのだ。

官兵衛は、それでも尚凝りもせず、穴蔵の中で天下取りの野望を画策していた。そんな折り、あの二人が、石垣原の穴蔵を尋ねて来た。

刑部こと大谷吉継は、侮蔑と嘲弄を込めた毒の眼で。毛利元就は、一切の感情を宿さぬ氷の瞳で。それぞれ官兵衛を、地を這う蛆虫を見下すように眺めていた。

「暗よ、ぬしにわれと毛利の兵を貸し与えよう。その兵を率いて、四国を攻め滅ぼせ。案ずるな、西海の鬼は不在よ。ぬしのような暗でもやすう落とせよう」

「西海の留守を突こうってか。お前さん達らしいな」

それだけなら特に驚くに値しない。この戦乱の世、相手の弱点をつくのは当然のことだ。だが、刑部は、続けて妙な要求を出した。

「ただし、ぬしの軍は徳川の軍に偽装してもらう。長曾我部が留守の間に、徳川が同盟の約定を破って攻め入ったことにしたいのでな」

徳川軍に？ 確か、西海と権現こんげんは親友だったはずだが。

そこまで考えて、あの二人の反吐が出るような腐れた企てがよく理解できた。だとしても、官兵衛に拒否権などない。逆らえば、今度こそ身動きの取れぬ土の中へと放り込まれる。死体として。

「なるほど、権現に小生の罪をおつ被せようって腹か」

「しかし。ぬしも西海の鬼に怨まれたくはなからうて。これはわれなりの心遣いよ」

何が心遣いだ……官兵衛は心の中で舌打ちする。毛利元就が、後

を継いで言う。

「巡りの悪い貴様の頭でも、理解できたか？　ならば話は簡単だ。一兵残らず殲滅し、外に情報を漏らさぬようにせよ」

「無論、このことは他言無用よ。くれぐれも、土壇場で妙な気を起こすなよ」

「くっ……！」

思わず、この手枷の鉄球を、あの二人の脳天に叩きつけてやりたくなったが、何とか自制した。

官兵衛がそんな行動に出ることぐらい、刑部と毛利はお見通しだろう。一対二では分が悪い。更に彼らは、後ろに多くの兵を控えさせていた。逆らえば殺すというのは、ハツタリではなかるう。あの時の黒田官兵衛は、大谷と毛利の要求を受け入れるしかなかった。

（畜生、毛利め……刑部め……）

改めて、あの二人の悪辣さに怒りが沸く。義憤というより、この件に自分を巻き込んだことについてだ。自分に四国を殲滅させたのは、徳川や長曾我部に秘密を打ち明けさせないためだ。

（真実を知れば、権現も西海も、絶対に小生を許さないだろうな）

特に部下を全滅させられた長曾我部の怒りは凄まじかるう。これでは、あの二人に助けを求めることも出来ない。刑部は自分を共犯者にすることで、徳川との結託を阻止したのだ。

（つまり、それだけ刑部は小生の台頭を怖れているということか。
くくく……）

笑おうとしたが、引き攣った笑みしか浮かんで来なかった。

（見ている……いずれお前さん達の鼻を明かしてやる。そして、天下は小生が頂く！）

刑部も毛利も気付かぬ水面下で、準備は着々と進んでいる。しかも、こんな卑劣な手を使うということは、奴らも徳川との戦は相当苦しいものであると白状しているようなものではないか。

今の豊臣は明らかに落ち目だ。散々失敗の坂を駆け降りて来た自分には分かる。いずれ、必ず好機は巡って来る。黒幕の身代わり、謀略の駒とさせられようとも、彼の野心の火は、消えることはなかった。

「こつちだ、急げ！」

暗い通路を、二十数名の男達がひた走る。ここは、長曾我部軍が万が一の場合に備えて用意した地下通路である。

「悔しいが、俺達だけじゃどうにもならねえ。ここを抜け出して、アニキに知らせるんだ！」

長曾我部軍の兵士達は、負傷者を庇いつつ、出口を目指す。だが、彼らに光明が訪れることはなかった。代わりに舞い降りたのは、彼らに災厄を降らす蝶だった。

「暗め、やはり詰めが甘い。それとも、わざと逃がしたのか？ われへのささやかな嫌がらせとして」

男は、全身を包帯で巻き、人体の肋骨を思わせる赤い鎧を着、御輿の上に胡座をかいて座っていた。その御輿は、奇妙なことに男一人を乗せて宙に浮いている。更に、彼の背中には、八つの無色の珠が浮揚し、数珠のように円形を描いていた。数珠は、ゆっくりと回転していた。奇態な人物の出現に、長曾我部の兵士達の間にも、動揺と困惑、そして、根源的な恐怖が広がる。彼らの中に、男が石田軍の参謀、刑部こと大谷吉継と知る者はいなかった。

「毛利の間諜の報告がなければ、危うく逃がすところであつた。では、はよう終わらすか」

刑部は、印を結ぶように両手で宙をなぞる。その動作に呼応して、数珠も回転速度を速める。

——穿つな八曜^{はちよう}——

彼が背中に負う、八つの数珠の一つが、瞬きの内に掻き消えた。それと同時に、長曾我部の兵の一人が、突如後方へと倒れる。凄まじい力で正面から殴られたようで、実際に男は顔面が陥没していた。続けて、二人、三人と、兵達が倒れ伏していく。兵が倒れる度に、刑部の背の数珠も減る。

兵士達を襲つた攻撃の正体は、やはり数珠であつた。珠の一つが、種子島のごとき速さで打ち出され、兵士の脳天を射ぬいたのだ。放たれた八つの数珠は、再度刑部の背へと戻る。この数珠は、刑部の意のままに動き、敵を屠り去る彼の凶器だつた。

「蝸牛どもめが。塩でも撒けば楽しかる」

舞うように、踊るように、洞窟内を数珠が乱れ飛ぶ。高速で縦横

無尽に駆け抜ける珠は、兵の肩を砕き、四肢をもぎ取り、胸を穿ち、腹を引き裂き、脳天を叩き割った。

十秒かからぬ内に、二十人以上はいた長曾我部の兵は、生前の面影を残さぬ血肉と内臓の混合物と化して、地面にぶちまけられていた。塩をかけられた蛞蝓か蝸牛のような有様だ。

「逃れようと思うでない。ここで果てるのが、ぬしらの星よ。のう……」

刑部の濁った眼が、血沼の先へと向けられる。そこには、遅れて逃げて来た別の一団が見えた。彼らは、刑部の殺戮を目の当たりにして、絶対に勝てぬと悟り、全速力で元来た道へ引き返そうとする。

——ぬま あまつみかほし
沼るな天津甕星——

刑部の御輿が更に上昇し、天地が逆転する。逆さまになった刑部は、掌を下に向け、数珠を地面に放つ。地面に着弾した直後、濁った黄色の波濤と化して、逃げる兵士達へと追い縋る。波濤は、兵士達の足元で黄色の渦と化して地面へ引きずり込む。

「う、うわあああ!？」

「体が、沈むっ!？」

渦の範囲内はどろどろの底無し沼と化していた。兵士らも必死で抵抗するが、それも虚しく地面へ飲み込まれていく。沼に飲まれた者らは圧死。運よく渦の外周にいて這い出せた者らは、刑部の数珠の餌食となった。

「無常よ無常、これを無常と言わずして何と言う」

沼地の渦は、死体も生者も構わず飲み込んでいく。渦が終息した後、地面は元通りになっていた。惨状の痕跡である、地面から突き出た犠牲者の手足を見て刑部は言う。

「もう一方の逃げ道から逃れようとしたのであろうが、どの道無常なことよ。そちらには毛利が張っているゆえ」

彼の言う通り……反対側の通路から逃げようとした長曾我部の兵は、出口で待ち構えていた毛利軍の弓兵隊の斉射を浴びて、残らず斃れることとなった。

「ここまででは上々。そう、悪だくみは狂わぬが望ましい。ヒヒヒッ」

襲撃者が去った後の長曾我部の本拠地には、無数の長曾我部兵の屍と、徳川軍の旗のみが残された。

その頃……長曾我部元親の船団は、四国への帰路についていた。

「もっと早く帰るつもりだったんだがな。すっかり遅くなっちまったぜ」

長曾我部元親は、船の先端に立ち、夜の海を眺めている。肩に担いだ碇槍の鎖がジャラジャラと音を立て、袖を通さずに肩で羽織つ

た紫色の上着が、海風に揺れる。

「大時化^{しけ}に出くわしたり、海賊に襲われた港町を救ったり、色々あったっすね」

「だな」

元親は四国を出てから後の冒険と漫遊の日々を思い出す。様々な出来事があったが、一番驚かされたのは……

「しかし、ついにあの豊臣秀吉もくたばったか」

「秀吉の野郎を倒したのは、家康さんだとか。やっぱり、すげえですね！」

国の垣根を越えた親友の快挙に、元親も顔が綻ぶ。

「大人しく、秀吉の下で収まる男じゃねえと思ってたが、ついにやりやがったな。あいつなら、平和に天下を治めてくれるだろうよ」

徳川家康には、太陽のような天性の魅力がある。民を想い、部下を大切にし、仲間との絆を重んじる姿勢は、元親も大いに共感できる。だからこそ、元親は家康に、天下平定の夢を託したのだ。自分が認めたあの男なら、必ずや天下を平和に出来ると信じて。船旅の最中も、家康の手助けをしたことが何度もあった。

「体はもちろん、器もすっかりでかくなりやがって」

最初に会った時は、まだ本多忠勝の傍から離れない小さな餓鬼だったのに。ついこの間会った時は、立派な体躯の青年に成長していた。その泰然自若とした佇まいからは、大軍を率い、国を治める男の貫禄が感じられた。

「こりゃ、俺も負けてられねえな」

「何言つてんすか！ アニキは今のままでも最高の男ッス！」

「そうか？ ハハハハハ！」

元親は豪快に笑った後、真剣な顔つきになってこう続けた。

「そう言ってくれるのはありがてえがよ、あいつがでっけえ夢を成し遂げようとしている時に、俺もいつまでもぶらぶらしているわけにもいかねえ。この旅は、俺に多くのことを教えてくれた。だが、やはり俺の原点は四国と瀬戸の海、そしてそこで待ってる野郎どもだ。一旦そこに立ち返って、改めて俺はどうあるべきか見つめ直そうと思つてな」

「四国への帰りを早めたのには、そんな理由があつたんすね」

「更に男を上げようとするアニキ、痺れるっす！」

「それに……秀吉の山猿がくたばって総てが終わりってわけじゃねえ。豊臣の残党も、あのまま大人しくしてるとは思えねえしな。そろそろ、何か起こりそうな予感がすんだよ」

霸王の死は、新たな大乱世への予兆ではないか。そう思えてならないのだ。

「よし、野郎ども！ 四国まで後少しだ！ それまで、氣い抜くんじゃねえぞ——！」

「アニキ————！！！」

長曾我部の船団は、翌朝には四国へと帰還した。

そこで長曾我部元親が目の当たりにしたものは……何より愛する

部下たちの屍の山。葵の旗が示す最悪の裏切りと、海より深い絶望だった。

「首尾よういったな。長曾我部の兵は全滅。これも、ぬしが潜ませた間諜からの情報があればこそ。これは、われからのささやかな礼よ」

四国から本土へ戻る船の中で、二人の黒幕、大谷吉継と毛利元就は向かい合って座していた。

彼らの前には、刑部が用意した膳が並べられているが、二人とも手をつけようとしない。刑部は包帯を取らねば物が食べられず、毛利は石田軍から出された食事に箸を向けることはしない。刑部は気にせず、上機嫌で話を続ける。

「唯一つ心残りがあるとすれば、あの惨状を目の当たりにした長曾我部の顔を拝めぬことよ。さぞや悲しいであろうな。徳川が憎いであろうな。絶望と悔恨が溶け合い、えもいわれぬ不幸の味を醸し出すであろうて。ヒヒヒッ」

包帯の下から、掠れた笑い声を漏らす刑部。毛利は、最前からずつと冷たい眼差しを送っていた。

「貴様の嗜好などどうでもよいわ。我は、長曾我部が徳川にその矛先を向けさえすればよい」

「案ずるな。身を裂かれるような憎しみと悲しみは、たちまちに頭を煮立たせる。無二の友に裏切られたのだから、尚更冷静ではい

られまいて」

刑部の脳裏に、ある男の姿が浮かぶ。彼も、徳川の裏切りによって人生を狂わされた男の一人だ。その憤怒の凄まじさは、常に傍にいてよくわかる。最も、今回は徳川のせいではなく、自分達二人が仕組んだ陰謀なのだが。

「そう、絆など、ただ一つの不幸でたやすく引き千切れるもの。一筋の麦わらのように、少し捻っただけで、ぶちりとな。そのようなものは所詮まやかし、泡沫の幻に過ぎぬ」
うたかた

押し殺した刑部の声には、水底の泥のように沈澱した、深い憎悪の念が込められていた。

「黒田が秘密を漏らすようなことはあるまいな」

「あれはそんな立派な男ではない。野心ばかりが河豚ふぐのように膨れ上がっており、結局は我が身可愛いだけの小物よ。おのれに不利になることは、絶対にせぬ男だ。もし秘密を明かせば、徳川と長曾我部、さらにわれやぬしから袋叩きよ。馬鹿ではあるが、その程度のことは分かるはず」

その慎重さと臆病さが、あの男を更なる泥沼に引きずり込む。そんな黒田の不幸を思い、大田には嗤った。

「して、毛利よ。次はどのようにして遊ぶ？」

「……折を見て、長曾我部に停戦の文を送る。我が安芸も、徳川に奇襲を受けたと記してな」

「さすれば奴めは心置きなく、徳川へ仇討ちに行けるというわけか。何なら、長曾我部に虚言と見抜かれぬよう、本当にどこぞの港を襲

つてみようか？ 今日のように」

「ふむ、悪くないな」

毛利は本気で考えている。長曾我部元親を騙す、そのために己が国の兵士を贄に捧げようとしている。

彼にとって、安芸の国は何を置いても守るべき己の領地だが、国を守る策のためならば、その一部を切り取り、捨て去ることを厭わない。彼が愛するのは、日輪が照らす安芸の国そのものであり、そこに生きる民は、国を存続させるための構成要素としか見なししていない。故に、必要とあらば躊躇いなく捨てることができる。

安芸の国は、毛利元就を頭脳とした人体に例えられる。生きるためには、戦に勝つためには、血を流すことを恐れてはならない。傷はいずれ癒える。髪や爪ならば、欠けてもまた生えて来る。たかがその程度のことには、何を躊躇う必要がある？

毛利元就の国家に対する姿勢は、窮めて冷酷で、厳正で、平等だ。何を置いても、国家の存続を第一に考え、兵や民をそのための捨て駒として割り切れる。国主としては完璧と言えるかもしれないが、人として歪^{いびつ}であると言わざるを得ない。

（われが言えたことではないが。しかし、ゆえにわれとぬしは同胞よ）

彼の卓越した知謀、毛利軍の兵力、中国地方の地理的な重要性。毛利元就と手を結ぶことを選んだのは、そんな現実的な理由以上に、彼の本質が、自分の“目的”に都合が良いものだったからだ。

「毛利よ。やはりぬしと悪たくみをするのは愉しい。ぬしと話していると、われがまともな人間でないかと思ひ込みそうになる」

「……………」

「笑え、ここは笑いどころよ」

「……貴様の冗談は笑えぬわ」

鼻を鳴らす毛利。彼は船が安芸に到着するまで、食事に手をつけることはなかった。

第二章 怨讐起源（一）

「おお、何とおぞましい……」

「近くに寄つたら感染^{うつ}るのではないか？」

「太閤は何故あのような者を……」

「大谷様つて、中身がない感じだよな」

そうさな……われとて昔からわれだったわけではない。われが今のわれになったのには、ちゃんと理由はある。コレデモな。

われは重い病によつて、人目に肌を晒せぬ姿に成り果てた。われ以外の者はわれを厭い、疎み、遠ざけ、忌み嫌い、陰で蔑んだ。この頃は、われもそれなりに人らしい心を持つておつた。だから酷く傷ついたものよ。悲しかった。悔しかった。恨めしかった。

寝ておる時も覚めたる時も、われは病の苦しみと、内から湧き出る嫉妬と憎悪に胸を掻きむしられる思いであつた。身体中をむなぎが這い回るようにな。よくぞ、狂死せなんだものよ。最も、あそこで死ねていた方が、あるいは幸福だったやもしれぬが。冗談よ。

同時に、われは己に問い続けた。何故だ。何故われが、われだけがかような不幸を背負わねばならぬのか。朝も夜も、われはただひたすら問い続けた。

答えはいつまで経つても出なんだよ。無理に己を納得させようとしたことなど数知れぬ。されど、われと違い“まともな姿”で生きていける者を見るたび、われは思わずにはいられぬのだ。

“何故、われだけが”

われは妬み続けた。羨み続けた。憎み続けた。怨み続けた。己の

運命を呪い続けた。昼夜問わず、何度も何度も何度も何度も何度も何度も――

そうしておる内にな。われは人を憎むこと、呪うことが、当たり前になつていったのよ。息を吸つて吐くように、とにかく、“まともな姿”で生きておる者を目にすれば、ごくごく自然にその者の不幸を望む己がおつた。不幸を目にした時のみ、われは幸せを実感することが出来た。

かくして、われはわれへと相成つた。他人の不幸こそがわれの幸福。われは、われ以外の全てをひたすら呪つておつた。

ソレデナ、われは氣がついたのよ。われが幸福になるにはどうすればよいか。

われの病を治す術はない。ならば、われ以外の全てが不幸になれば、全てがわれになれば、それが正しい人のかたちということになる。

われも人であることが出来るのだ。その思いつきにわれは歡喜した。ようやくわれは、生きる目的を見いだせたのだ。かような空想ゆめを頭蓋の内うへでこねくり回す内、やがてソレはわれの渴望うへとなつた。

ちようどその頃であつた。あやつがわれの病床を尋ねて来たのは。

「貴様が大谷吉継か」

やつは冷たい眼差しでわれを見下ろしておつた。

槍の穂先の如く尖つた銀の前髪。鰐が二つ重なつた無銘刀。鎧に刻まれた『だいいちだいまんだいきち大一大万大吉』の文字。

やつの名は知っておった。石田三成。

豊臣軍の臣下で、若輩ながらも数多くの武勲を挙げ、近頃めきめきと頭角を現している男。太閤豊臣秀吉への忠誠心も厚く、早くも秀吉の左腕と目されている。

三成は、今と全く変わらぬ尊大な態度で、われに向かって言い放った。

「私はこの度、恐れ多くも秀吉様に万の兵を任せて頂けることになった。その席で、半兵衛様は私に助言を下さった。より大きな軍を動かすならば、貴様のような軍師を傍に置けとのこと。

大谷吉継、半兵衛様は、貴様の能力を高く買っておられる。私の下で、豊臣が為に粉骨砕身働くがよい。拒否など認めない」

それを聞いて、われはくっくつと笑ったものよ。

「ほうほう、竹中殿がわれをそのように。されど、われは見ての通りの有様。ぬしの力にはなれぬよ」

どうせこやつも、主の命で仕方なく来ただけであらう。酷く投げやりに答えてやった。あるいは、怒ってわれを斬り捨てるやもしれぬ。それも悪くないと、その時のわれは思っておった。

「われのような者をぬしの陣幕に加えても、ぬしまでもが物笑いの種となるうよ。わざわざ厄介者を抱え込むこともあるまい。どうせぬしは……」

われとは違う。ぬしには翼がある。ただ前だけを見て、何処までも飛んでいける翼がの。われのように、己の不幸に嘆き、ただ地べたをはい回る芋虫とは違うのだ。

だが、話の途中で、われは言葉を止められた。

三成めは、音もなく近寄ると、われの胸倉を掴んで締め上げたのだ。首の骨を折らんとする勢いであった。

「黙れ」

憤怒の形相で、三成はわれを真っ直ぐに睨みつけおった。

「貴様の繰り言など興味はない。言っただけだ。拒否など認めないと。貴様はまだ、首を縦に振っていればそれでいいのだ。」

貴様の境遇など知るか。貴様が己をどう思おうが、他の者が貴様をどう思おうが、私にはどうでもいい。私が必要としているのは、貴様の力だ。

下らんことを考えるなよ、大谷吉継。貴様も、一度秀吉様の臣下になったのなら、ただあの御方のためにのみ尽力せよ。無能など認めぬ。怠惰など許さぬ。

そうやって一人虚しく朽ち果てるのを待つぐらいなら、秀吉様のために戦って、戦い抜いて死ね。さもなければ、今この場で私が殺してやる」

三成は、われの首を掴む手に力を込めた。今更死など恐れなんだ。ただ、われは戸惑っていた。われが何を感じたのか、われ自身にも分からぬのだが、その時思ったのよ。

触れれば死に至ると言われた、病に蝕まれたわれに、ああも躊躇いなく触ったのは、あやつが初めてであったと。

それから、われは三成の申し出を受け、やつの参謀として戦場を駆け回ることになった。若手随一と呼ばれる通り、三成は鬼神の如

き強さであつた。一度刃が閃けば、それだけで十数の敵が血水に沈んだ。されど、その荒すぎる気性ゆえ、何も考えずに突き進む傾向がある。そこをわれの策で補ってやれば、やつに敵はいなかった。三成めも、アレで意外に物分りはよい性格であつた。

われはといえば、久々に出た戦場を、存分に愉しんでおつた。何せ、戦場では、皆が等しく不幸になるのだから。これは思わぬ収穫であつた。誰もが絶えず死の恐怖に怯え、緊張を張り詰め、理不尽なる運命に嘆き、願いも虚しく死に至る。そんな不幸を見やるのは大層心地好く、不幸を振り撒くことがわれの生きる糧となつた。この爛れた頭を絞り上げ、より多くの敵が不幸になるよう骨を折つたものよ。

三成の目は、そんなわれが大層勤勉な男に映つたのであろう。次第にわれを信用するようになっていった。何とも滑稽なことよ。見ているものも、目指すものもまるで違う。だが、敵に破滅を与える、その一点でわれらは強く結びついておつた。

われは夢を見る。あの天より、不幸の星が降り注ぎ、この地に生くる全ての者に等しい不幸を与えることを。さすれば、誰も彼もがわれとなる。そうなれば初めて、われはまともな人に成ることができる。ただの空想に過ぎなかったそれを、現実のものとできる道を、ついにわれは見出したのだ。

そして、やはりというべきか、三成の配下どもにはわれを快く思わぬ者が少なからずおつた。いかに声を小さくしようとも、そういった蔑みは嫌でも耳に入ってきておる。声に出さずとも分かるのだ。われは平静を保っておつた。気にならなかつたわけではない。ただ、われにとっては忌まれ疎まれることは空気のようなものでな。

人からの蔑みを吸い、憎しみと呪いを吐き出すのだ。それが、わ

れにとつての自然。病床にあると、御輿の上にあると、それは何も変わらぬ。

そんなある日のことよ。

われに陰口を叩いておつた者達を、三成めが殴り飛ばしたことがあつた。きやつらは、皆一斉にわれに平伏し、必死に非礼を詫びた。当然である。怒る三成を更に怒らせようと思う馬鹿はおらぬ。あの時の三成ときたら、部下といえども殺しかねん形相であつた。

「貴様達は皆、等しく秀吉様の手足だ。秀吉様のために生き、死ぬただけに存在している。その自覚を忘れ、下らぬ足の引つ張り合いに現を抜かすなど、言語道断。」

これ以上、豊臣の品位を貶めるような真似を試みる。その穢れた舌を引き抜き、断ち斬ってくれる」

刀の柄に手を当てた三成に、その場にいた者全てが震え上がった。もちろん、われもよ。

もしもわれの本心が知られば、われが三成に舌を切られる。陰口どころの話ではない。われは常に、豊臣を含めた全ての者の不幸を心より願つておるのだから。

そんなわれの心中も知らず、われを庇う三成に、われは恐ろしくも可笑しく思つたものよ。

こまきながくて
小牧長久手の戦いの後、当時最大の敵であつた徳川家康が太閤に降つたことで、豊臣は天下統一にほぼ王手をかけた。天下で一、二を争つていた軍が一つになったのだ。未だ豊臣に逆らう者どもは数知れなんだが、既に大勢は決まりつつあつた。

その後もわれと三成は、方々を転々とし、豊臣の敵を潰して回った。その頃には、誰もが三成を太閤の左腕と認めておった。

特に小田原は傑作であつたよ。豊臣が小田原の城を包囲している最中、側面から攻めてきた伊達を、われと三成で返り討ちにしてやった。あの時の独眼竜とその右眼の表情と来たら……大勢の部下を殺され、何も出来ずに逃げ延びる屈辱と悔恨に満ちた顔を見て、われは実に清々しい気分になれたものよ。

ここまで順調に豊臣の天下統一が進んだのは、やはり竹中殿の功績よ。あの方は、遙か前から各地に豊臣の軍を潜ませ、一斉に決起させることで、武田、上杉、伊達、北条といった者どもを結託できぬようにした。国と国との間に柵を設けたのよ。後は一匹一匹、料理してゆけばよい。

太閤と竹中殿、あの御二方に関しては、われも幾らか好感を持っておった。もちろん、御二方が不幸であつたればこそ、だが。

竹中殿については……まあ、多くを語る必要はあるまい。知っている者は誰でも知っておることよ。われとあの方は大変似通っている。

ただ、未来を奪われながらも人として生き抜いた竹中殿と、未来を呪うしかなかったわれ。果たしていずれがより不幸であつたろうな？

太閤は、有り余る富と力、自信と威厳に溢れておって、われとは正反対に思える。だがそれは、われの思い違いであると気付いたのは、あの話を耳にしてからよ。われは地獄耳ゆえ、太閤とその奥方についての噂は聞いておる。ああ、耳とは、この兜の蝶々のことではないぞ？ ヒヒヒ。

人は安らぎがあれば、眼前の問題に背を向け、そこに逃げ込もうとするもの。大望を成さんとする者にとって、安息は最大の毒よ。太閤は、そんな己の弱さを知っていたが故に、己が手で安息を握り潰した。自ら不幸を背負わねば、前だけを見て進むことができないのだ。

望まぬ不幸を押し付けられる者は星の数ほどおれど、望んで不幸に落ちるなど、われにも真似のできぬことよ。

では三成は、どう思っておるのであるか。

われは三成に問うてみた。何故、ぬしはこうまで豊臣がために尽くすのかと。実に今更な問いであつたが、三成は気にした様子もなく、こう答えた。

「あの御方は、嘘をつかれないからだ。この世は力が全て。それは揺るぎなき絶対の真理だ。秀吉様の仰る通り、力なき日本は、いずれ海の向こうの外つ国に蹂躪される。だというのに、世の愚昧どもは、下らぬ小競り合いや領土争いに血道を上げている。脆弱な正義に逃げ、真実から目を背ける者に、この国を統べる資格はない。

絶対の真理を掲げる秀吉様だけが、この国を導くに相応しい御方なのだ。だから、私はあの御方に忠誠を誓った。秀吉様の創る新世界がため、立ちほだかる総ての敵を斬滅するために」

三成は、秀吉のことを熱っぽく、誇らしく語った。だが、瞳の奥の炎、その更に奥に在る虚無を、われは見逃さなかった。昔から、人の顔色を窺うことには慣れておる。

余人には信じられまいがな。われには、三成が怯えているように見えたのよ。暗い夜道で迷子にならぬよう、親の手をしかと握り締める稚児のような必死さが、やつにはあつた。

人は、三成を苛烈な男と呼ぶ。野心と情熱に溢れ、主君への深い忠義と、生きる希望に満ち満ちた、われとはまるで正反対の人間。つい先ほどまでは、そう思っておった。どうやら、われは思い違いをしていたようだ。

もしや、こやつは何も持っていないのではないか。触れれば火傷しそうなほどの激情も、己が空虚を取り繕うための飾りに過ぎないのではないか。やつめは己が責務を誇らしく語る。だがそれは、責務であって願望ではない。自分の生き方を知らぬ本当のやつは、己一人では立つことも出来ぬ、脆弱な伽藍洞^{がらんどう}ではなかるうか。

われには、誰にも言えぬわれだけの渴望^{ゆめ}がある。己が不幸によって生まれた夢なれど、これはわれのものだと胸を張って断言できる。だがやつは、その夢さえ持ち得ない。それが異常であるという自覚すらないのは、果たして幸か不幸か。

以前、われは三成を翼を持つ鳥に例えたが、鳥とていつまでも空を飛んでいることは出来ぬ。羽を休め、また空へ飛び立つためにも止まり木を探さねばならぬ。だから、やつには豊臣秀吉という、決して揺るがぬ大樹が必要だったのだ。

己の生きる目的を持たぬため、他者に寄り掛からねば生きる意味を見出だせぬ。だが、この世は嘘と偽り、悪意と敵意に満ちておる。やつの純粹さは、そんな人の悪意に馴染むことが出来ぬのだ。常に針の筵^{むしろ}に晒されているようなものである。

三成は、嘘と裏切りを病的に厭う。否、恐れていると言ってもいい。そんな男が、どうして流されやすく浅ましい人の心を理解できよう。やつが信じられるものは、嘘偽りのない、圧倒的な豊臣の“力”だけだったのだ。

信じられるのは太閤だけ、それ以外は総て斬滅。妥協と矛盾を容認できぬやつめは、かように単純な生き方をするしかなかった。

人は、世界が変わるに従って、己を変えることで世界に順応する。

だが、三成はあまりに純粹すぎて、絶えず変転する世界の中でも、自分を貫き通すしかない。純粹なことは罪ではない。だが、それ故に不純な人どもの中にあつて、やつめは異質にしか映らぬのだ。

われがこの包帯なしでは外に肌を晒せぬように、三成めも、己を刃の如く研ぎ澄まさねば、世界と触れ合うことができぬ。望んでこゝなつたわけではない。ただ、常人とは違う僅かなズレが、次第に深刻な歪みへと変わつていった。われと三成は、似た者同士やもしれぬと、その時気付いたのだ。

その時、われの脳に、黒い蛆虫が忍び入った。もしも、三成が太閤を失うようなことがあれば、やつは一体どうなってしまうのか。それを見てみたくはないかと、虫が囁く^{おくび}のよ。われは、それを噫にも出さなんだ。

だが、まさか、そんなわれの邪念が現実のものとなろうとは――

第二章 怨讐起源（二）

大谷吉継は、時期を見計らい、再び安芸は厳島、毛利の居城を訪れていた。

「こうしてぬしと謀を巡らすのも三度目よ。はかりごとたまには、ぬしから脚を運んでくれぬか。弱ったこの体に、長い行脚あんぎゃは辛い。脚が牛蒡ごぼうになりそうよ」

大谷は相変わらず、宙に浮く御輿の上で胡座をかいている。そんな彼の冗談を無視しつつ、毛利は答える。

「最初の取り決め通りだ。西日本の支配を盤石にするまで、我は中国より東に向かうつもりはない」

「無視か。まあそれはよい。ぬしの慎重さは理解しておる。臆病などとは思うまい。いやまことよ」

「大谷、貴様は我をからかうためにここまで来たのか」

毛利に指摘され、大谷はバツが悪そうに頭をかいた。

「おお、済まぬ。はよ本題に入るか。まずは西海の件だが、首尾はどうか？」

「長曾我部は、我との休戦協定に応じた。ただし、決して我の指図には従わぬという条件つきでな」

「ふむ。あれだけ反目していたぬしとの休戦に応じるとは、やはり今の長曾我部は、徳川しか目に入らぬようだの」

「徳川に対し、真意を問ひ質す使者を送ったようだがな。このことは、既にそちらに伝えてある。始末はぬかりないであろうな？」

長曾我部が送った使者は、大阪に差し掛かるところで、刑部が抹殺する手筈になっていた。

「むろんよ。今回も徳川の仕業に見せかけるには工夫が要ったがなこれで、やつの後悔と憎しみはうなぎ登りであるうて」

——う、うつつ！ すまねえ！ すまねえ！！ 俺が、俺が家康を信じたばかりに！！

俺はもう迷わない！ 俺は鬼になる！ 家康は、俺の手で斃す！
！ 必ずだ！！

「長曾我部は今や疑心暗鬼の蟻地獄に嵌まっておる。疑いが疑いを生み、誰も信じられず、悪い方向にしか物事を考えられなくなる。われにも経験があることよ」

この体が病に冒されてから、誰もが自分の醜い体を蔑んでいるように思えた。耳を塞ごうが、一人で閉じこもっていようが、疑いは晴れることはない。疑心の渦は大きくなり、刑部の中の黒い怪物を肥え太らせた。

「はかりごとの綺麗に進みやるは、やれ小気味良いものよ。
ぬしも痛快である？ 長年、ぬしを苦しめて来た西海の鬼が、われらの思い通りに踊らされておるのは」

「確かにな」

「お、意外よな。ぬしのこと、長曾我部に手こずっていたなど、認

めぬと思つておつたが」

「現状を無視して見栄を張るなど、愚物のすることよ。私の見積もりが甘かったことは認めよう。それ故に、あの海賊を今日までのさばらせて来た。だが、我が奴を敵と見做した以上、我は私の知謀を尽くして、あの海賊を葬り去る。駒として、最大限有効に活用してな」

「ヒヒヒ、それでこそわが同胞。長曾我部にとっては、ぬしを本気にさせたことが、最大の不幸であつたな。ただの小さな稚魚で満足しておれば、網からするりと抜けることも出来たものを」

四国を治める長曾我部は、今や天下に名を轟かす大魚に成長した。しかし、それ故に、毛利と大谷が張つた策略の網に絡め取られ、抜け出すことが出来ない。

真つ向勝負など無意味。あらゆる権謀術策を尽くして、己の手を汚さず葬り去る。それが、毛利元就の本気だつた。世の武将達は、刃を交えた真剣勝負を武人の誉れとする。だが、毛利にとってはそれは全く非合理的な、愚かな思考だ。真剣勝負に拘泥する者ほど、“真剣”の意味を履き違えている。何を犠牲にしても、いかなる手を用いても勝つ。それが真摯に物事を成すということだ。

「ともあれ、これで脇腹を刺される心配は、まず無くなつた」

徳川との結びつきが強い長曾我部が四国に陣取っていることは、石田軍にとっては大きな脅威だつた。現状の勢力に毛利の兵力を合わせれば、徳川に勝つ目も出てくる。しかし、東へ兵を進めれば、徳川に呼応して、長曾我部が背後から挟み撃ちを仕掛けるは必定。東を攻める前に、長曾我部は何としても排除せねばならぬ敵の一つだつた。

単に力押しで四国を攻め落とすだけならば容易い。しかし、長曾

我部は自らの船団を所有し、海を自在に移動できる。海の上こそが、長曾我部軍第二の拠点だ。海に出た長曾我部は神出鬼没。完全に潰そうと思えば、大規模な兵を動員する必要がある。これが、長年毛利が長曾我部に手こずらされて来た最大の理由だった。

その気になれば、奴は船に乗って、日本中の何処にでも自由に拠点を移すことができる。最悪、長曾我部が徳川の遊軍となり、徳川の進軍に合わせて自在に海から攻め込んでくる可能性がある。それは西軍にとって深刻な脅威だ。徳川との戦に兵の大半を裂かざるを得ない西軍は、海からの攻撃までは対処できないだろう。

以上の問題を考慮して、大谷と毛利は、極力兵を使わず、長曾我部を降す策を練り上げた。

四国を滅ぼして長曾我部の戦力を削り、その罪を家康に擦りつけることで、彼の怒りを徳川に向けさせる。本来こちらの脅威となるはずだった、長曾我部の水軍を、そっくりそのまま味方につける。

一石にて二鳥も三鳥も落とす策であった。

むろん、この計画には、部下に情深い彼の性格が前提となっていることは言うまでもない。

「因果よなア。徳川との友情がなければ、長曾我部もわれらの罠に嵌まることはなかった。徳川、ぬしの紡いだ絆が、長曾我部を地獄に追いやったのだ。これがぬしが得意顔で語る、理想の正体よ。人の情など、この無常の世では枷にしかならぬ」

さも嬉しそうに、目許を緩ませる刑部。毛利の目には、彼こそ得意顔になっているように見えた。

「浮かれている場合か。この程度、企ての序の口に過ぎぬ」

毛利に言われ、刑部の口から笑みが消える。

「で、あつたな。脇腹の次は、背後を何とかせねばならぬ」

大谷は、畳の上に広げた地図に目を落とし、中国、四国より更に西、九州に指を這わす。

「やつらに迂闊な動きを見せれば、たちまちの内にあの世行きよ」

実際、九州は四国以上の脅威であつた。現在、九州は島津義弘率しまつ よしひろいる南の島津軍と、大友宗麟おおともそうりんの治める北の大友ザビー教国に二分されていた。大友氏は、元々小国の領主に過ぎなかったが、南蛮渡来の宗教団体、ザビー教と結託することで、ここ数年で爆発的に勢力を拡大した。かつて九州に拠点を構えていた、ザビー軍の後継となつてゐる。

また、それ以上に、大友が現在の強国にのし上がったのは、立花たちひな宗茂むねしげの力があればこそだ。

彼は、“西の宗茂”と呼ばれ、本多忠勝、島津義弘とも肩を並べる、生ける伝説だ。彼は雷切という稲妻を発す双刃を振るうため、“雷神”とも称される。雷切の音は、彼と相対した総ての敵を、極限の恐怖へと誘つ。

盲目的なまでに主に忠を捧げる古い武人で、決して人望に厚いと言えない大友宗麟の今の権勢は、彼の尽力の賜物と言ってよい。

島津と大友の二大勢力は拮抗しており、それゆえ両軍とも牽制を繰り返すのみで、全面衝突に至らずにいる。

「鬼島津に雷神、共に攻め時を弁えた、戦巧者いくわいしやであるからの。剣の立ち会いと同じよ。先に動いた方が負けるとあらば、睨み合いが続くのも必然であるうて」

「だが、それが問題よ」

両軍の戦線が膠着している以上、衝突についての漁夫の利は期待

できない。更に、もしこの状況下で、自分達が九州を攻めれば、島津と大友は結託して対抗する可能性が高い。元より、彼ら是对立しながらも、むしろこの均衡状態を維持しようとしている節がある。

九州は現在、独立の気運が高まっている。長年、九州は織田や豊臣の侵略に晒されてきた。九州の民は、これ以上本土の争乱に振り回されぬことを望んでいる。大友にザビー教が根付いたように、九州では南蛮との交流が盛んだ。既に本土と違う、独自の文化が花開きつつある。

下手をすれば、こちらが東に出兵した機を見計らい、本土に逆侵攻する可能性もある。

「やれ、どこを見渡しても敵ばかりで気が滅入る。徳川とは大違いよ」

東日本は、着実に徳川による統一に向けて進んでいる。

武田は先の戦で徳川に破れ、総大将の武田信玄は病に倒れた。彼に代わり、第一の家臣、真田幸村が大将になったが、やはり力不足は否めず、周辺諸国の圧力を受け、今や見る陰もないほど没落してしまった。

武田の宿敵であった上杉は、毛利に勝るとも劣らぬ戦力を有しているが、かの軍神上杉謙信は信玄の病を知るや隠居を決め込み、越後を一切離れず天下の趨勢を見守っているという。

奥州は、伊達が小田原で豊臣に破れた後、急速に弱体化。今は羽州の最上義光もがみよしあきが幅を利かせている。そしてその最上はかねてから徳川と親交がある。徳川は程なくして、奥州も手中に収めるだろう。

「更に徳川は、かの雑賀衆との契約を狙っておるらしい。伊達や北条は、小田原の件で大層われらを恨んでおる。まず徳川につくであらうな」

「フン、つまり現在の窮状は、総て貴様らの派手な侵略行為が原因

ということではないか」

竹中半兵衛の作り上げた精強な軍勢が豊臣の遺産ならば、侵略によつて生じた恨みや憎しみは、豊臣の負の遺産だ。彼らはそれに苦しめられながら、何とか智恵を絞つて打開策を見つけようとしている。

「それを言われると耳が痛い。ああ、耳と言ってもコレのことではないぞ？」

大谷は、兜の蝶の飾りを指し示す。毛利は何の反応も示さなかった。

「……虚しい。ともあれ、徳川が東を取りまとめる前に、われらも西をまとめ、はように攻め込まねばならぬ。長曾我部とて、いつまでも騙されておるほど空頭からあたまでもあるまいしな。つまり、これは時間との勝負よ」

「分かつておる。島津に大友、九州を治める二国を迅速に降くだし、後顧の憂いを断たねばならぬ」

「できるか？ 島津は豪放なれど老獠ろっかいな古強者ふるつわものよ。長曾我部の時のような手は使えぬぞ」

数多の戦場を掻い潜り、戦の表も裏も知り尽くした老将・島津義弘。剛毅さと狡猾さを併せ持つ彼は、恐らく毛利のような男にとつては天敵であろう。策略の裏を読み、更にそれを正面から打ち破れるだけの力も持っているのだから。長曾我部のような罠を仕掛けても、あっさり見破られるのが落ちだ。

「であろうな。だから、我はもう一方を動かす」

「大友か。なるほど、立花は正面から相手にすれば剣呑に過ぎるが、

島津と違い、所詮は属将。ぬし流に言えば、駒に過ぎぬ」

「駒は差し手に従うしかない。ならば、差し手自身を駒とすれば、その者の駒もまた我のものとなる」

慧眼なる安芸の智将は、大友軍の致命的な、されど、拭い去りようが無い弱点を既に見抜いていた。

「既に計画は始まっている。先程、大友に潜ませていた間諜から文が届いた。間も無く、九州で大きな動きがあるはずだ」

「その辺りは、ぬしの得意技よな。九州征圧は、偏にぬしの計略に掛かつておる。任せるぞ」

「フン」

世辞など要らぬ、言われるまでも無いとばかりに、鼻を鳴らす毛利。

「そうそう、九州と言えば、そろそろ暗めも、穴蔵から這い出してくる頃合であろうよ。この天下分け目の時を前にして、あの黒田が黙ってみていられるはずが無い」

穴蔵に幽閉されている黒田官兵衛だが、その気になれば抜け出すこともできる。この事は、刑部も毛利も織り込み済みだ。

「血気に逸つておる穴蔵は、九州を良い具合に荒らしてくれよう。そのことが、われらの益になるとも知らずにな」

「目先の野望に目を奪われる者は、大局を見失う。枷を嵌められているのは腕ではなく、その思考だということに気付きはしない」

黒田官兵衛の行動が、刑部と毛利には手に取るようにわかった。

「九州については、まアこんなところか。しかし、頭痛の種は他にもある」

「まだ何かあるのか」

「三成よ。毎日毎日、徳川を殺しに行くのだと言って聞かぬ。何とかだめておるが、いつまで持つか」

「凶王三成か」

豊臣秀吉の後継者は、大方の予想通り石田三成に決まった。その後、続出した豊臣の造反者達を、三成は次々に肅清し、各地で血の嵐が吹き荒れた。その苛烈にして、一兵たりとも残さぬ容赦ない戦いぶりから、霸王の意志を継ぐ凶猛なる王、“凶王”と呼ばれ恐れられた。

徳川になびきかけていた者どもも、凶王の逆鱗に触れることを恐れ、再び豊臣に服従を誓った。また、秀吉の死で絶望しかけていた臣下たちは、三成の天をも焦がす激情に、再起の希望を見出した。逆に、そんな三成の非道とも言えるやり方に、一層叛意を強くする者も少なくなかったが。

「徳川に勝つためには色々と下準備が要る。アレも、それを分かってくれば良いのだがな」

「何を悩む必要がある。簡単なことであらう」

「ほう？」

「駒を挿げ替えればよい」

元就は、平然と言い放った。彼にとっては、私情で軍略を台無しにするような者など、駒として無能と言わざるを得ない。無能な駒

はすぐに取り替える。それが彼の信条だ。

「……毛利、そう言うてくれるな。今や凶王無しでは、我が軍は立ち行かぬよ」

確かに豊臣は各地で多大な恨みを買っているが、一方で三成と同じく、秀吉に恩を受けた熱烈な臣下も数知れない。今や石田軍の中枢を占める彼らにとって、三成の復讐という明白な大義は、その身命を託すに足るものだった。

凶王の凶気は伝播する。報恩雪仇に燃える石田軍は、文字通りの凶王軍だ。石田三成、凶王と呼ばれども、彼は確かにひとかどの“王”となっていた。

「われでは無理だ。われでは」

「……大谷。一つ聞かせろ」

自嘲するように呟く刑部に、元就はふと思いついたように問いかける。

「貴様の本当の目的とは、何だ？」

「本当の、目的……」

この大谷吉継が、天下分け目の戦に託す真の望み。内より湧き出でる渴望。それは――

「決まっておる。総ては義のため、三成を生かすためよ」

「義、か」

「左様。徳川への復讐を果たさずして、三成は生きていけぬ。他人を、己を傷つける生き方しかできぬ、哀れな男よ。われは三成の友

として、やつめを救ってやりたい。それだけよ」
「……………」

毛利の冷貌は、見え透いた綺麗事を嘲弄しているようだ。当然である。救う、か。あまりに似合わぬ台詞に、自分でも笑い転げそうになる。

聡明なこの男のこと、遅かれ早かれ、彼は本当の答えに気付くだろう。そうなったところで、大谷吉継としては、別に何の問題もない。

刑部は思う。結局……真に厄介な敵は、長曾我部でも島津でも、ましてや徳川でもなく、あらゆる不幸から超然としている、目の前のこの男ではないかと。

第二章 怨讐起源（二）（後書き）

島津に関しては青・緑ルートの九州独立志向の方を採用。どうしても島津が石田につく理由が考えられないもので……個人ならともかく、一軍の将が私情や同情で動いちゃ駄目だろと思うので。黒田緑ルートの最終戦では、毛利さまも相手の力を認められるぐらいには成長していることが触れられているので、その辺も取り入れてみました。

第三章 虚実变幻（一）

毛利元就には、“三本矢”^{さんぽんや}という腹心の配下がいる。いずれも、毛利元就に絶対の臣従を誓う部下であるが、彼らもまた、元就にとつては駒以外の何者でもない。三本刀でも、三本槍でもなく“矢”なのは、いつでも捨て駒、放たれた後に戻ってこない矢となれという意味が込められている。

それが分かっている、彼ら三人の毛利元就への忠誠は揺るがない。ただ、三人はそれぞれ違う動機で毛利元就に従っていた。

小早川隆景^{こはやかわ たかかげ}は、毛利元就を“恐ろしい御方”^{おんかた}と言う。

ああ……あの御方は恐ろしい！ あの御方は人の心を持つておられぬ。敵を屠る時は勿論、部下を捨て駒として犠牲にする時も、顔色一つ変えられぬ。その御心^{みこころ}は氷の如く、こちらまでもが凍てつきそうになる。あの御方はきつと、何人^{なんびと}に対しても情を感じてはおられまい。

その上、あの御方は聡明であらせられる。一手、二手先どころではない、遙かな未来までも見通し、この世に知らぬことなど無いように思えてならぬ。だからこそ恐ろしい。あの御方は、人の情を解さぬが、我らの思考に関しては、まさに心を覗き見るように掌握しておられる。もしも、僅かでも叛意を抱けば、あの御方はたちどころにそれを見抜き、確実なる死を下されるであろう。

あの御方に仕えている以上、いつかは私も捨て駒として、毛利家を支える人柱の一つにされよう。それは怖い。恐ろしい。死にたく無い。出来る事なら、総てを捨てて逃げ出したい思いだ。

だが、あの御方は必ずそれを見抜かれる。あの御方の意に背いた

者は死、あるのみ。だが、あの御方に従っていれば、少なくともあの御方が望まれぬ限りは、生き続けることが出来る。そう、私があの御方に臣従する理由はただ一つ。少しでも長い間、生きていたい。ただ、それだけなのだよ。

きつかわもとはる
吉川元春は毛利元就を“美しい御方”だと言う。

あの御方は美しい。武芸に智略、ありとあらゆる方面においてずば抜けた才覚を持たれておられ、容貌までもが、まるで神の造形物であるかのように非の打ちどころが無い。まさに天に愛されし神子^{みこ}、日輪の申し子よ。

だが、何より美しいのは、あの御方の透徹^{とつてつ}した君主としての姿勢だ。

あの御方は、万事を合理的に進められる。あの御方は平然と御自らの兵を犠牲にされるが、それは未来への布石。必ず、将来毛利家に益をもたらす結果を導かれるのだ。百を捨てて、未来の千を得る。国家の利益と兵の命を秤にかけ、より重い方を選ぶ。君主としては当然のことなれど、それを迷い無く実行できる者が、果たして何人いるであろうか。

あの御方が組み上げる軍略は、一部の隙も無く、隅々まで計算しつくされた、あたかも精緻な曼陀羅模様のよう。あの御方は過去も現在も未来も、総てを掌握しておられる。これが神の御業でなくて何と言う。

あの御方は人の身でありながら、この安芸毛利家と完全に一体化しておられる。個にして全、全にして個。人にして、一つの世界でもある。だからこそ、あそこまで国家に総てを捧げられるのだ。そして、私を含む毛利家の総ては、あの御方の世界の一部であり、あの御方そのものでもある。

私は、あの御方の世界の一片^{ひとかけら}である事を、心から誇りに思う。
あの御方の為に死ぬるのならば本望だ。元より、死など恐れる方が
おかしいのだ。我らは群にして個、一部が死しても、世界が生き続
ければ、それは即ち我ら総ての生に等しい。その死が、国家の繁栄
の礎となるのならば、それはまさに誉れ。私は待ち続ける。あの御
方が、栄光に満ちた死を私に賜るその時を。

^{もつりたかもと}
毛利隆元は毛利元就を“寂しい御方”だと言う。

あの御方は……寂しい御方だ。世の人々は、あの御方を冷血非道
なる人面獣心の男と呼ぶ。あの御方によつて破滅を与えられたのな
らば、そのように罵る気持ちも、分らないではない。

だが、あの御方は何も、私利私欲で戦っているわけではないのだ。
国を守るため、安芸の君主として最前の選択をしただけなのだ。こ
の乱世は、強くなくては生き残れない。あの御方は、この安芸を生
かし続けるために、人の心を捨て去る道を選んだ。総ては毛利家の
安寧と繁栄の為に。それは、織田や豊臣が天下を蹂躪する中で、奇
跡的に平穏を保ち続けた安芸の国を見ればよく分かる。あの御方の
非情さが、謀略が、この安芸を乱世の魔の手から救ったのだ。

あの御方は永遠に孤独だ。誰も信じられず、誰とも分かり合えず、
国家の為ならば、誰であろうと犠牲にしなければならぬ。毛利家
当主の重責が、あの御方にそれをさせる。それは、酷く悲しい。

あの御方がそのようなこと、微塵も思われていないのは分かって
いる。だからこそ、余計に悲しいのだ。誰も……あの御方自身でさ
え、あの御方を憐れまぬのならば、私が憐れもう。悲しすぎるあの
御方の生き方に、私も殉じよう。誰よりも弱く、孤独なあの御方の
為に。

恐怖、羨望、憐憫……それぞれ動機は違えども、ただ一つ共通していることがある。毛利元就は、彼らの心情など一顧だにしない。彼が求めるのは、服従のみ。必要な時が来れば、彼は何人たりとも、一片の情も与えず、犠牲にするだろう。

彼を、斯様^{かよう}に徹底した智謀の怪物“謀神”^{はかりがみ}に変えたのは、一体何だったのか。

毛利元就は、幼い頃から常人離れした才覚を発揮し、神童^{しんどう}と称えられて来た。十^{とお}に満たぬ歳で難解な書を読み、大人相手に議論を仕掛けて容易く論破するなど、有り余る才気を見せ付けていた。両親や親族、家臣一同は、彼の才能に大きな期待を寄せていた。

当時、中国は現在のような平穏とは程遠く、尼子^{あまこ}や大内^{おおうち}といった大名が虎視眈々と領土を狙い、その他の地方領主が小競り合いを繰り返し、国はすっかり疲弊していた。当時の当主、元就の父・弘元^{ひろもと}は決して暗愚ではなかったが、もはや中国は常人の才覚では收拾しきれない程に混乱していた。

激務が祟^{のしかか}ってか、両親と長男は相次いで死去。元就はあまりに若すぎる歳で安芸の君主として立つことを強いられた。

あるいは、ここで彼が失敗や挫折を経験していれば、その後の彼の人生は、大きく違ったものになったかもしれない。

だが、幸か不幸か。毛利元就の智謀は、常軌を逸していた。まず彼は、当主の椅子に座るや否や、大規模な人員整理を執り行った。無能な者、造反の兆しがある者を、片端から処分し、自分の意のままに動く者にすげ替えた。この速さは、当主になる前から、予め周

到に準備していたものとしか思えなかった。

もちろん、元就の若さや、強引な手法に反発する家臣も少なからずいた。だが、そういった者達は、反抗せぬよう釘を刺す文を送り付けられたり、誰も知らないはずの秘密を仄めかされたり、身内の者が不自然な急死を遂げるのを見て、一斉に震え上がり、新当主への服従を誓った。

元就は、幼い頃から勉学のためと称して、多くの家臣と触れ合ってきた。だが、その時点で彼の頭脳は、家臣達から学ぶものなど何もない程に完成されていた。彼の真の目的は、臣下総ての考えや心理、人間関係を探ることにあった。配下の総てを掌握することは、国を動かす上で必須。恐るべきことに、彼は十歳そこらで己が将来国を背負って立つ時の下準備を、着々と進めていたのだ。

彼は就任一月足らずで人心掌握と内部肅清を済ませると、中国地方の平定に向けて動き出す。彼は、厳し過ぎず甘過ぎず、反乱を起こさないぎりぎりの線を見切って、領民から税を搾り上げた。不必要な出費は極力切り詰め、家臣らにも儉約を命じ、軍備増強に注ぎ込んだ。その、“無駄”と見做した中には、彼の両親と兄の葬儀に関する費用も含まれていた。

当時の尼子や大内は、毛利家を上回る勢力を有していた。そんな強大な敵から国を守るため、元就はありとあらゆる策を繰り出した。各国に間諜を送り、情報を集める。守りの手薄な要人がいれば、捕らえて人質とする。敵領地の田畑を焼き払い、兵糧を削る。降ったように見せかけて、もう一方の勢力とも密かに手を結ぶ。自軍の兵を囫にし、わざと隙を見せて敵を誘い、背後から撃滅する。

暗殺、買収、詐術、煽動、離間、勝利のために、数多の策略を実行し、その尽くを成功に導いた。

数年後には、毛利家は中国一帯を統べる大領主へとの上がり、

その権勢は盤石となった。皆が元就を讃え、あるいは恐れる中、彼が思ったことはただ一つだった。

“何だ、こんなものか”

自分は、何も難しいことなどしていない。ただ、その時々で取れる、最善の手を打ち続けたただけだ。むしろ、今までそうして来なかった者達は、いかに怠惰なのかと呆れ返った。

臣下の中には、彼の非道とも言える戦略を非難する者もいた。元就は、怒るよりも、失望を禁じ得なかった。

そして、悟った。人間とは所詮、こんなものなのだ。情などという不確定なものに流され、成すべきことを見失う愚物の群れ。そのままでは、とても使い物にならぬ。駒として取り扱うには、余計なことを考えぬように仕立て上げねばならぬ。それも出来ぬ者は駒としても失格。我が安芸の地で生きる価値などない。

その後、元就は、一層臣や兵に厳しくするようになった。反抗する者は勿論、失態を晒した者達も容赦なく処断した。国境に厳重な検問を設け、逃亡兵は一人も許さなかった。

背くことも、逃げることも、無能ですら許されない。兵らは常に極度の緊張状態に晒されることになり、死に物狂いで働いた。結果、兵の練度は大きく上がり、毛利元就の軍略に従って動く、精強なる安芸の軍勢が完成した。

貴方は人の心が解らない。

よく言われることだ。だが、実際はその逆だ。人の心など、分かりすぎる程によく分かっている。

中国平定の激動の時代、元就は様々な人間の生き様を目の当たりにしてきた。

主を裏切り下剋上を起こす臣下。長年仕えた忠臣を、癪癪で処刑

してしまう主君。血の繋がった兄弟による相続争い。兄を守るため、自ら命を差し出す弟。食いぶちを得るため、産んだ子供を捨てる親子を庇って命を落とす親。捕らえられた仲間を救うため、無謀を承知で城に乗り込み、結果殺された少年。貧困に喘ぐ村を煽動して一揆を起こし、結果村ごと皆殺しにされた少女。何も出来ず、何も成さず、ただただ死んでいくだけの民草たち。

人間の善き面も悪しき面も、それこそ飽きる程に見てきた。人の想い、心、絆。その総てが無価値に映るほどに。特別なものなど何もない。何もかもが有り触れた、取るに足らぬものでしかない。国の大きさに比べれば、人一人の価値など、何とちつぽけなものか。

国主たるもの、国に生きる総ての民を平等に扱わねばならない。だが、総てに平等な生活を与えるのは、不可能であるし、それはそもそも真の平等ではない。人は、その能力に相応しい待遇を与えるべきだ。

人の価値を、平等に判別する基準はただ一つ。

“使えるか、使えないか”。

毛利元就は、国主として、総ての民に厳正なる評価を下して来た。結果、最底辺の人間は切り捨てられ、国家を維持するのに必要な人間だけが残された。そんな、捨て駒としての命運を逃れた彼らは、安芸の安穩な暮らしを享受している。

毛利元就の、常人離れた冷徹さと厳格さは、安芸の君主としての重責が生んだものなのか。それとも、彼は生まれ落ちた時から、内に虚無を宿す怪物だったのか。それは彼自身にも分からぬこと。確かなことは、これから、毛利元就はかくの如く在りつづける

だろう。その命が尽きるまで、彼は血塗られた道を歩む足を止めはしない。

「安芸毛利の兵たちよ！ 百万一心となつてかかれ！」

一本一本では脆弱な矢とて、幾つも束ねれば易々とは折れぬ。ばらばらの個など認めず、総てを一つの意志に束ねる。それが、毛利元就が己に課した使命だった。

第三章 虚実変幻（一）（後書き）

初のオリジナルキャラ登場。まあゲームでもモブ武将として出てますけど。三成も官兵衛も、そして秀吉もかつてはモブ武将だったのよね。今後の出番の予定は特にありません。

第三章 虚実変幻（二）

大阪城にて。大谷吉継は、石田軍の主将にして盟友の石田三成に、中国行きを提案していた。なお、彼が既に毛利と独自に密約を結んでいることは話していない。

「さて、三成。ぬしが徳川に対抗するには、毛利の力が必要よ」
「何故だ、刑部。芥子粒^{けしつぶ}ほどの領土に固執する者など、私の眼中に無い。それに、豊臣以外の力を借りるなど、秀吉様への冒瀆だ」

相変わらずの頑なさに、刑部は溜息を漏らす。

「ぬしの言うことも最もである。しかし……」

「それより刑部。私はいつになれば、家康を殺しに行けるのだ？」

家康の名を口にする時、ただでさえ剣呑な三成の顔つきが、憎悪と殺意に塗り潰される。

「刑部！ 私はお前の言に従い、ここ一月、豊臣の造反者どもを斬滅してきた。秀吉様の御恩を忘れ、家康に走った者どもも、滅すべき罪人には違いないからな。だが！ もう限界だ！！」

壁に拳を叩きつけ、三成は吼える。

「秀吉様はもう二度と、その力を振るわれることも、高邁なる理想を語られることも、私に笑まれることもない。

なのに！ あの男は、今ものうのうと生き続け、秀吉様から掠め取った天下を、我が物であるかのように振る舞っている！ 私にはそれが許せない！

あの男が今も同じ空気を吸い、一日でも長く生き続けていることが、私には耐えられんのだ!!」

三成の怒りに、刑部も気圧されそうになる。改めて、その憎悪の凄まじさを思い知らされる。

三成は、天下の趨勢など眼中にない。ただ家康を惨殺することだけを目的に、この戦を起こした。今の三成を支えているのは、豊臣への狂信と、家康への憎悪だけだ。

「……ぬしの怒りは最もよ。だからこそ、確実に徳川に勝つ策を練り上げねばならぬ。徳川を討ちに出た後で、背後を突かれては痛すぎる」

「……………」

「徳川も、周りの国々と手を結び、われらに対抗しようとしておる。既に、あの雑賀衆と契約を交わしたと聞く」

「雑賀衆と？」

傭兵集団・雑賀衆。数千丁を越える火器で武装した独立戦闘集団で、この乱世、天下統一を目指す多くの大名に雇われ、重要な戦いで常に勝利をもたらしてきた。雑賀は金にも情にも流されず、ただ雑賀衆を高く評価する者とのみ契約を結ぶという。

頭領の名は雑賀孫市さいかまごいち。この名は代々受け継がれ、今の雑賀孫市は三代目で、女性らしい。

「左様。かつては太閤が雇われ、小田原では共に城攻めに加わった雑賀よ。あの鉄砲と集団戦法は見事であつた。それが敵に回るとあらば、やれどれほどの脅威となるやら」

「おのれ……奴らもまた秀吉様を裏切るか!」

「雑賀は忠や情ではなく、契約によってのみ仕えたと聞く。裏切っ

たつもりはなかるうて」

「どちらでも構わん！ 家康につくというならば、（さいしゅう）雑賀衆もこの地上から燼滅（じんめつ）してくれる！」

いきり立つ三成を見ながら、刑部は別のことを考えていた。

（最も、雑賀が徳川と手を結んだのはわれにとっては都合よいが。長曾我部は、雑賀と交流があると聞く。今回の四国壊滅の件について、調査を依頼するやもしれぬ。だが、雑賀が徳川に組した今となつては、長曾我部も近づこうとすまいて。禍福は糾（あやな）える縄のごとしか、いやまことよ）

なお、長曾我部に仕掛けた策略についても、三成には何も話していない。

（三成めは裏切りを何より嫌う。もし知れば、きっとわれを責め、己をも責めるであろう。太閤の仇討ちに燃える三成の士気を挫くようなことは、避けねばなるまい。三成には、最後まで己は正しいのだと信じさせねばならぬ。この秘密は、われが墓穴まで持つていくことになるう）

石田三成を、完全なる復讐者、狂信者として仕立てあげる。その一念が、盤石なる徳川の大勢に風穴を穿つと、刑部は信じている。これは、長曾我部のみならず、三成に仕掛けた計略でもあった。

図らずも三成自身が望んだように、この戦の勝敗は、石田三成が徳川家康を討てるかどうかにかかっているのだ。そのための舞台を整えるのが、自分の役目。徳川が絆の力とやらで勢力を拡大するならば、自分は陰謀、策略を駆使して、それに対抗できるだけの軍を作り上げる。三成の信念とは正反対の、嘘と欺瞞に塗れた軍を。

（そうか。われは三成を欺いておるのか）

当然だ。分かりきったことだ。自分の真なる望みのためならば、誰であろうと利用する。それなのに、何故あえて心中で呟いたのか、自分でも不思議だった。

「小田原と言えば、北条も、徳川と同盟の動きがあるそうな」

北条家は、小田原の役にて滅亡寸前まで追い込まれるが、黒田官兵衛の無血開城により、小田原城主・北条氏政は一命を取り留めた。彼は小田原城にて蟄居ちつきよを命じられていたが、秀吉が斃れたのを機に、北条家再興に向けて動き出した。彼もまた、東の諸国に倣い、家康率いる東軍に加わろうとしている。

「北条オ！？」

この時の三成の怒気は、雑賀の話聞いた時の比ではなかった。

「秀吉様のお情けで生き延びておきながら、その御恩を忘れ、あまつさえ家康と手を組むとは……許せん！ 必ず斬殺してくれる！！」
「われとしても、あのしぶとさは腹にすえかねる。どん底まで落ちたのならば、そのまま這い回っておればよいものを」

そして、死ぬまで不幸を味わい続けられよい。いずれは、日の本の民総てが、そのようになる。

「ともあれ、徳川は多くの大名を味方につけ、盤石の布陣を敷きつつある。厄介なことこの上ないわ」

「何も難しいことはない。家康を殺し、奴に組する者を殺し、秀吉様に従わぬ者総てを斬滅する。それで終了だ」

事も無げに言う三成に、刑部はため息をつく。

「総ての戦がぬしの言うぐらい簡単ならば、楽なのだがな。だが、徳川はぬしも知つての通り、姑息な狸よ。自らは矢面に立たず、配下の者どもを盾として、ぬしを阻もうとするやもしれぬ。そうして手間取っておる間に、南の地から、漁夫の利を狙う輩がわらわらと這い出て来よう。そうなれば、仇討ちどころではない」

「……………」

「三成、ぬしの怒りはまっこと正しい。だがその怒り、しばしわれに預けてくれぬか。さすれば、その怒りを徳川に叩きつけるに相応しい場を用意することを約束しよう。それまで、まちと待て」

現在、大阪ではいつ徳川が攻めて来ても良いように、東に対して強大な防衛網を敷いているが、その分西側の守りは手薄になっている。進軍すれば、確実に九州の反豊臣勢力が動き出し、徳川と挟み撃ちにされる。それを防ぐためにも、毛利と協力して九州を平定し、その勢力を併呑^{へいどん}した上で、東へと侵攻する。そのようなことを、刑部は懇切丁寧に聞かせた。

三成は、黙って刑部の話を聞いていたが、踵^{きびす}を返すと、城の外へ歩き始める。

「三成や、どこへ行く」

「中国だ。疾^とく終らせる」

返答を聞いて、刑部の眼元が綻んだ。三成は元々、頭の悪い男ではない。今の豊臣が置かれた状況がいかに厳しいものであるか、頭

では理解できている。ただ、常に湧き出る己の激情に嘘をつけないため、融通が利かないだけなのだ。

「おお、聞き入れてくれるか」

三成は、振り向くことなく、いつものように言う。

「何度も言わせるな。疑う余地などない」

こうして、石田三成と大谷吉継は、大阪城の守りを島左近しまさねに任せ、裂けるだけの手勢を率いて、毛利家の本拠地、厳島を訪れた。毛利元就と対面した三成は、開口一番こう言い放った。

「従属しろ。それ以外の返答は認めない」

毛利元就は、三成と視線を合わせたまま眉一つ動かさず、大谷はやれやれといった風に頭を抱える。

「大谷。これが貴様らの大将か」

「すまぬな毛利。こういうやつなのよ」

決まりが悪そうに頭を掻く刑部。

「聞きしに勝る狂犬よ。今の豊臣の品位が知れようというものだ」
「貴様ア！ 秀吉様を侮辱するかア！！」

「侮辱か。果たしてそれはどちらであろうな？」

刀の柄に手をかけて咆哮する三成と、涼しげにあしらう毛利。炎と氷がせめぎあっているようだ。大谷は、二人の間に割って入る。

「抑えよ、三成。毛利も。今は内輪揉めしている場合ではない」

三成は、依然毛利を睨みつけている。殺気に満ちた眼光は、並の兵卒なら気死しかねない。三成の刀は鞘に収まったままだが、彼自身剥き出しの刃のようだ。

そんな殺意をぶつけられても、毛利は氷の面を崩さず、平然と受け流している。両者は、一瞬たりとも眼を逸らさない。

「毛利元就、私は貴様が信用ならない。もし私の寝首を掻くような真似を試してみる。その時は、この安芸ごと蹂滅してやる」

「安い脅しよ。徳川に裏切られたことに、それほどまでに傷ついたか」

「何……？」

「下らぬことに気を回す暇があったら、貴様も徳川を潰すために知恵を搾ったらどうだ」

「貴様に言われるまでもない！ 家康を殺す！ それが私の総てだ！」

なおも睨み合いは続く。しかし、両者全く同時に視線を切り、互いに背を向ける。

「刑部、後は任せる」

「あいわかった。同盟締結、ということでのよいのだな？」

「任せると言った。好きにしる」

刑部は、内心安堵の吐息を漏らす。

「いいか毛利、裏切るなよ」

「フン」

三成は、毛利の顔を見ようとせず、その場を後にしようとする。だが、突然、何かに気付いたように足を止める。その視線は、厳島の回廊の一点に注がれている。

「三成……？」

大谷が振り向いた時には、三成は弾かれたように駆け出していた。

「うふ、うふうふ。やっぱり安芸の国といえば牡蠣かきだよねえ。今

日は一人で牡蠣鍋だあ」

小早川秀秋こはやかわ ひであきは、牡蠣を山ほど入れた桶を抱えて、上機嫌で回廊を歩いていた。兜虫の角のような兜を被り、背中をすっぽりと包める大きさの鍋を背負っている。小柄な体躯だが、余程よく食べるのか、肉付きはよい。

「天下分け目だか何だか知らないけど、そんなことに一生懸命になっちゃって、皆馬鹿みたい。まあ、勝手に戦ってくれる分には構わないけど、僕を巻き込まないで欲しいなあ。あーやだやだ。こういうもやっとした気分の方は、一人で鍋を食べるに限るよ」

そこに……

「金吾^{きんご}おおおおおおおおおつ！！」

石田三成^{はやぶさ}が、隼の如き速さで突き進んできた。

「ひいつ！ み、三成くん！？ ど、どうしてこんなところに！？」

小早川秀秋、通称金吾は三成の姿を目にするや否や、背中の鍋を被^かつてうずくまる。鍋が甲羅に見立^{みだ}てると、伏^ふせた姿はそのまま兜虫^{かぶつむし}のようだ。

「金吾お！ 貴様^{たばか}何故ここにいる！ 病で動けぬなどと抜かしおつて、この私^{わたし}を謀^{はか}ったのかあ！！」

三成は刀を抜き、金吾の背負^{せお}う鍋に叩^{たた}き付ける。鍋越^{なべご}しに伝^{つた}わる凄^{せつ}まじい衝^{しょう}撃^{げき}と、三成の怒^{いか}気に、金吾は震^{ふる}えあがる。

「ひiiiiiiii！ ごめんなさあああああいい！！」

ちょうど五日前のことだ。三成は、（名目上）金吾率^{きんご}いる小早川軍^{さへがわ}を、対徳川^{たいとくせん}に備^{そな}えた防衛^{ぼうえい}線^{せん}に加^くえるべく、彼^{かれ}を大阪城^{おさかじょう}へと呼^よび寄^よせた。しかし、金吾は重^{おも}い病^{びょう}を理^{こと}由^ゆに登城^{とうじょう}を断^{ことわ}る文^{ぶん}を返^{かえ}して来^きた。ところが、實際^{じっさい}は……

「じ、実は安芸^{あんぎ}へは病^{びょう}氣^きを治^なしに来^きたんだよ！ 牡蠣^{かき}は栄養^{えいよう}満点^{まんてん}つていうからね！」

（よし！ 三成くんは単純^{たんじゆん}だから、これで騙^{だま}されるはず！！）

だが、桶に山と積まれた牡蠣は、病人が一人で食べられる量を越えていた。

「金吾……この期に及んでまだ虚言で誤魔化そうとするか!!」

嘘を何より嫌う三成は、再び金吾の甲……鍋に、刀を叩き付けた。

「ひいっ! ごめんなさいごめんなさい! 全部嘘でした! 戦に駆り出されるのが嫌だったんですう!!」

「金吾、貴様……」

「だ、だって、どうせ家康さんには敵いつこないし、負け戦で死ぬなんて嫌だし……はっ! あ、いや、今のは無し! 無しで!!」

人一倍臆病な割りに、口数が多いので、金吾は度々地雷を踏み、三成を怒らせていた。彼は、人をいらつかせる天性の才能を持っている。今回は途中で気付いたが、もう遅い。三成は、こめかみに青筋を浮かべ、唇を小刻みに震わせている。

「金吾……私が家康に劣っていると……秀吉様の遺された軍より、家康の軍の方が上だと……そう言うのだな!？」

「ひい! 嘘嘘嘘嘘! 今の全部嘘だからお願いごめん許してえ!!」

「許さん! 金吾! 今日こそ貴様の腑抜けた性根、叩き直してくれる!!」

「えー……へこんだ鍋じゃないんだし、叩いたって元には……」

「ならば死ね!!」

「ひええええええええええ!!」

怒髪天に達した三成は、金吾の甲羅を何度も叩く。鈍い金属音が、

敵島の空に響き渡った。

「何をしておるか、石田」

「あ、も、も、毛利さまあああああ！！」

金吾の目に、毛利元就の姿が映る。金吾は、這うようにしてその場から抜け出すと、救いを求めて毛利の下へ駆け寄る。

「毛利さまあああ！ 助けてええええええ！！」

涙を流しながら駆け寄って来た金吾に、毛利は……

「ひぶつ！！」

鋭い平手打ちを喰らわせた。金吾の右の頬から、小気味良い音が鳴る。

更に左、右と、金吾の顔面をひっぱたく。涙を散らし、仰向けに倒れる金吾。その腹を、毛利は無造作に踏み付ける。踵に体重をかけ、ぐりぐりと回した。

「ぐええええええええ！！ も、もうりざまあ、なんでえ！？」

「金吾。我の治める敵島で、醜態を晒すでない。この無能が」

毛利元就は、冷たい顔で吐き捨てると、金吾の腹に更に両足を乗せた。

小早川秀秋と、毛利家との結びつきは強い。彼は毛利家に連なる

一族である小早川家の現当主であり、

毛利家から中国の一地方、備前国びぜんの統治を任されていた。だが、血筋で跡継ぎになっただけの金吾はその器には程遠く、日がな一日中食べてばかりいる名ばかりの当主となっていた。

当時は、豊臣が日本各地で大攻勢をかけている頃で、中国地方にもその猛威が迫ってきていた。

専守防衛策を取る毛利元就は、竹中半兵衛との粘り強い交渉……という名の、脅しに騙し、虚実織り交ぜた熾烈な駆け引きの末、大阪に近い小早川の軍を差し出すことと引き換えに、停戦協定を結んだ。もちろん、このことを金吾が知ったのは、決定後のことだった。こうして、小早川秀秋は、半ば売り払われる形で豊臣の傘下に加わることになる。

無能な小早川とその軍は、豊臣に加わってからも殆ど役に立たず、豊臣でも持て余すことになった。有能な家臣は、総て毛利本家に引き抜かれた後で、毛利家の損失は無きに等しく、豊臣はまんまと厄介者を押し付けられた格好となった。毛利は損失を最小限に留め、長きに渡る休戦を勝ち取ったのだ。

金吾は、豊臣に降った後も、まともに働こうとはせず、的外れな発言で常に周囲を苛立たせた。彼が石田三成や大谷吉継と知り合ったのも、ちょうどこの頃である。

また、豊臣の一員となった金吾であるが、彼は幼少期より毛利元就に強い恐怖心を植え付けられており、豊臣傘下となった後も、独自に毛利と連絡を取り合い、彼の忠実な駒であり続けた。最も、彼が役に立つ局面などこれまで皆無だったが。

彼は、毛利と豊臣、同時に二つの主を戴く立場にあった。秀吉が斃れ、豊臣政権が弱体化する中で、小早川軍の所属は、更に曖昧になってきている。

「金吾、ぬしは相変わらず騒々しいの。蝦蟇^{がま}の方がもちと愛らしゅう鳴くわ」

浮遊する御輿から、仰向けになって踏まれる金吾を見下ろす刑部。

「ぎ、刑部さん！ 何で？ 何で三成くんや刑部さんがここに？」

「われらは毛利と同盟を結んだのよ。のう、三成、毛利」

「……………」

「フン」

金吾の表情が絶望に凍りつく。

「そ、そんな、怖すぎる二人が手を組むなんて…………悪夢だ…………」

「そうかそうか、ぬしは不幸か。メデタキな」

大谷は、嘆く金吾を見て包帯の下顔を綻ばせる。

誰からも無能扱いされている金吾であるが、大谷吉継にとっては、ある目的においてのみ有用となる。常に藪を突いては蛇を出す金吾の人生は、不幸に満ちている。自分が何もせずとも、ただそこにいるだけで、良質な不幸を観察できるのだ。

「全然めでたくないよ！！」

「金吾！ 私の話はまだ終わっていないぞ！！」

「やめて！ もうぶたないで！ 毛利さまあ、助けてえ！！」

「知るか。自分で何とかしろ」

金吾の腹から足を退け、脇腹を蹴つ飛ばす毛利。

「ぐひい！！」

百八十度回転し、再び俯せとなる金吾。彼に憐れみをかけるような真つ当な神経の持ち主は、ここにはいなかった。

三成が、再度声を張り上げようとしたその時……

「おやおや、どうしましたか、金吾さん」

三人とも一斉に、声のした方向に振り向く。

そこには、雪のように白い髪を肩を覆う程に伸ばし、顔の下半分に黒い覆面を被った男が立っていた。

「て、てんかい天海さま！」

金吾に天海と呼ばれた男は、目許を緩ませて言う。

「お邪魔してしまいましたか？ 見たところ、お友達と楽しそうに遊んでらっしゃるようだ。いや、びっくりしました。貴方にお友達がいるなんて、私初めて知りましたよ。いつも、一人ぼっちで鍋を食っておられますものね。てっきり、誰にも相手にされない寂しい方なのかと。でも、それは私の思い違いだったようですね。安心しました」

優しい眼差しで金吾を見やり、穏やかな笑みを浮かべる天海。

「色々と、余計なお世話だよ！ ていうか、何勘違いしているんだよ！ 助けてよ！」

「……………」

三成も、刑部も、毛利も、金吾の喚きなど耳に入らなかった。三成と刑部は、天海を前に戦時さながらの警戒心を向けている。二人とも初対面ながら、この男から発せられる、得体の知れない“何か”を感じ取ったのだ。

「貴様、何者だ？」

三成は天海を正面から見据え、剣呑な声で問い掛ける。天海は、微笑みと共にこう答えた。

「私は天海。御覧の通り、何の変哲もない、どこにでもいる僧侶です。うふふふ……」

僧と称したこの男は、白い服の上に、甲冑を身につけていた。そして、背中に背負った、先端に大きく湾曲した刃物の付いた二対の棒状の何か……

それは、錫杖などでは断じて無く、血潮を啜り、死を振り撒く大鎌そのものであった。

第三章 虚実变幻（二）（後書き）

鎌ではありません。『鎌のようなもの』です。

怒る三成を沢山書けて満足です。三成は怒っている時が一番魅力的ですね。関智一さんのボイスが素晴らしすぎます。烏城と小田原のイベントが特にお気に入り。

そしてみんな大好き金吾さん。金吾さんは西軍ドストリオと本当に相性が良いですね。この三人が真に結託するのは金吾さんを虐める時だけだと思います。

3で好きなキャラベスト5が、毛利・大谷・石田・天海・小早川の五人だったりします。

第三章 虚実变幻（三）

天海と名乗る自称・僧侶が、いつ頃小早川秀秋の傍に現れたのか、定かではない。過去の経歴、僧としての出自、本当の名前、彼の総ては謎の帷とばりに包まれている。しかし、彼の温かく、慈愛に満ちた言葉に救われた者は多く、小早川軍の者達からは『慈悲深き天海様』と呼ばれ、慕われている。

また、軍事・政治に関しても、理知的な切れ者であり、役に立たない当主の金吾に度々助言し、決断を促している。天海を信頼する金吾は、その総てを受け入れた。今では、金吾に代わって小早川軍そのものを取り仕切る立場にあった。

「あゝあ、酷い目にあつた。全く、皆怒りっぱいんだから。魚の骨でもかじればいいのに」

金吾は天海と連れ立って巖島を後にする。

「そして、喉に骨が刺さつて死ねばよろしいと。分かりました。金吾さんの心遣い、あの方達に伝えておきますね」

「やめてやめてやめて本当にやめて！」

天海の袖を掴む金吾。

「はあ、僕はただ牡蠣を食べに来ただけなのに、何でこんな目に。おまけに、毛利さま達と九州に行くことになっちゃったし。毛利さまも三成くんも、僕なんかになんか何かを期待されても困るんだよね。僕に何ができるってわけじゃないんだからさあ」

ため息と愚痴を繰り返す金吾を、天海は慈愛の籠った眼差しで見下ろしている。

「でもでも、九州って美味しいものいっぱいあるんだよねえ。知ってる？桜島大根と言つてさ。こーんなに大きな大根があるんだよ」

金吾は両腕で輪を描き、大根の大きさを示す。

「その中身をくり抜いて、色んな具材や出汁^{だし}を入れて、大根そのものを鍋にしちゃうんだ。はふゝ鍋の具だけじゃなく鍋まで食べられるなんて。想像しただけでほっぺたが落ちそうだよお」

弛んだ頬を手で掴んで、体をくねくねさせる金吾。

「金吾さんはおめでたい方ですねえ」

「めでたい？ 何言っているんだよ！ 全然めでたくないよ！ 三成くんや毛利さまのせいで、毎日胃が縮こまる思いをしているんだから！ すっかり食も細くなっちゃって、前は夕食に鍋三つは余裕だったのに、今じゃ鍋一つ、一日三鍋しか食べられないよ」

「……あの、一応聞いておきますが、一日三食総て鍋なのですか？ 後、一人で、鍋を総て食べられるのですか？」

「そうだよ？ やだなあ、何を言っているんだよ天海さま。鍋は一人で食べるためのものでしょう？ それに、鍋は肉や魚、野菜を全部まとめて食べられる、栄養満点の万能料理なんだよ。具材を変えれば飽きないし、三食鍋でも全然問題ないのさ」

「はあ、そういうものなのですか。食の細い私には、そんなに食べてお腹を壊さないか心配なのですが」

「うふふ、僕の胃袋は美味しいものならいくらでも入るんだよ」

「なるほど、その分は、そのふくよかな体に還元されると言っわけ

ですね」

天海は、聴こえようもない小声で呟く。

「何か言った？ それとさ、鍋の楽しみはまだあるんだよ。具を全部食べ終わったら、残った出汁に御飯を混ぜればおじやになるんだ。色んな具の味が染み出した出汁に混ぜた御飯は、最高に美味しいんだから！」

「……鍋丸ごと食された後に、まだお米までも食されるのですか」
「当たり前だよ。鍋の後におじやは常識。欠かすことのできない、神聖な儀式なんだよ。もちろん、御飯は鍋いっぱいいたーんまりとね。ああ、米の代わりにうどんを入れて、鍋焼きうどんにするってのもありだから」

「……聞いているだけで胸焼けがしそうです」

顔をしかめ、腹の辺りを抑える天海。

「ところで金吾さん。貴方は、あの御三方が嫌いなのですか？」
「うつ……あんまり大きい声じゃ言えないけどさ、嫌いだよ。三成くんはすぐに僕をぶつし、刑部さんは僕にいじわるするし、毛利さまは僕を踏ん付けるし。三人とも、いなくなっちゃえばいいのについて、いつも思っているよ」

天海を前にすると、彼は決して明かせない胸のうちもぺらぺらと喋ってしまう。彼にとっては、怒鳴られることも叩かれることも、無視されることもない相手というだけで貴重なのだらう。

そんな金吾の暗い憎しみを見て、天海は顔を綻ばせる。

「ほう。ならば、逃げ出してみえればよろしいのでは？」

「逃げられるものなら逃げたいよ………」

金吾はしばし黙っていたが、意を決して口を開く。

「これは本当に秘密にしておいて欲しいんだけど……実はさ、家康さんに、こっちに來ないかって誘われているんだ」

「ほうほう、徳川殿が……」

「家康さんはいい人だよ。優しいし。僕をぶたないし」

豊臣の下にいた頃、金吾は家康とも知り合っていた。当時、金吾は持ち前の迂闊な発言で度々三成を怒らせていたが、そこでいつも間に入って、庇ってくれたのが家康だった。

「……ふむ。大きくなったとは聞いていますが、偽善的なところは変わっていないようですね」

「何か言った？」

「いいえ、何も。それより、どうなされるのですか、金吾さん。徳川殿の誘いに応じて……凶王を、毛利様を、裏切られるのですか？」

金吾の顔を覗きこむ天海。「裏切り」と口にした時の天海の声は、いつもより陰を帯びていて、金吾を慄然とさせた。その瞳の底知れぬ深淵に、吸い込まれそうになる。

「え、そ、それは……うーん、まだ決めてない……」

「いいじゃないですか、謀反。^{むほん}やってみれば、意外に楽しいものですよ」

「やったことあるみたいに話すね……」

「とんでもありません。私はただのかよわき僧。己の欲のために主を裏切り、あまつさえその命を奪おうとするなんて、そんな恐ろしいことをする人の気が知れませんかよ」

天海は腕で肩を抱き、体を震わせる仕草をする。

「とにかく、今言ったことは絶対に他の人に喋っちゃ駄目だからね！もし三成くんや毛利さまの耳に入ったら……」

「生きたまま八つ裂きにされ、金吾さんが鍋にされてしまいますね。これまで幾多もの鍋を制覇してきた金吾さんのこと、きつとよい出し汁が出る事でしょう」

「嫌だよそんなの！　ちよつとだけ美味しそう思っちゃったじゃないか！！」

「ああ、かわいそうな金吾さん！（頭が）」

天海は、後ろを振り向き、厳島の社をその瞳に映す。

「それにしても……また厳島（こゝ）に来ることになるとはね。この潮の香り……あの●●の日々を思い出します」

数年前……

「ふう……逃げるのにも疲れました。喉が渴きましたね。潤すしますか……血と涙で」

あけちみつひで

明智光秀は、織田軍傘下でありながら、魔王・織田信長の苦悶の表情を見たいという、歪んだ欲情を抱き、いつか彼を殺す日を夢見ていた。そして彼は“本能寺の変”を起こし、炎上する本能寺で織田信長を討ち果たし、悲願を達成する。

しかし、彼の行動は蜂起の機会を窺っていた豊臣軍の軍師、竹中

半兵衛に読まれており、直後に行動を起こした豊臣秀吉率いる軍勢に“山崎の戦い”にて破れ、手勢を総て失った。豊臣軍はこれを機に、爆発的に勢力を拡大して行くことになる。

総てを失った彼に、悲愴な色はない。元より彼は、天下にも権勢にも興味はなく、部下も軍勢も必要としない。求めるのは、ただ犠牲者達の血と苦しみだけだった。彼は豊臣の追跡から逃れながら、欲望の赴くまま各地で殺戮を続け、安芸は厳島に流れ着いていた。

「何だ貴様は……ぎゃあああつ!!」

袈裟懸けに斬られた毛利の兵が、血飛沫を上げて倒れる。彼の背後には、既に数十を越える屍が、厳島の社を赤々と染めていた。

「ああつ……血と潮の入り混じったこの香り、たまりませんね」

恍惚に打ち震える光秀。鎌に付着した血を払うと、その切っ先を新たな犠牲者に向ける。

毛利軍の兵士達は、敵わないことを悟ったのか、皆一様に怯えている。それでも、彼らは武器を持つ手を離そうとしない。

「どうしましたか？ 私が恐ろしいのですか？ ならば逃げればよいのに……ああ」

光秀は、得心がいったように笑みを浮かべる。

「怖いのですね？ 私と同等か、それ以上に、貴方がたにここを死守するよう命じた毛利様が！」

明智光秀は、狂える快樂殺人鬼であるが、同時に人の心理に関する

る鋭い洞察力も持ち合わせていた。

「う、うわあああああつ!!」

進むも死、退くも死。まさに死に物狂いとなつて掛かつて来る兵士達を、光秀は無慈悲に、酷く愉しそうに斬り刻んだ。

「ちょっとした腹ごしらえのつもりだったのですが……毛利元就。私は貴方に興味が沸いて来ましたよ。うふふふ……ふふふふ……」

鎌に引つ掛かった腸を引きずり、光秀は毛利元就の住まう、厳島の本殿を目指す。

「も、元就様! 本殿の正門、突破されました!! 賊は殿内で殺戮を続けながら、真っ直ぐこちらに向かって来ます!」

「賊はたかが一匹であろう。何を手間どっておるか」

上座に腰掛け、階段の下にいる部下に、毛利元就は苛立ちを交えて叱責する。

「も、申し訳ありません! し、しかし、敵は恐らくあの明智……」

次の瞬間、伝令兵の腹に真っ赤な華が咲いた。

「ぐはあああああつ!」

「んふふふふ……初めまして……毛利様。明智光秀と言う名の、惨めな野良犬でございます」

腹から鎌の刃を引き抜き、べつとりと付着した血をなめ取る光秀。そんな光秀を、元就は眉一つ動かさず見下ろしている。彼の出現にも、目の前で部下を殺されたことにも、まるで動じていないようだ。

「餓鬼道に堕ちたる貴様が何用か」

「深紅に染まる海が見たくなりました。貴方も御一緒にどうですか？」

毛利は、心底から馬鹿に仕切ったように鼻を鳴らす。

「謀反を起こしたはいいが、豊臣に破れ、今や死に体の貴様に何ができる」

「ええ、ですから可哀想な私を憐れんで、貴方の悲鳴を聞かせて下さい。それだけが、今も昔も私の悦び……」

「痴れ者が。生きて帰れると思うな」

これ以上話す事など無いというように、毛利は輪刀・霸幻^{はげん}を頭上に掲げ、一言だけ命じる。

「やれ」

「うおおおおおおおおおおおおおおつー！！」

四方から大きな爆弾を背負った兵が飛び出す。彼らは毛利元就によつて死を上回る恐怖を植えつけられた、自爆前提の特攻兵だった。

「んふふふ……いいですよ、毛利様。貴方は本当に素晴らしい！」

光秀は、大鎌を振るって矢を弾きつつ、左側へと跳躍する。弓兵達の中へ飛び込み、彼らの内の一人を腕に抱える。そして、その腹に、大鎌の切っ先を突き入れた。

「うはっ……！ ああっ！」

鮮血が噴出し、臓物が零れ出る。だが、それだけではなかった。緑色の瘴気が発生し、鎌を通じて犠牲者から明智光秀へと流れ込んで行く。

——恍惚的 吸収——

爆発によって受けた火傷が、たちどころに癒えて行く。相手の生命力を吸収する、光秀の使う外法の業わざの一つだ。

「ふう……ごちそうさま」

吸収と回復を終えると、干からびた屍となった兵士を投げ捨て、大鎌を振るって周囲の弓兵を薙ぎ払う。

他の場所に控えていた弓兵達は、既に矢を番え終わっていた。それらが自身に向けられるのを見て、光秀は再度跳躍する。今度は、階上に佇む毛利元就に向かって、真っ直ぐに。元就もまた、輪刀を構え、迎え撃つ。

それが既に誘導であつた。元就の傍に着地した瞬間、地面が淡い緑色に発光し、光秀の足元から光の爆流が噴き上がる。

——先の手 『発』——

『発』は、毛利元就が自身の『光』の力で生み出した地雷だ。彼は予め、自身の周囲にこれを仕掛けておいた。しかし、これしきで怯む光秀ではない。大鎌を振りかざし、元就との間合いを詰める。ついに白兵戦を強いられた毛利元就だが、彼は武人としても超一流。輪刀を巧みに操り、光秀の疾風の斬撃を弾いて行く。

周囲の弓兵達は、一斉に手を止める。あれだけ密着されては、主に矢が当たる危険が高かった。

「役立たずの無能どもが……」

自らに敵を近づけた配下達に、元就は毒づく。

「貴方の兵は、随分貴方を恐れておられるようだ」

「だからどうした。兵を調教するには、恐怖を植えつけるが手っ取り早い」

「同感ですね。ただね、私は残念なのですよ。貴方はまだ、貴方自身の本性に気づいておられないようだ」

「戯言を……」

大鎌と輪刀が、激しく火花を散らす。円弧を描くように振るわれる毛利の輪刀は、彼が奉ずる日輪を象徴している。一方、光秀の大鎌は闇夜に映える三日月。月は太陽を喰らい日蝕の闇に墮とさんとし、太陽は月を消し去り、永劫の朝日をもたらそうとする。そんな死闘の最中、明智光秀の唇が、皮肉な笑いに歪む。

「とばけても無駄ですよ……貴方と私、一皮向けば、同じ色の腸が
はらわた
のた打ち回っている……！　そう、貴方と私の故郷は同じ、同じは

らわたから生まれた腐肉の香りだ」

光秀の声は、明らかな歓喜に打ち震えている。「同属」と巡り合った喜びに。

躊躇い無く兵を犠牲にする非情さ、兵士達が元就を見る怯えきつた眼。どれもこれも、この自分とよく似ている。

例えば同じ恐怖でも、魔王や霸王の一種の人間離れた崇高さや、人によっては輝きさえ伴うそれとは違う。だから光秀は彼らを見ても、強い興味は覚えても同類とは思わなかった。むしろ遙か上の存在ゆえに、地べたに引きずり落とすことを渴望する、そんな類の相手だった。

毛利元就のそれは、氷のように冷たく、無機質で、それ故に逆に人間らしさも感じる。人を苛む術を知り尽くした、人にしか与えられない恐怖の形だ。だからこそ、自分と同属にして同類だと感じられる。

全霊の殺意をぶつけ合いながら、光秀は元就に語りかける。その心を引き裂き、こじ開け、覗き込むように。
はわ

「取り繕うのはやめましょう。貴方は私と同じ……そう、ただ血が見たいだけ！」

「氷の面で取り繕っても、腹の色までは隠せない」

「己を隠すのは苦しいでしょう？ 欲望に素直になればとても楽になりますよ」

「貴方の爪先から伸びるのは血塗られた道です。その道のりは実に気持ち良さそうだ。わかりますよ。私も同じ道を歩んできた！」

毛利元就の顔立ちに、ついに歪みが生じる。甲高い声で言い返す元就。

「我が目的は、安芸毛利家永劫の繁栄！ 己の欲望にのみ耽溺する貴様と同じにするな！」

「そのために、どれだけの人生を踏みにじつてきたのやら！　国のため！　己のため！　言葉を変えようとも、結局は総て欲望でしかありません。光も闇も変わりませんよ。白か黒か、ただ一色で塗り潰そうとする浅ましき人の欲望に過ぎない！」

クククク……アー
ツハッハッハッハッハッハ！！」

彼の語る大義を、光秀は所詮張子の虎だと嘲弄する。

怨恨的
斬擊

周囲一体を薙ぎ払うように、大鎌を旋回させる光秀。これに対し、元就もまた、輪刀を二つに分割し、自身の身体ごと独楽のように回転させる。

返し手 転

二対の刃の車輪がぶつかり合い、その威力を相殺する。

「どうしました？端正なお顔が引き攣っていますよ」

「おのれ、愚劣な……！」

「苦しむ人を見るのはとても嬉しい。だから貴方を、ゆっくり眺めるとしましょー!」

顔面を狂喜に歪め、突進する明智光秀。

明智光秀を拒絶するように、正面に光の壁を作り出す元就。大鎌の切先は、『壁』に阻まれ先へ進むことが出来ない。それでも、光秀の眼光は、壁越しに元就を射抜かんとするほどに鋭く、邪念に満ちていた。

「実に残念ですよ！　せつかくお友達になれると思ったのですがね」
「下衆が、貴様との馴れ合いなどいらぬ！」

「おやおや寂しい御方だ。一人ぼっちですか」

「そうだ。我を理解できる者は、この世に我だけでよい！」

彼は理解も共感も同情も求めない。そうなるように出来ている。そうなるように、己で選んだ。

己も所詮は揺らぎ惑う凡庸な人間に過ぎないことなど百も承知だ。だからこそ、彼は己自身にも駒であることを課す。極稀に生じる僅かな揺らぎも、国主としての使命の重さが押し潰す。こうして己は完璧となる。完璧とならねばならない。

「何を呆けておるか！　射殺せ！！」

元就に怒鳴られ、周囲の兵士達は壁で足止めされている明智光秀に向けて、一斉に矢を射る。光秀の背に、矢が次々に突き刺さる。彼は、避けようともしなかった。既に、毛利元就以外の総てが眼中に入っていない。痛みも苦しみも、同属を相手にする快楽の前では総て消し飛ぶ。

「アハハハハハハ！！　そうです！　やはり貴方と私は同属だ！　だからこそ殺し合うしかない！　貴方の血は私と同じく冷たそう

だ！ 今から私が確かめてあげましょう！！」

そう、最初から手を組むなどありえないこと。何故なら、総てを駒と見做す毛利と同じく、自分も己を含めた総てを、苦しめ痛めつけ鬨り殺して快楽を得る糧としか見做せない。その身に背負った業ゆえに、総てを拒絶し続ける、永遠に孤独な存在。どれだけ尊い人間も、どれだけ親しい人間も、どれだけ愛しい人間も、その姿を目にするや、加虐と殺戮の対象にしてしまう。同類であろうとなんดารうと、目に付いた者は総て殺すしかないのだ。

「癒してください！ この魂の渴きを！！」

明智光秀の全身から、緑色の瘴気が噴出する。最終奥義の発動を見て取った元就は、自身もまた同等の奥義で迎え撃つ。

「参^{からすき}の星よ！ 我が紋よ！ 日輪に捧げ奉らん！！」

淡い緑色の輝きが毛利元就と輪刀を包み、日輪が現出したかのように眩い輝きを放つ。両者、全く同時に飛び立つ。光と闇が正面から激突し、巖島の社を渾沌の明星が照らし出す――

（そのようなこともあったな）

真紅の柱に残った刀傷から目を離し、毛利は過去の回想を打ち切る。

「毛利、金吾の傍にいるアレは何だ」

金吾が去り、三成も自軍に戻った後で、刑部は毛利と二人きりになる。刑部の頭の中は、あの天海という男から感じた言い知れぬ予感で一杯になっていた。

「アレからは破滅の匂いがする。奴はいずれ破滅をもたらすぞ。われやぬしにとって、決定的な破滅を……」

破滅は困る。自分は、もっと人が苦しむさまを見たいのだ。この命が尽きるまでは、日の本の民総てに、苦しみ続けてもらわねばならぬ。

「ぬしは、やつの素性を知っているのか？」

「……我に聞かずとも、少し調べれば分かることよ」

謎の高僧、天海か。あれこそ笑えぬ冗談の最たるものだ。

「左様か。まあ、ぬしならば心配なかるうて」

「何だそれは。いつもの冗談か？」

「違う違う。確かに、ぬしを信用できぬ三成の気持ちも分かるが、ぬしは己の利害にはどこまでも忠実よ。ならば、破滅を呼びかねぬあの男に対して、ぬしが何の手も打っていない事は考えられぬので。こと目的が一致している限りは、ぬしは信用に足る」

「フン……」

毛利は、しばし何事か考えていたが、おもむろに口を開いた。

「大谷。我も一つ信用してやろう。貴様の言う、本当の目的につい

てだ」

「おお、まことか」

「石田の為に徳川を討つ。我には下らぬ情としか思えぬが、そのような理由で行動を起こす者がいることは、我は承知している。貴様の友情とやら、精々利用させてもらおうでしょう」

「あいわかった。そう、われは三成が悲願を達成すれば、それでよいのだ」

包帯に覆われている故、感情の読めぬ大谷吉継の顔を見て、元就は思う。

（心と言葉……果たしてどちらが嘘であろうな？）

それから、九州にて、大友軍が島津領に侵攻したとの知らせが入ったのは、すぐのことだった。家康の東軍に対抗して、新たに“西軍”を名乗った石田・毛利連合軍は、この機を逃さず九州へと進軍を開始する。

第三章 虚実変幻（三）（後書き）

2で一番好きなバトルだった毛利元就VS明智光秀。いつか書きたいとは思っていたので、ここで入れてみました。台詞は戦国BASARA2台本全集を参照。本当、台詞のセンスが素晴らしいです。

3の台本全集も11月には発売されるらしいので、BASARAの二次創作を書く人は必携かも。

第四章 凶星群舞（一）

「なぜじゃ……なぜじゃ……」

一体何が悪かったのか。鉄球を引きずり、敵の軍勢から逃げ惑いながら、黒田官兵衛は己の行いを振り返る。

計画は完璧だった。彼は、大谷や毛利の目を盗み、発掘現場の鉱夫を中心とした、独自の軍を作り上げ、南の端から虎視眈々と再起の機会を伺っていた。そして訪れた、日の本を東西に分かつ、天下分け目の時。己が天下を掴む好機は、今を置いて他にない。

幸い、石田軍の目も、今は東に向いているはず。穴蔵から出た後、まずは大友と盟を結ぶ。続けて島津との仲を取り持ち、九州連合を結成し、東西の決戦に殴り込みをかける。しかる後に徳川と石田を倒し、天下を統一する。この計画に隙などあるはずがなかった。

だが、実際は……黒田軍を引き連れ、大友領に近づいた瞬間、大友軍は問答無用で攻撃を仕掛けて来た。更に、豊臣や毛利と思しき軍隊まで上陸して来て、九州はあつという間に内戦状態に突入する。長い時間をかけて育てて来た黒田軍は一夜で総崩れになり、官兵衛自身も大友軍から逃げ回っているところだった。

「なぜじゃあ——っ！！！」

何故いつもこうなってしまうのか。黒田官兵衛は、己の星の巡りの悪さを、天に向かって嘆く。

数日前、毛利元就は大友ザビー教国を訪れ、国主の大友宗麟と極秘裏に会談していた。

彼は一年近く前から、大友に間諜を送り込み、大友の内部事情を探りつつ、密かに宗麟に接触させていた。長い説得と交渉の末、こうして毛利との秘密会談が実現したのだ。

このことは、立花宗茂は何も知らない。彼は、国境で島津軍の警戒に当たることが多かった。

「大いなる友の国、大友ザビー教国へようこそ。僕がその国主、大友宗麟です」

金髪のおかつば頭に、西洋風の衣装を身につけた宗麟は、やや大仰な仕草で挨拶する。まだ年若い少年、金吾と対して変わらぬ年齢に見える。

「我が安芸の君主、毛利元就よ」

元就は、先程から不機嫌な気持ちで顔に出るのを何とか我慢していた。このザビー教国の怪しい雰囲気、奇怪な建造物、入信を迫る信者達、その他総てがいちいち神経に障る。特に時折響いて来る、彼らの教祖の名を讃える歌声、これが最高に不愉快だ。頭蓋に反響し、脳髓が生理的嫌悪感で満たされる。あの静謐で荘厳な、安芸は厳島の社に帰りたくなった。

（大谷にやらせるべきであつたか）

後悔の念が込み上げて来たところで、雑念を消去し、冷徹な策略家としての顔を取り戻す。

「さて、毛利元就様。ザビー教に入信希望とのことでしたが……」
「違う」

にべもなく断る毛利。

「私の目的は、既に配下の者が話した通りだ。貴様達大友は、長年南の島津と対立していると聞く。大友宗麟、西軍に組せよ。さすれば、我らは大友の九州平定に力を貸そう」

入信を即座に断られ、宗麟は渋い顔をするが、話が自分の利害に移ると、今度は別の苛立ちを見せ始めた。

「そうですね。僕としては、野蛮な島津などさっさと駆逐して、九州を統一してしまいたいのですが。僕が軍を動かそうとする度に、宗茂があれこれ難癖をつけてくるんですよ」

「立花宗茂か」

「あの男、家臣の分際でやたらと僕に意見するんですよ。何様のつもりでしょうか、気に入りませんね」

部下の報告通り、大友宗麟は、度々口出ししてくる宗茂を快く思っていないようだ。若くて当主になった宗麟は、部下や国を巻き込んで、我が儘三昧のやりたい放題を敢行、周囲を混乱の極みに陥れてきた。大友領がザビー教に染まったのも、ザビー教に傾倒する彼がその権力を最大限利用した結果だ。

そんな彼の暴走をぎりぎりのところで押し留めてきたのが、先代より代々大友家に仕える、立花宗茂だ。主に曇りなき忠義を捧げることこそ武士の道と信じる宗茂は、宗麟がいかにも未熟で暗愚な君主であろうと、見捨てることなく勤勉に仕えて来た。大友が今も分裂せずにいるのは、宗茂の涙ぐましい努力と忍耐によるものだが、そんな家臣の心を、幼い君主は理解できずにいた。

「そうか、ならば……」

「おっと、待って下さい。宗茂も気に入りませんが、初対面の貴方はそれ以前の問題です。我が大友ザビー教国は、外の如何なる勢力にも左右されず、ザビー様の崇高な教義を守り抜き、布教していくことを目的としています。本土で何が起ころうと、東と西のどちらが勝とうと、僕には何の関係もない事です」

口調は慇懃だが、声色から小馬鹿にしている事がよく分かる。ザビー教ではない人間の言うことなど、本来聞きたくも無いのだろう。だからといって、自分がザビー教に入るなどというのは論外だが。

「……大友、貴様、何故立花が島津との戦を渋っているか、考えたことはないのか？」

「どういことです？」

「立花が、貴様を快く思っていない事ぐらい、承知していよう」

「ええ、僕の目は誤魔化せません。忠義面をしているようですが、やたらと僕に反抗的で、あれこれ口出ししてくるのです。何より気に入らないのが、せつかく僕がつけてあげた洗礼名を名乗ることを拒否するのですよ。ギャロップ立花という、美しい響きの洗礼名を考えてあげたのに。一分ぐらいで」

全く一方的で、くだらない不満だ。だがこの未熟さが、こちらの付け入る隙となる。

「島津と立花は、長年懇意にしているとか。もしも、立花が貴様を裏切って島津につけば……この大友家はひとたまりもあるまい」

「なん、ですって……？」

宗麟は眼の色を変えた。部下が謀反を起こすなど、考えたことも

ないのだろう。ただしそれは、部下を信頼しているからではない。これまで誰も表立って逆らう者がいなかったため、下克上を起こされるなど、想像もつかないのだ。

「立花宗茂は、島津との間に立って開戦を遅らせつつ、その裏では島津と協定を結ぼうとしている。大友を滅ぼし、島津に九州を明け渡す為の協定をな」

「馬鹿な……で、ですが……」

宗麟は考え込んでいる。今までまるで疑いを持ってこなかったからこそ、突如として植えつけられた疑心暗鬼の種は、急速に成長している。彼はこれまで、部下の心情など一度も省みた事は無かった。理解できぬものを、理解できないままにしておいたのだ。それでも部下は、黙って自分についてきた。だから安心だと、根拠も無く盲信した。

彼は、部下が何を考えているかなど何も分からない。そのことに気付かせてやっただけだ。それだけで、宗麟の心は嵐のように揺れ動いている。

もしも、立花宗茂が自分に叛意を持っていたら……島津と同盟するまでもなく、彼はあっさりと自分の首を取れるだろう。それを理解した瞬間、宗麟の中で底無しの戦慄が這い上がってくる。

「これも所詮は、私の予測に過ぎぬ。立花は、真実貴様に忠誠を誓っている可能性も無くはない」

「うつ……」

あえてここで、揺らぎを戻す。いいように踊らされているのではないと。これは自分で考えた結果であると、そう思わせねばならな

い。その、己で得た確信こそが、誘導をより強固なものにする。

「だが、真偽を確かめる方法ならばある」

「そ、それは一体……？」

案の定飛びついた。今の宗麟は、大友家やザビー教のことなど頭に無く、何を信じてよいか分からぬ不快な気分を何とかしたくて仕方が無くなっている。人は、不安定である事を嫌う。読めぬ人の心に恐れを抱く。真実を知りたいという願望は、時に何より強烈で、人の視野を大きく狭める。

「島津に宣戦布告せよ。あの男が忠臣ならば、貴様の命令に従い、島津に戦を仕掛けるはず。これで奴の潔白は証明される」

「な、なるほど……」

これは最初に突きつけた条件と全く同じもの。しかし、今の宗麟の頭の中は、宗茂は白か黒か。それを確かめたいという思いで一杯になっている。

「勝算は十分にある。我ら西軍が貴様に手を貸すのだからな」

宗麟は考え込んでいる。もう一押しか。

「まだ足りぬか。貴様は欲しいのであろう？ 島津が大友を狙っているという決定的な証拠が」

「そ、そうです！ それが無い限り、貴方がたを信用することなど出来ません！」

すっかり取り乱した宗麟に、元就は言う。

「石垣原の方面に警戒を払え。島津はその穴蔵で、ある特殊な任務に向けて、練兵を行っている。それは、大友家当主、大友宗麟、貴様の暗殺だ」

「な……こ、この僕を!？」

度重なる疑心暗鬼により、今の宗麟は、命の危機を深刻に実感できるところになっていた。

「近い内に、島津の奇襲部隊が、大友領に向けて進軍を開始するはずだ。信じるか、それとも座して死を待つか……」

「……その情報が確かならば……いいでしょう。貴方がたを信用してあげますよ」

「島津との間で戦が起こり次第、我らは九州へ軍を進めよう。返答は、その時に聞かせてもらう」

会談を終えた後、毛利元就は足早に九州を後にした。一人残された宗麟は、ずっと元就の言葉の真偽について考えていた。しかし、どれだけ考えても、答えなど出るものではない。結局彼は、誰にもこの件を相談しなかった。元就の言葉によって、彼は部下の誰も信用できなくなっていたのだ。それも総て、元就の狙い通りとも知らず……

そして、元就の予測は現実のものとなる。石垣原から突如出現した謎の軍勢。彼らは真つ直ぐ大友領に向かっていった。宗麟は直ちに、自軍にその軍を殲滅するよう命を下す。続けて、家臣一同の前で、島津領への侵攻を一方的に告げた。この決定に、立花宗茂は猛反発

する。

「お待ち下さい！ 何故突然そのようなことを……それに、島津殿との戦は、我が軍に大きな損害をもたらすことは必至。勝敗も危うい戦いに、益などありません！」

「勝算はあります。石田殿と毛利殿が、我々に力を貸してくださるのですから」

「な、何ですと？」

宗麟の発言に、宗茂を初め、家臣一同は騒然となる。彼が石田や毛利と連絡を取っていることなど、寝耳に水だったからだ。

「そんな重大事を、何故我々に話してくださらなかったのですか！？」

「黙りなさい、宗茂。僕は太友ザビー教国の主です。この国の事は、総て僕が決めます。お前たちはただ、僕の決めたことに従っていればよいのです！」

困惑し、詰問する宗茂を一蹴する宗麟。軽く咳払いをして、話を続ける。

「僕は、彼ら西軍と手を結び、九州を平定します。それに、先程島津軍は、我が領土に踏み入り、卑劣にも奇襲をかけようとしていました。島津に太友を侵略する意図があることは明白。このまま放っておいては、いずれ本格的な侵攻が始まるでしょう。そうなる前に、こちらから叩き潰すのです」

家臣達は押し黙る。確かに、島津が先に太友の領土を侵したことは事実。今、現実に関に危機が迫っているのだ。いつもの宗麟の我が儘の一言で片付けられる事態ではない。それでも、立花宗茂は苦

しい顔をして反駁^{はんぱく}する。

「手前には今でも信じられません。島津殿が、まさかそのような……」

「宗茂。お前、やけに島津義弘を庇いますね？」

宗麟は、宗茂に冷たい眼差しを送る。お前の考えていることなど、総てお見通しだというように。

「え？　そ、そのようなことは決して……」

「お前は兼ねてより、島津義弘と仲が良いそうじゃないですか。度々国境に赴いて、裏で一体何をやっているのか分かったものではありませんね」

今の言葉で、宗茂は宗麟が自分に疑いを抱いているのだと覺^{さと}った。

「宗麟様！　宗麟様は、ま、まさか手前に二心ありとお疑いになられているではありませんぬな！？」

「どうでしょうか。お前は日ごろから、僕に反抗的な態度が目立ちますからね。ギャロップ」

洗礼名で呼ばれ、宗茂の顔が苦悶に歪む。

「ギャ、ギャロップ……い、いいでしょう。今はその名も甘んじて受け容れます。ですが！　この宗茂は、常に宗麟様に曇りなき忠誠を捧げております！　その忠誠まで疑われるのは、あまりに無体にございます！」

彼は父に、君主に尽くすことが武士の道だと教え込まれてきた。これまでもずっと、澄んだ青空のように真っ直ぐな忠義を、主に捧

げてきたつもりだ。その忠誠を疑われるのは、宗茂にとって最大の恥辱だった。

「ならば、その忠義を証明してもらいましょう。島津との戦で先陣を務め、見事島津を打ち破ってみせなさい！」

「うぐ!？」

宗茂は押し黙る。実のところ、主従関係を差し引いても、宗茂には宗麟に強く出られない理由があった。何を隠そう、宗茂が島津と裏で何事かを策動しているという宗麟の疑いは、一部に置いて真実だからだ。

だがそれは、宗麟が疑っているような、大友を滅ぼして島津が九州を支配するといったものではない。宗茂と島津が目指すは、九州の独立。これまでの織田や豊臣の時のように、本土の戦乱に左右されず、九州の平和を守り続けるため、両国の間で同盟を結ぼうという目論見だ。二つの国が力を合わせれば、九州を外部からの侵略から跳ね除け、九州に手を出す事は不利益にしかないと思わせることができる。こうして、長きに渡る平和を確立する。そんな計画を、宗茂は島津義弘と練っていた。

宗麟も、無闇やたらに戦を好む男ではないし、この計画では、宗麟が損をすることはない。長い時間を掛けて説得すれば、必ず同盟に応じてくれると宗茂は信じていた。

だが、今や宗麟は完全に島津を敵視し、西軍の力を借りて島津を攻め滅ぼそうとしている。宗茂は、島津義弘とは戦いたくない。剣を交えることで心を通わせた朋友^{とも}であるし、戦になれば、島津と大友双方に多大な犠牲が出る。九州は荒れ果て、独立の夢は遠のくだろう。

だが、宗麟の命令を拒否すれば、今度は謀反者の濡れ衣を着せら

れる。主への忠を第一とする宗茂にとって、友情や大義と秤にかけても、それは到底耐え難いことだった。

そもそも……島津軍が先に奇襲を掛けたというところからして、宗茂は信じられない。島津義弘は歴戦の武人にして老獪な戦略家であるが、信義に厚く、約定を破って騙まし討ちするような男ではない。

考えてみればおかしいことだらけだ。こちらは実際に奇襲を受けたわけではない。不穏な動きを見せたから、先制して撃退しただけだ。何故それを、島津の仕業と先んじて断定できたのか。その情報源は？

立花宗茂という男は、無口でいることが多く、雑念とは無縁の男と呼ばれるが、実際は沈黙しながらも頭の中ではこうしてあれこれ考え込む性分だった。日ごろから心中で主に対する不満や愚痴を呟き、そのことに自己嫌悪を覚えている。

だから、今、宗茂の中で急速に疑いの気持ち広がって行く。思えば、宗麟の彼らしからぬ妙に理に適った物言いといい、急に宗茂への疑いを強めたことといい、その裏に何者かの影を感じる。西軍との同盟……そこから導き出される答えは一つだ。

「我が主よ！ 貴方は毛利殿に利用されているのです！ 島津の奇襲の話も、恐らくは同盟を結ばせる為の罠。何とぞ、目をお覚まし下さい！」

「ふ、やはりそう来ましたか、宗茂。毛利殿が言っていましたよ。心に後る暗いところがある者は、話を別の方面に逸らしたがるよね」「むぐつ！？」

さすがは世に名高き智将。自分の目論見が読まれた時のことも考えて、手を打ってある。

「それに、貴方に心配されずとも、僕は彼らのことなど信用していません。しかし、彼らとて、東の徳川との戦を控えた身。島津を倒した後で、無理をして我が大友ザビー教国まで滅ぼそうとは思わないでしょう」

確かにその通りだ。しかし、彼らは九州を手中に収めた後、間違はなくこの大友軍を含めた九州の戦力を、東との戦に駆り出そうとするだろう。そうなれば、大友軍にも更に犠牲が出る。九州は西軍の食い物にされ、例え西軍が勝利しようとも、島津や宗茂が目指した明るい未来とは程遠いものに成り果てるに違いない。

それに、宗麟は『信用していない』というが、実はそれが一番危ういのだ。彼自身は、西軍に操られているという自覚が無い。あくまで自分で物を考えて、結論を出したのだと思い込んでいる。人を利用する時の基本は、相手に自分は対等なのだと思わせることだ。その自信は、自分は利用されているのだと言う意識を奪い去る。結果、より忠実な操り人形と化してしまう。

「宗麟様！　どうか手前の話を……」

「ギャーロップ。僕はまだ返答を聞いてはいませんよ。毛利殿が言っていました。問いには常に、『はい』か『いいえ』で答えさせろと。答えなさい宗茂。島津と戦うのですか？　戦わないのですか？」

戦う道を選べば、忠義は貫ける。戦わない道を選べば、不忠の烙印を押される。そんな、宗茂の意志を全く無視した問いに、彼は言葉を失う。だが、結論は出さねばならない。それも今すぐに。

「手前は――」

第四章 凶星群舞（二）

それから後、大友軍は島津領へと本格的な侵攻を開始する。大友軍の追撃から、命からがら逃げ延びた黒田官兵衛は、島津義弘の下へと身を寄せる。一方、石田三成率いる西軍も九州に上陸。ここに、九州最南端・耳川において、大友軍を加えた西軍と、島津・黒田連合軍による、九州統一をかけた戦いの火蓋が切って落とされた。

石田三成を先頭に、左右に大谷吉継、毛利元就を従え、西軍の中核三人は大軍を率いて九州の地を進む。彼らが居る本陣の先では、立花宗茂率いる大友軍と、島津・黒田軍との戦いが始まっている。

「首尾よう行ったようで何よりよ。どうした？ 毛利。顔が青いようだが」

「貴様に言われれば御仕舞いよ」

先程も、大友ザビー教国で宗麟と話をしてきた毛利は、大谷から顔を逸らす。

「さて、鬼島津は伏兵戦術を得手とする。迂闊に飛び込んで袋叩き。さりとて攻め手を緩めては、それこそ島津の思う壺」

島津の伏兵戦術は厄介だ。畏だと分かっているも、分かっているからこそ、慎重にならざるを得ず、結果不利な戦いを強いられる。畏はただ仕掛けてあるだけで、軍の思考を狭め、戦を有利に進める。そのことを、島津義弘は熟知している。だが……

「問題なかるう。捨て駒ならば、幾らでもいる」

捨て駒とは、即ち大友軍のことだ。勇んで突入した彼らは、今頃島津の釣り野伏に引っかかり、大きな損害を受けている頃だろう。大友軍を自軍に引きこんだのはそのためだ。島津が大友の戦で兵を使い果たしたところで、軍を動かし、島津軍を蹂躪する。

「とはいえ、こちらからも幾らか送り込んでおくか。……金吾辺りが適當か」

「であるな。撒き餌の役目ぐらいは果たせよう」

大谷は、真つ直ぐ戦場を見据えている三成に近寄り、声をかける。

「三成。九州の統合は、太閤の目的の一つであつた。それを叶える時は今ぞ」

「……これを最後の寄り道にする。島津を討ち次第、家康を殺しに行くぞ」

それだけ言うと、腰を屈め、三成は矢の如く飛び出していった。目指すは敵大将、島津義弘のいる本陣である。

「あの男には慎重さというものが無いのか？」

伏兵の存在を知つてなお恐れず突き進む三成に、毛利は呆れたように声を漏らす。

「三成とはそういう男よ。畏など飛び越えるか、踏み潰す事しか考えられぬ」

刑部はくつくつと笑う。

「さて、われも往くか。なおも悪あがきを続ける穴熊に、引導を渡

してやらねばなるまいて。毛利、大友の手綱は任せるぞ」

毛利にそう言い残した後、刑部を乗せた御輿も、ゆっくりと動き出す。あの男との腐れ縁も長くなっただが、そろそろ終らせても良い頃だ。あの男が次に何をするか、刑部は手に取るように分かった。

毛利元就に島津軍への攻撃を命じられた小早川軍は、密林の中を進む。しかし、一時間も経たずして、小早川秀秋が……

「疲れたあ。もう足が棒だよ。お腹も空いたし、そろそろ休憩しよ、ね？」

などと言い出したため、急遽野営を敷くことになった。金吾は例によって鍋を炊く準備を始めた。

「金吾様！ 戦場で鍋を食すなど、お止めください！」

ここは既に敵地。しかも鍋から煙が立ち上れば、敵にこちらの位置を知らせる格好の目印となる。だが、そんな部下の諫めなど金吾は聞く耳持たなかった。

「うるさいよ！ 一日三食の鍋時間だけが、僕の唯一の楽しみなんだからね！ 外で食べる鍋ってのも、中々乙でいいものだよ」

仕方なく部下達は金吾を守りつつ、周囲の哨戒を始めた。皆は、同行している天海が金吾を諫めてくれることを期待したが、彼は

つも通り、ニコニコと慈愛に満ちた笑みを浮かべるのみだった。

「金吾さん。今日はどんな鍋をお作りになられるのですか？」

「えへへ、見てよ！」

金吾は背負った鍋を地面に置く。部下の一人が担いで来た袋の中身を、鍋の中へとぶちまける。興味深そうに見下ろす天海。

「果物、ですか？」

鍋の中にあるのは、林檎、蜜柑、バナナ、椰子の実など、色とりどりの果物ばかりだった。

「そうだよ。南と言えば果物が美味しいからね。いつもは野菜が中心だけど、野菜がありなら果物でもいいんじゃないかな？ 名付けやすいー鍋！ 南蛮の言葉を使ってみたよ」

「すいーつ（笑）鍋ですか」

この果物総てを鍋で煮込むのだろうか。甘いもの同士、混ざり合っても普通に美味しいのかもしれない。

その時、天海の鼻をある匂いが通り過ぎた。彼の鋭敏なる嗅覚は、離れた場所にいる殺意や敵意の匂いを捕らえる。それでも、彼はあえて何も言わなかった。

程なくして、哨戒に出ていた兵が、慌てた様子で戻って来た。

「ひ、ひい、助け……」

いや、その怯えきった顔は、戻るといふより、逃げて来たといっ

た方が正しい。次の瞬間……

「ぎゃあああああああつ!!」

悲鳴と共に、鮮血が吹き出る。彼の背中を引き裂いたそれは、“前足”で彼を押し倒すと、踏み付けて進む。牙がびっしり生えた口の上に揃う二つの金眼で、獲物達を睥睨する。

「ひ、ひいいいいいっ! と、と、ととととととと……」
「虎ですね」

グルルルルルルル……

白い毛皮に黒の縞模様を持つこの猛獣は、まさしく虎であった。ただし、一般的な野生の虎と比べても遥かに大型の個体で、もはや虎の枠に収まらない。犀か水牛か、それ以上の巨体を誇っている。顔の大きさだけで成人男性と同程度。人間一人を、頭から丸呑みにできてしまいそうだ。

現れた脅威は、虎だけではない。虎の後ろから、虎の毛皮を加工した装束を身にまとい、両手に爪をつけた男が現れた。虎を操る術を知り、虎を命令を発する虎操兵だ。彼らがいてこそ、虎は見境のない野生の猛獣から、島津軍の凶悪な兵器となる。

続けて、密林の奥から島津軍の兵士達が飛び出て来る。彼らは、完全に不意を打たれた小早川軍の兵を次々に斬り殺していく。

「う、うわああ、か、囲まれちゃった」

金吾は既に腰を抜かしている。自分の軽率さがこの事態を招いたことには、まるで思い至らないようだ。

鬼島津に鍛えられた島津軍の戦意は高く、極めて高度に統率され

ている。さながら、理性を持つ獰猛な肉食獣だ。たちまち、金吾と天海を含めた僅かな兵を除いて、小早川軍は殲滅されてしまう。

「骸が並ぶ。この世で最も嘘がない光景ですね」

死屍累々の光景を見て、天海は覆面の下で微笑む。

「あわわわわわ……天海様あ！ 助けてえ！！」

「そんな！ ただの僧に過ぎない私に、戦えと仰るのですか！ 何と無体な……」

情けない悲鳴をあげる金吾に、天海は嘆いてみせる。

金吾は、いつものように鍋を背負って亀の如くうずくまろうと、近くの鍋に手を伸ばす。そんな金吾の尻を、天海は無造作に蹴り上げた。

「……栄誉ある一番槍は、金吾さんにお譲りしますね」
「うわあああああつ！？」

金吾の体が背中から鍋に落ちる。天海は、穏やかな笑みを崩さぬまま、背中の錫杖鎌を手取る。

「では、逝つてらっしゃいませ、金吾さん」
「“行く”の字が何かおかしくない？ う、うわあああああつ！？」

天海は、錫杖鎌を振り子のように振るうと、その柄を金吾を乗せた鍋にぶつけた。鍋は地面を滑り、真っ直ぐ虎へと向かっていく。

「ひいえええええええええつ！？」

虎は、その強靱な前足で鍋を弾く。金吾を乗せた鍋は強烈な回転をかけられ、円弧を描いて地面を疾走する。

「うわあああああつ！　め、目が！　目が回るうううううう！」

独楽と化した金吾は、進路上にいる敵を吹き飛ばしていく。鍋の底が、地面との摩擦で赤く熱されていた。

「熱っ！　熱い熱い熱い！　お尻が！　僕のお尻が燃えるうううううう！？」

「お見事です、金吾さん！　大将に相応しい活躍ですよ！」

本人の意志とは関係なく敵を倒す金吾を見て、天海はゆっくりと手を叩く。すぐに彼の目は、虎に向けられる。鋭利な爪牙と規格外の巨体を持ち、人肉を喰らう白き獣に対しても彼は慈愛に満ちた視線を向けていた。

「ホウホーッ！！」

爪を振り上げ、虎に指示を出す虎操兵。虎は後ろ脚を蹴って飛び出し、天海へと襲い掛かった。

「おやおや、私など食べても美味しくありませんよ」

天海は、ひらりと身かわす。彼のいた所を、弾丸と化した虎が通り過ぎていく。代わりに、天海の後ろにいた兵が犠牲になった。

虎は彼に頭からかぶりつくと、ほぼ一口で上半身を丸呑みにする。腰から上を食いちぎり、兜や鎧ごと咀嚼する。噛み砕き、ただの鉄塊と化したものを吐き出す。同時に、原型を留めぬほど砕かれた人肉の塊を飲み込む。返り血で濡れた首を回し、次なる獲物に狙いを定める。天海と虎の視線が交錯する。

「おお、怖い怖い。誰か助けてください」

そう呟く天海の声には、まるで緊張感がない。虎が再び飛びかかろうとした時……

天海の双眸に、突如禍々しい光が過ぎった。それを目にするや否や、虎は足を止め、跳躍間際の体勢のまま動かなくなる。その巨体を、小刻みに震わせたまま。

「おや、どうなされました？ 先程食べられた方が、お腹に当たったのですか？ うふふふ……」

虎は人語を解さない。たがら、言葉に惑わされることなく、目の前の男の本質を捉えることが出来た。これまで何度も自分を助けて来た、野生の勘が告げている。あの男は危険だ。あの眼は、野生動物が獲物を見つけた時の、純然たる殺意で濁っている。あの男を中心に、底無しの闇が、広がっているようだ。飛び込めば、二度と生きては戻れない。

あれは人の形をした死そのもの。あの男と戦ってはならない。弱肉強食の自然界で生き延びる術はただ一つ。自分より強い相手と戦わぬことだ。自分も、ずっとそうやって生き延びてきた。強い者からは逃げ、弱い者は喰らう。知識ではなく、生まれつきの本能として刻み込まれている。

もし彼が純粹に自然の動物であつたなら、彼は迷わず逃げ出しただ

ろう。しかし、彼の行動原理は、既に人の手を加えられていた。

「何をしておるか！ かかれ！ かかれ！」

主人の声を聞き、人によって植え付けられた別の習性が、彼に臨戦態勢を取らせる。

「戦われるおつもりですか？ どのようなかは分かっているでしょうに。見上げた忠臣です。金吾さんよりずっと優秀ですよ。もちろん、私よりも、ね……」

天海はもう一方の鎌を取り出し、両手に沿って水平に広げる。抱擁した者を永遠の眠りに誘う、死の翼のようだった。

「のわあああああああつ！？」

多くの島津兵を吹き飛ばした金吾鍋は、大木にぶつかりようやく動きを止める。

「お帰りなさい、金吾さん」

「ひ、ひひ、酷い目にあつた……あれえ？ 天海さまがぐるぐる回っている？」

「じきに治まりますよ。それより、金吾さん。今日の鍋は……」

グルアアアアアアアアアアアアツ！！

巨虎の咆哮に小早川兵のみならず、島津の兵も一瞬怯む。虎は爪牙を剥き出しにして、迷わず天海へ飛び掛かった。超重量の突進は、

完全武装の鎧武者とて圧死させる。更に肉を鎧ごと引き裂く爪と牙が加われば、生き残る術などありはしない。

迫り来る巨獣を前に、天海は薄く笑って、呟く。

「虎鍋と致しましょう」

鋭利な牙が、虎の頬から飛び出した。いや、それは牙ではない。どくどくと血を滴らせる三日月型のそれは、虎の両頬を貫いている二対の大鎌だった。虎の爪は、天海に届いていない。虎の突進を上回る速度で繰り出された天海の大鎌が、虎の頭部を挟み込み、空中で固定しているのだ。激痛に悶える虎だが、天海は微動だにしない。あの白い虎の巨体を、両の腕だけで支えている。細身の体に見合わない、尋常ならざる剛力だ。

「すごいや天海さま！ お坊さまじゃないみたいだ！」

ようやく眩暈から立ち直った金吾は、快哉を上げる。

「うふふ……」

なおももかく虎に対し、天海は両の鎌を振るい、顔面を引き裂く。刃を旋回させ、虎の前足を切断する。天海の大鎌は、迅速かつ着実に、虎の巨体を解体していく。その口を牙ごと横一文字に切り裂き、額に刃を打ち込む。筋肉を裂き、鋼並みの硬度を誇る頭蓋骨に風穴を開ける。傷口から血水と入り混じった脳漿が噴き出す。踊るように虎の側面を移動しながら、腹に刃を走らせる。肋骨を断ち割り、

中身をほじくり出す。血肉と臓物がこぼれ落ち、地面を赤々と濡らす。大気を震わす咆哮が、虎の口から放たれる。それが、彼の断末魔となった。

「ククク……アハハハハハ……アーツハハハハハハハハハハ！」

完全に絶命した虎を見ても、彼の狂喜は収まらない。大鎌を振るう手を止めようとせず、何度も何度も、虎の体に刃を振り下ろし、切り刻んでいく。

「て、天海さま？」

笑い狂う天海の姿に、金吾は恐怖を覚える。その時、空から何か大きな物体が落ちてきた。

「ぐえっ!!」

その何かに、金吾は下敷きにされる。

「もう、何なんだよ……」

自分の不運を嘆きながら、見上げてみると……酷く損壊した、血みどろの虎の頭がそこにあった。天海が刎ね飛ばしたそれが、金吾の下に落ちてきたのだ。

「ひ、ひひひひひっ!?!」

金吾は泡を吹くと、その場で気絶した。

「ふう、まあこんなところでしょうか」

ようやく落ち着きを取り戻した天海の足元には、赤黒い肉の塊と化した、かつて虎だったものが横たわっていた。自ら手にかけて死体に、慈愛に満ちた視線を投げかける。

「……あの世では、一人ぼっちで寂しいでしょう。分かりますよ。私もそうですから。孤独は辛い、寂しい。ウフフフフ……」

大鎌の切っ先を、虎操兵達に向ける。彼らの怯えた表情を見ながら、天海は告げる。

「一緒に送って差し上げますよ。慈悲です」

天海の囁きは、彼らには死神の呼び声に聞こえた。

第四章 凶星群舞（二）（後書き）

センターに三成、両サイドに大谷、毛利という構図がとても好きです。実現できて満足。

耳川ステージに虎が出てきたので出してみました。ゲームだと、虎より虎操兵の方が数段タフという不思議。

第四章 凶星群舞（三）

降りしきる赤い豪雨が、体を同じ色で染める。石田三成は、島津軍の本陣に向かつて、密林の中を脇目も振らず突き進む。当然、最も多くの敵と交戦する経路であり、常時百を超える敵と遭遇していた。それでも、三成の速度は下がらない。眼前に敵が現れた瞬間、紫色の光芒が閃き、血水の花が艶やかに咲く。吹き出た鮮血を頭から被り、赤黒く濁った泥土を踏み締める。

「血の雨よ」

立ちはだかった巨漢兵を、頭から一刀両断にして道を開ける。

「降り注げ」

側面から飛び出て来た島津の伏兵五名を、神速の居合で纏めて寸断する。

「氷雨となって」

—— 懺悔 ——

刹那の加速で通り過ぎた後には、無数の刃光が虚空を裂く。瞬時に繰り出す斬撃は百を超える。真空の斬殺空間に囚われた獲物に、逃げる術などありはしない。

「あの日の私を射抜いて殺せ」

人間は、一振りの刀でここまでの殺戮を行えるのか。三成が通り過ぎた後に広がるは、屍の山と血の河だ。

石田三成の剣速は、光を越える。いかな強力や技能も、桁違いの手数と速度の前では圧倒されるしかない。限界を超越した速さで振るわれる剣は、対人戦において無敵であり、槍や銃に勝る大量殺戮を可能とする。刀という武器の成し得る究極形といえよう。

極限まで練磨された彼の剣は、型だけ見れば、隙が無く、完璧で流麗ですらある。だが、実際に剣を振るう三成の姿は、そんな清涼な印象からは程遠い。相手を肉片一つ残さず刻み殺すような、執拗な斬撃。この世の全存在を否定し尽くすような憎悪と殺意を刃に乗せて、剣を振るう姿は“凶王”と呼ぶに相応しい。

「さもなくば……いつそ私を狂わせる!!」

狂ってしまったればどれほど楽か。だが、この癒えぬ悲しみと苦しみ、胸を内から掻きまられるような痛みがあるからこそ、己は復讐を忘れずにいられる。

三成の脳裏を過ぎるのは、あの日の悪夢。何故裏切った？ 何故守ることが出来なかった？ 拭い去りようのない悔恨。家康への、己への、そしてこの世の総てに対する果てのない憎しみ。その怨念と妄執だけが、今の三成を突き動かす。

「だええええええい!!」

島津義弘は、自分の身の丈を越える大剣、青嵐^{せいらん}を振るい、大友の兵を吹き飛ばす。

髪は白く、とうに老境を迎えているはずだが、巖のように盛り上がった筋肉からは、寸毫すんこうの衰えも感じない。一撃にて相手をとどむ、二の太刀要らずの薩摩・現流も、伝説通りの猛威を振るっている。大友軍に加え、西軍まで敵に回すという圧倒的・不利な状況下ながら、その猛威を食い止めているのは、彼の奮闘によるところが大きかった。

迅雷が落ちるが、とき剣には一片の迷いもないが、それでも悲哀の念があった。

（宗茂どん。出来れば、おまはん達とは戦いとうなかったと……）

今は完全に敵味方に分かれた盟友を思う。大友の侵攻と時を同じくして、西軍が九州にやって来たことで、事の大体的想像はついた。裏で何やら、良からぬ策謀があったのだらう。西軍には、智将と名高い毛利元就がいる。

歴戦の勇士であり、戦の表も裏も知り尽くしている島津義弘は、権謀術策による勝利を否定しない。戦とは、九割は始まる前から決まっているものだ。血を流さずして勝ちを収められる者こそ、有能な将の証と言える。

しかし、自分は、その一割に賭ける生き方しか出来なかった。

オイは戦場で魂の望むまま、一心不乱に剣を振るって来たつど。戦って戦って、戦い抜いた果てに、やがて数多の兵がオイの下に集まり、鬼島津などと呼ばれるようになった。オイがこれまで生きて来た道に後悔はなか。きっとオイはこんな風にしか生きられなかった。

それでも、オイはこれまでに多くの若者わかもんは犠牲にしてきた。年齢になるまで戦い続けるつちゅうことは、それだけ多くの死を生み出すということね。

今は乱世、戦場では、老若問わず強き者^{もん}だけが生き残る。オイも武人なれば、その理に従うことに迷いはなかった。

だが、長う続いた乱世も、間もなく終ろうとしちよる。皆が待ち望んで、平和な世の中がやってくつど。だつどん、おいは年寄りで、そんな戦以外はとんと不得手な無骨者ばい。これから来る若者の時代に、オイに何ばできつか……考えた末に、やはりオイの故郷、この九州のために動こうと決めたつと。九州を、戦乱に巻き込まれんよう独り立ちさせて、若者が自由に切磋琢磨していける。その道を切り開くことを、オイの最後の役目にしよう。そう決めたつど。

罪滅ぼしなんて、そんな大それたことを言うつもりはなか。人ば殺した罪は、終生消えることはなかよ。そんな事はようわかちよる。ただ、オイは若者が好きなんよ。真つ直ぐに未来を見て、己を鍛え、壁を乗り越えていく若者の姿がの。オイはそげな若者の命を、よく散らして来た。だつたらその分、多くの若者の未来を切り開いてやりたい。そう思つたんよ。

宗茂どんも、同じ思いじゃった。オイら二人が力ば合わせれば、必ず成し遂げられると信じちよった。

だども……

「し、島津様あああつ!？」

味方の兵が左右に分かれたれ、血の海に沈む。その後ろには、銀髪の青年が、幽鬼の様に佇んでいた。血塗られた刃を鞘に仕舞い、“大一大万大吉”の刻印が刻まれた柄尻を、義弘に突き付ける。

その容姿と刻印、そして氷のように冷たく、炎のように燃え盛る殺気。名を聞かずとも、誰が分かった。

「……おまはんが、凶王きやうおう三成か」

「島津義弘、九州を明け渡せ。刀を捨て、豊臣に服従しろ」

三成は、殺意に濁った眼を向けながら、島津義弘に降伏を呼び掛ける。

「ほう、あの凶王が降伏ば勧めつとは。随分お優しいことね？」

「私は急いでいる。刹那の時も惜しい。平伏ひれふさぬのなら、斬滅して終わらせるまで」

「……その殺意、オイに向けられたもんじゃなかね。聞かせてくれんか、三成どん。おまはんは何故九州を欲し、天下を目指す？」

戦いが避けられぬことは分かっている。それでも、島津義弘は、石田三成という若い将に興味を持った。その純粋なまでに尖らせた殺意に。

「天下など欲しくはない。私の望みはただ一つ、家康を殺すことだけだ！」

家康の名を口にした時、限界まで張り詰めていた三成の殺意が、更に跳ね上がった。島津は、その言葉がまごうことなき真実なのだと悟った。

「何と。天下の覇権など眼中になく、ただ家康どんを殺すためだけに、こん戦を起こしたっちゅうんか！」

「そうだ。奴は秀吉様を殺した。その大罪は、いかなる手を使っても償わせる！ この九州は、私が家康を殺すのに邪魔だ。否、元より日の本は総て秀吉様の掌中にあるべきもの。私はそれを、正しい形に戻すだけのことだ」

「むむむ……」

迷いのない三成の言葉に、島津は眉間に皺を寄せる。だが、その眼にあるのは怒りよりも憐れみだった。

「復讐に総てを捧げる気か？ 家康どんを殺した後、おまはんに何が残るっちゅうんじゃ」

「何も要らぬ！ 家康を殺せるのならば、この身が燃え尽きようと構うものか！！」

あまりに純粹で、それゆえに激し過ぎる憎悪の一念。島津義弘は、それを、無意味の一言で切り捨てることは出来ない。己もまた、多くの若者の命を奪い、数多の恨みを背負う身だ。刃を手に人を屠る者は、誰もが例外なく憎悪の円環に囚われる。そのことは、骨身に染みてわかつている。

天下の安寧のために秀吉を倒した家康を、義弘は否定できない。一方で三成が家康に抱く憎悪もまた、正当なものと認めざると得なかった。

（だつども……）

島津義弘は大剣、青嵐の柄に手をかける。

「三成どん。おまはんの憎しみは激しすぎか。おまはんの炎は多くの若者を巻き込み、死なせてしまう。オイはおまはんに、オイと同じば道歩かせたくはなか」

戦場で武を極める。周囲を、己自身すらも顧みず、復讐を追い求める。いずれも、数多の命を巻き込み散らす修羅の道だ。これから訪れる平和な時代に、修羅の因子を残してはならない。

「……本当なら、おまはんのような若者には、過去ではなく未来を見て欲しか。だども、おまはんが決して退けぬことも分かつちよる。ならば、オイはこの刃で、おまはんを止める！」

全ては、若者達の未来のために。それが、戦い続けて来た己が果たすべき、最後の役目だ。

青嵐を引き抜き、垂直に構える。刃に宿るは絶対の死。数多の敵を震撼させて来た、鬼島津の示現流の構えだ。

それを見ても、三成はまるで動じない。柄に手を当て、腰を屈め、いつでも抜刀できる体勢を取る。

「能書きはいい……私の道を阻むというなら、早々に斬り潰してやる」

「そうよ。意地と信念のぶつかり合い、それが戦よ。三成どん、おまはんの復讐がまつことおまはんの信念ならば、オイという楔くわくを碎き、証明してみせるがよか！」

島津義弘もまた、全身全霊を賭して三成を討つ気である。発散される殺気は三成にひけを取らない。二体の戦鬼は、必殺の意志を胸に対峙する。

「し、島津様！ 俺達も手伝います！」

「やめんしゃい！ おまはんらでは足手まといになるだけよ。無駄に命ば散らすんじゃないか！」

島津義弘の本気の“喝”に、彼をよく知るはずの側近達も震え上がる。いかに鍛えられた島津の兵とはいえ、凶王の前では紙屑も同然だろう。

「島津の兵なら、まず女子供を守り、それで自分の命も大事にしん

しやい。本陣は捨てる。おまはんらは城へ逃げ込め。ここはオイが
食い止める」

「島津様……」

「オイにもしものことがあれば、そんな時には降伏せい。おまはんら
には未来がある。恥を忍んでも、明日に望みを繋ぐことが生きる
つちゆうことね。さあ、行きんしやい！！」

「……分かりました。どうか、御武運を！！」

島津の兵達は、義弘一人を残して後退して行く。雑魚など眼中に
無い。三成は、何より信奉する主の面影を脳裏に浮かべ、誓いの句
を口にする。

「秀吉様……あの者を斬滅する許可を、私に！！」

「いくど、青嵐！ チエエエエストオオオオオオオオ！！」

両者、全く同時に飛び出す。刃の闇色の刃が煌めき、神速の振り
下ろしが迅雷を呼ぶ。

連なつた幾多の小さな刃が、刃の外周に沿って回転する。旋回す
る刃の群れは独特の駆動音を立て、電光を迸らせる。

“雷切”^{らいきり}……立花家に代々伝わる銘刀で、宗茂は父、立花道雪^{たちばなどうせつ}か
らこの雷切を受け継いだ。道雪もまた雷神と呼ばれた豪の者で、両
足が不自由ながらも双輪を操って戦場を疾駆し、生ける雷電のこと

き戦いぶりを見せたという。

脚を使わぬ父の武術はあまりに特異だったため、宗茂は雷切は継いでも武術は他の師に教わり、我流を交えて今の形に昇華させた。ただし、父より受け継いだものは、雷切の他にもある。

それは、君主に尽くす武士の魂。武士たるもの、一度仕えたと決めた主に誠心誠意尽くし、その意に背くことがあつてはならない。

宗茂は、父の言葉に感銘を受け、理想の武士となるべく、克己を重ねて来た。いかな誘惑にも惑わされず、ただ澄んだ心で、己の忠義を貫き通す。それこそが真の武士だと信じてきた。

だが、今の宗茂を縛っているものは、己で定めた武士の理だった。彼は父から掛け替えのない二つ、雷切と武士の魂を受け継いだ。しかし、それ以外は、何も受け継がなかったのだ。

もし、君主が暗愚であつたならどうすればよいか。もし、君主が何者かに操られていたら、どうすればよいか。

そういった諸々を、父、道雪は、何も教えてくれなかった。だから、宗茂はただ一つの教えに従うしかない。心の内で、どれだけ疑念が膨れ上がると、彼は主君の命に背けない。武士ならば、何があろうと君主に従うべし。それだけが、己の縋る総てなのだから。

今や立花宗茂は、大友宗麟の、ひいては、彼を裏で操る毛利元就の忠実な駒と化していた。

「あ、あの音は、雷切――！」

「に、西の宗茂だあ！ 逃げろお――！」

雷切の音を聞いて、敵兵が蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

この戦で宗茂は、極力敵兵を殺さぬよう務めてきた。それでも、勇敢な島津の将兵の何人は、宗茂に挑んできた。その場合は、宗茂も彼らを屠らざるを得なかった。

この戦は全くの無意味だ。本来なら、大友と島津は手を取り合い、

共に九州を守ろうとしたはず。だが、現状は、西軍の策略に踊らされ、両軍相争う事態に陥っている。この時点で、島津も大友も詰んでいる。どちらが勝とうが、疲弊した側を、西軍が押し潰すか、吸収して終了だ。

「貴様が西の宗茂か。大した活躍よな」

皮肉を込めた物言いと共に、馬に乗った毛利元就が姿を見せる。自分が妙な気を起こさぬか、監視の目的も兼ねて来たのだろう。

「……無益な血を流す必要はありません」

「あの兵どもは、貴様が恐ろしいから逃げたに過ぎぬ。貴様がいない時を見計らって、また仕掛けて来るぞ」

宗茂の情けを鼻で笑うように、元就は冷酷な現実を突き付ける。

「島津軍は後退し始めたようだ。城に逃げ込み、籠城するつもりである」

籠城策は無意味とは言えない。何しろ、西軍には時間が無い。大阪城の守りは万全であるが、いつ東の徳川が攻めてくるか分からない以上、早めに終らせて帰還するに越した事はない。

「だが今ならば、先んじて城を抑えることも出来よう。我はこれより、我が軍と共に城へと向かう」

毛利元就の後ろには、毛利軍の兵が多数続いている。宗茂は唇を噛んだ。城には、武将達の親族を始めとした、非戦闘員も大勢いる。

そこに、血も涙もない毛利軍が乗り込めばどうなるか。想像するだに恐ろしい。

「……手前がいきます。城を抑えれば、戦の大勢は決したも同然。その上で、手前が降伏を呼び掛ければ、彼らも応じるはずです」

「さすがに島津と内通していただけあって、奴らには甘いことだな」

元就の皮肉は、この際聞き流す。

「貴殿も、ここで島津の兵を多く失うのは望まないはず。その為には、手前が説得するのが最も穏便に事を収める道ではないかと……」
「穏便、か」

毛利の嘲笑うような言い方に、宗茂も同意したくなる。既に島津、大友双方に少なからず犠牲が出ている。今更穏便などと、戯言たわごとでしかない。

「いいだろう。貴様の好きにするがいい」

毛利は存外あっさりと賛同した。冷たい顔のままで釘を刺す。

「ただし、我らに弓引くような真似をすれば……」

「見くびらないで頂こう。手前は宗麟様の武士。あの方が貴殿との共闘を望むのなら、手前はそれに従うまで。貴殿こそ、同盟の約定を破り、宗麟様を害するようならば……」

宗茂の握る雷切から、紫電が迸る。雷は、宗茂の殺意そのものだ。

大友宗麟は、本拠地の^{こづめ}大友ザビー教国に残っている。そして、現在大友領には、後詰と島津の奇襲に備えるという名目で、西軍の一

部隊が駐屯している。ここまで来れば子供でもわかる。大友宗麟は、西軍に人質に取られているも同然だ。だから、今の宗茂は毛利元就の命令を無視できない立場にあった。

最も、毛利にとつても宗麟は宗茂を動かす唯一の手綱。それを殺してしまえば、宗茂は毛利に刃を向けることを躊躇わないだろう。

毛利ならば、その程度のことは分かっているはず。毛利が立花宗茂を操れるのは、大友宗麟の意志を外れぬ範囲内の話だ。

酷く危うく、歪^{いびつ}な形であるが、両者の間では限定的な主従関係と信頼関係が結ばれていた。

宗茂の本気の殺意を、元就は鼻で笑う。

「案ずるな。我が望みは中国の安寧のみ。九州など欲してはおらん。徳川との戦が済めば、丸ごと貴様の主にくれてやろう」

「……その言葉、嘘偽りでないことを祈ります」

そう、これは主のための戦。例え西軍に利用されていようとも、従うべき主の意志に違いないのだ。そうやって強く言い聞かせねばならぬほど、己は迷っていることを、宗茂は自覚していた。

背を向けた宗茂に、毛利は言葉を投げかける。

「立花宗茂。貴様は、実に優秀な駒であるな」

「……！」

その言葉は、宗茂にとつて最大級の侮辱だった。己が人生の総てを捧げて来た君主への忠義を、“駒”と揶揄されたのだ。

だが……どう言い訳しようと、今の自分が大友宗麟の、ひいては毛利元就の駒となっていて変わりはない。

島津の城へ向かう件にしても、最初から毛利の思惑通りに動かさ

れた感がある。西軍は、徳川との戦に備えて一人でも多くの兵を欲しがっている。自分に仲立ちをさせることで、精強で知られた島津の兵をなるだけ無傷で自軍に引き込むつもりだ。

だが、自分もよく知っているように、島津の兵は気骨のある男ばかりだ。勝ち目がなくとも、容易には屈服すまい。彼らにとっての精神的支柱、島津義弘が倒れぬ限りは。

「島津殿……」

あるいは、また毛利の命令で、今度は盟友と刃を交えることになるかもしれない。暗澹たる思いに吞まれながら、宗茂は己に向けて呟いた。

「手前は……武士です」

——貴様は優秀な駒であるな。

あの言葉は、半分ぐらいは嘲りであるが、もう半分は本心だった。単騎で千の兵を圧倒し、主の命令には絶対服従。あれこそ、己が理想とする手駒の姿だ。

大友宗麟の如き小物に仕えされるには、あまりに分不相応だ。最も、その宗麟が未熟だったからこそ、今回の計略は成功したのだが。

あのような優れた駒が、我の手元にあれば……

無いものを欲しがるなど、無意味なことは分かっている。毛利元就は徳川家康にとっての本多忠勝、伊達政宗にとっての片倉小十郎のような、己と肩を並べるほど優れた家臣に恵まれなかった。そう

いった将のいる軍と比べれば、毛利軍の力不足は明らか。だから、彼は部下の命を食いつぶしてでも、勝つための策略を練らねばならなかった。

長曾我部元親や、いつぞやの厳島に乗り込んできた痴れ者のような、一般兵では相手にならぬ将が現れた際は、毛利軍で唯一対抗できる彼自身が輪刀を手に取り、生死を賭けた。

部下の命を消費するのも、自らが命を賭けるのも、現状の戦力で最大の戦果を得るための方策でしかない。必要だからやっているだけの事だ。迷いに恐れ、下らぬ情に踊らされて手を緩めることこそ、将来的により大きな損失を自軍にもたらすのだ。

自分は永遠に孤独だ。心分かち合える臣下には一生巡りあえまい。それを受け入れ、ただ今在る駒^{モウ}を駆使して最善の手を打ち続ける。それが自分の歩むことの出来る、唯一の道だ。

そう……今こうしている時でさえ、敵味方、そして自分を含めた全てを、駒として如何に動かせばよいかということしか考えていないのだから。

城の人間を人質に取り、島津義弘に降伏を迫る。従う確率は五分と五分……されど、仮に味方に引き入れることが出来たとしても、駒として自由に動かせるかどうか。西軍に降った後に、島津の兵を煽動し、軍を内から瓦解させるかもしれない。それだけ、島津義弘の存在感は圧倒的だ。鬼島津の強大な戦闘能力は惜しいが、やはりここで止める^{とど}しかない。そう……西軍に、“頭”はこれ以上要らない。

石田三成は、島津義弘の討伐に向かった。首尾よく奴が島津義弘を殺^とれば良いが……もし仕損じた場合は、立花宗茂に動いてもらうしかないだろう。島津義弘に説得され、立花宗茂が心変わりする

可能性もあるので、出来れば使いたくはないが。

毛利元就は、石田三成が斃れた後のことについても、冷静に思索を巡らせている。石田三成。なるほど、一人の戦士としては、非凡な力を持っている。だが、総大将が勇んで敵将の首を取りに行くなど、己の役目をまるで理解していないとしか思えない。私情だけで動くようでは、駒としてはとても使い物にならない。

（大谷も、気苦労が絶えぬことよ）

当初は、あの男が実質的な西軍の頭として、石田三成を裏で操っているのだと思っていた。その予測は恐らく間違っていない。間違っていないのだが。

大谷吉継は、言葉巧みに石田を言いくるめ、意のままに動かそうとしている。だが、あの男の凶暴さを、持て余しているような印象を受ける。いや、そうではなく……極力石田の望みに沿うように、心を砕いている節がある。

それは、石田に自分を信頼させてより従順な傀儡に仕立てるためなのか。それとも……

いずれにせよ、あらゆる事態を想定して策を打つ必要がある。ここで石田三成が果てることも、無論、毛利の計算の内に入っている。天下分け目の乱世において、状況は日々変転する。策は臨機応変に組み替えていかねばならないだろう。何を変えようとも、己が目指すはただ一つ、安芸毛利家の繁栄のみ。それさえ達成されれば、誰がどうなろうと構いはしない。

第四章 凶星群舞（三）（後書き）

生まれて初めて九州弁を喋るキャラを書いた……

立花宗茂の父、立花道雪はBASARAでも見てみたいんですが、宗茂というより、大谷とかぶりそうだな。

第四章 凶星群舞（四）

「官兵衛さん、こつちだ！」

「お、おう！」

黒田官兵衛は、僅かに残った部下に先導され、九州南端の港に逃げ延びていた。港には、島津軍の船が停泊している。だが、島津の兵は今や総て戦に駆り出されており、現在港は殆どもぬけの殻と化していた。

「出航の準備は済んでる。早く乗ってくれ！」

「分かった。お前さん達には、何から何まで迷惑をかける」

「気にしなさんな。俺たちや官兵衛さんのお陰で、退屈な穴蔵暮らしから解放されて、夢を見ることが出来たんだからよ」

「うつつ、お前さん達、泣かせてくれるねえ！」

官兵衛は、枷で繋がれた両手で顔を覆う。

「ははは、泣くのは天下を取った後にしろって！」

黒田軍の構成員は、官兵衛同様、豊臣に逆らったり、重罪を犯して穴蔵に放り込まれた者が大半を占める。彼らは同じ境遇ゆえの連帯感で結ばれ、黒田官兵衛が掲げた天下という夢に向かって邁進していた。これまで恵まれなかった人生を、やり直す為に。

（悪いな、島津のじいさんよ。このままお前さんと戦っても、負け戦になっちまうのは火を見るより明らか。かと言って、西軍に降つてまた刑部や毛利にこき使われるのなんざ真っ平御免だ）

官兵衛が島津の下に身を寄せたのは、体制を立て直す時間が欲しかったのと、船を手に入れるためだ。

（こうなったら、北条殿のところに逃げ延びるしかない）

小田原の北条氏政とは、かつて豊臣軍が小田原を攻めた際、官兵衛の仲介で無血開城を成し遂げた縁で、堅い友情を結んでいる。彼ならば、きっと自分を匿ってくれるはずだ。ただ、北条は徳川家康率いる東軍に加わっていると聞く。

（権現とは出来れば顔を合わせたくないが、四の五の言ってられる状況じゃないしな）

理由は勿論、四国の一件である。ただ、あの刑部と毛利のこと。

四国壊滅の真相が明るみに出ないよう、色々と手を打っているはず。家康は何も知らないだろうから、しらばっくれていけばバレないだろう。黒田官兵衛には、そういう大雑把なところがあった。

とにかく今は、一刻も早く九州から離れなければ。島津軍と西軍が激突しているこの好機を逃してはならない。

既に何人もの部下が乗り込んだ船に、鉄球を引きずりながら走る。その時……

天空から、無数の流星が降り注いだ。船に風穴を開け、完膚なきまでに破壊する。黒田官兵衛の希望の綱であるはずの船は、乗員もろとも海の底へと沈んで行く。

「な、な、ななななな！？」

突然の事態に、黒田官兵衛は驚きを隠せない。

（ば、馬鹿な！ 幾ら小生が星に見放されているといっても！ お天道様から！ しかも、こんな真つ昼間から！ 星が降ってくるなんてありえないだろ！！）

驚愕のあまり、思わず突飛な創造をしてしまう官兵衛。

「か、官兵衛さん！ あれを！！」

部下の指差した先には、星を降らせた張本人が、空から舞い降りてくるのが見えた。宙に浮く御輿に乗った、包帯まみれの男が。

「黒田、そんなに急いで何処へ行く」

「ぎよ、刑部！？」

大谷吉継は、沈み行く船を背に、官兵衛達の正面に降下する。先程船を破壊したのは、彼の背中で周回する数珠だろう。

「な、何故小生がここにいと……」

「一応、お決まりのアレを言っておくか。“ぬしの考えることなど、お見通しよ”」

自分を見下す刑部に、官兵衛は齒軋りする。

「またか！ また小生の邪魔をするのか！ 刑部め！ 小生に何の怨みがあるんだよ！！」

「ハテ、何故であろうな？ あえて言うなら、うれしいからか。ぬしは星の巡りが悪すぎる。見ていて笑いが止まらぬわ」

両の瞳を、三日月形に歪ませる刑部。そう、人の不幸に、苦悩に、絶望に、心からの愉悦と快楽を覚える。それが大谷吉継という男だ。

「大体、どうやって小生に追いついたんだ！ お前は三成と一緒に、遅れてこの耳川まで来たはず！ それがどうして、先にここまで逃げた小生の先回りが出るんだよ！」

「ああ、ソレか。そういえば、まだぬしには見せた事は無かったな」

そう言うと、刑部の背中の数珠が、左右に四つずつ別れ、御輿の両端に集まる。垂直に、円を描いて回転する数珠は、眩い光を放ち、視認できぬほどの速さで回転する。この瞬間、刑部の御輿の両側に、光の車輪が出現した。

——急くな鉾星——

官兵衛が呆気に取られた瞬間、刑部の姿が掻き消える。数珠の車輪を備えた御輿に座す刑部は、戦車いくさくるまと化し、馬を凌ぐ速さで大地を疾駆する。官兵衛の周囲にいた兵士達は、構える暇も無く、光の弾丸となった刑部に跳ね飛ばされるか、車輪に巻き込まれて肉体を引き千切られた。

刑部は元の位置に戻ると、車輪を解除し、数珠を背後へと戻す。官兵衛以外の兵士達は、全員が血の海に沈んでいた。

「と、言うワケよ。われはこの身体ゆえ馬に乗れぬが、元よりわれは馬など必要としないのでな」

黒田官兵衛が、この機に乗じて九州から逃げ出すことを読んだ刑部は、この“形態”を用いて、港へと急行したのだ。

官兵衛は呆然としている。だが、息も絶え絶えに彼に語りかける部下の声を聞いて、我に返った。

「か、官兵衛さん……俺達、楽しかった……た……」
「お、おい、すっかり……」

部下の姿を見た時には、彼は既に死んでいた。他の部下たちも、もう誰も息をしていない。一瞬で彼らを屠った大谷吉継は実に涼しげな顔をしている。

彼は西軍の型を司る者として、凶王の陰に隠れ、ただ不気味な男、正体不明の人物としか思われていない。だが、凶王に恐れ戦き、まづはその頭脳を潰そうと彼に刃を向けた者は、等しくその愚行を悔ゆることになる。

十数の兵を瞬時に葬ったように、実のところ彼自身も、凶王と肩を並べる程度の戦闘能力を有しているのだ。彼は、戦場で殆ど返り血を浴びない。彼の自由自在に動く数珠を掻い潜って彼の下に辿り着けた者など、皆無に等しいからだ。加えて、おぞましいまでに奸智に長けた頭脳を持ち、ある意味凶王以上に厄介な相手と言える。豊臣の遺志を継ぐ石田軍の双頭は戦場にて絶望を撒き散らす、生ける病毒そのものだ。

「それにしても、ぬしに付き従う者がこれほどいたとは実に意外よ。穴蔵に放り込まれた者同士、同情を誘って丸め込んだか？」
「刑部……お前……」

顔を上げる官兵衛。長く伸ばした前髪の下から、小さな瞳が垣間見える。

「おいおい黒田ア。まさか、穴蔵で苦楽を共にしたコヤツらに情が移ったとか言うまいな？ 大勢の配下から慕われて舞い上がったか？ おのれも、徳川や長曾我部のようになれたと勘違いしたか？」

刑部は、眼で官兵衛の怒りを嘲笑う。心の底から滑稽だという風に。

「今更善人の真似事などよせ。われには分かる。ぬしは本心では、大して悲しんでなどおるまい。ぬしの頭の中にあるのは、いつでもぬしのことだけ。天下という肉に涎を垂らす欲深い熊、それがぬしの正体よ」

黒田官兵衛はよく“憎めない男”などと呼ばれる。だが、どれだけ間拔けな仕草や言動で他者の失笑を買おうとも、彼の根底にあるのは野心。他者を踏みつけ、引き摺り下ろしてでも、上に昇り詰めようとする欲望。それが彼の原動力となっている。

そう、自分も、長曾我部を初めとして、多くの人間を不幸に陥れてここに立っている。目の前のあの男と、何も変わりはないのだ。

「……………」

「ぬしはわれ、われはぬしよ。ぬしのような山椒より小さな“悪”が、天下を掴むなどと片腹痛い。どんな気分だ？ ぬしにはもう何も無い。部下も、仲間も、自由も、ツキの星も、何も、な。諦めろ黒田。ぬしは所詮、死ぬまで星に見放される定めなのよ。ヒヒヒヒヒ……………ヒヒヒヒッ！」

しわがれた声で笑う刑部。それを聞いて、俯いていた黒田は、静かに顔を上げる。

「ああ、そうだな」

どこかさばした口調で、官兵衛は返した。

「お前さん相手に格好つけてもしようがないだろう。ああそうさ。お前さんの言うとおり、小生は所詮こんなもんさ。他の誰かの為じゃない。小生は小生の為だけに、天下を目指してきた」
「そうである、そうである」

噓し立てるように笑う刑部。

「だから、諦められない」

刑部の笑いが、ぴたりと止まる。

「この野望は小生のものだ。だから、何が何でも成し遂げてみせるさ。ツキの星に見放された？ はっ、そんなものはいつものことさ。穴蔵に落ちたのなら、また這い上がればいい。小生は掴むぞ、天窓の外の^{ほしぎほし}筈星を！」

官兵衛の開き直りに等しい決意を聞いて、いつしか、刑部の顔から笑みが消えていた。体を小刻みに震わせている。

「……何故だ。何故、ぬしはこうも足掻ける。何故諦めない何故絶望しない！ 気にいらぬ、気にいらぬぞ。地底に沈んでも尚、星を見ようともがくぬしが気に喰わぬ！」

刑部の怒りを、今度は官兵衛が鼻で笑う番だった。

「はっ、そうか、そういうことかい。何だっていつも小生に辛く当たるんだと思っていたら……要はあれだ。お前さん、小生が羨まし

いんだろ？」

「……！」

「思えばお前さんも小生も、ツキに恵まれない人生だったよな。だが、小生は諦めなかった。お前さんはそこで腐って、人生を投げた。結局、寂しいのさお前さんは。だから“仲間”を欲しがるんだ。お前さんと同じように不幸に苦しむ仲間をな。不幸の沼に浸かったまま一步も動こうとせず、手を伸ばして他の奴らを引きずり込もうとする。何が暗だ。お前さんの方が余程真っ暗だな！」

「……」

刑部は口を紡いだまま、わなわなと肩を震わせている。その瞳は、既に憤怒の色で染まっている。

そうだ。不幸に見舞われた者は、運命の不条理を嘆き、他者を妬み、憎み、皆が不幸であれと呪うはず。皆がわれになるはずなのだ。だが、この男は違った。例え不幸のどん底に落ちてても、その眼は常に上に向けられ、穴蔵から抜け出そうと足掻いた。何度失敗し、また穴の底まで落ちてても、何度もやり直し、決して諦めようとはしなかった。

何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ！！

何故、こやつはわれのようにならぬのだ！

では、われは何だ。同じ境遇にいる者の奮闘を目の当たりにする度、己の惨めさを突き付けられる。

われは、かつての病床で醜くもがいていた芋虫ではない。われは生きる目的を見出だし、蛹を破り、蝶となった。

われは自由だ！　これが、病の淵で見る夢であつてたまるものか！

「お生憎様だな。小生は、お前さんのようにはならない。何度穴蔵に落とされようと、足掻いて、足掻いて、足掻き抜いてやる。小生は死ぬまで足掻く！　じつとしているなんぞ、性に合わないんだよ！」

「黒田……それは、無駄な足掻きと言うのだ！」

「どうした？　声にいつもの余裕が無いぜ。凶星つてことだろうが」
「黙れ……」

官兵衛の指摘通り今の刑部からは、相手を小馬鹿にするように罵る、いつもの余裕が消えていた。ただ、怒気の籠った声を搾り出す。あの凶王のように。

「嫌だね。刑部、お前さんが言つたように、小生は悪党なんだよ。確かにお前さんの境遇は同情するよ。そんな風になつちまうのも、仕方がないつてもんだ。……それでもな」

官兵衛は枷で繋がれた両腕を振り上げる。桁外れの剛力により、鉄球が宙に浮き、刑部目掛けて飛んでいく。刑部は、素早く御輿を上昇させ、当たれば致死の一撃をかわす。落下した鉄球が、大地に陥没を穿った。

「小生はな、お前さんが大ッッ嫌いなんだよ！　あれだけのことをされておいて、お前さんを許せるほど、小生は聖人君子じゃあないんでな！」

黒田が刑部にこれほどまでの強い殺意をぶつけたのは、初めてのことだった。

「くううろおおおだああああッ！　こおおおろお
おおおすうううッ！」

刑部の憤激に呼応するように、数珠も嵐のように荒れ狂う。

「こっちの台詞だ！　お前さんを踏み台にして、小生は頂天に昇っ
てやるよ！！」

鉄球を振り上げ、官兵衛もまた突進する。

第四章 凶星群舞（四）（後書き）

この辺の会話は、黒田官兵衛緑ルート最終話の大谷戦を参考に。

第四章 凶星群舞（五）

「ぐ……っ!!」

「!!……やるのお」

石田三成と島津義弘の死闘も、佳境に突入していた。義弘の体は、ところどころ斬り傷だらけで、流れる血が体を赤く染めている。凶王の斬撃の凄まじさを物語っていた。一方の三成は、創傷らしきものは負っていない。それも当然のこと。鬼島津の示現流は一刀必殺。その刃が体に食い込んだが最期、後は左右に断ち切られ、問答無用で終焉を与えられる。三成がまだ生きていることと、島津の刀を受けていないことは、ほぼ同義なのだ。

三成は、驚異的な速度と脚力、そして野生生物並みの危機察知能力で、刀を構えたら終わりとなされる神速の示現流を、振り下ろされる前に移動して、見事にかわしていた。示現流は二の太刀要らず。一の太刀に総てを懸けるため、構えからの速度は光以上だが、振り下ろした後に大きな隙が生じる。三成は、それを見計らって斬撃を放ち、島津の肉を切り裂く。かれこれ、数十回以上はこんなやり取りを繰り返している。

だが、三成とて無傷ではなかった。刀傷は無いにせよ、至る所に焦げ目が出来、煙を吹いている。己の肉が焼ける不快な臭いが、三成の鼻をつく。島津義弘の太刀には、雷が宿っている。例え剣をかわしたとしても、同時に発生する電撃が敵手の体を焼き、命を削るのだ。三成の焼け焦げた体は、何度も島津の雷撃の餌食になった証だ。

一方の島津は、並外れた筋量ゆえの鈍重さで、何度も三成の返しの刃をその身に受けていたが、巧みな体さばきによっていずれも急所は外している。両者とも、受けた損傷はほぼ同等だった。そして、

これからも互いの刃は、命までは届かないだろう。いずれかの体力が尽きない限りは。

超速の居合と神速の振り下ろし。共に速度にて相手を凌駕し、一撃で止める戦い方ながら、皮肉にもどちらの体力が先に尽きるかが勝敗を決める、消耗戦に陥っていた。

（だども、それならオイに分はある）

過信や思い上がりではなく、老練さゆえの冷静な観察眼を持つてそう判断する。

三成は、本陣にたどり着くまでに、島津軍の幾重にも張られた防衛線を突破してここまで来た。全力疾走に度重なる戦闘。それは、確実に三成を疲弊させているはず。自分も疲れていないとは言えないが、それでも彼ほどではない。

青嵐を構え直す義弘。緊張を極限まで高め、三成の僅かな隙も逃すまいとする。そして、彼の細い体が、僅かに揺らめいた。

（今ど！）

心の中で呟くより、刀を振り下ろす方が速い。最高の見切りと共に放たれた迅雷の刃が、三成の頭上に落ちる。だが……

三成の体が、横に倒れると同時に掻き消えた。

——鬱屈——

斬撃の軌跡が、三日月の弧を描く。咄嗟に後ろに下がった義弘の腹を、致命傷と紙一枚の差で切り裂いた。

（速か……！ いや……）

そうではない。自分が遅くなっているのだ。三成の速度は、戦いを始めた時と何も変わっていない。負傷しているはず、疲弊しているはず。それは、身体能力に必ず衰えをもたらすはずなのだ。自分のように。

「どうした！ 私を殺せ！ 緋水の飛沫を浴びせてみせろ！」

僅かな戸惑いを見逃さず、三成は一気呵成に攻め立てる。石田三成は、疲弊してはいないわけではない。ただ、肉体がその事実を認識しないだけなのだ。どれだけ疲労しようとも、体はそれを無視して、絶えず全力を発揮し続ける。

彼がこのように成ったのは、やはり秀吉の死が原因だ。誰よりも敬愛し、心酔していた主の死。三成は家康を憎むと同時に、秀吉を守れなかったことへの悔恨に苛まれた。

それから三成は誓った。この先、己の持てる時間の総てを、復讐のみに捧げると。そうしなければ、彼は己の罪深さに押し潰されそうだったからだ。その日から、三成は眠れなくなった。食事も殆ど取ることは無くなり、昼夜問わず戦いに明け暮れ、憎悪に身を焦がした。復讐に総てを捧げる彼にとって、食事や睡眠といった“怠惰”は、それだけで罪深い行為に思えたのだ。

こんな生活を続けていれば、思考は鈍り、肉体は衰え、いずれは限界に達し、壊れる。何人もの部下が、そう言って諫めた。

だが、三成の憎悪は、その常識さえも屈服させた。彼の渴望に従い、肉体そのものが劇的な変貌を遂げたのだ。いかなる無理をしようとも、身体だけは十全に機能を発揮できるように。凶気が正気を凌駕する。今の彼は、自然界の法則ではなく、復讐と贖罪という、己ただ一人の理に従い動いている。極限状態に置かれれば、人は限界を越えた力を発揮出来るといふ。三成は、己を絶えずその状態に

置いている。

当然、何の代価もないわけではない。表に出ることは無くても、確実に蓄積した疲労は、いずれ決定的な破滅を彼にもたらすだろう。だがそれは、家康を殺し、復讐を果たすまで途切れることはない。

安息を断つことで、怠惰に逃げる弱き心を捨て、ただ一つの目的にのみ邁進する。それは、奇しくも愛する者を殺して覇王の道を歩んだ、主君、豊臣秀吉と似通っていた。

実戦経験において、三成は島津義弘に遠く及ばない。だが、彼は足りない部分を、未来を食いつぶすことで補っている。島津義弘最大の武器が、武人として積み重ねた“過去”ならば、三成は未来をこの“現在”だけに注ぎ込み、決して折れぬ屈さぬ刃となった。

一転して義弘は不利に追いやられる。三成の動きにはまるで衰えが見られず、逆にこちらは確実に消耗していく。三成がどれほど“持つ”のか分からないが、持久戦になれば有利という考えは捨てた方がいい。

だが、そんな状況でありながら、島津義弘の顔には、獣の笑みが浮かんでいた。

「おもしろかあ!!」

隙を見せるを承知の上で、大振りな斬撃を放つ義弘。当然回避する三成だが、総てを力だけに注いだ一撃は、より広範囲に雷を降らせた。

雷に打たれ、動きを緩める三成。それを逃さず、島津は刀の軌道を横に変え、三成のいる直線上を薙ぎ払う。これで決まるのなら、決着はとうの昔についている。三成は、よろめきながらも大地を蹴

り、上へと飛び上がる。彼の体は、その時の体勢に関係なく、最善の回避行動を取れるよう出来上がっていた。

飛び上がった三成は、義弘の刀の腹へと着地する。電撃が発生する前に再度跳躍し、体勢を崩した義弘に刺突を放つ。

右肩の肉を抉られる。激痛に身を焼かれながらも、義弘は怯まずに脚を前に踏み出し、三成に体ごとぶつかっていく。

「どらあ——っ!!」

「……!」

重量級の体当たりをまともに喰らい、三成は吹き飛ばされる。いや、これは衝撃を最小限に留めるため、わざと後ろに飛んだのだ。宙で回転し、着地する余裕さえある。義弘は間髪入れず、青嵐を手突進する。それより、三成の方が速かった。

瞬間移動“刹那”。三成の姿が、島津の眼前から消失する。

（右ね!）

義弘は、迷わず青嵐を右に構える。太刀がぶつかる甲高い音が耳に響く。選択を誤ったり、一瞬でも決断が遅れていたら、今で勝負はついていた。消えた後に残った足跡の向きを見て、瞬時に仕掛ける方向を判断したのだ。

三成は仕損じたことに歯軋りすると、猛然と斬撃を繰り出す。

「退^どけ! 往^いね! 去れ! 死^しざれ! 散れ! 消^{しょう}えろ!」

鋭く、烈しく、それでいて正確無比。義弘も青嵐を盾にして防ぐが、三成の剣はその防御を巧みにすり抜け、義弘の体を切り裂いていく。だが、それでも島津義弘の顔から笑みは消えない。

「三成どん！ 打ち合いならオイに分があつとよ！！」

斬撃を受けるのも構わず、青嵐を両手で握り締めると、上へと切り上げた。

「……ッ！」

それだけで、三成の体は木葉のように吹き飛ばされる。何とか着地する三成だが、その顔が苦悶に歪む。右肩から左腰にかけて、斜め一直線に傷が刻まれている。大一大万大吉の鎧も、二つに分かたれてしまった。傷は見た目ほど深くはないが、刃のほんの先端が触れただけで、この負傷。まともに受けていれば、三成の体は容易く両断されていただろう。

義弘も、傷は決して浅くはない。既に少ない量の血が流れた。これ以上は危険だ。それでも彼は笑っている。凄絶な笑みを浮かべ、命の奪り合いを、心の底から楽しんでいる。

楽しか！ 楽しかあ！！

腹の底から沸き上がる昂揚感。血潮が沸騰しそうな程熱くなる。これだ。この感覚だ。互いの生死を賭けた真剣勝負ほど燃えるものなど、この世にはない。

（酒を呑み、句を読んでも、剣ほどにや燃えん）

そう、これが自分だ。確かに若者に教えを説き、自分の剣と心を次代に引き継ぐのは素晴らしいことだ。だが、義弘自身の渴望は違う。彼の真の目的は、勝算も見えぬ強敵との、心ひりつくような真剣勝負、殺し合いだ。

本多忠勝、立花宗茂といった猛者との死闘から、久しく感じていなかった、限界ぎりぎりまで鎬を削る緊張感。今自分の内で、その感覚が蘇っている。

自らが殺めた若者への贖罪など、お題目だ。自分は昔も今も、ただ戦いだけを渴望している。そのことを教えてくれたのは、目の前の若き将だ。

一瞬の刹那に、一時の切り合いに、振り下ろす一刀に、全身全霊を捧げる。それが島津義弘の生き様だ。

「があ——ははははは！！ 感謝すつど、三成どん！ こんなに楽ししかは久しぶりじゃあ！！」

呵呵大笑する義弘。対して三成は顔を憤怒の形相のまま固めている。言葉など要らぬ。貴様にくれてやるのは死だけだと言わんばかりに。

三成の体から、紫色の鬨気が噴出する。勝負に出るか！？
義弘は青嵐を構え、雷電を刃に纏わせる。

「死色の翹翼^{はね}よ、私を刳^{えぐ}れ！！」

抜刀と同時に飛び出し、無数の斬撃を繰り出す三成。数え切れぬ斬撃の群れは、刃の大津波。巻き込んだものを、微塵も残さず斬り潰すだろう。

迫り来る死の怒濤を前に、義弘は……

「甘か！！」

一喝すると同時に、振り上げた刀に雷が落ちる。

この時を待っていた。相手が痺れを切らし、大技を繰り出して来るこの時を。

三成の絶技は、確かに凄まじいの一言に尽きる。だが、島津の示現流は一刀必殺。

技の打ち合い、純粋な破壊力ならば、誰にも負けはしない。

「行くどー!!」

——示現流 断岩——

雷の宿りし青嵐を振り下ろす。義弘の体軀に比して尚不釣り合いなこの大剣は、さながら巨人の振るう太刀のよう。それは、より大きく重い物が強いという、自然界の絶対の真理を象徴しているようだった。

雪崩のように迫る斬撃などものともせず、触れた端から碎き散らしていく。千の斬撃も、極大の雷の前では羽虫の羽ばたき程度にしかない。絶対致死の雷霆が、三成の頭上に落ちてくる。

敗北……奥義のぶつけ合いで、三成は義弘に完敗した。この結果を覆すことは、どう足掻いても不可能だ。

今や三成は総ての力を突撃に注いでいる。左右や後ろに進路を変えることはできない。死の雷を前に、逃げ場は……

三成は、横に跳ぶことも、後ろに下がることもしなかった。それどころか、更に前へと加速した。

頭上に迫るは確実なる死。だが、とうに三成を両断しているはずの刃は、届いていなかった。三成は、地を這う蛇のように、体を低く屈めたからだ。

それは、刹那の万分の一の猶予。その瞬きよりも速い、僅かな時が、勝敗を決した。

逃げ場は、ある。地面にへばり付くどころか、めり込むほどに身を屈めた三成の目には、義弘の両の脚が映っていた。頭上に迫る刃など、一切意に介さない。ただ、刹那の加速に総てを懸ける。義弘の刃が届くのが先か。三成が駆け抜けるのが先か。

そうだ！ 私は行かねばならない辿り着かねばならないあの男の下に！

遅滞など許されない死んでいる暇などありはしない一瞬でも刹那でも六徳でも虚空でも清浄でも阿頼耶あいやでも速く私の体よ動け奔れ翔はしける飛べ！！

刹那の時の中で、あの男の姿を思い浮かべた瞬間、憎悪と殺意が膨れ上がる。殺意を炎に、憎悪を糧に、魂の内燃機関が爆動する。

軍配は……より遠くを目指した者に上がった。

「!?!」

青嵐の刃が地面に達し、溢れんばかりの雷が散華する。それと同時に、義弘の両足から血が吹き出る。両の膝が千切れる寸前まで、水平に断ち割られている。

大技の反動と、脚を斬られたことで、その場に崩れ落ちる。義弘の刀は、三成を捕らえることはなかった。三成は、義弘の想像を遥かに越えた加速で、刃が達するより速く足元をぐり抜けた。両足を断ち切って。勝負あった。この脚では、もう戦うことはできない。

脇腹を蹴り飛ばされ、腹を踏み付けられる。

それでいい。相手の命を奪うまでは勝ちとは言えない。三成は、義弘の頭の横に鞘の先端を突き立て、刀を抜く。その刀身は、紫色に輝いていた。

妙に穏やかな気分だった。負けた、負けた。このような若者に。

手を抜いたつもりはない。だが、自分は内心こうなることを望んでいた気がする。彼のような若者が、古き時代の象徴たる己を乗り越えていくことを。

いや、老いも若きも関係ない。ただ己の全力をぶつけ合い、勝敗を、生死を定める。それが、彼の愛した真剣勝負の世界だ。相手を殺さぬ限りは勝ちに非ず。ならば、自分も最後まで諦めず、足掻き抜いてみせよう。

「ははっ、よかー!」

島津義弘は彼らしく豪快に笑うと、最後の力を振り絞り、反撃を試みる。だが……

「野垂れ死ね」

斬首の刃が、喉へと落ちる。噴き上がった血潮が三成の体を赤く染め上げた。

第四章 凶星群舞（五）（後書き）

一回やってみたかった、リアル斬首。

戸次川三英雄で使うとバグが発生するのはあまりに（？）有名。

自分の健康管理に定評の無い凶王様。普通に考えれば飯も食わずろくに睡眠も取らなければ、ほぼ実力が拮抗している武將同士のバトルではまず敗北するはずですが、それについて作者なりに理由をでっち上げてみました。

第四章 凶星群舞（六）

「うおおおとつとお！？」

規格外の膂力で、手枷の鉄球をぶん回す官兵衛。その勢いに吞まれ、体勢を崩した官兵衛は、地面を転がる。いや、彼はわざと転んだのだ。鉄球による大振りな攻撃は、豪快な分隙も大きい。その技後の硬直を、官兵衛は自ら転倒し、回避動作とすることで打ち消していた。

官兵衛が転んだ直後、刑部の数珠が墜ち、大地を穿った。空中から数珠で攻撃を仕掛ける刑部は、未だ鉄球の直撃を受けてはいない。だが、大質量の鉄球の起こす風圧は、彼の軽い体を捉え、揺さぶりをかける。

「ぐ……黒田め」

「ははははは！ 小生を甘く見たな、刑部！ たった一人でここまで来たのが、お前さんの失策だ！」

地上で鉄球を振り回す官兵衛よりも、空中から自在に数珠を操る刑部の方が優位だ。しかし、官兵衛は型に嵌まらない動きで刑部を翻弄していた。加え、人一倍頑丈な体ゆえ、多数珠を喰らった程度では効果がない。

「どうして凶王を連れて来なかった？ 分かるぞ。お前さんは恐れているんだろう？ 小生が凶王に、四国の件をばらすことを！」

「ぐ……」

凶星だった。一人で官兵衛を追い掛けたのも、三成の目の届かぬところで、彼の口を封じるためだ。

「そうよ……ぬしは知りすぎた。口の軽い馬鹿は始末に負えぬ。ここで腐り、亡者に肉を明け渡しやれ」

——戻るな鎮星——

二重の円環を象った数珠を、官兵衛に向けて放つ。

「しゃらくさいんだよ！」

——厄玉蹴り——

今度は避けようとはしなかった。足元の鉄球を蹴り上げ、数珠を弾く盾とする。更に官兵衛自身も飛び上がり、体を地面に水平に傾け、鉄球へと両足で蹴りを放った。

「オウラア！！」

——厄玉突進——

官兵衛に蹴られた鉄球は、官兵衛を繋げたまま刑部目掛けて飛んでいく。

「！」

戻って来た数珠で、正面に防護壁を展開する。激突。臓腑を震わせる衝撃が、刑部の華奢な体を揺るがす。だが、これで終わりではなかった。

「ウウオラアッ！！」

官兵衛は、着地と同時に腕を引き、鉄球を再度宙に浮かせる。そして、腕を力一杯振り抜き、刑部の左側へ鉄球を叩き付けた。

「む……ぬう！？」

先程とは比較にならぬ衝撃。脳が、内臓が揺さぶられ、ぽろりとこぼれ落ちてしまいそうだ。咄嗟に左腕に数珠を構えて防御したが、そんなもので相殺しきれぬ威力ではなく、左腕がもがれるような激痛が走る。

とはいえ、数珠で防御していなければ、今頃全身の骨が砕け、内臓は風船のように破裂していただろう。官兵衛は、なおも鉄球を振るい、こちらを叩き潰そうとする。これ以上奴の近くにいてはまずい。

数珠を御輿の両側で車輪に変え、直ちにその場から離脱する。目標を失った鉄球が、大地をへこませる。

「ちい！！ 逃げるな、こらあ！」

なおも追い縋ってくる官兵衛を、数珠で打ち据える。だが、やはり大した痛手にはならぬようだ。

「ぜえ……ぜえ……」

息が荒い。体中が痛い。心臓が拍動する。

「どうした刑部！ もうへばったか？ いつもの憎まれ口はどうしたよ」

五月蠅い黙れ。われはぬしのような熊ではない。痛みに鈍くはな

いのだ。ああ、痛い痛い痛い苦しい苦しい……

「思えば、お前さんが小生を羨む気持ちも分からんでもない。小生は、負けても何度でもやり直せる。だがお前さんは負ければ死ぬだけだ」

官兵衛は、憐れむように、嘲るように、唇の端を歪める。その声を聞いた刑部の体が、一瞬だけ止まる。

「だがさっきも言ったとおり、お前さんに情けはかけない。終わらせてやるよ。今日こそお前とお別れだ!!」

腕を水平に突き出し、自身を中点として回転し始める官兵衛。旋回する鉄球が大気を攪拌し、突風を生み出す。官兵衛を中心に対流する風は、やがて巨大な竜巻を発生させる。

天に向かって屹立する塔の如き竜巻は、周囲の物体や死体を巻き込み、引き裂き、微塵に断碎していく。

「ひい、ひい……」

刑部は動かない。目前に暴嵐が迫っても、ただ荒い息を吐くだけだ。だが……

「ひい、ひい、ひ、ヒヒヒ……ヒヒヒッ！ ヒヒヒヒヒッ！」

それはいつしか、しわがれた笑い声に変わっていた。

そうだ、そうだ。われは何を思い違いをしていたのだ。

黒田めの言う通り、われは負ければ死ぬしかない。醜い屍かばねを野に晒し、鴉や蛆蠅共に体を啄まれるのを待つしかなくなる。

敗北してもやり直せる、ぬしとは違うのだ。

くだらぬ。ぬしの星の巡りの悪さなど、われや三成の苦しみに比べれば、亀虫よりもちつぽけなものよ。何が不幸だ、笑わせるな。ぬしは両の足で立ち、頑健な体に恵まれ、ただ迷いなく上を目指すことが出来るではないか。

ぬしは自由だ。ぬしは幸福だ。

ああ、妬ましい、妬ましいぞ黒田。ぬしを、われと同じ不幸の泥沼に沈めてやりたい。人生にやり直しなど効かぬことを思い知らせてやりたい。

おお、その時のことを夢想するだけで、脳髓より歡喜が蛆虫のように溢れ出てくるではないか。

われは人の不幸を望む。苦悶を願う。絶望を愛す。そう、これこそがわれだ。怒りだ誇りだ、そんな“まっとう”な感情、われには相応しくない。

黒田、上を目指すなら好きにしろ。ぬしが何度這い上がろうと、われは何度でも引きずり下ろしてくれようぞ。

われは沼地を舞う一羽の蝶々。不幸を振り撒き、人を奈落へ誘うのだ。

誰も彼もが不幸になれ。それがわれの幸福きふなれば。

——力^{りき}るな慧芒——

数珠の力を、体内へと取り込む。先程以上の激痛が、刑部を襲う。傷口に塩を塗り込むがとき行為。だが、これでいい。どうせ、次に一撃喰らえば死ぬのだ。命の削り惜しみをする必要はない。それに、苦しみもがくことには慣れている。自分は病に冒されたからずっと、生死の淵を彷徨い続けていたのだから。

元より、何かの間違いで生きているような体だ。いつまでも楽になれないこのしぶとさが、憎たらしくもある。そうだ。こんなところで楽になれるのか？　ここであっさり終わってしまえるほど、われは幸福な男であったか？　真の不幸の前には、死して楽になると道など許されないはず。己を呪う運命への、確たる信頼。体を酷使することに躊躇いはなかった。

「うぐ……ぐうつ……！」

体の一部を無理矢理引きはがされるような感覚。激痛と共に、内からかつてない程の力が沸いて来る。刑部の両目は、血のように赤く、爛々と輝いていた。

「不幸よ！　さんざめく降り注げえ！」

刑部が念じると共に、数珠が彼を中心として旋回する。数珠は巨大化し、官兵衛のものと肩を並べる竜巻を生み出す。

二つの螺旋がぶつかり合い、発生した風圧と衝撃波が、当たり一面を更地に変えた。

「ぬおおおおおおつ！！　負けるかぁ！！」

官兵衛は、渾身の力を込めて鉄球を回し続ける。“力るな慧芒”で強化された刑部の数珠は、今や自分と拮抗している。それでも、自身で指摘したように体力と、ここぞと言う時の火事場の馬鹿力なら、誰にも負けない自信がある。

負けない。こんなところで負けてたまるか。何度も負け続けても、その度に立ち上がってきた。だが、それで何も感じないはずがない。その度に、決して慣れない苦い屈辱を味わって来た。負けを味わうのはもう沢山だ。

小生は運命を変える！ 本当の枷は、腕に嵌められたものじゃない。お前さんをぶっ飛ばして、小生の凶運という名の厄介な枷を砕いてやる！ お前さんの振り撒く不幸なんぞで、人の未来は決められないってこと、証明してやる！ そして小生は、本当の自由を掴むんだ！！

こんな鈍色の鉄球なんかじゃない、キラキラ輝く勝利の星をな！！

「ぬおおおおおおおつ！！！！！！」

やはり地力の差か。互角に思えた激突も、徐々に官兵衛に天秤が傾いていった。数珠が一つ、また一つ弾き飛ばされていく。一つ減る度に、加速度的に官兵衛の優勢になっていく。

後少し、後少しだ！

吹き荒れる爆風と砂塵で視界は殆どきかない。だが、確かにその先に、蝶々の兜が見える。

刑部への怨みと、勝利への渴望が、官兵衛を後押しする。最後の数珠を弾くと同時に、鉄球を、砂塵の向こうの敵へとたたき付ける。手応えあり。骨が砕け、肉が弾ける音が聞こえる。

「やつ、やったぞおおおお！！ どうだ刑部、ざまあみろお！！」

ここで官兵衛も力を使い果たし、竜巻が急速に止んでいく。蝶々の兜が地面に転がっていた。

鉄球の下には、押し潰された血まみれの人型が……
ひとがた

（ち、違うつ！？）

あれは、大谷吉継ではない。包帯を巻いていないし、御輿にも乗っていない。辛うじて破壊を免れたあの顔には見覚えがある。あれは……いや、それより、刑部は何処に……

実際は、困惑する暇もなかった。

「台風の目、とは、よく言っただものよ」

御輿の下に数珠を錐状に束ね、遙か上空から落ちて来た刑部が、官兵衛の背中を撃ち貫いた。

「真逆、まさかこんな手に引っ掛かるとは思わなんだ」

背中をえぐられ、俯せに倒れ臥す官兵衛を、御輿の上から見下ろす。今の刑部は、蝶々の兜を被っていない。

官兵衛が鉄球を叩きつけた人影は、刑部ではなく、近くを転がっていた黒田軍兵士の死体だった。死体を数珠で引き寄せ、特徴的な蝶々の兜を被せて、身代わりに仕立て上げた。その姿は、舞い上がる砂塵が覆い隠してくれる。

数珠を旋回させながら、刑部は身代わりを数珠で固定したまま、自身は遙か上空へと舞い上がった。そして、官兵衛が身代わりに鉄球をぶつけたところで、一気に急降下したのだ。

「やはり、暗はぬしの方であつたな」

「畜……生……」

黒田官兵衛は、何とかその身を起こそうとするが、刑部はそれを許さない。

「ほおれ、次はぬしが空へ行く番よ」

——爆ぜるな計都——

高速回転する数珠に巻き込まれ、上空へと打ち上げられる。

「うおおおおおおっ!？」

空中で大爆発を起こし、地面に叩きつけられる官兵衛。全身から煙が吹き出し、意識が飛びそうになる。

自分は、ここで死ぬのか？　これで、今度こそ本当に、おしまいなのか？

いや、自分は最後まで諦めない。ツキの星を掴むまで。それが自分だ。黒田官兵衛だ。

薄れ行く意識の中で、彼の眼に、光り輝く星が映る。

だがそれは、刑部が追撃に放った数珠……彼を死に誘う、凶星^{まがつほし}だった。

官兵衛の口許に、自嘲めいた笑みが浮かぶ。

やはり小生には、最後までツキの星は輝かないか。まあ、いいさ。それが、小生の星廻りだってんなら、その凶運も、まとめて乗り越えてやるまでだ。ずっとそうして来た。もちろん、これから、だ。なあ、刑部……

致命の流星が、彼の全身に突き刺さる。何度も、何度も、何度も、何度も……

黒田官兵衛は、最後まで望みを、野心を、生きる意志を捨てなかった。

足掻いて、足掻いて、足掻き抜いて……そして、死んだ。

島津義弘の首級を、遅れてやって来た部下に押し付けた後、三成はただ無言で歩いていった。後ろからは、部下達の驚嘆と賞賛の声が聞こえる。何も感じない。

「おのれ！ 凶王！」

「よくも……よくも島津様を……！」

顔を涙で濡らし、憎しみを剥き出しにする島津の兵士を、ゴミでも払うように斬り捨てる。何も感じない。

返り血で頭から足まで濡れそぼった体から、赤い雫を垂らしながら、三成は歩く。

先程、島津義弘と繰り広げた極限の死闘など、最初からなかったかのように、彼の頭から消え失せていた。あの戦いは、己に何も残す事はなかった。邪魔物を斬ったと言う事実さえ、彼の内では忘却の砂に埋もれつつある。

彼の時間は、秀吉の死を目撃した時から止まっている。在るのは底なしの空虚と、それを埋める憎悪だけ。

「早く辿り着きたい……あの男の下に」

憎しみの対象は二人。一人は言わずと知れた徳川家康。もう一人は、主君を守れなかった自分自身だ。その償いは、家康を殺すこと

でしか果たされない。そう信じなければ、罪の重さに潰れてしまう。

「秀吉様、どうか私に、許しを請う許可を！」

怨敵に斬首の傷を刻むまで、贖罪と断罪の旅路は続く。

「ヒイ……ヒイ……ヒイ……」

息も絶え絶えに、黒官官兵衛の屍を見下ろす。

近くに落ちていた、蝶々の兜を拾い上げ、被り直す。奇跡的に、殆ど傷ついてはいなかった。僅かな安堵。この兜は、実はお気に入りなのだ。

終わってみれば、歓喜や達成感ではなく、胸に残ったのは途方もない疲労感だけだった。嘲りの言葉一つ、満足に出てこない。

正直、危なかった。あの奇策が決まらなければ、屍になっていたのは自分の方だ。いや、今も屍と大差ない。“力るな慧芒”の反動は、確実に彼の体を蝕んでいた。肉も骨もずたぼろだ。確実に寿命を縮めただろう。後どのくらい持つか……

空を見上げる。天上には、一面の曇り空が広がるばかり。

だが、われには分かる。来るべき時に、必ず星は降る。西と東で渦巻く二つの力がぶつかり合い、怨嗟が天と地を満たした時、災いの星が降り注ぐ。誰の下にも星は降り、上も下もわれとなろう。その時を夢想すると、昏い情念が肺腑の底から沸き上がる。

「滅びよ、まだ来るな。われは人が苦しむ姿が見たいイイイイイ
！！」

この体を蝕む苦痛。死神の足音が、今も脳裏で響き続けている。
この呪われし生こそが、己の憎悪の起源であり、目的へと向かわせる
貴重な原動力だ。既に手段と目的が混同しつつある。世界への怨
念を生きる糧に変えて、彼はただ、進む。

「それまで、まちと待て」

戦いは終わった。島津義弘、黒田官兵衛は戦死。甚大なる被害を
被った島津軍にこれ以上戦う術はなく、先んじて城を抑えた立花宗
茂の説得もあり、西軍に全面降伏する。

こうして、僅か三日足らずで、九州は西軍の手に落ちた。西軍は
島津、大友の両軍を併呑し、すぐさま本土へと引き返す。今や西の
軍勢は、徳川を中核とする東軍と、肩を並べられる程に膨れ上がっ
ていた。

第四章 凶星群舞（六）（後書き）

攻撃後に回避ステップは官兵衛の基本ですね。

官兵衛の手枷については、到底納得のいく説明ができそうになかったんで、あえてスルーしました。あんまり追究するとギャグになる。

手枷の謎その１：武具を変えられるなら、手枷も外せるはずではないのか。

謎その２：ストーリー上、義弘や宗茂、忠勝と組むことがあるんだが、彼らに壊してもらえばよいのではないか。

謎その３：手枷をしても不自由している様子がない。むしろ強力な武器にしか見えない。

第四章 凶星群舞（七）

三河、徳川家康の居城にて。

「家康様あーっ！ 西より火急の知らせが！」

徳川家に仕える家臣の一人、井伊直政いいなおまさは、息せき切って主の下に馳せ参じる。

「どうした、直政。そんなに慌てて」

徳川家康は、いつものように人なつっこい笑みを浮かべ、振り返った。逞しい体を、黄色の鎧で包んだ好青年だ。

「は、はっ！ 石田三成率いる西軍が、九州へと攻め入り、大友と盟を結び、島津を降し、九州を平定したとのこと！」

「何と！」

幼少の頃はともかく、今は滅多なことでは動じなくなった家康も、この報には啞然となる。

三成が……というより、戦略を組んだのはほぼ間違いなく刑部、大谷吉継であろうが……毛利元就と盟を結び、九州に手を出す可能性は考えていた。こちらとしては、西軍が九州に攻め入った後、苦戦している隙に大阪城を攻め落とすつもりだった。だが、これ程に速く、九州を統一してしまうとは……

「ふふふ、やるじゃないか、三成……」

家康の顔には笑み。友の健闘を称えるような言い分に、直政は困

惑する。だが、長年仕えているだけあり、すぐに家康の瞳に厳しい色が浮かんでいることに気づいた。己が主君は、石田三成を正しく脅威として認識している。

「直政、続けてくれ」

「……何でも凶王は、あの島津義弘をも討ち取ったと聞き及んでおります。凶王の武名は天下に轟き、西の諸国も続々と西軍に恭順の意を示しております」

「そうか、ついに鬼島津殿までもが……」

徳川第一の家臣、本多忠勝の好敵手だった男。戦国最強と謳われる忠勝と、互角に戦える数少ない武人の一人。少年時代の家康は、忠勝と島津との戦を、怯え混じりで見ていることしかできなかった。だが、今は違う。あの方とはいつかまた、酒を酌み交わし、手合わせしてみたかった。もう、忠勝の陰に隠れているだけの男ではないことを、見せたかった。

さして交流の無かった自分でさえ、その死を惜しむぐらいだ。主を失った九州の人々の悲しみは言葉では語り尽くせぬものであるう。

だが、これが戦だ。勝った者が生き、負けた者は死ぬ。そこに残るのは無数の屍と大切なものを失った悲しみのみ。

誰もが無傷で済む戦などありえない。勝った側も、必ず何かを失うのだ。

自分も、ここに辿り着くまでに、多くの部下を死なせ、屈辱を耐え忍んで来た。悲嘆、憎悪、苦悩、憤怒、絶望。数多の感情に翻弄され、心が折れ、諦めようと思ったことなど数知れない。

その度に自分を救ってくれたのは、忠勝を初めとする大勢の臣下との絆だった。

どんな苦境にあっても、逃げ出そうとせず、こんな不甲斐ない自

分を励まし続けてくれた臣下達。

彼らの言葉に、何度勇気づけられたことか。人は一人では生きられない。人と人とを繋ぎ、生きる活力を生み出すのが、絆。ならば、絆とは何と尊き力であることか。自分は、自分一人で大地に立っているのではない。大勢の臣下との絆に支えられて初めて、天下と向き合えるのだ。

（だから、ワシは絆の力で天下を統べようと思った。この素晴らしき力を世に広めれば、必ず争いの環を断ち切れる。そう信じた。今でも信じているとも）

力と恐怖で上から押さえ付けるのではなく、人々が互いに思いやり、一人一人の絆を大切にする世界。そんな世になれば、憎しみや悲しみも自然に癒され、永く穏やかな世が訪れるだろう。

戦の虚しさと絆の尊さを知った家康が目指すのは、そんな天下だった。

だが、理想を掲げるだけでは、現実は何も変わらない。彼の前に広がるは、死と憎悪、犠牲と悲嘆で塗り潰された、相も変わらぬ乱世の光景だった。

そう、今は乱世。力だけが全てを決める戦乱の世。いかに絆を掲げようとも、口先だけでは誰も聞き入れはしない。どうしても相容れない相手は、武力で打ち負かすしかないのだ。

天下を安寧に導くのに、争いは避けられない。ならば、せめて己も傷つこうと、家康は武器を捨てた。戦場の痛み苦しみを、己が掲げた理想を、忘れないために。両の拳は、斬り傷でずたずただ。大勢の敵を殴り、打ち倒し、そして、殺してきた。

（秀吉殿……）

かの太閤と、己の思想が相容れないことは分かっていた。それでも、乱世を終結させ、この日の本を平和にする。その思いは、同じだと信じていた。いや、それは間違っではいなかったのだろう。

侵略を迎え撃つのではなく、先んじて世界に打って出る。秀吉は、決して私利私欲で動く男ではない。彼は彼の、力こそ全てという信念に従い、この国を守ろうとしたのだ。

しかし当時は度重なる乱世で、日の本の民はすっかり疲弊していた。こんな状況で海外に打って出れば、更に大勢の兵を失い、民を苦しみの底に突き落とすのは明らかだった。

（その恐ろしい未来に、ワシは震えた。だから、ワシは秀吉殿を殺したのだ……）

説得はした。今は民を休ませ、荒れた国を復興させるべきだと訴えた。それでも、秀吉は決して聞き入れようとはしなかった。

目指す場所は変わらない。ただ、至るまでの道筋が違ったただけなのだ。それでも、互いの信念が相容れない以上、争いは起こる。争いの果てに、勝者と敗者は分かたれる。そして、負けた側には、怨恨と悲嘆が生まれる。

（三成、お前はワシを絶対に許さないだろうな。当然だ。それがワシの罪）

分かっていたのだ。秀吉を殺せば、三成が自分を激しく怨むであろうことは。それでも、自分はこの道を選ばざるを選なかった。

もっと他の方法があったのではないか。今も、そう思わずにはいられない。

だが、秀吉に反旗を翻し、一対一で彼と戦う機会は、あの時をおいて他に無かった。大勢の部下が、あの一時のために粉骨碎身してくれた。彼らの努力を水泡に帰し、その期待を裏切れることは、自分

にはできなかった。

もちろん、部下に責を押し付けるつもりはない。全ては自分が選
択したこと。全ての責任、否、罪は自分にある。

三成の怒りと憎しみは、至極真つ当なもの。自分だけは否定でき
ない。してはならない。

だが、復讐のために多くの民を巻き込み、時代を乱世に引き戻そ
うとするならば……止めねばならない。握る拳に、自然と力がこも
る。

「直政、皆を集めてくれ。我ら東軍は、これより三河を出て、大阪
城へ進軍する」

「は、ははっ！！」

ついにこの時が来た。直政は緊張の面持ちで、部屋を退出する。

「三成……」

目は自然と西へと向けられる。

戦いの全てが不毛なものだとは思わない。甲斐の虎、武田信玄。
自分は彼との戦いで、多くのことを学んだ。信玄の存在がなければ、
今の自分は無かつたろう。彼は天下を競う敵でありながら、偉大な
師でもあったのだ。長曾我部元親や伊達政宗といった男達とも、
刃と拳を交えることで分かり合うことができた。天下を統べるのに
必要な力も、長く苦しい戦いの日々が培ったものだ。

だが、三成との戦いは、何も生み出さぬ、どちらかが生きるか死
ぬかの戦いになるだろう。

三成は、そんな戦いに己の全てを賭けて来る。それを不毛だと否定してはならない。この世で自分だけは、彼の憎しみを、正面から受けねばならぬ義務がある。

（長かったな……）

秀吉を倒した直後、家康は、本多忠勝の背に乗って逃げ出した。秀吉との戦いは凄まじいものだった。紙一重の差で辛勝したものの、こちらの負傷も酷く、とても戦える状況ではなかった。

続けて三成と戦っても、勝ち目はない。それに、秀吉を倒した以上、自分は一刻も早く、自陣に戻らねばならない。そうしなければ、部下達が撤退できない。命懸けで豊臣軍を引き付けている部下達を、一人でも多く救うためにも、あの場は退散するしかなかった。

あの選択に後悔はない。だが、あれはどう言い訳しようと“逃げ”だろう。自分は、三成の怒りに背を向けたのだ。かつての友に、裏切りの罪を糾弾されることに、恐れが無かったとは言えない。

あそこで決着をつけなかったことが、三成の憎しみを更に肥え太らせたならば、その責は自分にもある。罪を清算するには……やはり、天下を統一し、民に平和をもたらすしかないだろう。三成が決して退かないように、秀吉への忠を忘れられないように、自分も、もはやそれ以外の生き方はできない。

「勝った者は生き、負けた者は死ぬ。ワシは絶対に負けられない」

家康は握った拳に目をやり、更に決意を口にする。

「絶対に……！」

四国は中富川、長曾我部軍の隠し砦にて。

四国の壊滅から、一月が流れようとしていた。長曾我部元親は、この間ずっと四国に留まり、復興と軍備の増強に努めて来た。

「ほう、いい仕上がりじゃねえか」

「へへ、長曾我部軍の最高傑作でさ！」

砦の中では、日々練兵と、新たなからくり兵器の開発が行われている。元親は階上から“アレ”を見下ろし、その出来に惚れ惚れする。富岳に滅騎、数多のからくり兵器を生み出して来た優れた技術力は、長曾我部軍の誇りだ。ならば、その技術の粋を結集したアレは、誇りの象徴と言える。そう、ただ一つの……長曾我部軍が所有するからくり兵器は、今やアレただ一つだ。他は全て、四国壊滅の際に失われてしまった。

「でかしたぜ！ おめえら！」

「アニキに褒めて貰えれば、徹夜の苦勞も報われるってもんですぜ。なあー！」

「アニキ——！！！」

アレの周りで最終調整に当たっている部下達が、一斉に声を上げる。

満足げに微笑む長曾我部。だがその顔に、一瞬影が差す。

「……これで、家康に一泡吹かせてやれるな」
「アニキ……」

隣にいた部下は、戦慄を隠し切れなかった。

表面上は、普段の優しく、快活なアニキと変わらない。だが、話が徳川家康のことに及んだ途端、まるで別人のような冷たい雰囲気包まれる。異名の通りの、“西海の鬼”のような……

無二の親友に裏切られ、大勢の部下を失ったのだ。当然だろう。自分も、家康への恨みはある。だがそれ以上に、今の危うい元親が、心配でならなかった。

長曾我部元親は考える。アレが完成し次第、自分達は徳川に打つて出る。折しも、家康率いる東軍が西へと進軍し、石田、毛利の西軍も、九州を平定し、急ぎ大阪に戻っていると聞く。激突の時は近い。自分が家康との決着をつけるのも、その時を置いて他に無かるう。もはや時間は残されていなかった。

（サヤカに話を聞いておいても良かったか……）

サヤカとは、今の雑賀衆の頭領、三代目雑賀孫市の本当の名である。雑賀衆の頭領は、代々雑賀孫市の名を受け継ぐことになっていた。

雑賀衆と長曾我部は、以前から交流があり、戦や船出の際には、物資や火器をよく雑賀の里から仕入れていた。頭領である孫市とは長い付き合いになる。取引相手になったことがあれば、敵対関係になったこともある、純粋に味方とは言えない相手であるが、腕が立ち、銃器の扱いに長け、大勢の配下をまとめあげる統率力を持つ、雑賀衆の頭領に相応しい人物であることは間違いない。

味方になれば、これ程頼もしい女はいない。しかし、風の知らせで、彼女達雑賀衆は、既に家康と契約を結んだと聞いた。家康の味方についたということは、彼女もまた自分の敵になったということだ。

雑賀衆の流儀はよく知っている。雑賀衆は情でも金でもなく、より雑賀衆を高く評価する者と契約を結び、その契約に忠実に従う。例えば相手が元親であっても、彼女は手心を加えたりなどしないだろう。孫市を信頼できないのではない。逆だ。雑賀衆の頭領である彼女を信頼できるからこそ、自分に躊躇い無く銃口を向けることを確信できる。

彼女らは、傭兵集団であることに、何処までも真摯で、撤退していた。海賊には海賊の流儀があるように、雑賀衆には雑賀衆の掟がある。それは、共に決して曲げられない、人の生き様だ。

奇襲を仕掛け、使者を斬ったことから、徳川が長曾我部を敵視しているのは明らかだ。のこのこ雑賀の里に乗り込んでいけば、またしても騙し討ちを受けるかもしれない。これ以上、自分のせいで部下を死なせたくなはない。

友情を裏切った家康への怒りは、勿論ある。だがそれ以上に、元親は自分を責めていた。

（俺が……俺が四国を離れたりしなければ、こんなことにはならなかった！俺の責任だ……！）

甘かった。浮かれていた。四国を離れたりしなければ、自分さえいれば、最悪の結果は免れたはずだ。どれだけ後悔したところで、失われた命は戻って来ない。

自分に出来ることは、仇を討ってやることぐらいだ。

それなのに、己は未だに迷っている。嵐のような怒りと悲しみに突き動かされながらも、まだ家康を信じたがっている自分がいる。

こんなことでは駄目だ……命を落とした手下達のことを思い、弱い心を振り払う。己はもう、鬼になると決めたのだ。

（とにかく、向こうにはサヤカもいる。正面から家康と戦っても勝

ち目はねえ。もうじき、家康と石田との間ででかい戦が起こる。その隙を見て、家康の下に乗り込むしかねえ)

そこまで考えて、長曾我部は舌打ちする。何だ、今の考えは。まるきり自分らしくない。西軍を利用して家康への道を開こうなどとこれでは毛利元就と同じではないか。自分は、こんなにせせこましい打算で動く人間だったか？

だが、これ以上、部下を死なせることに、長曾我部は耐えられなかった。例え好ましくないやり方でも、部下の命を守るには、これが最善なのだ。そう自分に言い聞かせる。

彼は、生まれて初めて恐怖を覚えていた。自分の責で、手下を失うという恐怖を。その恐怖と悔恨の念が、今の長曾我部を動かし、同時に、思考の牢獄に閉じ込めていた。

第四章 凶星群舞（七）（後書き）

家康は己の行いが全て善ではないと理解しつつも、天下のためにあえて綺麗事を口にするという、中々に複雑でオイシイ内面を持ったキャラなので結構書き甲斐があります。

第四章 凶星群舞（八）

西軍は九州から本土に戻り、大阪を目指して進軍する。凶王に恐れをなし、あるいはその勇名に惹かれ、多くの兵が西軍への参加を申し出ていた。その規模は、家康の東軍に引けを取るものではない。急ぎ大阪へ向かう軍の中には、大友宗麟と立花宗茂の姿もあった。

「宗麟様。我々まで、西軍に同行する必要は無かったのでは？」

大型のからくり兵器“駆動国崩し”……ザビー教教祖の顔を模した、通称“ああ！ザビー様！貴方の面影と思い出号”に乗る宗麟に、宗茂は怖ず怖ずと話し掛ける。

「黙りなさい、宗茂。これは聖戦なのです」

「せ、聖戦！？」

「そう、東の異教徒たちを肅清し、ザビー様の教えを日の本全土に広める崇高なる戦い。ああ！ザビー様！貴方の悲願が、ついに成就する時が来たのです！ザビー様！貴方の面影は、今もこの宗麟の胸に！」

両手を天に掲げる宗麟。彼の目には、慈愛に満ちたザビーの笑顔が青空に映っていた。

宗茂は頭を抱える。また毛利に、良からぬことを吹き込まれたのだろうか、すっかり調子づいてしまっている。ここは、家臣である自分が諫めなければ！ただ命令に唯々諾々と従うだけではない、主君の過ちを正すこともまた、忠義の道だ！

「そ、宗麟様……」

「そうそう、宗茂。九州での働きは見事でした。これで、お前の潔白は証明されましたね」
「！」

宗茂は、一瞬耳を疑った。

「そ、宗麟様、手前への疑いを解いてくださるのですか！？」
「ええ。お前も、ザビー教徒としての自覚が出来て来たようでありです。次の戦いでも、僕のためザビー様のために一生懸命働きなさい。いいですね、ギャロップ」

宗茂の心を、歓喜が包み込む。これだ、この瞬間だ。主君に認められることこそ、武士にとって最高の喜びなのだ。

「はっ！ この宗茂にお任せ下さい！ 必ずや、宗麟様のお役に立つて御覧に入れます！」

（って、違ううー！！）

心の中で叫ぶ宗茂。いざと言う時、強く出られぬ己を、自覚せずにはいらなかった。

（手前はギャロップでもザビー信徒でもなくて！ い、いや、そういう問題じゃない！ 手前には言うべきことが……でもここまで言い切ったからには撤回など持ったの他だし…… ああ、手前のバカバカーー！！）

「天海さま、天海さま」

「何ですか、金吾さん」

金吾は天海を呼び付け、小声で話し掛ける。

「この前の、家康さんの誘いのこと何だけどさ」

「ああ、あの東軍にねが」

「うわー！！ 声が大きいつてば！！」

慌てて天海の口を塞ぐ金吾。

「もう、天海さまったら、少しは空気を読んでよね」

「貴方に言われたらおしまいな気がします……」

天海は、今度は蚊のように小さな声で、金吾の耳元で囁く。

「で、結局どうなされるのですか？」

「……うん。家康さんの申し出、受けようと、思ったり、したり、しなかったり……」

「どちらですか」

やはり優柔不断な金吾であった。

「……もう耐えられないよ。今回の九州行きだつて、天海さまがいなかったら僕死んでたし。家康さんなら、きっとそんなことはしない。僕、家康さんについて行くよ」

天海は、目許を綻ばせる。

「……よく御決断なさいました。金吾さん。この天海、及ばずながら金吾さんのお手伝いをさせて頂きますよ」

「ありがとう。もうこの中で、僕が信頼しているのは天海さまだけだよ。頼りにしているからね、天海さま」

金吾は無邪気な笑顔を浮かべる。天海は、思う。この弱く愚かな少年の、儚くか細い希望。それが断ち切られた時、彼はどんな表情を浮かべるのだろうか。そのことを夢想し、天海は覆面の下で舌なめずりする。

「ああ、でも、西軍が勝っちゃったらどうしよう？ねえ、天海さま、やっぱり僕、ここに残るべきかな？どうだろう？あ、何だかこれって、今夜の鍋を肉か魚にするのか悩むのに似てるよね」

「……………」

天海は沈黙するしか無かった。考え直す。この少年は、何が起ころうと、死ぬまで何も変わらないのではないか。死ぬ直前であろうと、いつもと同じ情けない声をあげるだけなのでは……そう思わずにはいられない。

馬上の毛利元就と並んで移動する大谷吉継。石田三成は、一刻も早く到着したいのか、軍の先頭で兵を急かしている。

「はよ大阪に戻らねばな。われらが到着した時には、既に大阪が落ちておつては、笑い話にもならぬ」

「それは貴様らの駒の領分であろつ。もしものことがあれば、それ

は貴様の責と思え」

彼らしく、素っ気なく答える毛利に、刑部は苦笑する。

実のところ、それほど心配はしていない。毛利軍と盟を結んだことで、九州攻めにそれ程兵力を割かずに済んだ。

大阪城の守りは堅い。東軍が束になつて押し寄せようと、籠城すれば数日は持つ。あわよくば、城攻めをする東軍を背後から急襲できるかもしれない。これも、毛利軍の協力なくば描けなかった絵図だ。

刑部は、唐突にこう言いだした。

「毛利、ぬしには感謝している。コレデモな」

「ふん……」

初めて聞く感謝の言葉であるが、毛利の表情は変わらない。

「ここまで来られたのも、ぬしの助けがあればこそ。これで徳川と将棋が差せる」

「ようやく同じ盤上に駒を置けるというわけか。だが、その程度で満足したわけではあるまい」

「無論よ。徳川を詰めることが出来ねば、今までの苦労も水の泡。ここからが本当の戦、ますます骨を折ることになるであらうて」

刑部は大儀そくに空を見上げる。

「われも律義よ。働きすぎて滅入る。だが、これも義のため」

野望のため。

「三成のため」

われのため。

「貴様の、本当の目的とやらか」

「左様。最も、われも徳川に怨みがないわけではない。三成とは違い、直截的なものではないがな」

徳川家康。人はやつを、太陽のような男と呼ぶ。絆の尊さを声高に叫び、誰からも好かれる、正しき心を持つ男。

あの者は、闇の底でしか生きられぬわれや三成とは違い、光に照らされた道を歩むことのできる男よ。

いつそ、それが見せかけであつたのならば、われのように嘘で塗り固めたものならば、まだ可愛げもあつたものを。やつのそれは、真実本心から生まれたものなのだ。

われはこの西軍をここまで膨れ上がらせるのに、多大な労苦を費やした。嘘を吐き、甘言を囁き、不和を招き、不要なモノは殺し、必要なモノは奪い取ってきた。

だが、徳川の下には、何もせずとも、豊臣からの離反者や、周辺諸国の大名らが、こぞって集まつた。

それが、徳川家康という男の人徳。やつの頭上には、幸運の星が輝いておる。

われにはわかる。歴史は、徳川家康を、天下人として選ぶうとしている。われらはその道を阻む逆賊であり、歴史の流れを妨げる者なのだ。

だが……それだけは、それだけは許せない。幸福に恵まれた人間が、天の示す道を歩みながら、極上の栄華さかちを手にする。あらゆる幸

に見放された人間として、それだけは許容できない。

「おのれ……憎いぞ徳川！ 天曜の如く人を惹きつけるその幸福が憎い！！」

腹の底から声を絞り出すように、徳川への憎悪を口にする大谷。三成のように、ただ殺すだけでは飽き足らない。

やつが仰々しく語る絆とやらを尽く剥ぎ取り、孤独と絶望の淵へと叩き込む。己の理想が潰えることを思い知らせた上で、散々に苦しめて殺す。それぐらいやって初めて、やつが授かった幸福と釣り合うというものだ。

「ふん、くだらぬ」

一言で切り捨てる毛利。彼のそんな返答を予期していたように、刑部は笑う。

「で、あろうな。ぬしはわれや三成の思いなぞ、興味は無かるうよ」「当然だ。われの望みは……」

「中国地方永劫の繁栄、である？ ぬしはそれだけが望みであるからなア。そう……この戦の結果がどうなろうと、それだけが守られれば……」

「……何が言いたい？」

いつしか毛利の声には、氷の刃が含まれていた。

「いや、なあに。われも気づいたのよ。ぬしがわれらに力を貸した、本当の目的をな」

「……………」

すでに毛利の眼差しは、同盟相手に向けられるものではなかった。一部の隙もない、冷たい眼光で刑部を射抜く。

「ぬしの望みは、中国の繁栄。そこに嘘偽りはない。ただし、だ。われは思ふのよ。ぬしは本心では、三成と徳川、どちらが勝っても構わぬと思っているのではないか、となア」

毛利元就は答えない。大谷の口調からも、先程のような冗談めいたものは消えていた。

「そもそもぬしは、豊臣に組する明確な理由があるわけではない。徳川についても同じこと。ならば、徳川と三成……より勝ち目のある方に付くのが、ぬしにとっては最善の判断……である？」

「……………」
「普通に考えれば、徳川の優位は揺るがぬ。ぬしはわれらと違い、徳川と手を組むことに抵抗があるわけではない。

しかし、だ。われが言うのも何だが……万に一つも三成が徳川を討ち取れば、三成の怒りは、徳川に組したぬしにも向けられよう。ならば、徳川が勝ちし場合はどうか。徳川は、あれで甘い男よ。加えて、愚かでもない。中国の統治に、ぬしが必要なことは分かるはず。

三成とわれが斃れし後、ぬしは徳川に停戦を呼びかける。甘く、これ以上部下を失いたくない徳川は、この申し出を受けるである。……そう、どちらが勝ったとしても、ぬしと中国の安泰は確約されているのよ」

同盟相手の勝利を信じて、自国の命運を託す。聞こえはいいが、そんなものは所詮、ただの賭けだ。勝敗など時の運。他人や天運に自国の未来を委ねるなど、国主のすべきことではない。

選ぶべきは、いかな結果になろうとも、自国の安寧の保証される道。情や恩義に囚われず、冷徹に、かつ、最善の道を選ぶことこそが、国主の在るべき姿なのだ。

「……………」

毛利は、やはり何も答えない。二人の間には、水底に溜まって濁ったような空気が流れていた。

「ふふつ、冗談よ。われはぬしを、心から信じておるでなア」

ひっひっ、と笑う刑部。

「毛利、死ぬなよ。われはぬしのような良き、悪しき同胞を失いたくない」

そう、この男に死んで貰っては困る。この男こそ、われの目的を実行するに必要な“駒”なのだ。

この男は己のことしか考えておらぬ。己と己の抱えた物のためならば、他の者を平然と犠牲にできる、そういう人間よ。われや三成と同じように、ただ一つの生き方しか出来ぬのだ。

ぬしの行いは、不幸の渦を巻き起こす。長曾我部と大友を陥れたように。これからも、ぬしはぬしの生き続ける限り、数多の不幸を撒き散らすであろうて。“悪しき同胞”とはそういう意味よ。

それは、われの望んだ世と同じ。だからこそ、われはこの男を選

んだ。

数多の人の苦しみと不幸。ぬしは、それをもたらす星の下に生まれておるのよ。いかに智謀を張り巡らせようと、それだけは変わらぬ。何故なら、ぬしは最初から、個人の幸も不幸も眼中に無い、国家としての安定しか望まぬ男だからの。

毛利。ぬしは考えているのである？　いかにしてわれを出し抜くか。われに寝首を掛かれぬか。ぬしの頭の中にあるのはそれだけよ。だがな、われは何も恐れる必要はない。ぬしがどうしようと、結局はわれの望む通りの結果になる。

ヒヒヒヒヒ……ヒヒヒヒヒッ！

何だ？　何か見落としてはいないか？

突然、胸を不安の影を覆う。

見落としたと？　そんなもの、あるはずがない。われの望みは、より多くの人間を不幸に陥れること。

“そのために”、われは西と東、双方の力が拮抗するように骨を折ったのだ。

弱体化した豊臣の復興に努めたのも、毛利と盟を結んだのも、長曾我部を欺いたのも、九州を攻め落としたりしたもの、西と東を互角に仕立てあげ、より大勢の人間を巻き込み、共倒れにさせるため。

何を得ることもなく、誰も勝利することなく、ただ人が死ぬだけの虚しき戦い。それこそが、この日の本にとって最上の不幸ではないか。それこそが、われの望む結末。不幸の星を降らせる儀式なり。

誰が死のうと、誰が裏切ろうと、そこに描かれる絵図が地獄でさえあれば、われは満足する。

毛利元就は、その地獄を彩る良き色となってくれるであろう。例え最上の成果でなかりうと、これからの大戦で生まれる不幸が、生温いものであるはずがない。

われの望みは、この戦に参加している誰よりも易しい条件なのだ。

勝てる。必ず、われの望みは叶う。見落としなどはない。

この得体の知れない感覚は、迫り来る星に、畏怖を感じているだけのことだ。

そう、己に言い聞かせながら、大谷吉継は御輿を進める。

数多の人間の思惑を飲み込んで……歴史は、天下分け目の決戦へと進む。

第五章 妄執輪廻（一）

徳川家康率いる東軍は、大阪城へと侵攻する。大阪城の留守を預かる、豊臣の武将、島左近しまさこんは、押し寄せる徳川の大軍勢に対し、籠城策を取り、石田三成の本隊が帰還するまでの時間を稼ぐことに徹した。東軍の総攻撃は休むことなく続いたが、豊富な備蓄に堅牢なる守りを誇る大阪城を、ついに落とすこと叶わず、西軍本隊の到着を許してしまう。城の内と外、双方から挟撃されれば、いかな大軍とてひとたまりもない。家康は、大阪城攻略を早々に諦め、敵本隊到着を前に撤退を指示、関ヶ原まで後退する。

なお、島左近は、城内に進入しかけた敵を相手に僅かな手勢と共に奮戦。最後は敵陣のただ中に飛び込み、大勢の敵を巻き込んで自爆するという、壮絶な最期を遂げた。

石田三成もまた、大阪城に到着し次第、城内の残存兵力を加え、東軍を追い関ヶ原へ向かう。

かくして、東軍と西軍の全勢力が関ヶ原に集結することになり、ここに、日の本の未来を定める、天下分け目の合戦の火蓋が、切つて落とされたのだった。

「山頂は、徳川に奪われたか」

顎を撫でながら、敵陣営の様子を伺う刑部。東軍は、山頂を覆うように、大規模な陣を敷いている。天然の要害を生かした布陣は、難攻不落の砦に近い。

ざっと眺めただけでも、万全と呼ぶに相応しい布陣だ。大阪城を落とせなかった場合を想定して、この場所で迎え撃つべく、周到に

準備を進めていたのだろう。

対するこちらは、風下の分かりやすい位置に陣を敷かざるを得なくなった。これでは、あちらから自軍の動きはほぼ丸見え。戦における、高低差の有利不利など、今更論じるまでもない。

位置取りでは、まずあちらに分があると言えよう。遅れて到着した以上、元より避けられぬことであつたが。

「だが、われらにはさして関係のないことよ。のう、毛利」

「随分と、樂觀的なことだな」

「いやいや、これもぬしを信頼しておるからよ。まずはぬしが軍を動かし、東軍と正面からぶつかる。われと三成はその隙に、側面から本陣を攻め、徳川の首を取る。駒を扱う戦いならば、ぬしの最も得意とするところである？」

兵力差が互角ならば、後はどちらが“流れ”をものにできるかで、戦の勝敗は決まる。東軍を構成しているのは、対立関係にあった伊達と最上。臆病者の北条に、契約で繋がっているだけの雑賀。まとめ役であり、大将の徳川が斃れば、すぐに空中分解するだろう。徳川家康さえ討てば、勝利はこちらのものだ。皮肉にも、三成の欲求こそが、この戦に勝利するための最も合理的な手段となっていた。

毛利は大谷の顔を見ようとせず、黙って天を見上げた。

「日輪の加護ある限り、我に敗北はない。東軍は、すぐにそのことを思い知る」

そう言つて、毛利は刑部に背を向け、自陣へ戻っていく。西軍の陣地には、布で包まれた巨大な物体が、十数個鎮座していた。

「あいわかった。死ぬなよ、同胞」

刑部は、もう振り返らずに、三成の下へ向かう。

三成は、敵陣を見渡せる丘に立ったまま、微動だにしない。その視線は、あの男のいるであろう頂上にのみ注がれている。

「家康……家康！」

渾身の憎悪と怨念を込めて、その名を呟く。

「三成、間もなく毛利が東軍を攻める。われらはその機に乗じて、徳川を討ちに行くぞ」

三成は、刑部が近づいたことにも気づかないのか、一言も発しない。

「今すぐ徳川の下に行けぬのが気に喰わぬか？　だがな、三成。これが徳川と戦うのに最短の……」

「刑部」

突然、三成は声を発する。

「何度も言わせるな。疑う余地などない」

その答えを聞いて、刑部は包帯の下で微笑んだ。

三成は一步足を踏み出す。その顔を塗り潰す色は、憤怒。仇敵に僅かでも近づくだけで、その怒気が数倍に膨れ上がった。

「家康……斬首の傷は、貴様に相応しいイツ!!」

東軍の最前線では、主力である徳川軍に、雑賀衆と北条軍を加えた軍勢が展開していた。彼らの多くは、雑賀衆の銃火器で武装している。その銃には残さず弾丸が込められ、敵軍に鉄火の雨を降らせる時を待ち侘びている。

その中に、鮮やかな橙色の髪をした、引き締まった体躯の女性がいる。彼女が雑賀衆の頭領、三代目雑賀孫市だ。彼女もまた手に銃を持ち、獲物を狙う梟の眼で、西の陣地を見据えている。

「頭領、隊の配置、完了しました」

「よし……後は手筈通りに行く。奴らの動きから眼を離すな」

彼女自身も、敵陣から片時も目を離さない。

東軍と西軍との間には、銃の射程距離をぎりぎり外れる程度の間隔が開いている。孫市の眼には、両軍を分かつ見えざる赤い線が見えていた。西軍が、その境界を破り、攻め込んで来れば……勝敗の天秤は、こちら側に大きく傾く。

東軍の正面には、雑賀衆特製の、大小様々な地雷が埋められている。西軍が到着するまでの間に出来得る限りの数を埋め込んだ。線を踏み越えた瞬間、西軍は甚大なる被害を被ることになる。両軍ほぼ互角のこの戦況において、それはあるいは、致命打となるやもしれない。

「いやあ、何とも不思議なものぢやのう」

「北条か」

白髪を後ろで束ね、水色の着物と鎧を着た老人、北条氏政は、感慨深げに呟く。

「お主達雑賀衆には、小田原で散々してやられたものぢや。それが、今や東軍の旗の下、こうして肩を並べて戦うことになるのはもう」
「我らは契約によって主を定める。今回はお前達と同じ側になった、それだけのことだ」

あっさりと答える孫市。この戦国の世では、かつての敵が味方に、味方が敵になることなど、珍しくもない。

「ああ、それは分かっておるとも。傭兵のお主らを恨むのも、筋違いぢやと言うことももの。ぢやが、それだけぢやのうて、こうして同じく徳川殿の旗で戦っておると、昔のわだかまりがすうっと消えていきおるんぢや。これも徳川殿の言う、絆の力なのかのう……」

感慨深げに呟く氏政。

「我らは情にも金にも靡かぬ。我らはただ、契約に従い、眼前の敵を撃ち果たすのみ。だが、お前達と力を合わせることが最善の道ならば、我らは迷わずそれを選ぼう」

孫市の言葉に、氏政は得心したように頷く。

「よおおおおおし！！ 雑賀の！ この戦、必ず勝つぞい！ 憎き豊臣をやっつけ、北条の栄光を取り戻すのぢや！！」

先が幾重にも別れた槍、北条栄光槍を掲げ、気炎を上げる氏政。

（そして官兵衛殿！ お主の仇も、討つてみせるからのう！！）

島津義弘と同じく、黒田官兵衛の死の報もまた、東に届いていた。官兵衛には、豊臣の小田原攻めの際、降伏の仲立ちをしてもらった恩がある。彼がいなければ、自分はこの昔に、秀吉にくびり殺されていただろう。それ以来、官兵衛とは堅い友情を結んでいる。

その後、彼は豊臣に叛意ありとして遙か南の九州の石垣原に投獄され、自分も小田原城に蟄居を命ぜられていたため、長い間会うことは叶わなかったが……

だが、彼らは誓っていた。いつか自由になれた時は、二人で力を合わせて、天下統一を目指そうと。負け組同士が手を組み、勝ち組連中に一泡吹かせてやろうと。酒の席で語り合ったものだ。

（結局、その約束が果たされることは無くなってしまったが……せめて仇だけでも討つてやらねば、官兵衛殿が浮かばれん！）

北条氏政は、彼の縋り付く過去の栄光以外にも、強い動機を持つてこの大戦に臨んでいた。

（……とはいえ、できれば風魔と再契約を結んでおきたかったが……あやつ、今頃何処で何をしておるのやら）

風魔小太郎は、かつて北条氏政が雇っていた傭兵で、「伝説の忍」と呼ばれるほどの凄腕だった。苛烈な豊臣と雑賀衆の攻撃から、あれだけ長く陥落を免れたのも、彼の働きがあればこそだ。

しかし、奮闘虚しく北条は降伏。豊臣に蟄居を命ぜられている間に、風魔の契約期間は過ぎてしまい、彼はあっさりと、北条の下を去っていった。また連絡を取る事が出来れば、迷わず再度契約を結ぶのだが……

最悪、西軍についている可能性もある。氏政は、そうならない事

を祈るしかなかった。

「動くぞ」

孫市は、真つ直ぐ前を見据えたまま言う。敵陣営を覆い隠していた、布の帳が取り除かれる。ついに西軍が、その全容を露にする。

「……あれは！」

最前線には、こちらと同じく銃を携えた兵がずらりと並んでいる。だが、例え銃でも、この距離からではどの道届かない。銃の射程に入ろうとすれば、地雷原に足を踏み入れることになる。

だが、それより気になるのは、その背後に控える馬車の群れだ。
無論、移動用の馬車ではなく、突撃と蹂躪を目的とした、“戦車”
と呼ばれる代物だが……気になるのは、車の側に積まれているものだ。

ただの突撃ならば、歩兵だろうと馬だろうと車だろうと同じことだが、何かはわからないが、それ以外の意図で用意したとすれば……

「……まずいな」

直感に従い、雑賀孫市は飛び出した。あれを放っておいてはいけない。

「い、いかんぞ！ 孫市殿！！」

地雷原に自ら飛び込んでいった孫市に、氏政は泡を食う。だが、

孫市は、地雷の埋まっていない場所を正確に見切り、地雷を踏まぬように安全な道を駆け抜ける。元々地雷は彼女らが埋めたもの。その位置は完全に把握している。しかし、地面を見ただけではまるで分らない地雷を正確に避け、何の恐れも無く疾風のように踏破できる者など、果たしてどれだけいるだろうか。

戦車の屋根が二つに開き、中から鳥居のようなものがせり上がって来る。それには、一枚の円形の鏡が掲げられていた。孫市は迷わず銃を抜き、二挺の照準を鏡に合わせた。それより速く、西軍の銃口が火を吹く。波濤のように押し寄せる銃弾を、孫市は宙に飛び上がってかわす。

孫市は身体をくねらせ、空中で背を地面に向けたままの体勢で、“双弾ジヨウビタキ”の引き金を引く。

放たれた銃弾は、二枚の鏡に吸い込まれていく。鏡に蜘蛛の巣が広がる。破壊できたのは、二枚まで。孫市が次の行動を起こす前に、それは発動した。

破壊を免れた十三枚の鏡が、直視できぬ輝きを放つ。

鏡は任意の角度に傾けられるようになっており、この時間、太陽の光が最も当たる方向に傾けられていた。斜め上方を向いていた鏡の群れが、からくり仕掛けによって、正面より斜め下へと向けられる。

十三条の熱光が、原野を横断した。

光が、大地を焼き払う。斜線上に埋められていた地雷は、熱で残らず爆発する。誘爆に次ぐ誘爆で、大地は割れ、爆炎の砦が立ち上

がる。

「しよええええええつ!？」

その光景に、腰を抜かす氏政。だが、地雷だけでは済まなかった。光は、最前線に展開していた東軍の下にも到達する。

目も開けられぬほどの光の中で、兵士達を灼熱地獄が襲う。皮膚は焼け焦げ、脳が沸騰し、体が内側から炭化していく。死の光が通過した後には、焦げた大地と焼死体だけが残った。

「これぞ、てるひのおおかがみ照日大鏡!」

毛利は、陣の後方から輪刀を掲げ、高らかに叫ぶ。

「天津日の力にて、全てを焼き尽くせ!」

毛利軍の新兵器、照日大鏡は、鏡に太陽の光と熱を集束・反射させ、強力な熱線に変えて照射する。鏡は中国地方のみで産出される特殊な鉱物を用い、精密な計算に基づいて研磨される。太陽の側に向いている間は、熱を吸収し続け、向きを変えた瞬間、吸収した熱を反射した光に乗せ、超高熱の殺戮光線に変える。射程距離は光が届く範囲まで。加え、弓や銃と違い、盾による防御すら無意味と化する。事実、弾避けの後ろで焼死している兵士が何人もいた。

武将の特殊能力を除けば、日本史上初の光学兵器であった。

「罨が仕掛けてあることぐらい、我が見抜けぬと思ったか」

四頭の馬に引かせた、大型の戦車に腰掛けた毛利は、輪刀を振り上げ、指示を飛ばす。

「進め！ 天津日の輩どもよ！ 今こそ、白日の下に我が名を示せ
！！」

毛利の号令に従い、西軍が一斉に進軍を開始する。地雷は、照日大鏡の照射で全て焼き払われた。西軍の怒濤を遮るものは何もない。

「怯むな！ 撃て、撃てい！！」

東軍の兵士達の銃が、一斉に火を吹く。地雷が無くとも、こちらは斜面に陣取っている。銃撃戦において、高所は圧倒的に有利なのだ。だがそれも、大鏡が無ければの話。

照日大鏡の第二射が、斜面に展開した東軍を薙ぎ払う。そこに雪崩れ込む西の軍勢。運よく射線上から逃れた兵士達も、今度は戦車の突進により、跳ね潰された。

新兵器による先制攻撃が、見事に決まり、東軍の最前線は崩壊しつつあった。

「立ち止まるな！ 動け！」

孫市の声が戦場に響く。斜面で固まっていたことで、兵の犠牲を増やしてしまった。有利な地形を生かしての待ち伏せが、ここまで裏目に出るとは……

「鏡だ！ 鏡を壊せ！」

叫びながら、孫市は思う。

（かつて、我らの先代は銃の扱いを研究し、技術へと昇華し、日本の戦を大きく変えた。旧きは新しきに駆逐されるが道理。今度は、我らがその洗礼を受ける番だと言うのか）

銃弾一発では、さしたる損傷にならない。孫市は長銃“衝弾クロツグミ”を構え、鏡に発砲、破碎する。

直後、極大の殺気が近付いていたことに気付き、その場を飛び退く。彼女が一瞬前にいた場所を、雷光が薙ぎ払った。

「お前は……」

「手前の名は、立花宗茂」

その名は孫市も知っていた。西日本最強と謳われた、伝説級の武将だ。

「“西の立花”か……」

「我が主宗^{きみ}麟様の命により、これ以上貴殿に鏡を壊させるわけにはいかぬ。いざ、尋常に勝負！」

構えた二対の雷切が、稲光を放つ。その雷名に偽り無きことは、一目見ただけで分かる。そしてそれほどの猛者が、女性だからと侮るような愚か者であるはずがない。孫市もまた、銃弾を再装填しながら、殺意を絞り込んでいく。

そんな孫市と宗茂の頭上を、黒い影が飛び越えていった。

唸りを上げて旋回する数珠が、両輪を形成する。“急くな鉾星”で戦車と化した大谷吉継は、御輿の上に石田三成を乗せ、兵士達を飛び越え、あるいは弾き飛ばし、轢き殺す。三成も、刀を抜いて手近な敵を斬殺する。

その顔面は紫色に歪み、両の瞳は、血色に濁っていた。

「家康……家康……家康ウウウウウツッ!!」

怨敵の名を叫びながら、刀を振るう三成。今の三成と刑部は、触れた者総てを断ち斬り八つ裂き轢き殺す、斬滅の嵐と化していた。

「三成、聞かずともよいが、アレを見やれ」

数珠の車輪で敵を弾き飛ばしながら、刑部はある一点を指し示す。そこには、事態の急変におろおろしている、北条氏がいた。

「! 北条オオオオオオオオツッ!!」

この時、三成の憤怒の矛先が、一時的に変わった。氏政も、彼らの接近に気付き、恐慌を更に深める。

「しよええええええええ!? き、き、凶王ぢやあああああああ
っ!!」

妙な鏡によって損害が出たと思ったら、今度は凶王の出現だ。秀吉を裏切る形となった自分を、あの男は大層怨んでいるに違いない。

氏政は逃げ出そうとするも、寸前で踏み止まる。

（そうじゃ！　ここで逃げては、また小田原の二の舞じゃ！　もう、あんな思いをするのは嫌じゃ！！　御先祖様！　官兵衛殿！　儂に力を貸しとくれえーっ！！）

氏政は意を決し、北条栄光槍を振り上げて、驀進する三成と刑部に立ち向かう。

「ひよおおおおおえええええつ！！」

氏政から水色の霊気が噴出し、北条家代々の当主の靈魂が、顔だけとなって氏政の周囲を旋回する。

儂には、御先祖様方の御加護がある！　凶王なぞ、恐るるに足らんわい！

部下の制止も聞かず、氏政は、三成の極限の殺意に向かって突貫する。

「北条オオオオオオツ、死ねえツ！！」

「死ぬのはお主じゃ！　北条家再興の礎となれい！！」

絶対程度の凍気を放つ氏政。栄光槍を叩きつけた地点に、巨大な氷塊がそびえ立つ。

（おお！　見える！　儂にも見えるぞい！　北条家の栄光がああああああッ！！）

光の弾丸と化した刑部の御輿が、氷塊を掘り碎く。同時に跳躍する三成。

太陽を背にした姿を、氏政が捉えることは無く、三成の刃によって、袈裟懸けに斬り裂かれる。

鮮血が視界を染める。痛みを感じる間も無く、続く光速の抜刀が、北条氏政の体を、十六の部位に分割する。

生首に四肢、分断された肉片が、ぼとぼと地面に落ち、血の海に浮かんだ。

「ヒヒヒ、中々笑えたぞ、北条の」

「秀吉様の恩義を忘れた罪人には死あるのみ。次は家康！！ 貴様の首を貰う！！」

車輪が氏政の首を轢き潰し、血の染みに変える。爆走する双星を、止められる者などいなかった。

（石田と大谷は行ったか。……ここまで全て、読み通りよ）

既に豆粒より小さくなった西軍二将を見て、毛利は心中で呟いた。

第五章 妄執輪廻（二）

中央の先制に合わせて、右翼、左翼、さらには背後からも、西軍の攻撃が始まる。中央軍以外にも、戦車に照日大鏡を乗せた、“旭あさひくるまてんくん車天君”は配備されており、中央同様、東軍に大打撃を与えていた。

（ああっ！ や、やっぱり西軍が有利かなあ？）

その中で、小早川軍だけは動かず、左翼をうろろろしていた。突撃しようと言う部下の進言を、金吾は何かと理由をつけてかわしていた。

「て、天海さま。（家康さん、）本当に、来てくれるかなあ？」
「大丈夫ですよ、金吾さん。あの方は金吾さんのような、困っている方を見捨てられない性分ですから」

結局金吾は、最後まで東西どちらにつくのか決められなかった。迷った挙句、彼は天海の出した提案を受け入れることにした。

家康に使いの文を送り、寝返りの意志を伝える。もし了承する場合は、家康自身に迎えに来て貰うというものだ。

家康が危険を冒してでも迎えに来れば、それは彼が心から小早川を受け入れる意志があるということ。そんな相手ならば、信頼できる。裏切るだけの価値はあると言えよう。また、裏切りを知った石田や毛利からも護ってもらえる。

それまでは、戦には加わらず、可能な限り時間を稼ぐ。なお、この計画を知っているのは、金吾と天海の二人だけ。部下達は何も知らされておらず、ただただ困惑するだけだった。

「うつ、早く来ないかなあ……、あんまり焦らされるとお腹が空いて来ちゃうよ。あー、鍋食べたいなあ……」
「……………」

この期に及んで呑気な金吾を見る天海の眼から、いつしか慈父のような眼差しが消えていた。彼は無言で、背の大鎌を手に掛けた。

一方、右翼では……干戈を交える西軍、東軍の頭上を、巨大な影が飛び越えていく。

轟音と共に着地したソレを見て、周囲の兵は度肝を抜かれる。ソレは、朱色の装甲に覆われ、昆虫のような複数の脚に、魚とも獅子とも知れぬ顔を持つ、巨大なからくり兵器だった。

「どけどけい！ お前らに用はねえ！ 踏み潰されなくなったら引っ込んでな！ この“あかつきまる暁丸”になあ！！」

長曾我部元親は、暁丸の頭上に乗せられた船の上に立ち、碇槍を担いで周囲を恫喝する。

暁丸は、長曾我部軍がこの日のために作り上げた、新型にして、現在ただ一つのからくり兵器だった。

これまで長曾我部軍が開発した、木騎や滅騎とは全く設計思想の異なる兵器で、優れた耐久性、豊富な火力に加え、跳びはねながら移動することで、滅騎の弱点であった機動性をも補っていた。

再度跳躍。やはり、この場所は他と比べてずっと手薄だ。これなら、労せず家康の下に行けるはず。

（待っている、家康！ 俺は……）

家康に会ってどうするのか。頭の中では、とうに答えは出ている。それでも、元親はそれを言葉にすることが出来ずにいた。

内心の迷いを押し殺すように、長曾我部は更に戦意を高めていく。

「行くぜ野郎どもー！！」

「アニキ——！！」

長曾我部元親は、読みを誤った。

彼が今進もうとしている道は、確かに敵の数が最も少ない。その点については、彼の読みは正しい。だが、彼は思い至らなかった。兵の数が少ないということは、その数を補えるだけの力を持つ、超級の武将がいるということ。

その者は、この時代、日本で最も強い武将だった。

「！！」

目の前に、巨星が落ちて来る。大地を震わす衝撃に、舞い上がる粉塵。そんな物理的な要素だけでなく、全身が総毛立つ“圧”も伝わって来る。元親は、思わず唾を飲み込む。あれだけ声を荒げていた部下達も、眼前の存在を前にして、凧の訪れのように静まっていた。

天を突き刺す雄々しき双角。銅の光沢を放つ、堅牢な装甲。からくり兵器のような駆動音を響かせ、それは立ち上がる。

元親は、引き攣った笑顔のままで、その名を呟いた。

「本多……忠勝……！」

数万単位の軍勢が、正面からぶつかり合う。剣戟と銃声が、咆哮と悲鳴が、歩兵と騎兵の足音が絡み合い、壮大な交響曲を奏でる。

瞬きの間に、人が死ぬ。流れる血が大地を赤く染め、屍の山がその上を埋めて行く。

その全てが、ごくごくありふれた、戦場の日常だった。

「生は不平なれど、断末魔は公平よな」

横で流れて行く戦場の風景を見ながら、大谷吉継は呟く。

積み重ねてきた人生も、記憶も、感情も、信念も、忠義も、矜持も、野心も、欲望も、家名も、血統も、人と人を分かち、個を決定する総てが、死んだ瞬間無に帰す。

死こそは、揺るぎなき真実の平等。戦場は、その真実を誰の下にも容赦なく突きつける。

（素晴らしい。これぞわれの望んだ世界よ）

密かに口許を綻ばせる刑部。三成は、余所見などせず、ただ前だけを据えている。徳川家康へ、仇へと続く道を。

「三成、右腕は痛むか？」

三成の右腕は、肘の辺りで凍結し、赤黒く腫れていた。北条氏政が最期に放った奥義は、三成も知覚せぬ内に、その腕を凍結させていたのだ。

「北条め、やってくれる」

死に逝く者の、最後の意地か。不思議と嘲笑う気になれなかった。思えば、われも似たような気持ちで戦ってきた。まだ死にたくない。不幸のどん底のまま、終わりにたくない。その一念で、われは今日まで生きてきたのだ。

「問題ない。痛みなどで、私は止まらん。それに……私がかつて受けた傷に比べれば、この程度掠り傷にすらならん!!」
「であるな。ぬしは一生癒えぬ傷を、その心に負った。太閤の死によつて」

あの雨の日のことを思い出したのか、三成の目が、悲嘆と苦悶に歪む。

「戻りたい……泥雨降りしきるあの頃に……!!」
「ぬしの気持ちはよう分かる。だが無理をすれば、千切れるぞ」
「腕が千切れれば脚で! 脚が折れればこの牙で! 家康の喉笛を食い破ってくれる!!」

既に、この戦が終わった後のことなど、微塵も頭に無いのだろう。彼の頭の中は、家康への殺意で隈なく塗り潰されている。悲しみも苦しみも、癒えぬ心の傷も、全ては復讐の燃料となる。

その時……

H e l l D r a g o n !

刑部は、咄嗟に御輿を急停止させる。彼の眼前を、青く輝く雷の龍が舞い降りる。

爆砕と粉塵。濛々と立ちこめる煙の向こうに、帯電する刀を構えた男の姿が目に入った。

青い陣羽織に、三日月の乗った黒い兜。腰には竜の爪のように、六本の刀が差してあった。その傍には、茶色い羽織を着た男が佇んでいる。

「It has been a long time! 石田三成」

男の言葉には、異国の言語が混じっていた。

——天道突き——

光の拳が、照日大鏡を粉碎する。十分に力を溜めて放たれた拳の衝撃は、戦車を横転させる。そこに徳川の兵士が群がり、とどめを刺す。

家康は、友軍を助けながら、敵軍左翼の小早川秀秋の下へと向か

っていた。結果的に、伊達政宗に三成の相手を押し付けることになつてしまった。政宗としては、それは願ったり叶ったりであろうが。

「伊達、片倉、死ぬなよ……」

二人の命は勿論心配であるが、胸のしこりの理由は他にある。秀吉を殺した時と同様、またしても三成から遠ざかっていることが、家康の心を軋ませる。

しかし、両軍が拮抗しているこの状況で、小早川軍を寝返らせることが出来れば、勝敗の天秤は一気にこちらに傾く。総大将としては、軍全体のことを考えざるを得なかった。

「家康様！ 見えました！ 小早川の旗です！」

家康の眼にも、小早川軍の旗は映っていた。馬を止め、大音声で呼び掛ける。

「金吾！ ワシだ！ 家康だ！ もう恐れるものは何もない！ こちらに来い！！」

しかし、家康の呼び掛けに対し、向こうからは何の反応も無かった。何か様子がおかしい。小早川の兵士達は、皆虚ろな眼で下を見つめ、何かをぶつぶつと呟いている。家康の存在など、意識の中に無いように。

やがて、兵士達を掻き分け、一人の男が姿を現す。

蒼天からは、今も太陽が燦然と照り付けているのに、辺りに暗雲が立ち込めたような錯覚を覚えた。

それほどまでに、その男の存在感は異質で、寒々としたものを感じさせた。

「随分と大きくなりましたね、竹千代^{たけちよ}」

男は覆面の下で微笑むと、懐かしさを込めて、家康の幼名を呼んだ。

「お前……」

息を飲む家康。男は腰を折り、深々と一礼した。

「お久しぶりです。いえ、“初めまして”と言つべきでしょうか……
…うふふふ」

男は、両手に持った大鎌を左右に広げる。その刃には、つい先程人を斬つたものと思しき鮮血が付着していた。

長く白い髪、妖しい微笑、禍々しき凶器……その尽くが、家康の知る“あの男”と合致する。

「私は天海！ 誰よりも命の価値を知る者！ うふふふふふ……
ふはははははははは……」

「いよいよここまで来たな、小十郎」

「は、後は決着をつけるのみ。後は駆け抜けてくだされ、政宗様！」

「ここでやや時を遡る……」

伊達政宗と片倉小十郎は、本陣に強襲して来るであろう石田三成を迎え撃つべく、手勢を率いて馬を走らせていた。

二人の脳裏に、あの小田原での苦い敗戦の記憶が蘇る。あの日、石田三成に大勢の部下が殺され、政宗自身も完敗を喫した。奥州は著しく弱体化し、再び立て直すまでは、長い時間を要した。

「……随分遠回りしちまった気もするが、ようやく奴と戦える。負けの清算は、きっちり済まさねえとな」

低く抑えた声に戦意が宿る。だが、一時期のように、復讐の殺意に濁ってはいない。

しかし、長年仕えているから分かる。主には、別に引つ掛かることがあろうだ。小十郎は、あえてそれを口にする。

「……やはり、真田は参戦しなかったようすな」

「ああ……」

近頃、織田軍の残党が加賀、甲斐、越後にて、領土を荒らし回っていると言う。拠点を持たず、盗賊のように散発的に現れる敵に対し、三国は自国の守りを第一にせざるをえず、とても関ヶ原に來れる状況ではなかった。

前田や上杉はともかく、武田信玄不在の甲斐は、厳しい戦いを強いられていると聞く。織田残党軍も、その規模は残党と呼べるようなものではなく、どこか他の勢力が援助しているのでは、という疑いもある。

「徳川は、その争いを平定した上で、西との決戦に臨むつもりですが、石田があれば早くに九州を落とすとは、予想していません」

結果的に、この関ヶ原は日本中の大名が集まる、というわけには行かなかった。西と東、双方の戦力は拮抗し、どちらにとっても厳しい戦いになるだろう。小十郎はその裏に何らかの作為を感じるが、それこそ今気にするべきことではない。

「どつちにしろ、この戦に勝った方が天下の覇権を握る……俺が真田と戦う理由も、無くなるってことだな。

フツ、皆が待ち望んだ泰平の世がやって来るんだ。結構なことじゃねえか」

そう言う政宗の口調には、一抹の寂しさが混じっていた。

政宗にとって、真田幸村は憎しみや怒り、理屈や利害を超越した宿敵同士なのだろう。どうせなら、天下分け目の大舞台で決着をつけたいという思いがあつたはずだ。

「心中お察し致します、政宗様。ですが……」

「Don't worry, 小十郎。オレは、今戦うべき敵を見失うほどfoolじゃねえ」

未練を振り払うように、微笑する政宗。彼もまた、小十郎とは長い付き合いだ。だから分かつていた。小十郎が、自分の未練を振り払わせるために、あえて真田の話を出したということ。

小十郎は、己の心配は杞憂だったことに微笑しつつ、自分の意を汲み取られたことに喜ぶのだった。

（このお方に仕えることが出来て、本当によかった）

小田原の敗戦の後、伊達家は存続すら危ぶまれる程の、苦難の連続だった。

伊達家は、少ない兵力で乱れた奥州を平定しつつ、最上を初めと

する隣国の侵攻にも備えなければならなかった。次々に降り懸かる難題に対し、小十郎は苦しいと思ったことは一度もない。

しかし、敗北の自責と憎悪に囚われ、思うように飛翔できない主君を見る時だけは、後悔の念に襲われるのだった。

二度とあのお方に、後悔はさせない。俺自身も、だ。その誓いを胸に、今日まで小十郎は戦って来た。

（政宗様、もはや貴方を縛る鎖は何もない。思う存分、天へとお昇りくだされ！）

そして今、小十郎は、政宗の背中越しに、石田三成と大谷吉継の姿を見ている。政宗は、一度負けた相手に向けるものとは思えぬ、不敵な笑みを浮かべていた。

「ほう、これはこれは。そうよな、ぬしらも東軍に加わっておったか」

「刑部、何だこれは」

まるで初対面の相手に対するように、三成は言う。その声に怒りが混じっているのは、仇敵への道行きを邪魔されたからだろう。

「小田原でぬしに負けた蛇よ。覚えておらぬのか？」

「……あのような男、記憶に無い」

きつぱりと断言する三成。

「……というわけだ。残念だったなア伊達の。勇んで仇討ちに來た

のであろうが、三成はぬしのことなど覚えておらぬ。

大方、埃でも払うような感覚だったのであろう。ぬしも、ぬしの手下を殺したこともなア」

あからさまな挑発だ。だが、以前の政宗ならば、即座に激昂して切り掛かっていてもおかしくない。小十郎自身が、冷静さを失わぬよう、自制しているぐらいだ。だが、政宗は怒りだすこともなく、ただ乾いた笑みを浮かべて見せた。

「オレは負けた。部下も守り切れなかった。どう足掻いても、過去は動かせねエ。ここでお前らをやったところで、あいつらが戻って来るわけじゃねえしな」

「ならば、何もせず黙って地べたを這いずり回っておれ。さすれば、もちと長生き出来たかもしれぬぞ」

「……一度地に落ちてみて、はつきり分かった。オレは竜だ。竜にしかねない。諦めて膝を突くことも、負けを負けのままにしておくことも、オレには出来なかった。だから、ここに来た。OK?」

そう言っ、刀を突き付ける。

どれだけ己の無力に打ちのめされようと、胸の内で息づく竜は、決して消えなかった。今も、戦え、刀を取れ、駆け上がれと吼えている。復讐でも、贖罪でもない。ただ、己の生き様を貫き通すために戦う。それが、伊達政宗が見出だした答えだった。

大谷吉継の顔が、不機嫌に歪む。九州で屠ったあの男と、目の前の男が重なった。

（ぬしもか。ぬしも、不幸の底にありながら、天を目指して足掻くのか。何故憎まぬ。何故呪わぬ。何故われにならぬのだ!）

心の内で、政宗への呪詛を紡ぐ。許せぬ。ぬしもまた、永劫目覚めぬ閻底へと沈めてやろうぞ。

「HA！　どいうワケか、アンタの方が乗り気のような」

政宗は、刑部の溢れ出る殺意を感じ取っていた。

「政宗様、大谷吉継は、私が」

「ああ、任せるぜ。小十郎」

政宗は、三成へと眼を遣る。

「アンタと戦う理由は他にもある。小田原の時もそうだったが、オレは、秀吉の……あの大猿のやり方が気に入らないでね。アンタを勝たせちまったら、世の中はまた逆戻りだ。オレはそれを、許すわけにはいかねエ」

明らかに、挑発の意図を込めて放った台詞だ。

「何……」と、問い返すこともなかった。三成は一足飛びに政宗の間に合いに入り、刹那の間に抜刀する。

そう来ることを予期していた政宗は、両手で持った刀を水平に構え、三成の太刀を受け止める。

刃に込めたものと同等の殺意を、瞳から叩き付ける三成。

「ほう、ようやくオレを見たな」

「許さぬ、だと？　それはこちらの台詞だ。名も無く、力も無い輩が秀吉様を侮辱する……そんなことが許されてなるものか！　その暴言の罪、斬刑に値する！」

至近距離から、三成の凄まじい殺気と憎悪が伝わって来る。それを肌で感じつつ、政宗は猛獣を思わせる、獰猛な笑みを浮かべた。

「OK！ 今アンタが戦うべきは徳川じゃねえ、このオレだ！！
さあ、烈しいPartyにしようぜ！」

政宗が力を込めると、刀から青い電撃が迸る。瞬間的に高められた力が、三成の刃を弾き返す。政宗は、その隙に腰の残り五本の刀に手を当て、電光と共に一気に引き抜く。

政宗は左右の手の、指と指の間に、三本ずつ刀を挟み、合計六本の刀を左右に構える。これぞ、伊達政宗の六爪流^{ろくそうじゅう}。全力で戦うに値する相手のみに見せる構えだ。

「秀吉様……しばしお待ちを。まずは、貴方様を侮辱した身の程知らずを斬滅致します……！」

暗い眩きに宿るは、狂信と憎悪。対する三成は刀一本。だが、そこに濃縮された殺意は、政宗の覇気に引けを取るものではなかった。

再度激突する、蒼と紫の閃光――

第五章 妄執輪廻（二）（後書き）

ひとまず最初の対戦カード決定。
意外に思ってくださいれば幸いです。

しかし政宗は難しい……英語以外にこれといったキャラ立てが無い気がする。

「天下を平和に」は家康の、「仲間思い」は元親のアイデンティティだし。

その二つの属性に「野心」が加わる感じかなーと無理くり解釈してますが……

そのせいか、三つのどれを支柱として描いていけばいいのかよくわからない。

その辺は謙信や信玄も同じだったり。

逆に三成、刑部、毛利、天海、家康、小十郎などは
行動原理が何なのかズバッと決まっっていて実に書きやすいです。

第五章 妄執輪廻（三）

「たあああああつ！！」

雷電と共に、立花宗茂の雷切が虚空を薙ぐ。例え刃を避けようとも、纏った紫電が敵を焼く。

孫市は、雷にも触れぬよう、余裕を持って後背に跳躍する。銃弾を叩き込むのを忘れない。だが、宗茂は雷切を一振りし、正面に雷の幕を生じさせ、弾丸を炭屑に変えた。

距離を取りながら、空薬莖を排出し、弾丸を再装填する。この間一秒とかからない。

だが、その間にも宗茂は、間合いを詰めてくる。それでも、動きの速さならば、孫市の方が上だ。今度は右へと移動し、側面から全弾発砲。宗茂の大柄な体躯では、俊敏とまではいかず、動いた後には幾許かの隙が見える。それでも、刃を振るう腕は、雷よりも速い。雷の波濤が、燃える弾丸を浚っていった。

交戦開始から三分。それだけの間に、一体何発の銃弾を消費したのだろう。未だ、宗茂に傷らしい傷を与えられてはいない。流石に九州最強と呼ばれるだけのことはある。微塵の隙間もない、絶望で出来た鉄壁だ。

だが、それも読み通り。彼女もまた罠に過ぎない。視線だけで合図を確認した他の雑賀衆が、大筒を宗茂の無防備な背中に発射する。

「むう……！！」

迫る弾丸は二つ。見ずとも音と火薬の臭い、その二つは見えていた。

振り返り様に雷切を振り、砲弾の一発を焼却する。だが、もう一発は雷の網をすり抜け、宗茂の体に着弾する。さしもの宗茂も、これには堪えたらしく、大きくよろめく。

その隙に、孫市は“衝弾クロツグミ”と“連弾サンコウチヨウ”、破壊力重視の双銃を撃つ。それだけではない。周囲で戦っていた雑賀衆も、一斉に銃口を宗茂に向ける。目立つ合図があったわけではない。ただ、頭領の行動から、自分達が何をすべきか、各々の頭で判断し、結果、全員が同じ答えを出したのだ。

予め打ち合わせただけの、付け焼き刃の連携ではこうはいかない。各々が、常に全体の流れを念頭に置いて行動しているからこそ出来るのだ。雑賀衆の高度な連携戦術は、集団を一個の生き物となす。

刻一刻と変転する戦局に対応するには、個の細やかな判断が重要となる。もちろん、全員が自由な判断の下動いては、統率など取れない。

だから、彼らはあえて型を捨てた。その代わりに、全員が、全員のことを考えて動くよう、調練したのだ。無論易々と出来ることではない。それを可能としたのは、集団への帰属意識、雑賀衆の一員であることへの強い誇りだ。

情にも金にも靡かず、ただ戦場における、群の強さを追究する。その、善悪に流されぬ在り方こそ、彼らの誇る“生き様”であり、高度な集団戦を実現する、柱となる思想だった。

我らは個にして群。雑賀衆の一人一人は、鳥の羽根の一枚一枚だ。頭領、雑賀孫市の意志に倣い、翼は自在に羽ばたくのだ。

数千匹の鴉が一斉に飛び立ったかのように、銃声が断続的に鳴り響く。

全包围からの一斉射撃。降り注ぐ砲火の雨。逃げ場はない。

そして……

孫市は、立花が雷神と称される理由を知ることになる。

宗茂は雷切の切っ先を、地面に押し付ける。両の脚を後ろに跳ね上げた瞬間、宗茂は稲妻となって走り出した。

脚が地面から離れれば、体を支える部位が脚から雷切へと移る。

高速回転する刃と雷は、地面を削る車輪となる。雷切の回転は、宗茂の巨体を押し出し、爆発的な推進力を生み出す。

それはまさに雷速。急加速した宗茂は、弾丸の雨をくぐり抜け、正面にいた雑賀衆へと突っ込む。銃弾を上回る速さには、さしもの彼らも対応出来ず、大地を疾走する雷の餌食となった。爆走する宗茂は、急旋回し、触れた敵を全て炭屑と帰した。

これは、宗茂の父、立花道雪が、自らの不自由な脚を補うために編み出した“剣技”だ。道雪はこの技で、戦場を稲妻の如く駆け回り、雷神として恐れられたという。その凄まじいばかりの技の冴えは、宗茂にも確かに受け継がれている。

孫市の顔に曇りが差す。数で上回る敵であっても、戦術と兵器の優位を活かせば、幾らでも戦いようはある。しかし、実のところ最も対処に困る相手は、あの立花宗茂のような、単騎で絶大な力を持つ武将なのだ。ああいう手合いには、搦手が通じない。

いかに予測を立て、罠を張り、数で押し切ろうとしても、真の勇将の力は、その総てを粉碎する。

孫市の脳裏に、苦い記憶が蘇る。

かつて、尾張の魔王によって、雑賀衆は壊滅させられた。先代の雑賀孫市が命を落としたのも、その時だ。

魔王は、雑賀衆と同じ火器と、数倍の兵力、自身の圧倒的な力によって、雑賀衆を粉碎した。魔王の軍勢は、その名から受ける印象とは異なり、細部に至るまで統率された、死をも恐れぬ羅刹の軍団だ。魔王は一辺の油断も容赦もなく、冷徹な戦略の下、雑賀衆を討ち滅ぼした。

皮肉にも、銃火器の優位性と、集団戦における戦術の重要性、雑賀衆が掲げて来た二つの思想は、その壊滅を持って証明されることになる。

あの日の悪夢は、三代目まうごちを初めとする雑賀衆全員の胸に、深く刻まれている。

雑賀衆は、魔王と言う暴嵐の前に、翼を折られ、地に落ちた。

そして……今。この関ヶ原の決戦は、あの日と同じか、それ以上の嵐となるだろう。東西で生じた二つの渦が、総てを巻き込み、ぶつかり合っているのだ。

間違いなく、凄まじい数の犠牲が出る。雑賀衆も、その列に加わらぬとも限らない。雑賀衆は、今また存亡の危機に立たされているのだ。

力及ばぬ時は、あの雷神一人に、雑賀衆は引き裂かれるだろう。あの男は、それだけの力は持っている。頭領である己の判断の過ちが、同胞を死なせ、一族を全滅に追いやる。重い責任が、孫市の肩にのしかかる。

しかし、その重みは、自分で選んだものだ。押し付けられたのではない、自分の意志で、受け継ぐことを選択した。己で選んだ道だからこそ、誇りが生まれる。その誇りが、確かな芯となり、支えとなる。

西軍は、立花宗茂は、確かに強大な壁だ。だが、それを乗り越えた時にこそ、雑賀衆の強さは、生き様は、間違っていなかったと証明される。

雑賀衆にとっては、徳川と石田、どちらが勝とうと興味はない。それでも雑賀は、東軍に付いた。自分達の意志で選んだのだ。彼女らは、その選択に、自由にこそ誇りを抱く。だからこそ、絶対に退くことは出来ない。

「何にも恥じぬ生き様を！」

孫市は、宗茂の電速の突進を、軌道を事前に読むことでかわしつつ、身につけていた銃火器一式を、総て宙空へと放り投げる。落下して来た銃器を手に取り、弾薬が尽きるまで撃ち続ける。尽きればまた次の銃を、尽きればまた次の銃を――

無制限に乱射された銃弾は、弾幕の津波となつて、戦場を覆い尽くす。

雷速で駆動する今の宗茂に、銃弾などは軽く避けられてしまう。また、当たったとしても、雷の幕で消し飛ばされるだけだ。

点や線の銃撃では、宗茂を捕らえられない。ならば、“面”ならばどうか？

いかに電速で動けるとはいえ、移動範囲総てを弾幕で覆い尽くせば、避けることは不可能――！

「……！」

天空より降り注ぐ膨大な銃弾に、宗茂は叩き伏せられる。

空をびつしりと覆う銃弾は、雷の防御網を摺り抜け、宗茂の体に突き刺さる。頑強な鎧に輝が入った。周囲の雑賀衆は、頭領が銃を投げた時点で、金属製の盾を構えている。これは、銃撃から身を守るばかりか、弾丸を弾く効果もある。盾を構えた雑賀衆に包囲され

た宗茂は、降り注ぐ銃弾のみならず、無数の跳弾によっても肉体を削られていた。そして、この隙を、雑賀の頭領が見逃すことなどありえない。

今孫市が肩に担いでいるのは、長い四角柱に、銃把の付属した大型の銃器だ。その先端、敵に向けた面には、四つの発射口が覗いている。

孫市は、雑賀衆が所持する最大の火器“狙弾力ワセミ”の引き金を引く。

爆音と同時に、発射口から四つの弾頭が煙を噴いて飛ぶ。反動で、孫市の足がやや後ろに下がった。

一方雑賀衆も、手榴弾“火弾ヒレンジャク”を四方八方から投げつける。

全弾命中。爆発に爆発が重なり合い、立花宗茂は爆炎地獄へと叩き込まれる。

「ぬ、おおおおおおつ！！」

咆哮と共に猛る雷電が、燃え盛る炎を吹き飛ばす。それでも、無傷というわけには行かず、鎧は所々破損し、火傷の数は数え切れず、撃たれた痕からは血が流れている。

強い。久方ぶりに味わう苦痛を噛み締めながら、宗茂は、孫市と雑賀衆の強さに、素直に感嘆していた。

南蛮から日の本にもたらされた銃なる兵器は、この国の戦を大きく変えた。だが、武人としての極みに達していた宗茂にとっては、ただ、少し速いだけの飛び道具に過ぎず、その真価を理解出来なかった。

少なくとも自分に限れば、撃ち返すなり、避けるなり、幾らでも

対処の仕様はある。

そんなものより、島津義弘のような超一流の武人の振るう剣の方が、遙かに恐ろしかった。だが……

（これが、銃の痛みか……）

血が流れる銃創を腕で抑える。立花宗茂は、生まれて初めて、撃たれる痛みを知ったのだ。

単調に銃を撃つだけではない。常にこちらの死角を狙う、正確にして不規則な銃撃。火繩銃しか知らぬ宗茂が、見たこともないような火器の数々。どちらも驚嘆に足るものだ。

そして何より、集団戦の強さ。多数の兵が互いの弱みを補い合い、完璧なる統率の下、一系乱れず動く様は、群れにして一個の生き物のようだ。いかにして、彼女はかような結束を成し遂げたのだろうか。

宗茂の知るそれとは大きく異なるとはいえ、これも理想的な君臣の関係と言えるのではないか。ザビー教に侵食される大友軍内で、孤立しがちな宗茂にとっては、正直、羨ましささえ覚える。

旧き時代の武士を駆逐しつつある銃の使い手達が、理想的とも言える結束を実現し、いつまでも武士の生き方にこだわる己が、主との距離を広げていく。これは何と言う皮肉だろうか。

いや……

「立花様ーっ！」

「御無事でございますかーっ！」

爆発を目にした大友の武将達が、手勢を率いて援軍に駆け付ける。孫市の周囲にいた雑賀衆に、強襲をかける。宗茂の顔に微笑みが浮かぶ。

「……皆の者、かたじけない！」

思わず涙が溢れそうになる。武士の魂は未だ消えていない。こんな愚直な己を慕ってくれる者達があんなにいる。その事実が、宗茂の闘志を奮い起こす。

横目で、己が主の様子を見る。宗麟の乗る駆動国崩しは、毛利の旭軍天君のすぐ隣にあり、戦況を眺めている。ここから声は聞こえないが、彼は彼なりに、部下の身を案じていると思いたい。いや、そうでなくとも構わない。臣は主に何かを求めてはならないのだ。

澄んだ心で、主への忠を貫き通す。それが己の選んだ生き様だ。

再装填を完了した孫市が、こちらに銃口を向ける。

見れば、彼女も雷による火傷や裂傷を所々に負っている。負傷の度合いは、宗茂よりも小さいとはいえ、異常な耐久度を誇る宗茂に比べて華奢な孫市は、雷切の刃を一撃でもまともに喰らえば即死。傷の度合いで、有利不利を決定づけることは出来ない。

そして、大友軍が参戦した今、孫市は雑賀衆の援護を受けることも出来ないだろう。

これからは、一人で立花宗茂に立ち向かわねばならない。

だが、孫市に恐れも気負いもない。死を恐れず、さりとて全身全霊で生きあがく。それが八咫鴉やたがらすの生き様だ。

契約と忠義、生き様と武士の魂。互いに、これは己自身のための戦ではない。それでいて彼らは、他の誰かの為ではなく、ただ己の誇りを貫くために戦うのだ。

無数の銃口が火を噴き、雷神は電光と化して戦場を翔ける。

人はその男を、戦国最強と呼ぶ。

徳川第一の家臣、いかなる技や武器を持っても、傷一つ付けることのできない、生ける伝説。よりによって、最も出会ってはならない相手と出くわしてしまうとは。

「……………」

本多忠勝は、口をきつく結んだまま、円錐形の機巧槍を構える。

忠勝の巨体と同等の高さの大槍で、内部の機巧により槍身が高速回転する。全身隈なく覆う鎧の背部が展開し、内蔵された推進筒が火を噴く。

規格外の巨体と重量を持つ忠勝であるが、実のところ、彼が戦国最強である真の理由は、巨体に似合わぬ驚異的な加速にあるのかもしれない。

岩塊を砕き、城壁をたやすく貫通する機巧槍に、忠勝の重量と突進が加われば、その破壊力は計り知れない。砕けぬものなど、この世に存在しないだろう。

彼と初めて相対した者は、大半がその威容に圧倒され、萎縮する。その恐怖に耐え、慎重に対処しようとすれば、その凄まじい加速を理解する暇もなく挽き肉にされる。

長曾我部元親は、家康と共に戦っていた中で、本多忠勝の強さを嫌というほど目の当たりにしてきた。だから、今回も最善の判断を取る事が出来た。

「うおおおおおおおおおッ！！！」

碇槍に炎を纏わせ、全身全霊で技を繰り出す。雷の螺旋と炎の颯風が正面からぶつかり合う。何とか競り合っていたが、正面のやり合いなら重量で勝る側が勝つのは道理。吹き飛ばされ、元親の体が宙に舞う。

否、これはわざと飛翔したのだ。突進する忠勝は、暁丸にぶつかり止まる。元親は、空中で体勢を立て直し、槍の穂先に再度炎を纏わせる。忠勝の無防備な背中へと、渾身の一撃を叩き込んだ。

「……………！？」

「やった……」と、心中で呟く暇もなかった。忠勝は槍を構えたまま、その場で急速回転する。爪先まで装甲で覆われた両足を軸とした、体全体による回転。技でも何でもない、単純極まりない攻撃であるが、あの本多忠勝がやれば、それだけで怒れる暴嵐が生まれる。

それは人間の小賢しき浅知恵など、力だけで捻り潰す、巨神の鉄槌だった。長曾我部も、暁丸の巨体ですら、後方に吹き飛ばされる。元親が与えた背中への一撃も、決定打には至らない。全体を分厚い装甲で覆う忠勝に、弱点など存在しないのだ。誰も勝てない、だからこそ、戦国最強。その言葉の意味を、人々は立ち会った時に初めて理解できるのだろう。

だが、長曾我部元親とて、弱肉強食の摂理に従い、このまま敗れる終わりなど認めない。本多忠勝が強いことなど百も承知だ。徳川家康に抗うと決めた以上、彼と戦う覚悟も出来ていた。

「飛べえ！　暁丸！！！」

遙か上空へと跳躍する暁丸。忠勝は、からくり兵器は捨て置き、まずは元親に狙いを定める。再度、超高密度の突風と化す。元親は、前転で突進をかわす。続く回転攻撃も、間合いを見切って紙一重のところで回避する。

勝機は、この一瞬。

いかに忠勝が脅威の加速を誇ろうとも、その巨体ゆえ、動作はどついても大振りになる。機巧槍を全力で振り回した後は、僅かな硬直が出来る。

それは、何度か忠勝と戦場を共にし、彼の戦い方を見てきた元親だからこそ分かる、刹那の隙だった。

「大鬼裁きは優しくないぜえ!!」

出し惜しみはしない。碇槍に極大の猛火を纏わせ、忠勝にぶつける。さしもの戦国最強も、これには怯む。

「……………!!」
「撃てえーっ!!」

間髪入れず、上空の暁丸からの支援砲撃。

大筒十数発分の火薬を詰めた特製砲弾の直撃を喰らってしまう忠勝。彼を中心に、爆炎が包み込む。そして、これで終わりではない。動きの止まった忠勝に向けて、暁丸の巨体が落下する。忠勝は、己をも上回る暁丸の巨体に押し潰された。

火炎、砲撃、圧殺の三段攻撃が見事に決まった。だが、長曾我部元親は油断しない。この程度で倒れるぐらいなら、戦国最強と呼ばれはしない。更なる追撃を加えようと、暁丸を下がらせた時……元

親の頭の中で、最大級の虫の知らせが鳴った。

鎧の各部から電光を発しながら、立ち上がる本多忠勝。熟練の船乗りなら誰でも分かる、大時化の予兆のようなものを、元親は全身で感じ取っている。

どうやら、向こうも出し惜しみをしないようだ。忠勝の背部から環を描いた八つの円盤が展開する。背中の推進筒が火を吹き、鋼の巨体が宙に浮く。

機巧槍を体の中心に沿って構える。忠勝の槍と全身からは、火だるまになったように、絶えず雷がほとばしる。八つの円盤は、電撃増幅装置だ。忠勝の放つ雷を、瞬間的に増幅、広範囲に雷を降らせる――

「！ 野郎ども、逃げろお——っ！！」

元親の必死の叫びは、落雷の轟音に掻き消された。

槍から天に放たれ、空中で四散、数条の雷霆らいていが大地に降り注ぐ。

天に轟き、地を穿ち、そして人を焦がし尽くす。

それはまさに、天の怒りに等しかった。

忠勝の力とて無限ではない。あまりの出力に、電撃発生装置が過負荷で強制停止する。

時間にて、僅か五秒足らず。それでも、忠勝の放った雷撃は、凄まじい惨状を描き出していた。

大地は引き裂かれ、西軍の兵士達が、黒焦げになって倒れている。その中には、長曾我部軍の兵士も混じっていた。

その惨状に、四国の悪夢が蘇る。

「う、あ……」

元親もまた、雷で背中を焼かれ、惨たらしい傷を晒していた。だが、心の傷はそれ以上に深かった。

「俺は……俺は、また……」

守れなかった。死なせてしまった。

「う、うおおおおおおおおおおつ！！！！」

慟哭と共に、忠勝に立ち向かう元親。今の彼は、誰と戦っているのかさえ忘れていた。溢れる激情に突き動かされ、動きの止まった忠勝に、極大の炎弾を叩き込んだ。

誇りと生き様、忠義と信念、親愛と絆、憎悪と殺意。

数多の感情を巻き込んで、戦場の混沌は、更に激しく渦を巻く。

第五章 妄執輪廻（四）

「天海様……」

「慈悲深き天海様……」

「私達は貴方様に救われた」

「優しい御言葉に救われた」

「生き方を見失っていた我々に、道を示して下さいました」

「天海様がおられなければ、私達は生きていけない」

「あの御方のおっしゃることは総て正しい」

「貴方様のために」

「天海様のために」

「慈悲を」

「慈悲を」

「慈悲を……！」

小早川の兵士達は、虚ろな目を宙に向け、呪詛のように何事かを呟きながら、徳川の兵に襲い掛かる。

どれだけ傷を負っても、まるで痛みを感じぬように、死ぬまでは動き続ける。爆弾を背負って突撃してくる、自爆覚悟の兵も多くなる。

兵の数も練度も徳川軍の方がずっと上だが、小早川軍の命を惜しまぬ戦いぶりに、思わぬ苦戦を強いられていた。

そんな小早川軍を見ながら、家康は思う。“あの男”の率いていた軍も、彼らと同じような目をしていたと。

冷酷で残忍、快楽のために人間を惨殺する彼は、到底人の上に立てる器ではなかった。にも関わらず、あの男の周囲には多くの兵が集まっていた。

恐らく彼には、人心を掌握する才能があったのだろう。

とかく異常な性格ばかりが際立つ男だったが、思い返せば驚くほど理知的な面もあった。そうでなければ、一時とはいえあの魔王に重用され、一軍の主となることなど出来まい。

魔王の下で共に戦っていた頃、無辜の民に対する虐殺は不快でたまらなかったが、時折り見せる優れた戦術眼や、効率的な軍の動かし方には目を見張るものがあった。

それに、あの男は常に人を苦しめることだけを考えていた。それは裏を返せば、人の心理に深く精通しているということだ。その才覚は、人の心を掴むのに発揮されていたのかもしれない。

いずれにせよ推測だ。あの男の心の深淵はあまりに深すぎて、当時の家康の理解を遥かに越えていた。

（だから、ワシはお前が恐ろしかった。ある意味、信長公よりも……）

信長もまた、魔王と恐れられるほどの冷酷さと凶猛な精神の持ち主で、比叡山延暦寺の焼き打ちなどの常軌を逸した蛮行で日本全土を震撼させたが、あくまでそれは覇業の過程で生じたもの。どれだけ残酷で容赦のない所業であろうと、邪魔物を消し去るという確かな目的があった。

一方あの男の殺戮は、まるで無軌道だ。魔王の下で殺戮に明け暮れたと思えば、天下統一まで後一步というところで、その主君を裏切り殺してしまう。

その恐れを知らぬ狂気には、単に魔王の後釜を狙うといったような、俗な考えとは到底思えぬものがあった。

当時は、あの魔王さえ殺してしまったあの男に、底知れぬ戦慄を覚えたものだ。

だが、魔王が斃れてから間もなく、あの男も歴史から姿を消した。そう、消えたのだ……

「うふふふ……」

踊るように、両の大鎌を振るう天海。その切っ先を、家康は金色の手甲で受け止める。返しの拳を、天海はやや大袈裟に、背中を反らしてかわす。

「おお、怖い怖い。今は、当たったら死んでいましたよ。しばらく会わない内に、随分と遅しくなられたようで」

「……金吾をどうした？」

「ああ、金吾さんですか！　うふふ……中々、愛らしい声で泣かれていますね……」

「くっ……」

尚も、左の拳を連打する家康。天海は、時に身をかわし、時に大鎌を盾として、拳を受け流していく。初撃から目にも留まらぬ連撃に繋げ、敵を圧倒するのが家康の戦い方だが、それも最初の一撃が当たらねば意味を成さない。この天海は、家康によって相性の悪い相手と言える。それは、技術や戦法に留まるものではなく……

「それより、見て下さいよ竹千代。この血の匂い、腐肉の香り。今もあちこちで、人が死んでいきますよ」

死をも恐れぬ小早川軍、否、天海軍の猛攻に、徳川軍にも少なからず被害が出ていた。

「くっ……みんな……」

戦をすれば、敵味方問わず必ず死者が出る。わかっているても、そ

の事実には家康の胸は締め付けられる。まして……

「もちろん、ここだけではありません。今もこの関ヶ原のありとあらゆる場所で、人が死んでいるはずです。そう、竹千代。貴方と凶王が起こした戦によってね！」

家康は、咄嗟に天道突きを撃つ。だが、これは失敗だった。完全に意を読まれている。

進路上の物体を薙ぎ払う拳の波動を、天海は余裕を持って回避する。振るわれた刃が、家康の肩を斬り裂いていた。痛みは大したことではない。だが、問題なのは心の方だ。

「是非知りたいと思ひましてね。何千何万もの兵を死なせる戦、それを起こした人の気持ちは、一体どんなものなのか。辛いのか、悲しいのか、それとも……嬉しいのでしょうか？」

そんなことはない！ 反駁するように、拳を放つ家康。

天海は、紙一重でそれをかわすと、嘲弄の笑みと共に大鎌を薙いだ。

「竹千代、正直、私は嬉しく思っていますよ。貴方が、私が期待した通りに成長してくれたことを」

天海は、これが初対面ではないかのように、ずっと前から家康を知っているように、話す。

「信長公の下におられた時の貴方は、か弱くて何も知らない子供でした。ですが、夢だけは大きかった。知っていますよ。貴方は魔王に面従しながらも、天下を奪う機会をずっと窺っておられた。」

貴方は、私などと違って実に慎重だ。謀反を起こしても、信長公に勝てぬことなど分かっていた。ですから、機会が訪れるまで、ずっと信長公に従っていたのです。秀吉様の時も同じでしょう？
勝てぬと判断すれば決して動かず、勝機を見出せば、躊躇うことなくその手を下す。そして貴方は、ついに天下を掌握なされた。御見事です竹千代。貴方には確かに、天下人たる才能がある！人を追い落とす才能もねえ」

家康の背中に、微かな戦慄が走る。よもや、あの頃から、そこまで自分のことを見抜かれていたとは。

「絆の力で天下を統べる。素晴らしいことです。貴方なら、きっと実現できますよ。目的のためには手段を選ばない、貴方ならね？」

覆面の下でほくそ笑む天海。

「その絆とやらを紡ぐために、貴方は多くの絆を断ち切って来たはずだ。貴方に敵対する者達を、貴方に手を貸す者達を、秀吉様を、そして凶王の絆をねえ！」

「……」

「凶王様の絶望の深さは格別でございました。私も、多くの死を看^あ取^{たえ}つて来ましたが、生きながらあれだけの絶望に堕ちた御方を見たことがありません。

どんな気分ですか？ 人の絆を裁ち切り、奈落に落とす気分というものは！ 是非とも、私に御教授願いたい！」
「それは……」

あの雨の日、憎悪に染まり切った三成の瞳が、脳裏を過ぎる。総てを奪われた者のみが宿す絶望の深淵が、そこにあった。
家康の胸を、罪悪感が貫く。

「仕方がなかった！」

喉元まで出かかった言葉を吐いたのは、天海だった。

「そう、仕方がないのです。太閤を殺さなければ、凶王は復讐に駆られることもなく、貴方と今でも仲良くやれていたかもしれない！
こんな争いも起きはしなかったでしょう！」

ああ、そうだ。ワシが秀吉を殺したことで、三成との友情は永久に引き裂かれ、日本を東西に分かつ争いを招いた。

今でも夢を見る……秀吉を殺すこともなく、三成と肩を並べて、共に皆が笑って暮らせる世を創っていくことを。

もしそんな未来があるなら、どれだけ素晴らしいことだろう。だが……

「ですが、太閤を殺さなければ、あの方は外の国へ侵略を始め、戦火は果てしなく広がり、今より遥かに多くの民が死んでいったことでしょう」

説得も和解も不可能だった。他にやり方はあったかもしれないが、あまりにも時間がなさすぎた。

「大を生かすために小を殺す。実に良識的な判断です。何一つ恥じることも、負い目を感じることもありません。

うふふ……だから、そんなに辛そうな顔をしなくともよいのですよ？ 私が許しましょう、貴方の罪を！」

優しい言葉を並べ立てながら、その言いようは、逆に家康を攻めているようだった。

「そうそう、私、貴方によく似たお方を知っていますよ。あの方も、より大きなものを守るために、多くを犠牲にして来られた。今の貴方と同じように」

天海は、あの安芸の当主の、冷たい横顔を思い出す。恐らくこの天下で、あの正反対としか思えない二人を重ね合わせる者などいない。だが自分には、あの二人が酷く似通った存在に思える。

自身の目的のため、味方の屍を積み重ねるという点において……

「さつきから……何が言いたい!!」

思わず声を荒げる。会話の最中も、二人は高速で拳を繰り出し鎌を振るい続けている。天海の鎌は、家康の体を傷つけていたが、家康の拳もまた、天海の変則的な動きを捕らえつつあった。

流星はあの霸王を斃した男。彼はもう、弱く幼く、威勢だけは良かった竹千代とは違い、自分を追い込むほどの力をつけている。

「なぁに、貴方のしていることは、何も珍しいことではない、という事です。」

私は諸国を流離う中で、様々な人の生き方というものを目の当たりにして来ました。そこで分かったことは、誰もが理由をつけて、人を殺す……ということですよ」

霸道のため。野心のため。欲望のため。復讐のため。嫉妬のため。大義のため。正義のため。美学のため。愛情のため。友情のため。自由のため。信念のため。宿命のため。忠義のため。命令のため。契約のため。誇りのため。誓いのため。民衆のため。国家のため。生き様のため。大切な人を守るため。

人を殺す。

理由は数限りなくあれど、結果は一つ。殺すのだ。

「貴方も、あの方も、そして私も、所詮同じ殺す側の人間に過ぎない！ もうやめましょうよ、犠牲に耐える振りをするのは」
「！！」

今の天海の一言は、家康の心の何かを、確実に決った。

「貴方が苦しもうが悲しもうが、結局殺すことには変わりない。そんなことは自己満足、ただの時間の無駄です。自分の行いが正しいと信じているならば、何も負い目を感じる必要などないはずです」

いつしか天海は、慈父のような声で語りかけていた。

「そろそろ、貴方は苦しむことをやめてもいい頃です。私は、貴方を救ってあげたいのですよ、竹千代」

「……………」

そんなことを口にしながらも、その切っ先に宿る殺意に、一片のぶれもない。

そうだ。この男はそういう生き物だ。

口ではどれだけ聞こえのいい言葉を吐こうと、この男の頭にあるのは殺すことだけだ。

かつては、理知と狂気、正反対の彼岸を行き来するこの男の本質が読めず、ただただ恐怖するしかなかった。

だが、今ならば分かる。奪われるだけでなく、奪う側に回り、数限りない人間達の生き様を見、その死に触れて来た今なら。

世の中には、理性や常識、人が人として生きるのに何より必要なものを欠損することなく持ちながら、それでも狂気に走る人間がいる。

人の心や痛みを理解しながら、それでも己の欲望のみを優先できる。どれだけ理解を越えていようと、そんな人間は確実に存在するのだ。

いや、それはきっと、珍しいことではない。この乱世では、正しい心に立派な人格を持ちながら、その手を血に染める者は数知れない。

「（のろい）天海の言うことは、決して間違っていない。」

無数の人間の正義が交錯するこの乱世、殺人という結果だけが、唯一共通する真実なのだ。

「お前の目から見れば、さぞかし滑稽に映るのだろうな……」

最初から殺すことしか頭にないお前には、殺人という現在から目を背け、過去や未来ばかりを語る我々は、不純にさえ映るのだろう。

「貴方が正しいことをしようとも、貴方を憎む者は必ず現れるのです。今に溺れていれば、それでいいじゃありませんか」

「……そうしてワシを、魔王の後釜にしようという腹か？」

「うふふふ……」

肯定するように、天海は笑う。

「ええ。かつては魔王の手足として働き、霸王を裏切り、今また凶王と天下を巻き込む争いを始めている！ 大勢の人間を死に追いやりながら、それでも夢を諦めずに突き進む！ そう、貴方は紛れも無く奪う側の人間だ！」

違う、と、今度は反駁しなかった。己の罪を、己の悪を、否定してはならない。そうすれば、それこそ独善になってしまう。

だが……

会話の最中も死闘は続く。

——陽岩割り——

家康の拳が、大地を砕き、隆起させる。天海は寸前でかわすものの、揺れた地面に足を取られ、ふらついてしまう。

「おおっとつと！」

その隙を逃さず、家康はさらに一步踏み込む。

だが、天海のその動作も、相手の油断を誘う罠。倒れこむのと同じ時に、二対の大鎌をまったく同時に、挟み込むように振るった。愛する者を抱きしめるように。

凶速で迫り来る、首を刎ね飛ばす意志を秘めた鎌を……

家康は両手で掴み取っていた。握った手から血が流れる。それ以外にも、家康の拳は、度重なる酷使で傷だらけだった。

天海は、手を切り裂いてやろうと鎌を押し込むが、皮膚に僅かに食い込んだ程度で、それ以上先に動かせない。家康の力が、天海と拮抗しているのだ。

手を離せば武器を失う。闇の力で、家康の生命力を吸い取ろうと

する。しかしそれは、家康の拳から溢れる光によって阻まれた。家康はゆっくり顔を上げ、低い声で話し出す。

「そうだな……お前の言うとおり、ワシは奪う側の人間だ」

天海の顔が、喜悅に歪む。そう、この男は徳川^{ワシ}家康の欺瞞を暴き、それに絶望する姿を見たい、ただそれだけなのだ。

「だが！」

天海は、鎌に加わる力が、更に上がったのを感じた。

「人を殺さねば何も為せない。そんな乱世^{じだい}だからこそ、何としても終わらせなければならん！人を殺さずとも、憎しみ合わずとも、各々の道を切り開いていける。そんな平和な世を、ワシは創りたい！」

どれだけの犠牲を払おうとも、乱世を平定し、人々を絆で結ぶまでは、決して止まらない。自分は、すでに覚悟を決めている。

いや、改めて誓うまでもなく、自分はきつとそうする。

今までずっと、そうやって生きてきた。徳川家康の人生は、犠牲と共にある。

天海よ、幾らでも嘲るがいい。お前の言う通り、自分は奪う側の人間だ。

他者を奪い殺すことでしか、平和を実現する術を知らぬ愚か者だ。だが、だからこそ……

「ワシは忘れん！ 死んでいった部下達を！ ワシが殺した者達を！
ワシが断ち切った絆を！ この痛みを苦しみを、決して忘れん
！！」

武器を捨てたのは、戦の痛みを常に感じていたから。
戦とは、辛く悲しく、掛け替えの無いものを失わせる。

その事実を忘れ、戦争を盤面の遊戯に貶めてしまったら、やがて
は部下の死に何も感じなくなり、駒のように使い捨てるようになる
だろう。さもなくば、あの男のように、殺戮を愉しむようになって
しまう。

（ああ、三成……）

お前が敵に回って、ワシは酷く悲しい。だが、お前が迷いなく憎
しみをぶつけてくれるお陰で、ワシは勝利の喜びに酔わずにいられ
る。

ワシはこれからも進むだろう。数多の屍を乗り越えて、痛みと悲
しみを、心に刻みつけて。

人の総てを結ぶまで！

「あは、あはははは！ 御立派なことですね、竹千代。なら、私は
どうしたらいいのですか？」

「何？」

鎌に込められた力が増す。刃が更に深く食い込み、鮮血を滴らせ
た。

「私は人を殺したい！ 何回も何遍も！ 幾千も幾万も！ 例えあの御方を殺しても、私の渴きは満たされることはなかった！ 私自身では、もうどうしようもないのです！

そんな私は、一体誰と絆を結べばよいのですか！ 貴方の言う平和な世に、私の居場所はない！

どうすれば、私は救われるのです！ 教えてください！ どうか、どうか私に、慈悲を——！！」

家康は言葉が出なかった。天海の嘆きに衝撃を受けた……からではない。また、憐れみを覚えたわけでもない。

理解していたからだ。

あの男の言葉はいつも謎めいていて、底知れぬ深淵を感じさせる。だが、実際のところ、そこには“何も無い”のだ。口では何を語ろうと、彼は殺す。殺すことしかしない。できない。望まない。まさか本気で、救いとやらに縋っているわけでもあるまい。簡単なことだ。要するに、自分は奴に、“舐められている”——

「なあ——」

天海が、既に捨てた名で、彼を呼ぶ。

「思えば、ワシとお前、こうして同じ高さで目を合わせて話をするのは、初めてだったな」

昔は、ただ上から見下ろされるだけだった。今は違う。

今なら出来る。

「それが、どうかし……」

次の瞬間、家康の顔面が巨大化する。間もなく、天海の視界が爆裂し、脳内が一瞬真っ白になる。頭部に走る、凄まじいという言葉では遠い衝撃。頭蓋が粉みじんになる幻想に襲われる。

天海の鎌がより深く食い込んだことで、両者の距離が縮まった。家康は、敵が間合いに入った瞬間を見て、渾身の頭突きを食らわせたのだ。

「——っ!!」

大きくふらつく天海。それでも殺人者としての本能で鎌を手放さず、追撃の拳打は、何とか鎌で凌いだ。

「あまりワシを見くびるなよ」

ぐらつく視界の中、家康の平静を保った……さりとして、奥に闘志を秘めた言葉が聞こえた。

「ワシとて、怒る時は怒るのだ」

だが、大鎌を素手で止めた代償は大きい。

深く傷ついた家康の拳からは、更に多くの血が滴り、確実に彼の体力を削っていった。

第五章 妄執輪廻（五）

CLAZY STREAM!

轟く雷鳴は竜の咆哮の如く。蒼き雷を帯びた六つの刃が、大気を引き裂く。全霊の闘志を乗せた、荒れ狂う竜の六爪を……

「轉るな、塵芥が」

三成は、ただ一本の無銘の刀にて迎え撃つ。刀身も見えぬ神速の抜刀。無数の紫閃が、竜の爪牙を叩き落とす。その形相は、一貫して憤怒一色。彼は、豊臣秀吉の理想以外の、あらゆる価値観を認めない。それが、かつて秀吉に楯突いた男のものならば尚更だ。

「貴様の執念など、取るに足らぬものだ。たった一度の敗北がどうした。私はあの日、永遠の敗北を味わったのだ！」

その目に宿るは、総てを失った後悔と絶望。この世の総てを呪う負の情念を前に、それでも政宗は、怯みはしない。闇を照らす電光となつて、真つ向から立ち向かう。

「HA！ 負けを味わってアンタは何をした？ 何を思った？ 何もしちゃいねエ。アンタは豊臣秀吉の幻影（Phantom）に囚われたまま、一步も動けねエだけだ！」

そう言いつつも、政宗は三成を心から否定することが出来ずにいた。かつて自分もまた、敗北を味わい、憎悪と復讐にその身を落としていた。大切な者を失った悲しみは、理屈で処理できるものではない。あのまま突き進んでいれば、自分もまた、目の前の男のよう

になっていただろう。道を踏み外しかけた自分を諫め、光の下に引き戻してくれたのは、心から自分を信頼してくれる右目だった。

自分はまだ、総てを失ったわけではない。生き残った部下たちも、死んだ部下たちも、そして何より、伊達政宗自身も、ただの復讐の悪鬼に堕ちることなど、望んでいないと思い知らされたのだ。

（Thanks、小十郎。そうだな、いつまでも後ろばかりを見続けるんなざ、オレらしくなかった。

オレは危うく、あいつらをオレを地に縛り付ける亡霊にしちまうところだった。死んだ奴らのことは、絶対に忘れねエ。そいつらの想いを全部背負って、オレは天に昇る！どこまでも高くなる！）

「おのれ、これ以上秀吉様を愚弄することは許さん！」

激情とは裏腹に、鍰鳴りの音さえしない一閃を放つ。政宗は寸前でかわすも、鎧に一文字の傷が刻まれる。怯むことなく、返しの六爪を放つ。三成は後方へと飛び跳ね、雷の網に囚われるのを免れた。

「違うだろ。オレが戦ってるのはアンタだ。アンタの怒りはアンタのもんだ。秀吉に押し付けてんじゃねエよ」

MAGNUM!

政宗は、右手の三刀を突き出し、迅雷となって突進する。三成は宙に跳び上がり回避するも、放電が脚を掠めた。着地の直後、肉が焦げる激痛も意に介さず、三成は大地を蹴って突進する。逸脱した精神力で、身体機能を強制的に十全な状態に保たせている為、苦痛

や疲労が彼の能力を損なうことはない。見えるもう一方の目を掠める抜刀を、政宗は紙一重でかわす。

「それとも、秀吉の為って理由をつけなきゃ何もできねえか？ 後継者がそのザマじゃあ、あの世でヤツも泣いてるだろうよ」

「黙れ！！ 家康への道のりに転がる路傍の石ごときが！ 二度と口が聞けぬよう、その喉かつ斬ってくれろ！」

四方八方から迫り来る数珠を、片倉小十郎はただ一振りの日本刀“黒龍”を振るい、たたき落とす。

周囲を数珠に取り囲まれても、小十郎は慌てず動じず、冷静に対処していた。

いかに変則的な動きをしようとも、ただ間合いに入って来る珠を優先して斬ればよいだけのこと。

前後、あるいは左右から挟み込むように珠が飛来した場合は、体を転ばせて珠を回避する。

領域内に侵入して来る珠には必ず時間差が生じるから、一本の刀だろうと十分に対応可能だ。

だが、常に死角を狙いすまして飛んで来る珠の場所を察知するには、神経を極限まで研ぎ澄まし、目に見えない部分までも、聴覚、嗅覚、触覚、そして第六感を用いて、感知しなければならない。加え、あらゆる方向から飛来する数珠を斬るには、雷のごとき反射速度が求められる。

鋭敏な知覚に高速の反射、いずれも剣の道における基本であるが、極めればあらゆる状況、あらゆる攻撃に対処可能な武器となる。彼

は他の武将達と比べ、格別目立つような派手さはない。しかし、戦闘者たる武人の本質に、どこまでも忠実な剣技は、いかな敵が相手でも的確に対応できる。

それは、片倉小十郎という男の生き方を、体現しているような剣だった。

厄介な相手よ。大谷吉継は、片倉小十郎との相性の悪さを認める。数珠はかなり精密な操作が可能だが、それは速度が伴わなければの話。人間を殺せるだけの速度を持たせた場合、発射してからの操作は難しい。故に、どうしても敵に着弾するまでに誤差が生まれる。刹那の暇があれば、あの男は反応してのけるだろう。

加えてあの男は、驚くほど慎重だ。数珠が見たこともない動きを見せはじめた場合は、必ず距離を取り、慎重に、かつ敏速に見極めた後、的確に対処する。数珠の攻撃が一瞬でも途切れれば、即座に雷速の踏み込みで刺突を放つ。わざと隙を作って誘い込もうとしても、数珠の位置から、即座に罠と見抜いてしまう。

心を乱して、隙を作ることがないのだ。これでは、いずれかが気を抜くまで勝負はつくまい。

「契約を結んだ雑賀、強者になびく最上に北条、奴らに疑問はない。されど、あの跳ねつ返りの伊達が、素直に徳川に降るわけがない。総て、ぬしの入れ知恵か」

小十郎は、口をつぐんだまま、数珠を凌ぎ続けている。

「ヒヒヒ、どのような気分かな？ 主に天下への夢を諦めさせるといふものは。この戦、われらと徳川、どちらが勝ったとしても、ぬしに再起の芽はない。われらは言うまでもない。三成は徳川を討った後、伊達一党を皆殺しにするであろうな」

その光景を思い浮かべ、刑部の目が喜悦に歪む。

「されど、仮に徳川が勝ったとて、徳川には、ぬしらより古くから仕えておった大名が何人もある。日の本は奴らに分け与えられ、伊達が統べる領地など、元の奥州の地を除けばほとんど残るまいよ。天下など夢のまた夢。ヒヒヒ……」

「……………」

小十郎は肯定も否定もせず、無言で数珠を凌ぎ続けていた。

「それとも、またぞろ謀叛でも起こしてみるか？ 徳川が弱った隙を突いて、一気に天下を掠め取るのよ。かつて徳川自身がやったようになア。さすれば天下はまた乱世に逆戻り。大勢の者が不幸になる。人々に恐れられる、それもまた、竜に相応しい生き方であろうて」

「……………」

話を聞き、小十郎がその顔に浮かべたのは、懊悩でも憤怒でもなく……

「……………それが、テメエの手口ってわけか」

やや呆れたように、溜息を零した。彼は、大谷吉継の台詞が、総て自分を動揺させるためのものと気づいていた。

「豊臣の軍師つてのは、みんなそうなのか？ あの男を思い出さず、テメエの方が数段陰険だな」

小十郎の脳裏を過ぎったのは、かつて彼を勧誘したこともある、白貌の軍師だった。

「テメエの言うことなんざ百も承知だ。徳川が勝てば、乱世は終わる。俺たちの出る幕なんざ、無くなるかもしれないねえ」

そう、分かっているのだ。既に伊達家が天下を統一する見込みは無いことに。

この数年で、時代は大きく動いた。数多の群雄が天下に名乗りを上げ、互いに覇を競った戦国乱世。誰もが天下統一という夢を掲げ、そこに向かって突き進んでいた時代は、間もなく終わりを迎えようとしている。

既に時流は徳川の天下に流れている。それは、単純な兵力や基盤だけではなく、戦国乱世を取り巻く、風潮の変化が大きく影響している。

今や乱世の主眼は、誰が天下を統べるのか、ではなく、どのように天下を統べるのかということに移ってしまっている。

乱世に変化をもたらしたのは、やはり二人の巨人、織田信長と豊臣秀吉の二人だ。

急激に勢力を拡張する織田信長に対し、諸国の大名は同盟を結んで対抗した。思えばこの時点で、誰もが平等に天下を目指すという、戦国乱世の構図は崩れていたのだろう。

続けて、日の本を掌握した豊臣秀吉。戦術に兵器と、数多の革新的な要素で天下を席卷したが、その中でも最大のものは、天下統一の後の、明確な未来図を描いてみせたことだろう。

皆がこぞって天下という夢ばかりを追い求める中、秀吉は天下を、自身の理想を実現するための通過点としか見做していなかった。

伊達家を始めとする他の戦国大名も、天下統一の後のことを、考えていなかったわけではない。

しかし、己の思想を前面に押し出し、はっきりとした未来図を描いて、圧倒的な武力でそれを体現した男は、秀吉が初めてだろう。

秀吉の下に多くの兵が集まり、竹中半兵衛、石田三成のような忠臣に恵まれたのは、ただ恐怖だけではない。信じるに足る大義があったからだ。

しかし、政宗を始めとする諸大名は、秀吉の描く未来に反発し、豊臣の侵略に抗った。

この時点で、日本は豊臣か、反豊臣かの二極化が進んでいた。地方の領主が自由に天下を狙える時代は、終わろうとしていた。

そして、当初豊臣側にいた徳川家康が秀吉を倒したことで、彼は反豊臣の代表に収まった。無論、魔王を討った明智光秀と違い、彼にはそれに相応しい実力があつたのは確かだが、時節が彼に味方したのだ。

豊臣の富国強兵、徳川の天下泰平。天下平定後の未来図は、その二つに絞られる。

彼と同じ思想を掲げて天下を目指しても、もはや、徳川の追隨者とししか見做されない。最悪、私欲で天下を掻き乱す逆賊扱いだ。

自分も人の子だ。あの小田原で、豊臣秀吉を討ち取れていたならば……そう思わないことはない。しかし、どうしたところで、過去は覆しようがない。

結局、自分よりも竹中よりも、じつと耐えて、好機を待ち続けた徳川家康が、一枚上手だったのだろう。

夢は破れた。しかし、志は貫き通さなければならない。天下に平和を。誰もが笑って暮らせる世を。優しきあのお方の思い描いた世を実現するため、自分は最後まで、その背を支え続けよう。

「だが、男として生きる以上、武器を取らなくても、必ず戦わなきゃならない時は来る。俺も、政宗様も、あるべき未来で前を見て、懸命に生きるだけさ。テメエらみてえに、いつまでも過去にしがみ

ついてる奴らが、傍迷惑な戦を起こしやがるんだよ！」

小十郎の咆哮を、刑部は鼻で笑う。

「落伍者の負け惜しみにしか聞こえぬな」

「じゃあテメエはどうなんだ。俺にはテメエが、本気で勝とうとしているように思えないんだがな」

「ほう？」

大谷吉継は一切手を抜いていない。八つの数珠は、今も絶対の殺意を持って迫って来ている。だが、小十郎は眼前の男に、どこか遊興めいたものを感じずにはいらなかった。

「そうでなきゃあ、仮に徳川が勝ったら、なんて台詞は出てこないはずだぜ。本当は、石田が勝とうが負けようが、どうでもいいと思っ
つてんじゃねえか？」

「……………」

刑部は無言で、包帯の下の唇を歪めて見せた。

ああ、その通りよ。われの渴望のぞみは他人の不幸。

より多くの人間が不幸になるならば、東と西、どちらが勝とうが構いはしない。

どちらであろうと、な……

堅実な戦いを続ける二人の副将と違い、竜と凶王は、最初から出し惜しみのない全力全開だ。六爪に凶刃、雷速と神速。故に、決着が早まるのもまた必然といえた。

「Hell Dragon！」

——斬滅——

両者の放った蒼と紫の波動が、中間地点で相殺、消滅する。それと同時に飛び出す両者。斬撃の嵐が吹き荒れ、刃がぶつかる金属音が絶え間無く木霊する。

三成が刃を振るう度、政宗の体の最低五か所から血が噴き出る。六爪は攻撃に全てを注ぐ型のため、防御が弱くなる欠点を持つ。三成の神速の刃は、六爪をもすり抜け、政宗の体を切り裂いていた。こちらは六本の刀で攻めているが、速さではあちらが一枚上手らしい。

「それが……どうしたア！！」

——X - BOLT——

六爪を、十字を描くように振りぬく。刃は当たらずとも、青白い放電の波が、三成の体を襲う。速さで劣っていても、力ならばこちらが上だ。

肉が焦げる悪臭の中で、三成は吼える。

「私が秀吉様の幻影に囚われているだと？ ふざけるな！ あの御方を幻影にしようとしているのは貴様らだろう！ 好き勝手に争う貴様ら愚物を駆逐し、この日の本を一つに纏めたのは、秀吉様だ！！」

なのに貴様らはその偉業を忘れ、秀吉様を悪と断じ、あの御方の覇業を掠め取った家康に尻尾を振る！！

許さない！ 許さない！！ あの御方を亡霊にしようとする、この世の全てを許しはしないっ！！」

彼を闘争に駆り立てるのは、単純な憎しみや悲しみだけではない。秀吉が斃れた時、三成は絶望の闇底味わった。しかし、彼以外の多くの民にとってはそうではなかった。彼らは家康を救世主と讃え、秀吉を暴虐の霸王と呼んで蔑んだ。豊臣傘下にいた者も、次々に家康へ寝返り、敵として刃を向けた。

それは、秀吉の打ち立てる天下こそが至上と信じる三成にとって、最低の裏切りだった。家康の裏切りに続く二重の背信に、彼の憎悪と絶望はさらに底を割り、果ての無い深淵へと落ちて行った。

主に尽くす忠の心を、政宗が分からないわけがない。

しかし、天下に理想を掲げる一人の将として、政宗は三成の憎しみを、断固として否定する。

「……それが秀吉^{ヤッ}の創ろうとした天下への、民の答えてことだ。恐怖で民を押さえつける支配の、それが限界なんだよ！

アンタのやろうとしていることは、歴史の針を止めることだ。アンタの憎悪（Hate）は、この国の民全てを引きずり込んで、奈落の底に閉じ込めちまう。オレはそいつを、見過ごすわけにはいかねエー！！」

闘気の高ぶりとともに、六爪から噴き上がる六条の蒼き雷光。持てる力を全て出し切り、最大の奥義をぶつける。

「竜の爪痕、その身に欲しいか！？」

六頭の雷竜が、政宗の腕の先で暴れ狂う。電気の磁力を帯びた三成もまた、最強の奥義バサラにて迎え撃つ。

「死色の羽翼はねよ、私を刎えれ！！」

抜刀の刹那、鞘口から紫の洪水が溢れ出る。

重なり合う斬撃と光芒。音と光が支配する世界に、二人の若武者は立っていた。

圧倒的な手数による攻勢は、彼らの正面に斬撃の盾を形成する。触れるもの全てを切り裂き、微塵に砕いて散らす、無双の斬滅空間。“攻撃は最大の防御”を、正しく体現している。

刃の盾は、接触した境界面から相殺し削られていくが、更なる手数によって防壁は修復されていく。

両者の手数は全くの互角。しかも、二人とも今の位置から動くことも出来ない。

この状態では、僅かに体を動かしただけでも斬撃の盾に間隙が生じる。もし、他の技を繰り出そうとしたり、今の位置から動いて背後を取ろうとすれば、その瞬間、堤防が決壊するように斬撃が流れ込み、刃の濁流に飲み込まれるだろう。互いに、今のままで、相手を押し切る以外に勝機はない。

技量が互角であり、戦いに懸ける信念もまた互角である以上、後は純粹な力比べ、体力勝負になる。

ただ信念のみを刃に乗せ、ひたすらに刃を振るう機構と成す。技と速度を極めた二人の侍の死闘は、読みや知略、駆け引きを排除する原始的な持久戦に突入していた。

とは言え、限界のせめぎあいは長くは続かない。

「！！」

石田三成の、肘の部位で凍結した右腕が、この時ついに限界を迎えた。

苦痛などは、強靱な精神力でたやすく押さえ込める。だが、極限の攻防で、刀を手放すまいとする僅かな力みが、彼の体に歪み^{ひず}みとなって現れてしまった。伊達政宗の独眼は、その隙を逃しはしない。ここぞとばかりに、全霊を込めた六閃を放つ。

大気が震動し、蒼と紫の光芒が攪拌される。三成と政宗は、反動で互いに吹き飛ばされ、大きく距離を開く。宙を舞う刀が四本、地に突き刺さった。内三本は政宗の刀、残る一本は、三成の刀だった。

（三成……）

その光景を、大谷吉継は目に焼き付けた。

政宗の左手には、まだ三本の刀が残っている。あのままでは、丸腰の三成は成す術なく殺されるだろう。

死ぬ。石田三成は、この場で命を落とす。

全てを捧げた主を失い、自責と悔恨に苦しみながら、唯一つ残った復讐さえも果たせずに、死ぬ――

伊達政宗は、三爪を手に仇敵へと駆け出す。

片倉小十郎も、雷を纏わせた刀をこちらに向け、突っ込んで来る。

動揺も困惑も無かった。ただ、自然に体が動いていた。

全てが瞬きの内だった。

噴き上がる鮮血。あかいろ

政宗の三爪が斬り裂いたのは、三成ではなかった。

三成の瞳には、自分を突き飛ばし、包帯を赤く染める盟友の姿が映った。

大谷吉継が間に割って入り、政宗の刃をその身に受けたのだ。

一秒に満たぬ間とはいえ、誰もが、この展開に啞然となる。その中で、最も早く動いたのは、彼だった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!」

漆黒の闘気が噴出し、三成の双眸が、血のような赤一色に染まる。獣の慟哭が響き渡るよりも早く、彼の姿は掻き消えていた。

「……ッ!」

右肩に激痛が走る。政宗の肩の肉が、へらで掬い取ったように、ごっそりと抉り取られていた。後方へと着地した三成の手刀は、政宗の血で染まっていた。

——じりじり 恐慌 ——

視認出来たのは刹那の間。再度三成の姿は掻き消える。政宗も、左手の三爪を振るって打ち払おうとするも、刃が虚空に軌跡を描く頃には、右の脇腹がえぐられていた。

島津義弘との戦いで見せた、剣速をも上回る超加速。今の三成は、それを恒常的に発動させていた。

光さえも追いつかぬ速度で襲い掛かる三成を、政宗は捉えきれない。無数の鴉に啄つばまれるように、全身を朱に染めていく。

この絶技は、標的への執着と完全なる忘我が生み出す狂気の極致。三成の脳髓にあるのは、ただ相手を喰い殺さんとする凶獣の意志のみ。政宗の六爪の更にも上を行く、あらゆる防御を捨て去った、攻撃特化形態だ。ゆえに、それがかすり傷程度であろつと、攻撃を受けた瞬間、三成の“恐慌”は崩壊する。傷を受けた瞬間、三成の防衛本能が蘇るからだ。

だが、逆に言えば、攻撃を受けぬ限り、彼はずっと加速している。政宗の剣閃よりも、迸る雷よりも、更に速く！

仮に政宗が六爪のままだったならば、広範囲に雷を放ち、“恐慌”を崩せただろう。しかし、三つの刀ではそれも叶わない。成す術なく、三成の手刀に切り刻まれるしかなかった。

「政宗様！」

助けに入ろうとする小十郎だが、行く手を見えない壁に阻まれる。八つの数珠が、小十郎の周囲で結界を形成していたのだ。

刑部はまだ生きていた。御輿から転げ落ち、地を這う姿は人型の芋虫のように見えた。それでも、震える掌を掲げ、小十郎を行かすまいと念を送っている。

小十郎は黒龍に雷を集中させ、一撃で結界を破ろうとする。その判断は正しく、元より、さして強固な結界でもない。半秒程度の時を稼ぐのが精々だった。

だが、半秒以下の時が、小十郎には無限に引き延ばされているように思えた。彼は、これから起こる光景を、終生忘れないだろう。

「！！」

政宗が振るった三刀から生じる雷の爪は、ついに三成の体を捕らえる。それが、雷のほんの一端に触れた程度であらうとも、恐慌は解除され、三成は大きく体勢を崩す。

これが、計算通りなのか、天運なのかは分からない。ただ、三成の眼前には、彼の刀が突き刺さっていた。

政宗は、とどめを刺そうと刀を手に更に前へと踏み込む。

三成は、土壇場で凶獣の本能を呼び覚ました。無銘刀の柄に噛み付くと、転倒する際の勢いを利用して、刀を咥えたまま、宙で弧を描くように前転する。この瞬間、政宗の脳裏から、防御の意識は消え去っていた。

それが竜に引導を渡す、決着の刃となった。三成が咥えた刀は、紫色の三日月を描き、鎧を割り肉を裂き骨を断ち臓器を抉り、政宗

の右の脇腹から左肩まで、真っ直ぐ伸びる傷を刻んだ。

滝に打たれたように、三成の全身が返り血で真っ赤に染まる。

片倉小十郎が、数珠の結界を破壊したのは、その直後のことだった。

今二の足で立てるものは、それぞれ倒れ臥した者達へと駆け寄った。

「政宗様！！」

小十郎は、血まみれの主を抱え上げる。

直ちに応急処置を……何処に？

背中を残して、体がすっぱりと断ち割られているのだ。位置からして、心臓に届いているだろう。流れ出る血と共に、体から急速に熱が失われていく。

「政宗様！ 政宗様あ！！」

必死に主の名を呼びながらも、彼は心の何処かで諦観していた。

彼は伊達の副将として、常に冷静さを失わぬよう努めて来た。どれだけ心が乱れようと、激情に流されようと、今の状況を正しく把握し、適切な判断を下す。それだけは決して忘れないようにしてき

た。

だから、どれだけ心の内で否定の叫びを上げようと、彼の中の片倉小十郎は、既に確信していた。

彼は、主が戦場に出る前から、幾多もの死線をくぐり抜け、数え切れない屍の山を踏み越えてここまで来た。大勢の仲間達の死を、その目に焼き付けて来た。

戦場という最も死に近い場所に居続けたから、分かるのだ。

もう、手遅れだ。今、腕に伝わるのは、これまで最期を看取ってきた同胞達と、同じ感覚だった。

その時、政宗の手が、ピクリと動いた。

「！ 政宗様……！」

小十郎は絶句する。その独眼は、迅雷の闘志でぎらついていた。手の中の刀を、懸命に握りしめようとしている。彼は、死に瀕した今も、戦いを諦めていない。眼前に迫る死に、懸命に抗おうとしている。

その姿に、小十郎は真の竜の姿を見た。この御方ならば……そうだが、この御方は天上を駆ける蒼龍。こんなところで終わるはずがない。そんな淡い希望が、胸に宿った瞬間……

唐突に、生命の拍動が、小十郎の腕の中から喪失する。五指が力を失い、三本の刀が掌から零れ落ちる。彼の象徴というべき、左の独眼がゆっくりと閉じられ……二度と開かれることはなかった。

心臓を断ち割られた人間は誰であろうと死ぬ。奇跡は起こらなかった。

「う、うおおおおおおおおおおおつ!!」

無力な己を、一瞬でも安易な希望に酔った己を責めるように、片倉小十郎は、天に向かって絶叫した。

その姿を、大谷吉継は虚ろな意識の中で眺めていた。彼は三成が秀吉を失った時のことを思い出していた。あの男も、きつと三成と同じ思いを味わっているだろう。

そうでなければならぬ。結局、幸福という高台にいる人間に、不幸の沼に落ちた人間われらの嘆きや苦しみは分からぬ。自らも、同じ暗闇に沈むまでは。

刑部の顔は、嗜虐的な笑みに歪んでいた。だがそれは、伊達の主従ではなく、己に向けられたものかもしれない。

滑稽か。それはわれ自身のことであろうに。

もしも自分が二人いたならば、もう一人の自分は、己の行いを指を差して大笑するだろう。大谷吉継のこれまでの価値観に照らせば、先程の自分は、滑稽千万と言う他なかった。

だが、その馬鹿げた行為によって、三成の命は救われ、彼は勝利を手にした。

「刑部！ 刑部!!」

先程から三成は、ずっとわれに呼びかけ続けている。何をしておるか。今なら間に合う。早う片倉の首を落とせ。ぐずぐずしておれば、ぬしが背^{せな}から刺されるぞ。

「逝くな！ 私の下から去るなあ——ッ！」

案ずるな、われは死なぬ。深手であるが、死ぬほどではない。咄嗟に数珠を三つだけ持って、結界を張ったのだ。

御蔭で、紙一重で、臍物に届かずに済んだ。われながら、何とも生き汚いことよ。

なあ、だから、そんな辛そうな顔をするな、三成。

それが凶王と恐れられた男の顔か？

まるで、親と引き離されそうになって泣きわめく稚児^{ちこ}のようではないか……

「そ、そんな、筆頭が！？」

「う、嘘だ！ 嘘だと言って下さい！ 小十郎様！」

「ありえねえ！ そんなことはあっちゃいけねえ！」

主の死に気付いた伊達の配下達が、次々に声を荒げる。悲嘆と絶望の叫びが、大波となって、戦場にこだまする。独眼竜の人望の程が伺えた。

「凶王……！」

「許さねえ！ 絶対に許さねえ！！」
「筆頭の仇だ！！」

三成の傍にいた伊達の兵が、顔を涙に濡らして切り掛かって来た。三成は、いつしか刑部を呼ぶのを止めていた。柄尻に手を置き、夢遊病者のように立ち上がる。

隙だらけのように見えて、彼と接する大気は、変わらず殺意で満ちている。もしも刀の届く範囲に踏み入れば、瞬時に解体されるだろう。

「止める！！」

男の一喝が、蒼天に響き渡る。彼らを押し止め、その命を救ったのは、政宗の亡骸なきがらの傍に立つ、片倉小十郎だった。

兵士達は、無言で足を止める。死をも恐れぬ彼らだったが、今の小十郎の形相は、それ以上に恐ろしかったのだ。

それは、まさに悪鬼と呼ぶに相応しい。血管は浮き、双眸は殺意一色で濁っており、食いしばった奥歯からは、血が流れている。爆発寸前の火薬玉のようだ。だから、次に彼が発した言葉を、その場の誰も一瞬信じられなかった。

「……撤退だ」

「え……？」

兵士達の顔は、困惑で固められていた。反論の声が発せられる前に……

「撤退だ！！」

怒号が、皆の意を掻き消した。小十郎は、刀を脚下に突き立てていた。今すぐに斬り掛かっていきたい自分を、その場に縫い止めるように。

小十郎は、誰よりも冷静に現在の状況を把握していた。そう努めなければ、いつ怒りで我を失ってもおかしくないからだ。

兵力で劣る伊達軍の勝算は、政宗が石田三成を討ち取れるかに掛かっていた。だが、もはやそれは叶わない。

大谷吉継は既に戦闘不能。自分が、石田三成との一騎打ちに持ち込むことは出来る。だが、勝てるかどうかは分からない。相手は、政宗を二度に渡って破った凶戦士なのだ。

もし敗れるようなことがあれば、今度こそ伊達軍は全滅だ。自分一人の命ならばいくらでも賭けられる。だが、政宗が逝った今、伊達軍の命運は全て、己が双肩に懸かっている。感情に任せた、軽はずみな判断は許されない。

(ぐ……)

本心では、冷静さなどかなぐり捨てて、主君の仇を討ちたかった。憎悪の獣が体の中で暴れて、今にも腹を引き裂いて出てきそうだ。自分がそう命じれば、伊達の兵士達は、玉碎覚悟で石田軍と戦うだろう。それが分かりきっているからこそ、小十郎は、彼らを死兵にできなかった。

それに、かつて自分は政宗に言った。怒りを覚えた時こそ冷静になれと。死した者が望むのは、無駄死にではなく意志を受け継いでくれることだと。

政宗を諫める目的で放った自身の言葉が、小十郎を戒めていた。

そう言った自分も、結局分かっていなかったのだらう。失ってはならぬものを失った時の絶望の深さを。

だからこそ、堕ちてはならぬと、理性で強く律する。憎しみに駆られる戦いなど、どう転んだところで滅びへの道程でしかないのだから。

小十郎は、自身の馬に政宗の亡骸を乗せ、生き残った部下を連れて戦線から離脱した。伊達軍が立ち去るまで、三成はその場を動かなかった。

彼の心中は分からない。だが、刑部を背にして立つその姿は、彼を庇っているようにも見えた。

「三成……ここはもうよい。ぬしは先に行け。われは疲れた」

これは本心だ。出血は止めたが、この体ではもう戦えない。

最も、大谷吉継という人間は、ここで終わりかもしれない。これまでの戦いの全てを崩しかねない、どうしようもない矛盾に、気付かされてしまったのだから。

自分を置いていくことを躊躇っているような三成に、刑部は言う。

「ぬしにはまだ、殺すべき相手がいるであろう？」

「そうだ……家康！」

三成の瞳に、暗い憎悪の火が点る。彼の憎しみが消えていなかったことに、刑部は安堵する。

そうよ、それでよい。憎しみ無くしてぬしは生きていけぬ。独眼竜との戦いを見て、改めて確信した。

ぬしの力の源は、濁りも混じりもない、黒一色の憎しみよ。それがあれば、徳川に後れを取ることも無かろうて。

ゆめ忘れるでない。でなくば、われのように無様を晒すことになるぞ……

「行け、三成。われはここで、徳川の兵どもを食い止めておくがゆえ」

石田軍の兵の応急処置を受けながら、刑部は不敵に笑んでみせる。

「……ああ。だがこれだけは言っておく。刑部、死ぬことは許さない」

「あいわかった。徳川の首を土産に持って帰るのを、楽しみにしておるぞ」

三成は頷くと、徳川の本陣がある山頂へと駆け出していった。

第五章 妄執輪廻（五）（後書き）

お久しぶりです（汗

大分間空いてしまいましたがどうか更新。

遅れた言い訳をすると、円環少女を最新刊まで読んでたり、スパロボしをやっていたからです。

後もう少しなんで、何とか近いうちに終わらせたいものです。

第五章 妄執輪廻（六）

石田三成が、伊達政宗を破った頃……家康は本陣へと馬を走らせていた。

（奴め、何が目的だ？）

心中でそう呟きつつも、彼の行動に理由をつけるなど、無意味なことだとわかっていた。

天海は、家康にある程度傷を与えたところで、小早川の兵を率いて戦場から退いた。凶王が、本陣に迫っていると言いつ残して。

——いやあ、さすがは天下人になれるお方。かよわき僧には荷が重過ぎます。それに、万が一にも私が貴方を倒してしまつては、凶王の怨みを買うことは必至。八つ当たりの的になるのは御免です。ああ、怖い怖い。

それでは、“家康殿”。貴方の行く道が、慈悲深きものでありますように……

確かに天海相手に長く時間を掛けすぎた感がある。もしも伊達軍が突破された場合は、本陣にて、自分が三成を迎え撃つ。これが当初の計画だ。

だが、今の状態で、果たして三成と満足に戦えるかどうか……流れる血が止まらない。天海の鎌でつけられた傷は、家康の高い回復能力を持っても、治癒が進まなかった。まるで彼が与えた

呪いのようだった。こちらが万全でない以上、勝敗は、三成がどの程度損傷しているかに掛かっている。

ここで気付く。ごく自然に、三成を斃すことを確定事項にしている自分がいることに。説得や和解と言った選択肢は、無駄だと切り捨てていた。

戦いを前に迷いを捨てることは、将としては正しい。しかし、普段己が唱えていることとの落差は、弁明のしようがなかった。

天海に看破された通り、己はいざとなれば、勝つこと以外何も考えられなくなる人間だ。今その本性を受け入れて、勝利を目指すしかない。

家康の感覚器に、氷塊を当てたような戦慄が走った。隠そうともしない、剥き出しの殺意。姿を見ずとも、すぐに彼のものと分かった。

「iiiiiiiえやああああすうううううッ!!」

「三成!!」

宿命の再会は、会話ではなく、怒濤の攻防から始まった。餓えた肉食獣のように飛び掛かって来た三成の白刃を、家康は金色の手甲で受け止める。その後にくく十を超える剣閃を、家康は自らも拳を放ちつつ受け流す。三成の速攻に対し、防御に徹するのは逆に危険だ。刃が、家康の首筋を掠め、赤い花弁を散らす。

しかし、家康の拳も、三成の腹部を捉えていた。直撃は避けたも

の、衝撃で三成の体は後方に飛ばされる。地面に足を擦り付け、衝撃を殺して急停止する。前を見るその眼には、尽きぬ憎しみが渦巻いていた。

家康は下馬し、三成と正面から向かい合った。

「お前がここに来たということは……伊達を斃したのか」

三成の全身を濡らす血は、未だに落ちていない。そういえば、大谷吉継も傍にいない。伊達が一矢報いてくれたのだろうか。

三成は、家康の問いには一切答えない。最初から耳に入っていないように。

「どんな強固な軍を築いても……どんな綺麗言を嘯^{うそ}いても……私は、この目で見ています。家康……貴様の罪を……」

「三成……」

柄尻を突き付ける三成。依然、彼は真つ直ぐな憎しみを発し続けた。覚悟していた通りだ。事ここに至って、戦い以外の選択肢などありえない。

「そうだな。ワシはお前の大切なものを奪った。お前の絆を断ち切ったのは、ワシだ」

奪った側と奪われた側。この決定的な断絶を前に、言い訳など、出来るはずもなかった。

「そうだ！それが貴様の罪だ！さあ……秀吉様に頭を垂れる！許しを望んでお願い願え！！そして！！首を刎ねられろ！！」

「……詫びよと言つならば幾らでも詫びよう。済まなかった、三成」
それが酷い自己満足だとしても、家康は謝らずにはいられなかった。次に発する言葉が、三成をさらに激怒させると知りながら。

「だが、ワシはお前に、殺されてやるつもりはない」

「！……貴様と言う奴はッ！」

家康の取り繕った皮を、三成は言葉の爪牙で引き剥がす。

「貴様は昔からそう言う奴だった。秀吉様の下にいた頃も、聞こえのいい言葉を吐きながら、その実、頭にあったのは己のことだけ……
貴様は、己の野望を、夢という言葉で飾り立て、秀吉様の天下を汚したのだ！」

三成の言葉は、どこまでも真実だ。自分は、ずっと己の本心を押し殺し、強者の傘の下で、天下を奪う機会を窺いつづけていた。天下を速やかに平和にするのに、それが最善の手段だと信じたからだ。

自分は、三成の前で、嘘をつき続けてきた。もし秀吉の歩む道が、民の平和から外れるようならば、反乱を起こそうと最初から決めていたのだ。

いつも夢見てきた。秀吉の理想が、自分と同じならば、三成とも手を取り合い、戦っていけたかもしれないと……

馬鹿馬鹿しい。結果がどうあれ、自分はずっと彼を欺き続けてきたのだ。秀吉の死があろうと無かろうと、自分に三成を友と呼ぶ資格はない。

「私の絆を奪っておきながら、一方では絆を説く！！ 答える家康！ この矛盾の行方を！！」

かつての自分なら、この弾劾に胸を張って答えられなかっただろう。いや、今でもそうだ。三成の糾弾は、刃となって心に刺さる。

「そうだな。ワシは、ワシの理想のため、お前の大切なものを犠牲にした。言い逃れようのない、罪だ。絆を語る資格など、無いのかもしれない」

だが……

「それでも、絆は“ある”」

それが、人を欺き、人を殺し続けてきた自分の半生で得た結論だ。人と人は互いに結びついて生きている。己にどれだけ矛盾があろうと、その真理だけは否定しようがない。

己の罪から背を向けるのが欺瞞と言うならば、そこにある絆から目を逸らすのも、また欺瞞だ。

「ワシはそれを守りたい。その一心で、ワシはここまで来た。敵を、仲間を、そして秀吉殿を犠牲にして、多くの絆を断ち切って……それでも、いや、だからこそ、ワシは立ち止まるわけにはいかない。ワシには、ワシを信じてくれる多くの仲間がいる。例え裏切りを重ねようとも、その期待を、ワシ自身の信念を、裏切ることだけは許されない！」

この拳は、踏み締めた足跡は、既に血と屍で赤黒く濁っている。

だが、その道の果てに、平和な時代があると信じた。ワシのその理想を信じて、多くの人が後押ししてくれた。徳川家康の夢は、もはや自分一人のものではないのだ。それこそが絆だと、ワシは思う。だから、ワシは倒れるわけにはいかない。皆を導いた者として、夢の形を、見せ続けなければならない。

罪や夢の重さに押し潰されそうになっても、しかと大地を踏み締めて、立ち続ける。それが……

「それがワシの決意だ！！ 三成、お前にも秀吉にも、天下は譲らない！！」

三成は泣き笑いのように顔を歪めていた。揺らめく体は今にも倒れそうだ。

「三成……」

「もう、いい。私は今、貴様を殺すことしか考えられない……！」

家康にも分かっていた。どれだけ言葉を費やそうと無意味だ。石田三成は、そこにある確かな真実だけを信じる男だった。だからこそ彼は、豊臣秀吉の絶対的な力こそが、信じるに足る真実だったのだ。

彼にとっては、家康が秀吉を殺した、ただだけが真実だ。

そして三成は、目にした真実に背を向けられるような男ではない。ずっと真っ直ぐに、前だけを見つめて生きてきたのだ。復讐以外の選択肢など、彼には無い。

腰の刀に手を当て、いつでも飛び出せるように、前傾姿勢を取る三成。

家康も、腰を落とし、両の拳を突き出して、迎撃の構えを取る。

これから自分は、三成を、かつての友を、殺す。

その正義に一点の誤りもないと理解しながらも、自分の正義やばうを押し通すために、殺すのだ。その“悪”を受け入れ、決断を下すのも、力を持つ者の責務だ。

三成の憎悪はあまりにも大きくなりすぎた。その炎は、やがては日の本全土を焼く。幕を引くのもまた、自分の責務つとめだろう。

「もう、誰の許可も要らない……家康、貴様を斬滅する!!」

二人の道は、自分が秀吉を殺した時に断たれている。本来、あの雨の日に、既に決着をつけていなければならなかったのだ。だからこの戦いは、あの日の再開でもある。

石田三成が銀色の颯風さっふうと化して飛び立つ。

「iiiiiiiえええやあああすうううううッ!!」

徳川家康は、大地をしかと踏みしめ、金色の光拳で迎え撃つ。

「三成、石田三成iiiiiiiッ!」

東軍と西軍、両陣営の総大将同士の戦いが、ついに幕を開けた。

家康の思惑通りに。

徳川家康は、武人であると同時に東軍の総大将だ。ただ人望と武力だけで、ここまで昇り詰めたわけではない。彼は常に、全体の戦略を考えて行動している。

だから、三成が自陣を離れて単身自分の下までやって来るのも、読み通りの結果であった。

「命が惜しい者は頭を垂れなさい！ ザビー教に入信すれば、許してあげますよ」

大友宗麟が乗る駆動国崩し、正式名称「ああ、ザビー様！貴方の面影と思い出号」の目玉の部分から、砲弾が飛び出す。宗麟のしていることといえば、配下に指示を出す毛利の隣で、こうやって、安全な本陣から砲弾を撃ち込むぐらいだ。本当の戦がどのようなものか、彼はまだ知らない。

雑賀孫市と立花宗茂は、まだ戦い続けている。放電と流れ弾が飛ぶ戦闘領域に、誰も近づくことは叶わない。休む間も無く、孫市の銃火器が火を噴く。出し惜しみは一切ない。その鉄火の渦を、宗茂は達人の剣技と雷の障壁を持って、ただ一人で受けきっていた。

孫市は動けない。銃を撃つ手を休めれば、宗茂は再度雷切を使つて加速するだろう。そうなれば、相手を止めるのは難しくなる。あくまでこちらの本領は銃撃、“西の宗茂”に一度間合いに入られれば、それで終わりだ。

宗茂は不破の鉄壁だ。とても彼を出し抜いて、毛利や大友を狙撃するなど叶わない。それでも、こうして銃を撃ち続ける限りは、彼の動きを止めることは出来る。

弾薬が尽きるのが先か、宗茂の体力が尽きるのが先か。冷静に見れば、刃が当たれば死ぬこちらの方が分は悪かった。しかし、孫市としては、彼をここに引き付けておけた時点で、目的の最低条件は達せられた。

「毛利様あーっ！　み、南の方角より、徳川の援軍があーっ！！」

毛利は僅かに眉を動かす。伝令が告げたこの報告が、西軍崩壊の号砲だった。

南だけではなく、四方八方から、東軍と思しき軍勢が、次々に馳せ参じた。彼らは、関ヶ原の方々に散っていた者達だ。

いかに旭車天君という新兵器があろうとも、兵力差と地の利では東軍が遥かに優位。戦が長引いたことで、ついに地力の差が形となって現れた。

均衡は一気に破れた。

四方より囲まれて一斉に狙撃されれば、旭車天君とてただの的ではない。

大鏡は碎かれ、馬は倒れ伏す。数で上回る側だから出来る、強引かつ確実な戦い方だった。

彼らは敵軍を蹴散らし、友軍を助けると、毛利と大友のいる西軍本陣へと殺到する。たちまち、本陣は主戦場から分断され、孤立することになる。

「ひ、ひい！？」

宗麟の顔が恐怖に曇った。これほど大勢の敵の殺意に晒されたことなど、今まで無かったのだ。

「な！？　宗茂も他の連中も、何をやってたのですか！？　は、速く！　速く僕を守りなさい！！」

錯乱して喚き出す宗麟。彼の望みは叶わない。立花宗茂と大友軍は、雑賀衆に阻まれ、身動き取れずにいた。

「我が主！^{きみ} 雑賀殿、最初からこれが狙いで……」

孫市は、引き金を引きつつ、ただ微かに笑みを浮かべてみせた。

石田三成が、本陣を離れて家康を討ちに行くことは最初から読めていた。だから家康は、あえて東軍の本陣に残り、自らを餌にして、石田三成と大谷吉継を敵陣から引き離す計を立てた。

三成は、優れた剣士であっても、将としての能力は無いに等しい。家康が囷になれば、任意の地点に誘導できる。

西軍の土台を支えているのは、大谷吉継と毛利元就の二人の軍師だ。彼らさえ討てば、西軍は司令塔を失い瓦解する。東軍の標的は、最初からこの二人だった。

大谷吉継は既に陥落した。西軍の本隊も、雑賀衆の活躍で大きく戦力を削られている。石田、大谷のいない今、毛利の力を合わせても、東軍の猛攻を凌ぎ切る力は残されていない。

「撃てえ——っ！！」

井伊尚政の号令一下、総攻撃を開始する東軍。大友宗麟が慌てふためく中、毛利はその様子を、冷めた目で見つめていた。

瞳を血色に染め、“恐慌”を発動させる三成。

忘我と狂気の極致が生み出す超加速。瞬きよりも速く、家康は肩

の肉を抉られた。

「くっ……！」

返しに放った家康の拳は、三成の残像を貫くに留まった。逆に手痛い反撃を喰らってしまう。

今の三成の眼には、家康以外映っていない。標的への殺意を絞り込み、尖らせ、刃と成す。その集中力が、規格外の神速を生み出すのだ。

だから……

三成は、家康の足元で光る方陣に気付かなかった。

「——！！」

家康の踏み締める大地が、光り輝き、ある紋様を描き出す。それは、徳川家を象徴する“葵”の家紋だった。

——葵の極み——

葵の方陣から、天空目掛けて光の波動が噴き上がる。家康が、足を通して大地へ浸透させた“光”の力が一気に放出されたのだ。

いかに超加速を誇る“恐慌”三成といえど、周囲の空間全てを包む光の波動は避けられない。唯一の逃げ場は背後だが、今の三成に後退という選択肢はなかった。

そして、“恐慌”発動中は、かすり傷一つ受けただけでも、“恐慌”は解除される。

「がつ！！？」

大きく体勢を崩す三成。既に彼の瞳は赤く染まっていない。攻撃

を受けたことで、生物として当然の反射で、防衛本能が呼び覚まされる。それは、忘我状態で無くなることを意味していた。

家康は、波動に押し上げられた三成に、間髪入れず天道突きを叩き込む。

「がはっ!!」

吐血して、後方へと吹き飛んでいく三成。家康は追撃の手を緩めない。

政宗と比べて、家康が優位に立つことがあるとすれば、それは三成の手の内を熟知していることだろう。

豊臣傘下時代、家康は何度も三成と肩を並べて戦った。だから、家康は三成の剣技や呼吸の際を見抜いた上で、攻撃を仕掛けることが出来た。

自分は、当時から予見していたのだ。いつか、豊臣秀吉と道を違えた時、三成とも戦うことになるだろうと。秀吉に勝てたのも、ずっと彼の傍で、その戦いを観察していたからだ。

それならば三成にも、同じ条件が当て嵌まるはずだが……そうはならない。三成は、家康が裏切るまで、一度も彼を疑わなかったのだ。対策など何もない。ただ、激情のままに剣を振るっている。

それは、三成の家康に対する信頼の証。その事実が、家康の胸を軋ませる。

——東風の乱舞——
とんぱう

苦い感情を押し殺して放たれるは、百を超える拳の弾幕。三成も

さる者、即座に体制を立て直し、高速剣で対応する。
刀と手甲がぶつかり合い、火花と金属音を散らす。

「家康！ 家康！ いいいいいえやすうううううッ！！」

何故！ 何故！ 何故！ 何故！

何故殺した！？ 何故裏切った！？

何故、私はあの御方を守れなかったのだ！？

手甲と刀が交差する度、三成の怒りが、嘆きが、苦しみが、痛みが、悲しみが、憎悪が伝わって来る。

それは、家康に対するものだけではない。秀吉の死に間に合わなかった自分、守り切れなかった自分。己への憎悪が溢れ出て、家康を、他者を、そして日の本全土を、傷つけずにはいられないのだ。胸を苛む心の傷は、癒えるどころか更に傷口を拡げている。彼の慟哭と絶望は、終わることが無い。

家康は、涙を流さなかった。奪った側である自分に、彼を憐れむ資格など無いと分かっていたから。

しかし、彼の拳は、ずっと血を流し続けていた。天海の鎌で付けられた傷は、呪いで自然治癒を阻害する。血液の減少で、意識が徐々に薄れつつあるのが分かった。それでも家康は、痛みを耐え、手を固く握り締めて拳を振るう。

三成は精神力で、苦痛や疲労を押し殺している。どれだけ深手を負っても、彼は戦い続けるだろう。止めるには、殺すしかない。そして自分の理想を貫き通すために、家康は退くわけにはいかなかった。

彼を狂わせた元凶である自分が、自身の野望^{ゆめ}のために彼を殺す。罪に罪を塗り重ねる、紛うことなき“悪”そのものだ。決して許される行いではない。

だが、それが悪であろうと、何だろうと、行動しない限り、人は何も成すことは出来ない。傍観者には、決して天下は変えられないのだ。そして自分は、屍の山を駆け抜ける覇業の道を、すでに選択している。

家康も三成も、共に策を弄して戦う使い手ではない。拳と刀、人にとって最も単純な武器を、極限まで鍛え上げた達人だ。故に、その激突は、ひたすら互いの技術をぶつけ合う、原始的なものとなる。

「淡く微笑め！ 東の照^{しょう}！！」

「刃^{とが}に咎^{とが}を！ 鞘^{あがな}に贖^{あがな}いを！！」

煌めく黄光と紫閃。炸裂するは、互いの究極奥義。交錯する拳と刃の応酬は、大気を攪拌し、巨大な渦を作り出す。それは、彼らの長き因縁を決する、決闘場であつた。

第五章 妄執輪廻（七）

「……………」

死闘が続く関ヶ原の中でも、この地は特に凄惨な有様だった。地面は黒く焼け焦げ、所々穴が穿たれている。そこかしこに転がる焼死体が、烈し過ぎる戦いを物語っていた。

本多忠勝は、焦土と化した大地を一步一步踏み締めながら歩く。装甲は砕け、体の各所から煙を噴き、損傷からは電流が漏れ出ている。よろい
きずぐち
けつえき

彼もまた満身創痍だった。螺旋槍はその手に無く、遠くの地面に突き刺さっている。ただ一つ残った武装である、背中から伸びる二つの砲塔を、敵手へと向けた。

狙いは、同じく瀕死の重傷を負った長曾我部元親だ。彼は全身から血を流し、所々火傷を負っていた。螺旋槍によってえぐられたものか、脇腹には半月型の穴が開いていた。碇槍を支えにして、何とか立っている状態だ。

彼の背後には、完膚なきまでに大破した暁丸の残骸が転がっていた。自爆前提で突撃し、本多忠勝を中破させたが、その代償として、ふかであわ
長曾我部軍の最高傑作は、二度と跳躍することはない。

長曾我部軍の兵士達も、皆重傷を負って動けないか、死んでいるかのどちらかだ。

そして、元親の命運も間もなく果てる。忠勝の砲塔が、火を噴く寸前……

爆発音が二つ重なった。一つは砲弾の発射音、もう一つは、突如、忠勝の胸部装甲が破裂した音だった。損傷を受けていた箇所が、限界を迎えたのだ。忠勝は大きくのけ反り、それによって砲弾は、狙いを逸れ、元親の頭上を飛んでいく。

これを勝機と、はつきり認識したわけではない。ただ戦の鬼としての本能が、彼を突き動かした。

「うおおおおおおおッ!!」

残る力を振り絞り、碇槍を構えて突貫する。本多忠勝が体勢を立て直すより、槍の穂先が損傷箇所に刺さる方が速かった。

いかに堅牢を極める本多忠勝とはいえ、鎧の内側まではその限りではない。槍から噴き上がる爆炎が、戦国最強の体を内から焼き尽くした。

「……………!!…?」

本多忠勝は人語を発しない。だが、元親には忠勝が、主の名を叫んでいるように思えた。彼の脳裏にも、同じ男の顔が浮かんでいた。

家康……

思い返せば、彼との出会いは、この本多忠勝がきっかけだった。

当時、長曾我部元親はお宝を求め、日本中を飛び回っていた。戦国最強と名高い本多忠勝に目をつけたのだ。

その強さもさることながら、忠勝の姿形が、彼の趣味にぴたりと当て嵌まったのだ。

「よお、戦国最強！ いいねえ、その勇姿、見れば見るほど惚れ惚れするぜ。あんたと一番上手く扱えるのは徳川じゃねえ。この俺だ！ あんたの強さに、俺ら長曾我部のからくり技術が加われば、あんたはもつと強くなれる！ どうだ！ 徳川なんぞとは手を切って、俺の下に来ねえか？ 退屈はさせねえぜ！」

「待て待てい！」

徳川家康は、忠勝を庇うように前に出た。当時の彼は、まだ背が低く、元親の胸元辺りに頭が届く程度だった。

「忠勝はワシの家臣だ！ お前のような海賊には渡さんぞ！」

「ハッ、優れた武将には、相応の頭が必要だぜ。こいつに相応しいのは、護るべき弱い主じゃねえ、肩を並べて戦える強え奴よ。いつまでも後ろにくっついていてだけの奴が頭じゃあ、せつかくの戦国最強も宝の持ち腐れってなもんだぜ」

痛いところを突かれたのか、家康は一瞬気圧される。未熟な自分がいるせいで、忠勝は十分な力を振るえずにいるのではないか。元親に言われずとも、常に思い悩んでいることだった。

「ならば、ワシが忠勝の主に相応しいかどうか、この場で証明してやる！」

「ほお、どうやって？」

「ワシと勝負しろ！ 長曾我部元親！！ 互いに武器を捨て、部下の助けも借りぬ！ 一対一の勝負だ！」

「面白え……」

元親は剣呑な笑みを浮かべる。彼が勝負に応じないはずがなかった。

「……………」

忠勝は、手を伸ばして家康を制止しようとする。
だが、忠勝の言わんとしたことを理解したのか、家康はその手を振り払った。

「止めるな、忠勝！こいつの言う通りだ。お前に相応しい男になるために、ワシはもっと強くならねばならん。いつまでも、お前に甘えているわけにはいかんだ」

家康の瞳には、若さゆえの焦燥と、確たる決意が宿っていた。

結果は、家康の惨敗だった。体格や経験値など様々な要素で、当時の元親に敵うはずもなかった。

だが、家康は最後まで決して音を上げなかった。どれだけ殴られても蹴られても、部下に助けを求めることなく、一人で立ち向かい続けた。

忠勝も、家康の心を尊重し、手を出そうとはしなかった。元親は問うた。

「何故だ？ 何故あんたがそこまでする？」

本田忠勝の陰に隠れ、自分では手を汚さない。そんな、徳川家康に対する世間の評価と、今目の前にいる男との落差はあまりに大きかった。

「……何を言うか。ワシは忠勝の主だぞ。男の戦いに体を張れぬようでは、忠勝の隣に立つ資格など、無

いわ……」

元親は、家康の内に真の絆を見た。最強の武力にただより掛かるだけではない。自らも、共に成長し、いつかは並び立とうとする気概が感じられたのだ。

元親は負けを認めていた。どうやっても、この二人の絆を引き裂くことなど出来ないと思っていた。

本多忠勝に最も相応しい男などと、思い上がりも甚だしい。それは目の前の、小さな侍だ。

その夜、詫びも兼ねて元親は船の酒を全て家康に振る舞い、一晩中飲み明かした。

「負けたぜ、徳川家康」

二人はすっかり意気投合していた。

片や三河の有力大名、片や四国の海賊団の頭。生まれも育ちも立場もまるで違う二人だが、驚くほど多くの共通点があった。

部下との絆を重んじ、主従が互いに支え合っていく姿勢は、元親も大いに共感できた。酔った勢いも手伝って、家康は、己が思い描く天下の未来像を、楽しげに語ってみせた。

「夢を夢のままで終わらせる気は毛頭ない。ワシには忠勝を始めとして、頼れる仲間が大勢いる。」

どんな困難が降り懸かって来ても、皆で力を合わせれば、必ず乗り越えていける。ワシはそう信じている」

この時、元親は思った。自分は、家康のように情熱を持って、天

下に夢を思い描けるのかどうか。

この時代、誰もが天下統一を目指し、相争っていた。自分も、特に疑問もなく乱世に名乗りを上げたが、果たしてそれは本当に、自分のしたかったことなのだろうか。

自分の本当の望みは、風の向くまま、気の向くまま、自由に生きることだった。天下の趨勢に囚われ、結果自由を失ってしまったては意味がない。

徳川家康、この男ならば天下を平穩に治め、希望に溢れた未来を創ってくれるだろう。それは、これまで元親が手にした何よりも、素晴らしいお宝ではなかるうか。元親の本心は、徳川家康の創る未来を見てみたいと叫んでいた。

それから、元親と家康は堅い友情を結び、徳川の天下統一のため、協力することを約束したのだった。

「……家……康」

碓槍の先では、黒焦げになった本多忠勝が、膝を突いていた。彼はもう、二度と起き上がることはない。戦国最強の最期だった。

純然たる勝利とは言い難かった。忠勝は最後まで一人で戦ったのに対し、自分は暁丸や部下達といった、大勢の人の力を借り、また犠牲にすることでようやく勝ちを拾うことが出来た。

よって、元親の胸に勝利の達成感など微塵もない。多くの部下を失った悲しみ、それを止められなかった己の力不足への自責。そして、“親友”の家臣をその手にかけたことへの罪悪感。

まだ彼を、親友と呼べた自分に驚いた。だが、今や自分に、彼を糾弾する資格があるのだろうか。自分が大勢の部下を奪われたよう

に、己もまた、彼の大切な臣下^{きすな}を奪ってしまった。

「おめえら……動ける奴は動けない奴を連れて、ここから逃げろ……」

「あ、アニキは……？」

元親はそれ以上何も語らず、山頂を目指して歩き始めた。忠勝との激闘で、その体はもうぼろぼろだ。

俺は、何としても、家康に会う。会わなければならない。会って一体どうするのか。刃を突き付けて報復を果たすのか。それとも、忠勝を壊^{こわ}したことを詫^わびるのか。

今の自分に、家康を糾弾する資格など無いのかもしれない。一方で、彼を信じていいのかどうか分からない。あの日、四国を壊滅させられたことを、忘れることなど出来はしない。

今はただ、真実を知りたい。それは、家康に直接問い質さぬ限り、分からないことだろう。

予感はある。真実がどのようなものであれ、元親にとって辛い結果になるのは間違いないかった。

「いいいいえやすううううううツ……」

死闘の果てに……家康も三成も、共に限界を迎えていた。だが、それでも石田三成の方が損耗は大きかった。

「う、おおおおおおおおおおッ……」

残る力を振り絞って疾駆する三成。消えかけた灯を、生命力を燃料として再び燃え上がらせている。

「三成……」

家康は、その最後の輝きを消し去ろうと、拳に力を籠める。狙いを定めて、渾身の天道突きを放つ。

直撃すれば、確実に頭蓋を砕く一撃だ。今の力尽きかけている三成に、この拳を避ける術はない。避けようとする意志さえないのだ。

今の三成は、とうに限界を迎えた体を、家康への殺意だけで動かしているのだから。三成の視界を、光が包み込む。

実力が拮抗した者同士の戦いは、完全に釣り合った天秤に例えられる。

それは、僅かな重さの変動で、簡単に傾いてしまうということだ。例え、戦う当人達にとって全く予期せぬことであっても……

三成が、突如右側に体勢を大きく崩す。度重なる負傷と出血。彼の凝縮した殺意を持っても、その体を繋ぎ止めることは出来なかった。

そのすぐ隣を、天道突きの光芒が通り過ぎて行く。意識して動いたわけではなくとも、結果的にこれが、三成の命を救った。

三成はそのまま体が倒れる勢いをも利用し、刹那の加速で家康の懐へと飛び込む。

だが、家康も万が一を想定し、左の拳に光を溜^{ちから}めている。魔弾と化した三成に、迎撃の拳を放つ。

今度は避けなかった。光の拳が、三成の腹へと減^めり込んだ。

「…………ッ！」

口から盛大に血を吐く三成。衝撃で肋骨が砕け、臓器が攪拌される。あの、鋼鉄の肉体を持つ豊臣秀吉をも屠った家康の拳は、素手の不利を埋めて余りある威力を秘めている。

まして、三成の肉体の強度は、秀吉より数段劣る。直撃していれば、間違いなく命はないだろう。

そう、直撃していたならば。

「……！」

家康の顔に、戦慄が走る。三成の手に握られていたもの。それは、ひびわれた大谷吉継の数珠だった。

三成はこれを盾にすることで、拳の衝撃を緩和したのだ。大谷は、単身家康の下に向かう三成に、数珠の一つを与えた。

——ぬしと徳川の戦は、攻ならばぬしが有利、されど、守りについては、ぬしは大層脆い。徳川を殺すことに躍起になって、気付かぬ内にあの世行き、ということになるやもしれぬ。

われの残る念を籠めておいた。いざという時は、コレを使い。

ぬしに武運を、徳川に不幸を。

三成は最初、これを使うつもりはなかった。秀吉の仇討ちは、単身で果たさねば意味はない。

しかし、底無しの殺意が、勝利への渴望が、土壇場で、彼の信条

を狂わせた。

いかな偉人も、英雄も、天下人も、死ぬ時は等しく一瞬だ。織田信長や豊臣秀吉がそうであつたように。

刀が首を通過する寸前、家康は、僅かに微笑んでいるように見えた。

直後、鮮血の華が咲き、家康の首が宙を舞う。

ここに、復讐は果たされた。

体から零れる血の雫が、雨のように大地を打つ。三成は虚ろな目で、家康の亡骸^{なきがら}を見下ろす。

彼を、この手で殺した。復讐を果たした。しかし、胸に去来するのは、果てしのない虚無だけだった。

彼はただ、復讐だけを追い求めて走つて来た。それ以外を一切省みず、数多の屍を積み重ねて来た。

その、彼にとって唯一と言って良い生きる目的は、たった今失われた。

自らの手で断ち切つたのだ。家康の死体へと歩を進める。その時

……

「ほう、貴様が勝つたか」

声が聞こえると同時に、三成の背中に、焼け付くような痛みが走った。

「!」

俯せに崩れ落ちる三成。背中は、炎に炙られたように焼け爛れていた。

苦痛の中で、三成は顔を上げる。そこにいたのは、本来ここにいないはずのない男だった。

「き、貴様ア……」

「だ、駄目だ！とても勝てん！」

「逃げろーっ!!」

勝ち目の無いことを悟ったのか、毛利軍の兵士達は、我先にと逃げ出していく。

彼らは無視して、東軍の者達は毛利への包囲を狭めていく。

「ひ、ひい……ぼ、僕も逃げますよ！毛利さん、貴方と心中なんて御免被ります！あ、あれ？この、動け！動きなさい！」

大友宗麟は、駆動国崩しで、強引に突破しようとするも、何故か全く動かなかった。

毛利は、慌てる宗麟や逃げ惑う西軍を余所に、何かを悟ったように天を見上げた。

「……全て、私の計算通り……」

「毛利元就、覚悟おーっ!!」

「撃てえーっ!!」

井伊の指示で、東軍の鉄砲が一斉に火を噴く。もちろん、これで仕留められるとは思わない。攻撃に攻撃を重ねて、最後には数で圧殺する。

だが……

誰もが目の前の光景を疑った。毛利は、輪刀を振って防御しようとするも、全てを弾くことは出来ず、その身に銃弾を浴びたのだった。体がよろめき、口から血を吐く。

東軍の間に流れたのは、快哉よりも困惑だった。毛利元就といえば、希代の智将というだけでなく、長曾我部元親に匹敵する実力者であったはず。それが、いかに完全包囲されているとはいえ、これほどあっさりと終わるものなのか？

諸将の胸に疑念が宿る。しかしそれは、この千載一遇の勝機をみすみす手放すほど大きなものではなかった。

飛矢と銃火の嵐の中で、宗麟は頭を屈めてうずくまり、毛利は輪刀を振るいながらも逃げようとはしない。

毛利は、ふと天を見上げた。誰が信じられるだろうか。毛利の瞳

からは、一筋の涙が流れていたのだ。

「……これで、よろしいですね。 “元就様”」

それが、もうりたかもと“毛利隆元”の発した最期の一言だった。

「な、何ですか!？」

宗麟の乗る駆動国崩しと、毛利の乗る旭車天君がまばゆい光に包まれる。東軍の者たちが、これは畏だと気付いた時には、既に遅かった。

自分は、血族の中で特に毛利元就に似ていた。毛利軍に名を連ねる者は、血族であろうと全てが当主の駒だ。駒にはそれぞれ相應しい役割が与えられる。自分が命じられた役割は、毛利元就の影武者。元々似ていた顔を更に作り変え、武芸を修め、毛利元就を演じるため、口調から立ち振る舞いに至るまでを矯正した。

全ては、この日、天下分け目の決戦において、毛利家に勝利をもたらすため。毛利隆元は、隆元であるための全てを削ぎ落とされ、服従だけを残し、“毛利元就の形をした駒”へと作り変えられた。

唯一真似が出来なかったのは、その武力と知略のみ。裏を返せば、外側からは、誰も正体を見破れないということだ。

その正体を知る者は、毛利軍の僅かな精鋭を除けば、東軍は無論、友軍である西軍にもいなかった。

駒は与えられた役割を、忠実に遂行した。今、この瞬間に。足元のある一点を踏むことで、その仕掛けは発動する。

隆元の乗る旭車天君と宗麟の駆動国崩しには、大量の火薬が詰め込まれている。それに、大鏡で太陽光線を照射することで、一斉に起爆する。

「ひいつ……」

至近距離にいた隆元と大友宗麟が、真っ先に光に飲まれた。隆元は毛利元就に作り変えられるに当たって、恐怖や矜持といった要らぬ感情は全て消去されている。

あるのはただ、駒としての意志のみ。だが、死の間際に、彼はふと思った。

あの御方は、ただ自分が死んだだけでは、きっと何とも思われな
い。だが、駒としての死ならば、少なくとも「役に立った」とは思
って頂ける。それだけで満足だ。

そう思うこと自体が、駒に作り変えられた故であると知りながら。

次の瞬間、隆元の意識はその肉体ごと消し飛んだ。急速に拡がる
爆熱の渦が、数多の命を飲み込み、光の中に還していく。

その光景を、立花宗茂は驚愕の眼差しに固まっていた。

「我が……主……」^{きみ}

主の剣となり、盾となることこそ、立花宗茂が貫いて来た武士の生き様だ。だが、自分はそれを果たせなかった。主は、死んでしまった。

彼は、武士としてあまりに実直過ぎたが故に、受けた衝撃は計り知れなかった。そして、それは今彼が交戦している相手にとって、致命的な隙となる。

悲しむことも、憤ることも、自分を責めることも、絶望する時間さえ与えられなかった。

その空虚を、千載一遇の勝機を見逃さぬ雑賀孫市ではない。

驚いたのは孫市も同じだ。しかし、それは一瞬のこと。彼女は即座に、これは毛利の奸計であり、味方を巻き添えにしても東軍に大打撃を与える作戦だったのだと理解する。

そして、その目論見は成功した。東軍の主力は、今の爆発に巻き込まれて消し飛んだ。戦況は再び、先の見えない混迷へと戻った。それでも、孫市は退こうとはしなかった。一度契約を結んだ以上は、最後まで東軍のために戦う。それが自分達の定めた生き様だ。

孫市は、迷わず駆け出した。宗茂は、数瞬爆発から目を離せなかった。その差が、生死の境を決した。

立花宗茂は至高の武人。余所見をしていようと、敵が迫って来

れば、体が独りでに反応する。高速で振るわれた雷切は、しかし、孫市を捉えることはなく、空を斬り裂くに留まった。この領域の戦いは、僅かな意識の乱れが、勝敗を分かつ要素となる。

宗茂の周囲には、雷の膜が形成され、飛んで来る銃弾を叩き落としている。これによって、宗茂は何百発と銃弾を喰らっても、耐え抜くことが出来た。だが、孫市は、散弾銃を槍に見立て、直接電磁障壁を貫いた。この距離からならば、銃弾をまともに浴びるしかない。

体が電流で焼けるのも構わず、孫市は引き金を引く。銃弾は、過あやまたず宗茂の顔面へと滑り込む。

首から上が、柘榴のように弾けた。即死である。九州最強の武人は、主の後を追って呆気なくその命を散らした。

だが、孫市もまた、宗茂の強さを見誤っていた。

立花宗茂は、全身に電流を流すことで、神経の伝達を速め、驚異的な反射神経を実現していた。死の寸前であっても、体に流された電気は、彼の最期の遺志に従って肉体を動かす。結果、首から上が殆ど消失した状態からでも、立花宗茂は動いた。

この戦いに意味はない。彼の守るべき主は、既に失われているのだから。されど、彼は武士である一方、一人の武人でもある。最後に彼を動かしたのは、敵を屠り去ることに全てを懸ける、武人の本能だった。

雷速の刃が、空中にいる孫市の胸を薙ぎ払い、寸断した。

主を中心として起こった爆発が、徐々に収まりかけた頃……逃げ出したように思えた毛利の兵が、一斉に戻って来る。彼らが一時逃

走したのも、全て策の内。爆発から逃れ、東軍を包囲するためだったのだ。

毛利の自爆で甚大な被害を被った東軍は、更に挟み撃ちに遭い、瞬く間にその数を減らしていく。この状況で、指揮を取るべき武将達は、大半が爆発に飲まれて消し飛んでいた。

西も東も、否応なく混乱に飲みこまれる、その中で正気を保っていられたのは、この状況を知っていた毛利軍だけだった。

第五章 妄執輪廻（八）

「毛利イイイ！ 貴イ様ア！！」

三成の眼前にいろのが、本物の毛利元就だった。彼は、影武者を立てることで敵味方双方を欺き、自分は単独で動き回っていたのだ。姿を見られぬようにして方々の戦場に現れ、配下に指示を下し、この関ヶ原全ての戦いを支配下に置こうとした。最終的に、東軍の大部分が、影武者の前に集まるよう仕向けたのも彼だ。

そして、家康と三成の決着がつく頃合いを見計らって、彼は姿を現した。傷付いた石田三成に、引導を渡すために。

この男は実に単純だ。もし徳川を倒し、天下を統一したならば、次に何をするかは想像がつく。彼は豊臣秀吉の遺志を継ぐと言い出して、世界に対し戦争を始めようとするだろう。

毛利元就とて、これからの時代、天下を治めるのに諸外国への対策を怠つてはならないことは理解している。だが、戦うにせよ、和平を結ぶにせよ、新時代を主導していくのは、自分達毛利家で無くてはならない。

既に東軍、西軍共に、戦闘続行が難しい損害を被っている。一方、毛利軍は損害を最少限に留め、今や戦場を掌握している。

東軍の総大将、徳川家康は既に斃れた。後はこの石田三成を葬れば、天下は毛利家のものとなる。

彼は、天下取りに格別の情熱を持っているわけではない。これもまた、毛利家が恒久の安泰を得るための手段に過ぎないのだ。

「全ては、私の計算通りよ。残念だったな、石田。我を信じないと云った貴様の判断は、正しかった」

「毛オオオオオ利イイイイイツ！！」

彼は背信を何よりも許さない。裏切り者への憤怒と共に、三成の瞳が赤く染まる。最後の力を振り絞り、“恐慌”で瞬時に毛利の首を刎ね――

しかし、その瞬間、三成の全身を焼けるような痛みが襲った。比喩ではなく、実際に焼けている。三成を焼く眩い光は、照日大鏡と同じものだった。

「がああああああッ！！」

――終の手『照』――

毛利元就の頭上には、彼の武器である輪刀が輝いていた。

彼の輪刀は、照日大鏡と同じ素材でできている。故に、輪刀を用いて太陽光を収束、照射することも可能となる。高熱の鎚が、三成をその場に抑え付けていた。

常時体を焼かれています、恐慌は発動できない。無理に光の呪縛を打ち破る力も、今の三成には残されていなかった。歯を食いしばり、憎悪を煮詰めた眼で元就を睨む。

「毛利！ 毛オ利イイイイイイツ！！！」

その殺意を、巖島で対面した時と同様、涼しい顔で受け流す。

「では、死ね」

輪刀を握み、演舞を踊るように、動けぬ三成に向けて振るう。

「日を抱き、腹を暴^{あらわ}す徒^{とも}よ——」

踊る刃が肉を裂き、鮮血が体を染める。輪刀を二つに分割し、両の手で持ち独楽のように回転する。刃の一撃一撃が、三成の命を削っていく。

「慧の光に収めたもう」

空中に投げた輪刀から、再度太陽光が照射される。

日輪への崇敬を示すように、両手を掲げる毛利。これは、勝利を讃える祝福の光。だが三成にとっては、死へと誘う絶望の光となる。

「……………かはっ」

三成の両目と唇から、滝のように血が流れる。この瞬間彼の生命の糸は、切れた。

最期に脳裏に浮かぶのは、誰よりも敬愛する主君の貌。

「……………ひでよし……………さ……………ま……………」

その名を呼びながら、前のめりに倒れる三成。豊臣秀吉と同様、彼は最期の時まで、後退することは無かった。

いかな凶獣も、死ねば等しく骸^{むくろ}。憎悪に滾っていた瞳も、もはや光を灯すことはない。

三成の亡骸を一瞥する毛利の眼にもまた、感情の色は窺えない。これまで自分は、数え切れない人間を陥れ、裏切り、死に至らしめて来た。

眼前の骸もまた、その膨大な死者の一人でしかない。彼の心の鏡に映るものは、毛利家の現在と未来だけだ。それに、三成を屠つても、彼には処理すべき問題がまだ残っている。

「毛利!!」

後ろから声を掛けられ、振り返る。そこに立っていたのは、満身創痍の長曾我部元親だった。

毛利は煩わしそうに、僅かに顔をしかめた。

「何だ、貴様。まだ生きていたのか」

長曾我部元親は困惑していた。眼前の光景は、元親の想像を遙かに越えるものだった。

「家、康……?」

徳川家康は、首から上を失い、倒れ伏していた。石田三成もまた、毛利の足元で絶命している。真相を家康に問うつもりでいた元親は、事態の急変に絶句するしかなかった。

「どういつ、ことだ? 何で、毛利、お前と石田は手を組んでいたんじゃない?」

「ふん」

無知を嘲るように、元就は鼻を鳴らす。

「愚者は愚者らしく、何も知らぬままでおればよいものを」
おろかも

「どういう意味だ……」

「大方、徳川に四国壊滅の真相を問い質すつもりで来たのであろう」
「！」

思っていたことをぴたりと言い当てられ、元親の背筋に寒気が走った。脳内が警告を発している。これ以上、毛利やっの話聞いてはならない。それは、長曾我部元親に、決定的な破滅をもたらすことになるだろうと。

元就は、覚悟を決める時など与えず、無慈悲に真実を告げる。

「代わりに我が答えてやろう。貴様の留守を狙った四国の壊滅……
全て、我が仕組んだことよ」

「な……っ!？」

眩暈がする。地面が揺らぐような感覚が、脳内を襲う。それでも、彼の芯は冷静に、毛利の言葉を受け止めていた。元親の中で、急速に真相が組み上げられて行く。

生存者は一人もいなかった。現場には、徳川の旗だけが残されていた。毛利からの休戦の申し出。殺された使者。

（アニキ、俺あまだ信じられないです。あの家康さんが……）
（あの毛利が休戦なんて、本気ですかね？何か罠を仕掛けているん

じゃ……）」

怒りで見落としていた、数々の細かい疑問。今告げられた真相と組み合わせることで、裏に潜んだ巨大な奸計が浮かび上がる。

自分がおかした、取り返しのない過ちも……

「う、うおあああああああつ！！ 毛利、てめええええええええつ！！」

滂沱の涙を流し、絶叫する元親。碇槍の先から、炎が噴出する。

「殺す……！ 殺してやる……！！」

かつてない程に猛る長曾我部の怒気に当てられても、毛利は眉一つ動かさない。

「……馴れ合いを好む貴様が、殺してやる、か」

火炎を纏った碇槍の一撃を、輪刀で悠々と受ける。

「我を仇と憎んでそれで満足か？ 四国壊滅の憂き目を見たのは、漫遊していた貴様の罪でもあるう」

「……」

そんなことは、言われなくても分かっている。

毛利元就がどれ程狡猾で、油断のならない男かは、長年戦つて来て分かつていたはず。そんな危険な敵を傍に残したまま、自分は四国を空けてしまった。それは驕りであり、油断であり、罪だ。

自分の慢心が、部下を死なせ、無実の友を疑い、拳げ句の果てに

友の第一の家臣を殺してしまった。

「俺は……俺を許せねえ！！」

胸を覆う悲嘆を吐き出すように、長曾我部元親は吠える。とめどなく流れる涙が、空中へと散った。

「だが毛利！ あいつらを殺したてめえだけは……てめえだけは！
何が何でも道連れにしてやる！！」

残る力を振り絞り、槍に極大の火炎を纏わせる。元より、自分は瀕死の重傷だ。ほぼ無傷の毛利相手に、ともに勝てるとは思われない。

刺し違えてでも奴を仕留め、仇を討ち、愚かな己自身に罰を下す

「ああ、貴方は何て、可哀相なお方……」

「……がつ」

長曾我部の胸板に、赤い花が咲く。彼の背後には、覆面の怪僧、
天海が立っていた。

「てめえ……は……」

血に染まった銀月が、赤い雫を垂らす。天海の手にした大鎌は、背中から元親の心臓を貫いていた。

「悲しいでしょう？ 苦しいでしょう？ 償いよの無い罪に、取り返しのつかない過ちに苛まれるのは。貴方はもう、生きているだけで辛いはずだ。ならば、速やかに人生の幕を引いて差し上げるこそ、慈悲というもの」

言葉とは裏腹に、天海の顔は喜色に蕩けている。元親の苦悩が、楽しくてたまらないという風に。

元親の全身から、急速に力が抜けていく。残った本能で碇槍を離すまいと、震える手に力を込める。だが、彼には最後の反撃さえ許されなかった。

元就は、輪刀を袈裟がけに振るい、元親の体を容赦無く斬り裂いた。

「――ッ！――」

「長曾我部元親。貴様は、徳川の戦力を削る上で、それなりに役に立った。だが、もう貴様に価値はない。用済みの駒が、いつまでもさえず轉るな」

三成を殺した時と同様、元就は一切の情を込めぬ目で、死に逝く元親を見やる。

「すまねえ……家康…… すまねえ……野郎ども……」

虚ろな眼差しは、既にこの世の光景を映してはいない。ただ、後

悔だけを胸に抱いて……長曾我部元親は、静かに崩れ落ちた。

「ああ！ 可哀想な元親さん！ あの世では、部下の皆さんや竹千代と再会できるといいですね。いえ、きっと会えますよ。うふふふふふ……」

長曾我部元親の死体を見下ろして、恍惚に体を震わせる天海。

極上の苦悩、極上の悲嘆。そして、絶望の果ての死。自分はこれを見たいがために、毛利元就あそひでと手を組んだ。

家康と戦ったのも、こうやって背後から元親を刺したのも……いや、更に遡れば、小早川秀秋の下へ向かったのも、総て毛利元就が指示したことだ。天海も、毛利の指示通りに行動した。その方が、彼の“渴望”を満たすのに都合がよかったからだ。

「それにしても、利用した拳句にあっさり切り捨てるとは。酷いことをなさりますねえ。是非お聞きしたい。今、どのような気持ちなのか」

言葉では糾弾しながらも、その顔から笑みは消えていない。この問いの裏には、“同類”への期待が込められていた。毛利元就は、答えを返すのも下らぬという風に答えた。

「貴様は石を退かすのに、いちいち石の気持ちを考えるのか？」

家康の平和への志も、三成の復讐に懸ける執念も、元親の部下への想いも、彼にとっては全てが無価値な石樽いしくれでしかないのだ。完成された存在に、他者に影響される余地などない。あつてはならない。それは、天海の価値観とは異なるもの。だがそれでも、彼は元就

の問いに満足した。自分以外の総てを踏み台にして栄華を目指す彼の在り方は、世に深い苦しみと悲しみをばら撒く。

彼と共にいれば、極上の苦悩を思ふ存分堪能できる。だからこそ自分は、彼と手を組む道を選んだのだ。そう、自分と元就が最初に戦った時に、まだ天海という名を名乗る前から……

「毛利様、やはり貴方は私の……」

そう言いかけて、言葉を切る。毛利も、天海に警戒を払いながらも、目は別の場所を見ていた。

そこには、御輿に乗って空に浮き、包帯を血に染めた大谷吉継がいた。彼は、茫然と眼下の惨状を見下ろしている。彼の視線は、石田三成に止まったまま離れない。

「三……成……」

数年前……大坂城に豊臣の有力者が集まり、茶会が催された。その中には、当時めきめきと頭角を現しつつあった石田三成や、大谷吉継もいた。招かれた豊臣諸将は、親睦を深める意味で、茶碗に入った茶を一口ずつ飲んで、次の者へ回していった。序列からすれば、大谷吉継もこの茶を飲む資格を持っている。しかし、この時彼が口をつけた茶碗は誰もが嫌い、後の者達は病気の感染を恐れ、飲むふりをするだけであった。

大谷吉継にとっては、分かり切ったことだった。親睦を深める茶会が聞いて呆れる。分かっているながら、彼は無視した。気にならなかったわけではない。彼は、心の苦痛を、残らず怨念として内に溜め込む習性を身に着けていた。

だが……石田三成だけは、何の躊躇いもなく茶を飲み干してみせた。諸将は驚いたが、すぐに表情を切り替え、動揺を顔に出すまいと努めている。その姿が何とも滑稽であった。

さて、あの時、自分は一体どんな顔をしていたのか――

それは、在りし日の記憶。彼にとって数少ない、忘れたいと思わなかった想い出だった。

彼の記憶の大半を占めるのは、苦痛と絶望の日々。病に倒れ、床に臥せっている間、彼はずっと自らの境遇を呪い続けていた。世界の総てが、彼を嘲笑っているように思えてならなかった。だから、彼は世界を不幸に陥れ、総てを自分と同じ色に染めようと思ったのだ。不幸に濁り腐った黒一色に。

だが、その黒に残った一点の光に、彼は気付かなかった。いや、分かっているながら無視した。

どれだけ世界の不幸を望んでも……三成の不幸だけは、望まなかったということに。

それは、大谷吉継という男の生きる意味を根底から覆す、致命的な矛盾だ。これを認めてしまえば、大谷吉継の人生は崩壊する。他

者を妬み、不幸にすることに総てを懸けて生きてきた。そんな自分に、幸福らしいものが、あつてはならない。

だから、彼は自分自身に嘘を吐いた。それ事態は容易いことだった。彼は常に、他者に対して嘘しか口にしなかったのだから。

敵を、仲間を、盟友までも偽り、騙し、陥れながら、自分自身に嘘を吐き続けてここまで来たのだ。

今まで彼は、悩むことも迷うこともなかった。総てを、他者への嫉妬という一点に落とし込むことで、己の心から目を逸らし続けて来たのだ。そうしなければ、生きられなかった。そうしなければ、己を襲う不幸に押し潰されていた。

しかし、その嘘はもう暴かれた。自分自身の行為によつて、もはや誤魔化しようの無いほどに。自らの行いに悩み惑う、至極人間らしい反応を、ここに來て彼は取り戻していた。

これから自分はどう生きるべきか。自分の本当の望みとは、一体何なのか――

だが、それを定める前に――

「お、おおおおお…… おおおおおおおおおおおお
おおおおおっ！……！」

彼が目にしたものは、石田三成の亡骸だった。

幸福^{ひかり}は失われた。

後に残ったものは、黒一色で塗り潰された、底無しの闇だけ。

——こうして、大谷吉継は“完成”された。

「ヒ、ヒヒヒヒヒ、ヒヒヒヒヒ……ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

腹から絞り出すような嘆きの後、大谷吉継は体を震わせ、笑っていた。

「……愚かな、とうとう頭まで壊れたか」

侮蔑の言葉と共に、引導を渡さんと輪刀を構える毛利。だが、大谷吉継は突然笑いを止めてこう答えた。

「ぬしに言われたくはないなア。ぬしとて、とうに心など死んでい
るであろつに」

大谷は、いつも毛利に話し掛けていたのと同じ、親しげな口調で

話す。先程の悲嘆ぶりと到結び付かない分、逆に不気味さが感じられた。

天海は、微笑みを浮かべたまま何もせず、ただ事態の推移を見守っている。

「毛利よ……ぬしには、してやられたわ。我を含め、この戦場に集った全ての者がぬしに欺かれた。これで天下はぬしのもの。どうよ、満足か？」

「……………」

「我らを始め、この戦でぬしの踏み台になった者共は数知れまい。礼を言わせて貰おう、毛利。ぬしのお陰で、大勢の人間が不幸になった。屍と不幸に満ち満ちた世界……これぞ、われの待ち望んだ光景よ」

「それが貴様の、“本当の目的”か」

「いかにも。ぬしと手を組んだのは正解であつた。北条は死んだ。伊達は死んだ。長曾我部は死んだ。徳川も死んだ。やつらを慕う者どもも、皆道連れで不幸になる」

大谷吉継は、一旦言葉を切る。

「そして……三成も、死んだ」

暖寒定かならぬ彼の口調が、この時だけは、氷のように冷たくなつた。

「だが……まだ足りぬ」

大谷の右手は、いつしか自分の左腕を掻きまづっていた。

「世に不幸の星を降らすには、まだ足らぬのだ。何故か分かるな、

毛利……」

「……………」

「ぬしよ。皆が仲良く不幸になっておるのに、ぬしだけは幸福なままだ。これはいかん。これでは星は降らぬ。我の望みは叶えられん。それに……………」

大谷は、一度言葉を切り、しわがれた声で咆哮する。

「ぬしは三成を殺した！ 三成を裏切った！ それだけは許し難い
イイイイ！！」

毛利も初めて見る、大谷吉継の怒りの感情だった。しかし、その
激情は、波が引くように急速に冷めていく。

「だが、まだぬしとは戦わぬ。この体では、とてもぬしには勝て
ぬでな」

今の大谷は、正気と狂気の狭間を漂っていた。何が嘘で何が真実
なのか、もはや彼自身にも判別できない。彼に残っているものは、
内に抱え切れぬほどの憎悪と怨念だけだ。

彼は今や、その妄執だけで動いている。毛利元就が、中国の繁栄
という目的だけで動いているように。

対面する両者は、この時真に同胞と成った。

目的のために、感情も動揺も総てを切り捨てられる精神性。故に、
軍師・大谷吉継はここで無駄に命を散らす愚を犯さない。どうすれ

ば己の望みを達成できるかを、冷静に判断する。三成を庇って伊達政宗に付けられた傷痕は、未だ血を流し続けている。ここに辿り着くだけでも必死だったのだ。

「それに、今ぬしを殺すより、天下を取って幸の絶頂にいるぬしを蹴落とす方が、より大きな不幸を生める。饑^{はなむけ}として、ぬしに、この言葉を贈ろう」

「貴様の都合など、私の知ったことか。貴様はここで死ね」

元就の輪刀に光が凝縮される。空中の大谷目掛けて、焦熱の太陽光線を照射する。

「悔ゆる、無道の人と事を起こしたること。三年を出でずして、われ此恨を報ぜん」

三年以内に報復を果たす。それは、大谷から毛利への宣戦布告。

同時に空中で起こる爆発。大谷吉継は、光と煙の中へと消えていった。

光が晴れた後……そこには何も残っていなかった。

「……………逃げたか」

輪刀を構え直す。逃げたのは、自分のすぐ傍にいる天海に警戒

を払っていたためだ。長曾我部にしたことを、自分にせぬとは言いい切れない。

横を見てみれば、天海も姿を消していた。まあいい。奴については、手を打っている。

大谷吉継の呪いは、彼の心に些かの痛痒も与えなかった。葬り去るべき敵が増えた……それだけのことだ。呪いとは、凝縮した悪意を人にぶつける行いだ。人は、それによって己の罪悪感を刺激され、悩み、苦しむようになる。だが、毛利元就はそんな感情とは最初から無縁だ。

悪意も、善意も、殺意も、好意も、彼には等しく空気の如きものなのだから。

第五章 妄執輪廻（八）（後書き）

実は前回の入れ替わりは、毛利隆元を「元就」と表記すれば嘘の記述を書いたことになるが、ただ単に「毛利」と記しているだけならばアンフェアではない、毛利元就は基本的に名字で表記されることを活用した、読者に向けた叙述トリックのつもりだったのですが気づかれた方はいらっしゃるでしょうか。まあ推理小説とか読んでいないとこの手のトリックは馴染みが薄いと思いますけど。

第五章 妄執輪廻（九）

「うふ、うふふふ……これでもうしばらくは、退屈しないで済みそうですね」

大谷吉継。彼は近い内に……遅くとも三年以内に、毛利元就に対して戦争を起こすだろう。そうなれば、また大勢の人が死ぬ。自分も、今しばらくは楽しめそうだ。

「ああ、何て恐ろしい……かわき僧の身では、ただ祈ることしかできません」

そんなことを嘯うそいていると……

「天海さまあゝ」

間の抜けた声が、聴こえて来る。聞き慣れた声の主は、小早川秀秋だった。

彼は死んではいなかった。家康と戦う際、彼がいると邪魔だったので遠ざけた……というより、自分から逃げていったのだ。

「はあ、怖かった……やっぱ僕には天海様しかいないよお、今まで通り、僕を助けてよお」

「やれやれ、仕方ありませんね、金吾さんは」

天海は肩を竦める。涙と鼻水で顔を濡らした金吾は、天海へと飛びついた。

天海の顔が、一瞬、驚愕と苦悶に歪んだ。

腹部が焼けるように熱い。それは、彼が常に味わい、また与えてきた、最も親しい隣人……痛みだった。

天海の脇腹に、深い刀傷が刻まれていた。これまでの戦いで負ったものではない。傷口からは、どくどくと血が流れ続けている。一体、何処から攻撃を受けたのか。

「ひ、ひiiiiiiiiiiii!!」

金吾は、悲鳴を上げて、後ろ向きのまま遠ざかっていく。次は自分が攻撃されるかもしれない。極自然な反応だ。逃げる拍子に、金吾は、手から何かを落とした。それは、つい最近使ったばかりの、鮮血で染まった小太刀だった。

どれだけありえないことでも、最早答えは明白だ。

「……そう来ましたか。さすがに、この展開は……想像してませんでしたよ……」

「ご、ごめんなさい！　だ、だって、毛利さまが、言う通りにしなかったら酷い目に遭わすって……ば、僕だって、こんなことしたくなかったけど……で、でもお……」

金吾の顔は、脅え切っていた。同時に、この状況でもまだ自分だけは助かりたい、甘えと卑屈さが感じられた。申し訳なさそうな態度は、それで自分を許して貰いたいという、保身の裏返しだ。

「ああ……」

思い返せば、彼は常に脅えていた。それは、いつもの金吾と何ら変わらぬ態度であり、戦場ならば尚のことだった。違和感らしきものは、何一つ無かったのだ。

だから、彼が本当は何に脅えていたのか、気付くことは出来なかった。彼が恐れ、迷っていたのは、東西のどちらに付くのかということではなく、自分の演技を見破られることだったのだ。

天海は、それについて気付けなかった。金吾は、いつでもどこでも、常に挙動不審で脅えていた男だったから。恐怖を持って恐怖を隠す。これこそが、最高の偽装だ。そして恐怖に屈した者ほど、そこから逃げようと、時に大胆な行動を取る。

毛利元就は、小早川秀秋という駒の扱い方を、誰より熟知していた。

「うふ、うふふふ……」

ふらつきながらも、天海は鎌を握り締める。確かに深手を負ったが、まだ致命傷ではない。だが、この策を仕込んだのが毛利元就ならば、まだ何かあるはず。

案の定、彼の元に、大量の矢と銃弾が飛んで来た。天海は、鎌を振るって弾くが、この体は万全には遠い。少なからずその身に受けてしまう。

「……最初、元就君の話を聞いた時は半信半疑だったけど、まさか本当に最後に総取りしてしまうなんてねえ」

やや大仰な程、格式張った歩き方で、その男はやって来た。薄い

青緑色の衣装に身を包んだひよる長い男で、手には細身の直剣を持ち、中程で天に向かって跳ねた、特徴的な口髭をしている。

「まあ、吾輩にとつては、吾輩の権利さえ保障してくれるなら、東西のどちらが勝とうが構わなかったわけだけど」

彼の名は最上義光。もがみよしあき “羽州の狐”の異名を取る大名で、弱体化した伊達に代わって東北地方で大きな権力を持っている。

「ほう……貴方も毛利様と手を……？」

「まあ、それはつい先ほどのことなだけどね」

最上に東軍と敵対するつもりは無かった。彼は兼ねてより徳川家康と懇意にしている。東軍勝利の暁には、相応以上の報償が貰えるだろう。あえて西軍に勝たせる利点はどこにもない。

だが、戦は生き物。いかに東軍が優位とはいえ、それは勝利を確定するほどの差ではない。

奇策や奇跡で、西軍の大逆転が起こる可能性も、決して低くないのだ。特に徳川家康。彼は東軍の総大将にも関わらず、石田三成個人との因縁に入れ込み過ぎているくらいがあった。

実際、徳川家康は石田三成との一騎打ちに敗れて死亡している。

故に、最上が取るべきは、東西のどちらが勝つても、命と領土を保持し続けることの出来る道だった。

西軍の長はあの凶王三成だ。もし西軍が勝ったならば、彼は東軍に組した者を皆殺しにするだろう。だが、西軍との戦いの中で確実に石田三成を始末することが出来れば……東西のどちらが勝とうとも、上手い具合に立ち回る自信があった。だから、最上は毛利との取引に応じたのだ。とはいえ、この二人は、詳細な情報のやり取りをしていたわけではない。

最上は毛利を信用していたわけではないし、毛利も同じこと。影武者による自爆作戦についても、最上は実際起こるまでは知らなかった。

最上が結んだ取引内容は、石田三成が死亡し、尚且つ毛利軍の勝利が確定した場合のみ、毛利軍に協力する。それまでは、極力動かず、防戦に徹する。その過程で、毛利軍に出る被害を、毛利元就は全て容認した。

これによって、毛利元就は勝利を盤石とし、最上は東北のみならず東日本一帯の支配権を得ることが約束される。

「吾輩は高貴な狐。強くて、賢い、狐である！ 本当の勝者とはただ腕が立つだけの者ではない。頭を使い、敵を、味方を欺き、最後まで生き残った者のことを言うのだよ。」

ま、元就君とは他にも気が合うところはあったしね。例えば、郷土愛に溢れるところとか。それに……」

最上は飄々とした態度を崩さぬも、常におどけていた彼の顔に、怒りの色が浮かんだ。

「吾輩が敬愛する信長公。その仇討ちが出来るとあらば、ね」

最上義光が指揮剣を振るうと同時に、彼の兵達が一斉に攻撃を開始する。

「ふ……ふふふふ……いいでしょう。信長公、竹千代、凶王様……
……今や冥府の方が、ずっと賑やかなことになっていそうですね……」

哄笑する天海は、腹部から流れる血で地面が染まるのも無視して、

かくして、数多の犠牲を払った関ヶ原において、毛利元就は残存戦力の全てを掌握するに至ったのだ。それは、彼が次代の天下人の座に付いたことを意味していた。

毛利元就は、山頂から戦場を見下ろし、輪刀を掲げて高らかに宣言する。彼の体は、その前途を祝福するかのように、陽光に照り輝いていた。

昇陽の時、ここに成り。

「我が名は毛利元就！ 天下分け目の勝利者よ！！」

叢くさむらの中で、全身を包帯で巻いた肉の塊が芋虫のように這っていた。血臭と、それ以外の強い臭いを、辺りに立ち上らせている。

大谷吉継は、荒く息を吐く。あそこから逃げ出したはいいが、この体は既に死に体だ。三年どころか、もし毛利の追っ手に見つかれば、その時点で自分の命は尽きる。

「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒ……」

にも関わらず、口からは笑い声しか漏れでて来ない。実に清々しい気分だった。もはや己に迷いはない。最後に残っていた人間らしいと思しき部分も、三成の死と共に消え去った。世界中の人間を不幸にする、そこに矛盾は存在しないのだ。これから先は、世界を呪

いながら、妄執だけを糧に生きて行く。生き続ける。自分にはもう、それしか無いからだ。

これでいい……もうわれは、“誰の幸福も望まずに済む”。

迷いも惑いも何もなく、ただ、不幸だけを追い求めて――

足音を、草を掻き分ける音が聞こえてくる。毛利軍だろうか。もし見つければ、今のわれに抗う術は無いな。他人事のようにそう考えていると……

「ぎゃあっ！」

「ぐざい！」

悲鳴が聞こえると同時に、兵士達の気配が一人一人消えていく。それが全て消えるまで、長い時間は掛からなかった。悲鳴と悲鳴の感覚は刹那に満たない。恐るべき早業だった。

この時、大谷は見た。

はらりと落ちる、漆黒の羽根を……

「御苦労、風魔」

気配は全て消えた訳ではなかった。自分を除いて、まだ一人分残っている。一人にも関わらず、その男は相手に話し掛けていた。それはその相手が、姿を見せながらも、完全に気配を絶つほどの手練であることを意味していた。

「おや……これはこれは」

喋っていた男の方が、こちらに近づいてくる。いざとなれば、数珠をぶつけてやろうと念を込める。首を上げられないので顔はよく見えないが、腰に刀を差し、黒衣の上に白い羽織を着込んでいた。

「誰かと思えば、卿^{けい}はもしや、西軍の軍師、大谷吉継殿ではないかね」

男は包帯塗れの刑部を見ても、まるで動じることなく話し掛ける。大谷は、完全に初対面だった。

「いや、喋らなくていい。何故卿がそこにいるのか。おおよその見当はつくとも。後の方で顔を出すつもりだったが、機会を伺っている内に戦が終わってしまった。あの太閤の跡をどちらが継ぐのか……人並み程度に興味があったのだが。まさかあのような結果に終わるとは……」

男は笑っているように思えた。

「まあ、終わったことを論じるのは、また余裕がある時にしよう。それよりも、こうして出会えたのも何かの縁だ。私と来ないかね？ 悪いようにはしない」

男は、大谷の心を見透かすように告げる。

「まだ、戦いたいのだろう？ 私としても、この天下、もう少し掻き乱してみたい。それを望む者が、この世にはまだまだ大勢いるのだよ」

「……………」

「そう、例えば、“友人”の妹君……彼女はきつと、卿のお気に召すのではないかな？」

正直、男の言うことなど殆ど脳に入らなかった。しかし、これで終わりではない。辛うじてそれだけは理解出来た。

薄れ行く意識の中、われは――

関ヶ原の戦いの後、毛利は風の速さで直ちに本拠地、安芸へと帰還する。長曾我部元親と大友宗麟、立花宗茂が関ヶ原で倒れたことで、毛利は労せずして四国と九州を手中に収めた。更に東軍で唯一勢力を残していた最上義光も、毛利に恭順を誓った。これで、毛利元就は日本の大半を手中に収めたことになる。

毛利元就は、全国に安芸への遷都と安芸幕府設置の報を発した。彼は帝も既に確保しており、ここに至るまでの流れは、予め周到に計画されたものと思えなかった。程無くして、これに反発する徳川、豊臣の残党や、漁夫の利を狙う地方領主達が決起。一斉に安芸へと進軍する。しかし、関ヶ原で大半の戦力を温存していた毛利は、その尽くを振り返り討ちにしてみせた。

有能な将が不在の軍など烏合の衆。毛利軍の戦術の網に嵌めとられ、次々に奈落へ落ちていった。こうして、毛利元就は自らの統べる天下に向けて着実に基盤を固めていった。

毛利元就が掲げた思想は“天下統制”。天下統一などはただの通

過点。法によつて秩序を、武力によつて恐怖を与え、流されやすい民衆を統制していこうと言うものだ。彼はそのための政策を、着実に、かつ急速に進めていった。

東軍、特に徳川軍の生き残りの心中は複雑だ。毛利元就の策で、東軍は甚大な被害を被った。しかし、彼ら全員が敬愛する徳川家康の仇、石田三成を仕留めたのは、他ならぬ毛利なのだ。毛利に敵対すべきか否か、答えの出ない議論が延々と続いた。豊臣の残党も、似たような状況だった。最終的にそれぞれの軍は二派に分裂。半減した戦力と拙い連携で勝てるはずもなく、毛利軍に確固撃破されていった。なお、その裏には毛利元就の巧妙極まる離間策があつた。この状況に、未だ独立を保っていた上杉、武田、前田の諸大名は、しかし何も手を打つことが出来ずにいた。関ヶ原の頃から、領土を荒らし回る敵対勢力のために。

その名は凶王軍。

織田軍の残党を中核とし、野盗に山賊、ならず者らが集まり、各地で略奪や破壊を繰り返している。織田の残党は、旗印として織田信長の妹にして第五天魔王、お市を担ぎ上げてはいるが、実質的に彼らを統べているのは、“凶王”^{きょうおう}と呼ばれる謎の人物だ。全身を白い布で包み、摩訶不思議な術を操ることから、呪い師^{まじな}と専らの噂である。

凶王とは、関ヶ原で死んだ石田三成の異名であるが、現在の凶王はその意味が些か異なる。凶王の凶は、凶暴、凶悪の凶というより、吉凶、大凶の凶、この世全ての不幸を司る王という意味なのだ。

毛利元就に敗北し、地方へ逃げ延びて来た兵達を吸収し、近年更にその勢力を拡張しつつある。

凶王軍の構成員は、皆生氣を感じさせぬ虚ろな瞳をしていた。彼

らは皆、戦に敗れ、人生に絶望した敗残兵たちだ。己の背負った不幸を許容出来ず、世界を呪い、憎み続けている。

そんな彼らに“凶王”は囁いた。

——聞け、負け狗ども。幸せになりたいか？ 無駄よ無駄よ。ぬしらが勝ち取れる幸せなこの世にあるものか。だが、ぬしらのような負け狗でも、簡単に幸せになれる方法がある。

——不幸をばら撒け。他者を不幸にせよ。さすれば、ぬしらだけが不幸ではなくなる。他人の不幸を眺めるのは実に愉しいぞ。己が不幸であることを忘れられる……

凶王の託宣は、彼らの頭に染み渡った。こうして凶王軍は、不幸に憑かれた狂信者の集まりと化していった。

それでいて、凶王軍は凶王の的確な指揮の下で動く、機能的な軍隊だった。拠点を決めず、神出鬼没な襲撃を繰り返すこともあり、毛利軍を始めとする各勢力は、凶王軍の跳梁跋扈に苦しめられていた。

「でええええい!!」

槍に炎を纏わせ、迫る敵を焼き払う。赤い着物に二対の槍を携えた、精悍な顔立ちの若者、彼の名は真田幸村。病に倒れた武田信玄に代わり、甲斐の総大将を務める若武者である。幸村は、武田の領

内に押し寄せる凶王軍を相手に奮戦していた。数は多くとも、浪人や流民が中心となった凶王軍では、甲斐の若虎、真田幸村の敵ではない。

「これ以上の戦いは無益なり！ 各々方、武器を捨て投降なされよ！！」

だが、凶王軍の兵は、幸村の声など聞こえぬように進軍を止めない。

「何と言う生氣に溢れた姿……」

「妬ましい……羨ましい……」

「お前も、お前も不幸になれ……」

「くっ……！」

聞く耳持たぬ凶王軍に、幸村はやむなく反撃する。彼の後ろには、護るべき甲斐の民がいるのだ。

「はあ、はあ……」

敵を壊滅させた後、槍を地面に刺し、荒く息を吐く。凶王軍は、確かに真田幸村の敵ではない。しかし、彼らは時も場所も選ばずに、それどころか相手が最も嫌がるであろう機を狙い済まして襲撃してくる。これに対応するには、常時警戒しておかねばならず、休む暇もない戦いを強いられることになる。

「大丈夫かい、旦那」

幸村の側に、迷彩色の忍装束を着た忍が降り立つ。武田の忍にして、現在は甲斐の副将である猿飛佐助だ。彼は、別方向に現れた敵

軍を、先程壊滅させてきたところだ。

「少しは休んだらどう？もう何日も寝てないでしょ」

「そういうわけにもいかぬ。敵はいつ襲って来るか分かんのだ。拙者の気の緩みで、甲斐の民を傷付けるようなことがあれば、お館様に顔向け出来ぬ」

幸村の答えは国を治める者として、至極最もなものだ。佐助は肩を疎めるだけで、それ以上何も言わなかった。

そう言う佐助も、幸村同様不眠不休で働き続けている。忍はそれが本分のようなもので、疲労を表に出すことはない。しかし、常に飄々とした態度でいる彼も、言葉にどこか重苦しい調子が混ざるのを隠し切れなかった。

二人とも分かっていた。このまま戦い続けても、いずれ力尽きて倒れることになる。広範囲に姿を隠した敵を叩くには、相当以上の軍勢が必要だ。だが、先の戦で敗れ、弱体化著しい武田に、そんな兵力を用意できるはずもなかった。

「……佐助、安芸に向かってはくれぬか」

それだけで、佐助は幸村の意図を察した。現在、日本で最も巨大な勢力を保持しているのは、安芸の毛利家だ。毛利元就に援軍を出して貰い、足りない兵力を補うのだ。そして一気に、甲斐から凶王軍を駆逐する。

だが、相手は冷酷非道で知られる毛利元就。何の見返りもなくこちらの要望が受け入れられるとも思えない。毛利幕府への帰属……などという生易しいものでは済まないことは確実だ。容赦のない毛利はこれを期に武田の領地を丸ごと奪い取る気だろう。このことは、家臣一同を交えて散々話し合った。毛利に頼ることの危険性な

ど幸村は百も承知だ。その上で、佐助は今一度確認する。

「……それが、大将の決断なんだな」

幸村は、苦渋を顔に滲ませながらも、迷いを振り切るように、しかと頷く。

幸村とて、武田信玄の愛した甲斐の地を、みすみす毛利に明け渡したくはない。しかし、自分の意地と我が儘を押し通せば、大勢の民や兵が犠牲になる。信玄が倒れた直後も、拙い采配のせいで、少なからぬ犠牲を出した。

「……民こそが国の宝。国が残っても、民の命が失われれば何にもならぬ。この真田幸村……恥を偲んでも……お館様の名に泥を塗ることになるうとも、民を守る道を選ぼうと思う」

戦も政治も、結局国を動かすための手段でしかない。何を守り、何を捨てるか。一国の主が真に成すべきことは、善きも悪しきも全てを飲み込んだ上で、決断を下すことなのだ。

佐助は、それが彼が一人前の将になりつつある証だと思いつつも、そうせざるを得ない今の状況を憂いてもいた。

「……それが大将の決断なら、俺から言うことは何もねえさ。じゃ、ちよつくら行つてくらあ」

本音を言えば、あまり手を組みたくない相手だ。上杉や前田となら、知らぬ相手ではないし、そう無体な条件を突き付けられることもないだろう。しかし、今はそれも凶王軍の襲撃に晒されている。援助が出来る余裕があるとは思えない。

もしかすると、毛利が凶王軍討伐に積極的でなかったのは、地方大名が自発的に恭順を誓うよう、仕向ける為ではなかったのか……

そう邪推してしまう。

幸村は空を見上げる。

（この国はどこに向かうのであろうか）

折しも曇り空で、先の見えないこの国の行く末を象徴しているようだった。甲斐は未だ苦境から脱せず、信玄の病状も悪化するばかり。

（いや、歎いていても始まらぬ。今自分に何ができるか、何を成さねばならぬかを考えねば。そうでなければ、お館様や、政宗殿にも笑われよう）

幸村は、尊敬する師と、ついに決着をつけることなく逝った好敵手を思う。

現在、奥州は関ヶ原から生還した片倉小十郎が中心となって、押し寄せる滅亡の危機に懸命に抗っている。関ヶ原で兵力を損なった分、武田以上に苦しい状況にあるはずだ。自分が弱音を吐いているわけにはいかない。

赤い鉢巻きを締め直し、前を見て歩き出す。

その時……

「……」

上空から、無数の光の玉が降り注ぐ。幸村と佐助は、武器を振ってそれを打ち払う。それは、半透明の大きな数珠だった。

「何奴ツ!!」

誰^{すいか}何する幸村。その時佐助は気付いた。土煙に紛れて、幸村の傍に、黒い影が近付いていることに。

「旦那ア!!」

駆け出す佐助。翻る凶刃。舞い散るは漆黒の羽。

そして……真紅^{あか}を染める鮮血^{あか}。

幸よ死ね。福よ消えよ。愛よ潰えよ。希望よ砕けよ。勇気よ果てよ。

誰も彼もが黒に沈め。

ヒ、ヒヒヒヒヒヒ……ヒッヒッヒッヒッヒッヒッヒッヒッ……!

これは戦国乱世。幾多の武将が夢と野望を賭けて覇権を争い……

一握りの栄華の陰で、数多の死と絶望が産み落とされた時代である。

第五章 妄執輪廻（九）（後書き）

何かえらく駆け足になってしまいましたが、本編に当たる文章はここで終わりです。途中までの構想では本当にここまででした。

次回からはエンディングですが、BASARAシリーズらしくマルチエンディングで二種類あります。

外からは分からないようにタイトル表記は五章のままで続けますが内容は最終章です。タイトル書くと即ネタバレになってしまうので

……

第五章（十）↓毛利元就エンド

第五章（十一）↓大谷吉継エンド

先に言っておくと、今回新しく出たキャラクターに出番は無いも同然です。あくまで主役二名に焦点を絞ったエンディングになります……と言つか既に途中までは書いてます。

次回投稿分で完結を予定しています。

第五章 妄執輪廻（十）

「……ここは……」

大谷吉継が目を覚ました時、彼は暗い荒野にいた。ごつごつした岩肌の地面が地平線の果てまで広がっている。空は鈍色に曇り、吹き荒ぶ風が背を震わせる。

周囲を見回す。何故、自分はこんなところにいるのか。その前に、自分は一体何をしていたのか。思い出せない。自分がここにいると近くした以前の記憶が、濃い靄が掛かったように判然としない。

「何を呆けている、刑部」

突然、背後から懐かしい声が聞こえた。そこに立っていたのは……

「三成……」

石田三成。前に伸びた銀髪の下の不機嫌な顔つき、この世の総てを憎むかのような剣呑な殺気。彼の知る石田三成、そのままの姿だった。

だが、そんなことは在り得ない。三成は関ヶ原で死んだはずだ。その彼がここにいるとなれば……

「ここは、あの世か。そうか、われは毛利に敗れて、それで……」

「何をごちゃごちゃ言っている。往くぞ、刑部」

「往く？ どこへ？」

未だ状況を把握できぬ大谷に、三成はさも当然のように語る。

「決まっているだろう。秀吉様を探す」

その答えに、大谷は最初呆然となるが、すぐに苦笑する。

「……ククツ、そうであるな。ここがあの世ならば、ぬしがそう考えるのは全く自然なことよ」

彼は紛れもなく三成だ。一度死んでも、何も変わっていない。

その時、地平線の前から、土煙を上げて何かが迫ってくる。武具や甲冑に身を包んだ彼らは、この冥府^{せかい}を根城とする亡者の軍勢だ。

「おうおう、あの世であろうと争いごとの種は尽きぬようであるな」
「構わん。私の行く手を阻む者は、誰であろうと斬滅あるのみ」

柄に手を当て、走り出す体勢を取る三成。生きている間は何度となく見たその仕草も、自信に満ちた態度も、今となっては懐かしい。
（修羅道……死の間際まで戦い続けたわれらには、相応しい世界であるか）

苦笑しつつ、大谷も背の数珠を操作する。

「やつらの親玉を捕まえて、太閤の居所を吐かせるというのはどう

か。それが、仏であろうと、閻魔であろうと、な。それで良いな、三成」

「……何度も言わせるな。疑う余地は無い」

われと三成は、共に駆け出し、亡者の群れの中へと突っ込んで行く。これから先、われらは当ての無い戦いを延々と続けるのである。だが、懐かしい昂揚と充実がそこにはあった。

——もしかすると、これがわれの本当の望みだったのかもしれぬ。

ならば、この果てなき修羅道こそがわれの――

だが、総てはもう遅い。

これは幻想ゆめでしかないのだから。

毛利元就に敗れ、地を這う彼が見た、刹那の夢――

輪刀が、大谷吉継の首を刎ね飛ばした。厳島の床に転がるは、包帯の巻かれた生首。毛利元就は、脚を上げると、その幻想ゆめと妄執まじしが詰まった頭蓋を踏み碎いた。

「ふん」

元就は冷たく一瞥をくれると、一切の興味を無くしたように、その場を立ち去った。

死後の世界などはない。世界を形作り、関わる資格を持つ者は、生きている人間だけだ。死の先には何も無い。死者は幸福も、不幸も、何も手にすることは出来ないのだ。

あの、関ヶ原の戦いから数十年……

現在日の本は、中国は安芸の国にある毛利幕府の統治下に置かれている。

徳川、石田が揃って倒れた関ヶ原の戦いの後、残った大名を降伏させ、あるいは攻め滅ぼして、毛利家は天下統一を果たした。この国の人間なら、誰でも知っている歴史上の事実だ。

毛利幕府は全国統一後、法令を発布した。日の本の国民は全て、“初代の”毛利元就の創り出した管理体制に置かれ、必要な労働に従事している。

僅かな違反でも厳罰が下るため、市中の人々は常に何かに脅えた様子が見受けられる。少々息苦しくはあるが、その分治安は保たれ、罪を犯す者は減りつつある。

関ヶ原の直後は、毛利家への叛乱が頻発したものの、時が流れる

につれて鎮静化していった。皆、長い戦乱に疲れ、多少自由が無くとも、安定した毛利の統治を求めたのだ。この数十年、日の本では大きな乱も起こらず、毛利幕府の支配はますます盤石となっていた。最後まで毛利家に抵抗した、凶王軍なる輩の存在を知る者も、今となっては極わずかだ。

この日、私は祖父の葬儀で、安芸は厳島を訪れていた。祖父の名は小早川秀秋といい、毛利幕府の開祖、毛利元就の縁者である。

小早川家は毛利家が天下を掌握した後、相応の地位を与えられた。祖父は領主として小早川家の土地を治め、妻や子供、家族と共に、死ぬまで悠々自適に過ごしたという。

私の記憶にある祖父は、小柄だが恰幅の良い老人で、よく鍋を好んで食していた。親族が集まる機会があれば、必ず鍋料理だった。自分は戦国改め日本美食會にっぽんびしょくかいの會長なのだと思ひげに語ったこともある。領主としては些か頼りないという意見を良く聞くが、私にとつては気楽に接することのできる、優しいお爺ちゃんだった。

しかし、そんな祖父も数日前、六十余年の天寿を全うした。これで、毛利家の要人の内、戦国の世から生きている者は、ほばいなくなった。関ヶ原の戦いと、その後起こった“凶王の乱”……それはそれは激しいもので、毛利元就の嫡子を初め、毛利に連なる一族の人間も多く亡くなったそう。祖父もその戦に参加したそうだが、関ヶ原のことについては、いくら聞いても一言も語ろうとしない。それどころか、関ヶ原の話題が出ると、途端に柔和な笑顔を捨て、酷く脅えていたのが印象に残っている。一度だけ口走った「てんかいさま」という人物に関係しているのだろうか。

葬儀会場には続々と参列者が集まってくる。そんな中……故人について、あるいはそれ以外について話していた声が、一斉に止む。毛利家の当主、毛利元就が姿を現したのだ。

親族一同、一斉に姿勢を正し、毛利一族の長を迎える。礼を尽くしながらも、私を含めた皆の心には、緊張と、恐怖があつた。

毛利家の当主は、代々毛利元就の名を名乗る。

当代で三代目に当たるが、彼もまた初代や二代目と同じく、伶俐なる頭脳と優れた政治手腕で、毛利幕府を統べている。

彼の政策は初代と二代目のそれを、そのままぞるものだ。初代が作り出した、大名や民草を縛り付ける恐怖と利益の均衡は、数十年、毛利幕府を支えて来た。

三代目は、いかにも冷たそうな、端正な顔立ちをしている。祖父の話では、彼は二代目と同じく、初代の毛利元就にそっくりだと言う。そっくりどころか、瓜二つだったらしい。

その“毛利元就”について、気味の悪い噂話を耳にしたことがある。毛利家の当主、毛利元就は、代替わりをしているのではなく、初代からずっと同一人物であるというものだ。

そんなことはありえない。もしそれが事実なら、今の毛利元就は祖父と同じく既に老齢のはず。あんなに若々しいはずがない。容姿の一致については、今や当時の生き残りが殆どいないことから、本当に似ていたか立証するのは困難だろう。

しかし……^{とんひ}鳶が鷹を生む例えもあるように、凡庸な親から優秀な子が生まれることはある。その逆で、優秀な親から優秀な子が生まれるとは限らない。むしろ、そうならない場合の方が多いはずだ。しかし、三代の毛利元就はいずれも優秀で、判を押したように優れ

た統治能力を見せている。

三代続けて、とはいえ、“たかが三代”のことと言ってしまえば、それまでだが……

毛利元就は、自らを日輪の申し子と称す。日輪は、一度沈んでもまた昇り、永遠に日の本を照らし続けるのだ。今では日輪信仰は日の本の国教であり、毛利家の権威の象徴となっている。

もしかすると……その申し子たる毛利元就もまた、死しても尚転生を果たすことで、永劫の時を生きる不滅の存在なのでは……

ふとした拍子に、毛利元就と目があつた。その冷たい瞳に、心臓が凍り付く心地がした。心の奥まで見通されているようで、私は急いで下らぬ疑念を切り捨てて。

もしそのことを当主に知られようものなら命はない。毛利元就は、太陽と同じく至尊にして絶対。触れることを許されぬ存在なのだ。逆に言えば、従属し続ける限り、生きることを許される。

祖父も、最後まで彼に従い続けたからこそ、安穩とした余生を送ることが出来た。自分もきつと、祖父と同じ道を辿るのだろ。それがきつと、“駒”として求められることであろ。うから。

古来より、日輪は神の象徴として尊ばれ、あるいは恐れられてきた。

だが、その実、日輪とは巨大な熱と炎を纏った石の塊だ。そこには意志も魂もない。日輪が日の本を照らすのは、恵みでも慈悲でもない。ただの自然現象だ。

それを知ってか知らずか……毛利元就もまた、その境地に近付きつつある。今の彼を突き動かすものが何なのか、最初に抱いた意志が何だったのか、彼自身にも定かではない。

永き時を経て、自我は削ぎ落とされ、使命感と義務感だけが残り、遂には国を動かす機構そのものに成り果てた。太陽に意志などないのと同じように、喜びも満足感も達成感も感じない。それは、元来彼が望んだこと。完全なる統治者を目指し、不要なものは己の感情も含めて全て消し去ろうとした。その果てが今の彼だ。雑念を全て剥ぎ取った先に残るのは、愛でも野心でもない、ただの執着……いや、妄執と呼ぶべきものかもしれない。

彼はこれからも、国家の歯車を廻すためだけの存在であり続けるだろう。

暁と黄昏を繰り返す日輪のように。

永遠に、永劫に……

おお……日輪よ。この、幸せ――

第五章 妄執輪廻（十）（後書き）

次は第五章（九）より分岐する、もう一つの最終章です。

第五章 妄執輪廻（十一）（前書き）

こちらは、第五章（九）から続く、もう一つの最終章です。
前の話の続きではありません。

第五章 妄執輪廻（十一）

関ヶ原より後の三年。恐らく大半の人間にとっては、思い出すのも苦痛な三年であつたことであろう。

されど、われにとつては至福の日々であつた。人が不幸に墜ちゆく様を、存分に見ることが出来たのだからな。

われは、骨董好きの梟雄に風魔の忍、第五天魔王らと手を組んで、日本を飛び回り、不幸の種を蒔いていった。

より効率的に、大勢の人間を不幸にするにはどうすればよいか。それは、民の声望を集める者、心の支えとなる者を葬ることよ。その思い付きに従い、伊予河野の巫女や東北の一揆衆の娘、巖流島の悪童などを、次々に血祭りに上げてやつたわ。

甲斐では、首尾よく真田とその従者の忍を葬ることが出来た。いや、そうでもないか。何せ風魔を失うことになつたのだからな。病に臥せつた武田信玄を見た時は、われも思うことがないわけではなかつたが……“忘れた”。弟子と部下の首を見せ付けた後で、縊^{くび}り殺してやつたわ。

奥州では、松永めが最上義光を唆して、伊達との戦を起こさせた。最上は猜疑心の強い男。そういう男は、攻められるかも知れない恐怖を植えつけてやれば、勝手に先走るようになる。

その戦に乗じて、二人纏めて仕留めてやつた。無論こちらも無傷とはいかぬ。今度は松永めを失うことになつた。片倉を道連れにしたの爆死という、派手な最期であつたよ。まあ、それもわれが仕組んだことだつたのだから。やつもわれを捨て駒にするつもりであつたから、お互いさまと言う奴よ。

第五天は加賀に送り込んでやった。利家とその女房は説得を試みたようだが、無駄なことよ。夫婦揃って影に喰われおった。その後、第五天はすつ飛んで来た前田の風来坊と相打ちになったが、ある意味上々の成果よ。これで、織田の者どもも、不幸に飲まれることになる。

そして二年目……上杉と毛利の戦が始まった。原因は飢饉よ。隠居を決め込んでいた上杉も、餓えた民草のためには立ち上がらざるを得なんだ。涙ぐましいことよ。われも畑を焼き払うなどして、それを後押ししてやった。

結果は上杉の大敗。いかに軍神といえど、毛利軍の兵力に、諸外国より集めた最新の火器相手では分が悪すぎた。軍神とその側近のくの一は、数多の敵を道連れにしつつ、戦場にて果てた。

これで、日の本に毛利軍の敵はいなくなり、安芸幕府の天下となった。

今や毛利元就は日本の全てを一手に束ねる権力を持ち、栄華の絶頂にあった。

……そう、われが待ち望んだ“刻”が、ついにやって来たのだ。

われに未来はない。ただでさえ壊れた体を、無理に動かして来たのだからな。先程はさらりと語ったが、不幸を広めていく途中で、われは何度も死にかけた。

だが、その度にわれは生き延びた。ある時は他人を犠牲にして。ある時はわれ自身の執念で。ある時はただ天運に恵まれて。

死に瀕する度、われは思った。ここでわれが死ねば、この乱世は平穏な結末を迎えてしまう。それだけは許さぬ。われを見捨てた世

界が、われから何もかもを奪った世界が、われの死した後になお笑い続けていられるなど、断じて認められぬ。その一念を糧に、われは生き延びた。コレが素晴らしい力などと宣うつもりはない。^{のたま}

ただ、われは今日この日、まだ生きている。ソレだけは確かなことであつた。

関ヶ原の戦いから、三年が経ようとした頃。凶王軍は毛利幕府の本拠地、安芸は厳島に侵攻した。いかに毛利軍が上杉との戦の直後でいくらか疲弊しているとはいえ、彼我の戦力差は歴然。飛んで火にいる夏の虫の例えの如く、凶王軍の者たちは命を散らしていった。自分が何のために戦っていたのか、ついに分からぬまま……

だが、彼らを使い捨ての盾とすることで、凶王・大谷吉継は、ついに毛利元就の座す厳島本殿に到達した。

「久しいな、毛利」

約三年ぶりの再会に、大谷は、かつて共に悪巧みをしていた時のように、親しげな口調で語りかける。だが、断じて旧交を暖めに来たのではないことは、一目瞭然だった。

右手に握るは、柄が二つ連なつた無銘刀。石田三成が使っていた刀と同じものだ。刀身からは、今も血が滴り落ちている。

そして左手には……つい先程、その刀で命を奪ったばかりの、小早川秀秋の生首が握られていた。間抜けなことに、鍋を食べていて逃げ遅れた金吾は、呆気なく首を狩られた。その顔は、極限の恐怖に歪んでいる。

大谷は、金吾の首を無造作に放り投げる。毛利と大谷、向かい合う二人の中間に落下した。

一方の毛利も、大谷吉継の姿を目にしても、金吾の生首を見ても、その白貌には漣一つ立たなかった。

「死に損ないが。我をこれ以上煩わすな」

天下を統一した後も、彼の尊大な態度は変わらない。否、ますます冷たくなった気がする。何の感情も籠らぬその瞳は、人を人として見てはいない。この男は、益か損でしか人間を判断しようとしな
いのだ。

「まア、そう言うな。今日はぬしに、愉快な知らせを持って来たのよ」

「よもや、決闘の申し込み、というのではあるまいな？ 我がそんなものを受けるとでも？」

表情は変わらず能面のままだが、大谷には毛利が鼻で笑っているように思えた。背後には、弓や銃を構えた毛利元就の親衛隊が多数控えている。

元就の合図一つで、彼らは大谷に一齐に仕掛ける。それで殺られる大谷ではあるまいが、それに加えて毛利元就自身を相手にすれば、勝ち目はない。そして、大谷の手勢はここにたどり着くまでに全て使い潰している。

これ以上は話すこともないと言うように、毛利元就は輪刀を掲げる。これを振り下ろすと同時に、背後の軍が攻撃を開始する。だが、その時……

轟音が、敵島の本殿を揺るがした。元就は、輪刀を振り下ろす手を止めた。瀬戸海の方から聞こえる、何かが弾けて飛ぶ音。潮風に混じった火薬の臭い。これは……

「も、元就様あつ!?」

伝令の兵が、血相を変えて駆け付ける。

「瀬戸海につ……! 異国のものと思わしき船が多数! 本殿を砲撃しておりますっ!」

その報告は、毛利元就でさえも瞠目させた。

再度砲音が轟き、天井から破片が落ちて来る。想定していなかった異国からの襲撃に、毛利軍はたちまち恐慌状態に陥った。

「ヒヒヒ、良い顔よな、毛利。ぬしのそのような面、初めて見るぞ」

くぐもった笑みを漏らす大谷。毛利元就の殺意の籠った眼が、彼を射抜く。

「これは……貴様の差し金か?」

何とか平静を保とうとしているのが可笑しくてたまらない、包帯の下顔は、そんな嗜虐的な笑みに歪んでいた。

「何、ぬしがかつて長曾我部にやったものと同じ手よ。元々、やつらはこの国に攻め込む機会を伺っておった。われはそれに、都合の良い理由を付けてやっただけよ」

この数ヶ月、諸外国が日本の毛利幕府に送った使者の船を、大谷ら凶王軍は次々に沈めていった。巧妙に、指示を下したのは毛利幕府であるという証拠を残して。

列強諸国はこの事件に憤慨。特に被害の大きかった某国では、開戦派が和平派を押し切って、ついに日本への武力侵攻が決定された。

「貴様……己が何をしたのか、分かっているのか!!」

毛利の顔から、本気の憤怒が表出する。

「そうよなア。ぬしの眼の届かぬ所で、相当派手にやったからな。幾ら宥^{なだ}めたところで聞く耳持つまいて。日本は異国に惨々(さんざん)に踏み荒らされよう」

それは、この日本に生きる全ての民にとつての悪夢だ。豊臣秀吉も、この事態を恐れたからこそ、富国強兵策を推し進めて来たのだ。それを、この男は、かつて豊臣に属していたこの男は、平然と日本を地獄に叩き込んで見せた。だが、そのことに躊躇いはない。何故なら……

「スバラシイではないか。これで、この国の人間は皆不幸になる。言つたであろう? それこそがわれの望みであると」

そう、今の彼は“完成”されている。ただ一つの妄執に取り付かれ、そのためならばあらゆるものを犠牲にできる。故に、秀吉や三成の意志に背くことになろうとも、ただ己の欲望にのみ従うのだ。

「この国も、ぬしの築いて来たものも、これで全て終わりよ。気の毒であつたな、毛利イ? ヒヒヒヒヒヒ!!」

彼の目的は、憎く妬ましき毛利元就と、彼の作った安芸幕府を破壊させること。だが、凶王軍の戦力では、逆立ちしても毛利軍には敵わない。そこで彼がとったのは、毛利幕府より強大な勢力……つまり、外の海の列強諸国の力を借りることだった。しかし、こんな自分の言うことに、異国人らが耳を貸すとは思えない。怪物の妄言と思われるのが落ちだ。

だから、大谷吉継は彼らの憎しみを煽ることにしたのだ。同胞を奪われた怒りと憎しみは、容易く人の理性を狂わせる。国が違えども人の本質に変わりはない。まして異国人は、元々この国を蔑視している。火種が投じられれば、後は猛火と化して、この国を飲み込もうとするだろう。

この策には重大な欠陥がある。例えこのやり方で毛利幕府を打ち倒せたとしても、後に残るのは、更に強大な諸外国の侵略と未曾有の混乱。とても天下を取るどころではない。外国が憎んでいるのは毛利幕府というより日本そのもの。例え毛利を打ち取っても、和解や懐柔は難しいだろう。

しかし、大谷吉継にとってそれは利点であり欠点ではない。彼の望みは毛利家と日本の破滅であり、最初から、何かを得ようとする気などないのだ。全てを失い、全てに価値を見出だせなくなった、今の彼だからこそ出来る、まさに最期の策だった。

「まだだ!!」

毛利元就は声を荒げる。人を陥れて勝利する謀略家といえども、彼もまた、天下統一を成し遂げた一角の英雄だ。ひとかどいかに危機的な状況にあっても、己を見失い、絶望したりはしない。

「我がいる限り、我が毛利家は不滅よ！ 貴様の小賢しい企てなど

で、私の歩む道は止められはせぬ！ 日輪の輝きは未来永劫、この国を照らし続けるのだ！」

「……そうさなア。ぬしならば、ぬしならばこの窮地でも、上手く乗り切ってしまうやもしれぬ」

説得に懐柔、更に取引や脅迫を織り交ぜて、外国を撤退させる。憎しみの方向を、他の国に向けることもするだろう。いざとなれば、彼はあらゆる手を用いて自分の築いた毛利家を護ろうとするはずだ。曲がりなりにも、あの英雄が集う関ヶ原で最後まで生き残り、他を出し抜いて勝利をした男。いくら追いつめてもそれで十分ということはない。大谷吉継は、毛利元就と言う男を良く理解していた。

だから……

「ぬしは、ここで死ぬるがよい」

王手ではまだ足りない。王将を盤上から消し去って初めて、勝利は確定するのだ。

——ああ、ずっと思っていた。

われとぬしはよく似ている。冷酷さも、狡猾さも、目的のためには手段を選ばぬところも、実に似通っておる。われとぬしは同胞……あの言葉は、本心から言ったことよ。

だからこそ、許せぬのだ。なまじ似通っている分……僅かな、されど決定的な差が許せない。容姿に地位、そして何より、その心の

在り様が、妬ましかった。

初めて会った時から、ぬしは自信に満ち溢れておった。同じ悪巧みをするのでも、己を悪と割り切り、卑屈に振る舞うことしかできぬわれと違い、ぬしは清々しいまでに、己の正義を疑わぬ。

ぬしのようになることが出来たなら、われはこの不快な後ろめたさを感じずとも良いのに……！

今だからわかる。心の奥底では、われはずっとそんなことを思っていた。何もかもを切り捨てて、割り切って行動のできるぬしが、妬ましくて仕方なかったのだ。

ぬしの裏切りや、ぬしが三成を殺したことも、結局は切欠に過ぎぬ。

本当は……ずっとずっと前から、毛利元就。われはぬしを殺してやりたかったよ……！

輪刀が揺らぎ、数珠が旋回する。

こうして……今日この時まで、数多の将兵を意のままに操った希代の策士二人による、最初で最後の、一対一の戦いが始まった。

他の毛利の兵は、異国船からの砲撃によって恐慌状態に陥り、完全に陣形が崩れてしまっている。あまりに予想外の事態に、自分が何をすべきか見失っているのだ。

大谷吉継は、この状況を創るためだけに、日本全土を戦火で焼き

かねない策を実行した……と言つても過言ではない。

「使えぬ無能どもめが……！」

齒を噛み締めて吐き捨てる毛利。彼の一言に、声の聞こえた何人かの兵が顔色を変える。毛利元就により与えられた恐怖が、彼らに正気を取り戻させた。幾人かの精兵が、主の援護に加わろうとする。しかし……

——ぬま あまつみかほし沼るな天津甕星——

彼らは大谷吉継が展開した黄土色の沼地に嵌まり、地面へと引きずり込まれて行く。毛利元就は、いち早く跳躍し、輪刀から太陽光線を放つ。

「焼け焦げよ……！」

舞い降りる死の陽光に対して、大谷は背後ではなく前に進む。数珠を正面に展開し、盾を形成。光を歪曲させつつ、効果範囲を一気に駆け抜ける。それでも、完全には防ぎ切れないのか、体を炙られていく。

（まア、われの場合は、体を黒焦げにされようが、今とそう変わらぬ、か）

そんな益体も無いことを考えられるほど、彼は落ち着いていた。分は悪い。かつては八つあった数珠も、今では五個にまで減っている。八つの内、一つは三成に与え、もう二つはこれまでの戦いで破壊された。身体の状態を差し引いても、元就とは、自力に大きな差があった。

それなら、頭を使って上手く立ち回ることも出来るのだが、その道も閉ざされている。外の兵士達は、今頃異国の軍を相手にしているだろうが、それでも、いずれはこちらに雪崩れ込んで来るだろう。早々に決着をつける必要がある。こちらは火力で劣るのを承知の上で、短期決戦を挑まねばならないのだ。

「幸よ！ 福よ！ 塵と消え！！」

出し惜しみをしている余裕も時間も無い。毛利元就の眼前で、奥義^{サラ}を発動させる。巨大化し、急速に旋回する五つの数珠を、しかし毛利は冷静に、最大の奥義を持って迎え撃つ。

「皓伯^{こうはく}に塗せ、夜半^{よは}の面影！！」

淡緑色の光を纏い、二つに分割した輪刀が乱舞する。激突する二人の奥義。巻き込まれた兵士たちが、次々に吹き飛ばされていく。形勢は、明らかに大谷吉継の劣勢だった。八つならいざ知らず、五つの数珠ではその威力を受けきれない。大谷が渾身の力を込めた数珠も、一つ二つと碎き散らされて行く。

「諦めよ。地べたを這いずり、不幸を舐めることしか能のない貴様に、我は止められぬ！」

ああ、そうよなア。

どのような手段であれ、ぬしは確かに、天下統一という偉業を成し遂げた。歴史に名を刻み、天下に燦然と輝く英雄よ。われのごとき、地を這いずる影とは比較にならぬわ。

だが、忘れるでないぞ。光が強ければ強いほど、影もまた色濃くなるということに。

ぬしが幸であればあるほど、われは強く思うのだ。その座から引きずり下ろしたい、不幸のどん底に落としてやりたい、と。

奥義同士の競り合いは、当然の結果として、毛利元就に軍配が上がる。五つの数珠を吹き飛ばし……輪刀が、彼の胴体を薙ぎ払った。

「――！」

大谷の体は、腰の辺りで上下に分断される。溢れる鮮血が、本殿の床を赤く染め上げる。

致死の一撃を受けたにも関わらず……大谷吉継は、笑っていた。

——ここまで総て、計算通りよ。

最も近くの数珠を操作し、己の背中にぶつける。その衝撃に押され、大谷の残った上半身が、勢い良く飛び出した。

「――！」

毛利元就は、その動きに対応出来ない。切り裂かれた下半身の重量が減ったことで、毛利の読みすら超える、驚異的な加速を実現していた。最初から己の体が断たれることを前提とした、文字通り捨て身の策だ。

この身は呪いで満ちている。己を呪いの流星と化して、大谷吉継は突撃する。

水平に構えた無銘刀が、毛利の腹部へと突き刺さった。

「が……っ!？」

刃が鎧を貫通し、臓物を抉って進み、背中から貫通する。その氷の面が、苦悶に歪むのが見えた。

爆発する歓喜に飲まれそうになるも、極限の集中で意識を繋ぐ。瀕死なのはこちらも同じ。意識を失えば、もう目を覚ますことはない。

“あの男”がやったように、突き刺した刀を水平に引き抜く。臓物と入り混じった鮮血が吹き出て、体にかかる。

生暖かい。氷のように冷たい血の流れる男、そんな噂を幾度も耳にしたが……

「ぬしも人間であつたな、毛利!」

「き、貴様……」

間髪入れず、もう一方の手が伸びて、毛利の傷口へと突っ込まれる。怨念を込めた指先が、はらわた腸を掻き穿てる。

「——ッ!——!」

苦悶の表情の先にあるのは、凄絶なまでの狂喜の貌。

「良い……実に良い……不幸よ!!」

毛利が、何か言おうとした瞬間……

本殿の天井が、音を立てて崩れ落ちた。

度重なる砲撃と、二人の奥義バサラの余波もあり、ついに天井が耐え切れなくなったのだ。落下する天井は、毛利に大谷、そして多くの兵を巻き込み、押し潰した。

「う、うう……」

豪奢を誇った厳島本殿は倒壊した。後に残ったものは瓦礫の山で、かつての面影を偲ばせるものは何もない。あちこちから火の手も上がり始めている。瓦礫の下には、押し潰された大勢の人間が埋まっている。その中の一つ……包帯で巻かれた腕がぴくりと動いた。

大谷吉継はまだ生きていた。まだ死んでいないというだけの話で、残り数秒も持つまい。

彼の隣では、毛利元就が、驚愕に顔を凍らせて死んでいた。図らずも、彼の体を盾にすることで、落下する瓦礫の衝撃を緩和することが出来た。意図したことではない。ただの運だ。それについて思

いを巡らす余裕も、今の彼にはない。

空を見上げる。砲音は絶え間無く鳴り響き、剣戟に銃声、悲鳴が聞こえて来る。

炎は瓦礫を燃やしてますます勢いを強め、周囲を燃やし尽くすのも時間の問題だ。命が尽きるのが先か。炎に飲まれるのが先か。これまで自分は何度となく死神の手から逃げ延びて来た。だが、いよいよ年貢の納め時らしい。死を目前にして、しかし彼は、満ち足りた笑顔を浮かべていた。

彼の視線の先にあるものは、夕暮れ時で紫がかった空。だが、彼の眼には別の光景が映っている。

それは、空を埋め尽くさんばかりに降り注ぐ、数多の流れ星――

「ヒィ……ヒ……ヒヒヒヒ……ヒヒヒッ……！」

われには見える。われの待ち望んだアレが。天から降り注ぐ破滅の星が。

われの大願は、今ここに成ったのだ！

「メデタキな。われは……シアワセ……！」

全身が、かつてない多幸感で満たされていた。流せるものなら、

滂沱の涙を流したい程に嬉しかった。

人生最高の幸福を味わいながら……大谷吉継は静かに目を閉じる。

そして二度と、目を開けることは無かった。

毛利元就亡き後、頭脳を失った毛利幕府は転落の一途を辿っていた。異国軍との大敗、お決まりの後継者争い。毛利元就が築き上げた優れた統治機構も、この混乱に加え、肝心要の毛利元就がいなければ、十全に機能するはずもなかった。

幕府の締め付けが緩むと同時に、毛利の支配に不満を抱く多くの地方大名が決起。日本は再び泥沼の乱世に突入し、数多の血が流された。この隙を異国が見逃すはずもなく、各国は大軍を率いて日本へ侵攻。かつてない大規模侵攻は、瀕死の毛利幕府に止めを刺し、地方の抵抗勢力も次々に駆逐された。

国土は散々に荒らされ、最終的には、日本は異国によって植民地化される。

だが、それで終わりではなかった。

日本は幾つかの列強によって分割統治されているが、その支配権を巡って、各国の利害が衝突。

これが遠因となり、世界を巻き込む大戦へと繋がっていくことになる。それによって生み出される死者の数は、日の本一国の乱世な

どとは、比較にさえならない。

地獄はまだ、終わらない。

世に幸福がある限り、それを妬み憎み呪う敗者がいる限り、戦乱と流血は永劫に続くのだ。

——上もわれ、下もわれ。 世界は総てわれとなった！

<最終章 墜星落日 完>

あとがき

最後まで読んでくださってありがとうございます。
感想を書いてくださった皆様方、大変励みになりました。
どうもありがとうございます。

大切なことは先に言っておきます。

よって、以降は全て読み飛ばしていい駄文です。

元々は戦国BASARA3の西軍ドストリオ（石田三成・大谷吉継・毛利元就）のやり取りが面白くて、ストーリーやら、キャラ間のやり取りやら色々妄想していたら、収まり切らなくなったので、三国羅将伝の気分転換も兼ねて書き始めました。

当時は3も発売して間も無い時期であり、上手い具合に流れに乗ることが出来たかなあと今では思ってます。

基本的に私が小説を書く動機は自給自足。

これこれこーゆーのを読んでみたいけど無いから自分で書く、みたいな。

ここまで読んでくださった読者様ならばお判りでしょうが、こんな内容のBASARA小説はそうそう無い！はずです。

お陰さまで嗜好の合う方々には喜んでいただけたようですが、人がやらないことをやる、というのは小説に限らず私が何か行動する根源だったりします。

また、戦国BASARAというのはプレイヤー武将なら誰でも主役

になることが出来、誰でも天下統一できる。

キャラ間の強弱が曖昧で、一对一の戦闘ならば誰を勝たせることも自由。そして何よりそれが“公式設定”であること。

これらの要素が二次創作を書くのに、特にいわゆる脇役や敵役を活躍させたいと思う私のような書き手にとっては実に都合がよかったのです。

参考にしたのは、3で最も鬱なルートと呼ばれる毛利元就青ルートで、これに感銘を受けて書き始めたと言っても過言ではありません。

本作ではゲームではやれないことを色々とやってみました。

例えば三成と大谷、政宗と小十郎、本作ではどちらも主が従より先に死にますが、

主に先立たれるパターンは実はゲームではまず実現しないんですね。

後は、本編で他の武将との絡みがあまりに少ない天海様を要所要所で活躍させてみたり。

エンディングを二種類用意したのは、終わり方を色々考えていたら、どうにも一本にまとまらず、

ならばいっそ二つ用意してしまえ、とこうなったわけです。ネット小説だからこそでできる試みですしね。

当時はノベルゲームをよくやっていて、マルチエンディングの楽しみに目覚めていたというのも大きいです。

<最終章 永劫繁栄>

夢才チ＋未来才チ。

エンディングの定番パターンというべきこの二つをミックスしてみ

た。

つつか前半はるるうに剣心の志々雄編ラストそのまんまですね。管理人は死後の世界否定派というか、少なくともそれが必須となる世界観以外ならば必要ないと思ってます。聖闘士星矢とかね。死後の世界や転生なんてものがあるなら、それは生きていると同じじゃないのか。死の衝撃を和らげることになるのではないか、と思うもので……

<最終章 墜星落日>

全滅エンド。

全滅エンドにした理由はただ一つ。

「戦国BASARAの二次創作小説で全滅エンドをやった男」と言う称号が欲しかったから。

まあザビーは事前に海外逃亡してますが……

さすがに海外にいる彼まで殺すという無茶なことは出来ませんでした。

で、何故本編のラストでいきなり松永やら風魔やらが出てきたかというと、

幾らなんでも大谷一人で無双やるのは無茶だから、味方になるキャラが欲しかったからです。

何か使い捨ての弾丸みたいな扱いになってしまいました。元より戦争ってそういうものじゃないの？と思ったり思わなかったり……

迷いを振り切った完全版大谷吉継は、管理人が発売前に予想していた大谷吉継でした。

いざゲームやってみれば、まさかあそこまで三成思いだとは思わなんだ。

てつきり三成の不幸を目当てに傍にいるのだろうと失礼な想像をしてました。

図らずも、いやむしろ必然と言うべきか、「幸せ」がテーマみたいになってしまいました。

作者から言えることは、毛利元就にしろ、大谷吉継にしろ、最後まで自分の望み通りに生きたということだけです。この話のエンディングは、その行き着く果てが描かれています。

ただし二人の願望は、元就が三成を殺した時点で決して並び立つことはない、故に二つの結末が必要だったのです。

管理人は、完結のあとがきを書くことが出来て、今、幸せです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0809o/>

妖星と日輪

2011年1月29日12時39分発行